

山口大学大学院東アジア研究科
博士論文

朝鮮時代後期中国語教科書のハングル音注における濃音表記 sg と ss の研究
— 『華音啓蒙諺解』 『你呢貴姓』 『学清』 『華音撮要』 を対象に —

令和8年01月

LU JINGHAN

目次

第1章 序論	- 5 -
1 研究背景	- 5 -
2 研究対象と研究目的	- 8 -
3 研究資料	- 10 -
3.1 『華音啓蒙諺解』	- 10 -
3.2 『你呢貴姓』『学清』	- 11 -
3.3 『華音撮要』	- 13 -
4 先行研究	- 14 -
4.1 朝鮮時代漢語教科書の研究概要	- 14 -
4.1.1 朝鮮時代初期漢語教科書の研究概要	- 15 -
4.1.2 朝鮮時代中、後期漢語教科書の研究概要	- 17 -
4.1.3 まとめ	- 18 -
4.2 「慣用外中国語」に関する研究	- 18 -
4.3 濃音表記についての先行研究	- 21 -
4.4 まとめ	- 23 -
第2章 『華音啓蒙諺解』の漢語音における濃音表記 sg-、ss-	- 24 -
1 濃音表記 sg-	- 24 -
1.1 音韻地位から見る sg-表記	- 24 -
1.2 文の焦点から見る sg-表記	- 26 -
1.3 語の重音から見る sg-表記	- 30 -
2 濃音表記 ss-	- 34 -
2.1 音韻地位から見る ss-表記	- 34 -
2.2 文の焦点から見る ss-表記	- 36 -
2.3 ss-表記の出現傾向	- 40 -
2.4 ss+i 介音について	- 41 -
2.5 語の重音から見る ss-表記	- 45 -
2.5.1 名詞として用いられる濃音表記 ss-漢字	- 51 -
2.5.2 動詞として用いられる濃音表記 ss-漢字	- 52 -
2.5.3 副詞、量詞として用いられる濃音表記 ss-漢字	- 53 -
2.5.4 形容詞として用いられる濃音表記 ss-漢字	- 54 -
2.5.5 数詞として用いられる濃音表記 ss-漢字	- 54 -
2.5.6 小結	- 55 -
3 まとめ	- 55 -

第3章 『你呢』『学清』の漢語音注における濃音表記 sg-、ss-	- 57 -
1 『你呢』『学清』の濃音表記 sg-	- 58 -
1.1 音韻地位から見る『你呢』『学清』の sg-表記	- 58 -
1.2 文の焦点から見る『你呢』『学清』の sg-表記	- 61 -
1.3 語の重音から見る『你呢』『学清』の sg-表記	- 62 -
2 『你呢』『学清』の濃音表記 ss-	- 63 -
2.1 音韻地位から見る『你呢』の ss-表記	- 63 -
2.2 音韻地位から見る『学清』の ss-表記	- 66 -
2.3 文の焦点から見る『你呢』『学清』の ss-表記	- 68 -
2.4 語の重音から見る ss-表記	- 69 -
2.4.1 語の重音から見る『你呢』の ss-表記	- 69 -
2.4.2 語の重音から見る『学清』の ss-表記	- 74 -
3 まとめ	- 75 -
第4章 『華音撮要』における濃音表記 sg-と ss-	- 76 -
1 『撮要』の sg-表記	- 76 -
1.1 音韻地位から見る sg-表記	- 76 -
1.2 文の焦点から見る『撮要』の sg-表記	- 78 -
1.3 語の重音から見る sg-表記	- 80 -
2 『撮要』の ss-表記	- 82 -
2.1 音韻地位から見る ss-表記	- 82 -
2.2 文の焦点から見る『撮要』の ss-表記	- 86 -
2.3 語の重音から見る ss-表記	- 88 -
2.4 ss-表記の使用傾向	- 94 -
3 まとめ	- 96 -
第5章 朝鮮時代後期の四資料における濃音表記 sg-、ss-	- 99 -
1 『華音』『你呢』『学清』『撮要』の言語基礎	- 99 -
1.1 『華音』の言語基礎	- 99 -
1.2 『你呢』『学清』の言語基礎	- 101 -
1.3 『撮要』の言語基礎	- 101 -
1.4 まとめ	- 102 -
2 四資料共通 sg-例字について	- 103 -
3 四資料に共通する ss-例字について	- 106 -
4 韓国語と漢語の音韻体系の差異	- 117 -
5 漢語の全濁声母とその清化	- 119 -

6 中間言語から見る濃音表記.....	- 120 -
6.1 中間言語と濃音表記.....	- 120 -
6.2 「質正」制度と濃音表記.....	- 122 -
7 まとめ.....	- 124 -
第6章 結論.....	- 126 -
1 四資料に見られる濃音 sg-について.....	- 126 -
2 四資料に見られる濃音 ss-について.....	- 129 -
3 今後の課題.....	- 131 -
参考文献：.....	- 133 -
付録：.....	- 137 -

第1章 序論

1 研究背景

朝鮮半島は古くから中国との関係が密接であり、盛んな交流が行われてきた。このことは王克平(2009)が引用した朝鮮の徐居正(1486)『筆苑雜記』¹の「爲中國之番邦，故歷代親信于中國，受封爵，朝貢不絶，禮義之道不缺，衣冠制度，悉同于中國各代之制，故曰：詩書禮義之邦，仁義之國也」という記述や、中国の『明史』「外国」伝・朝鮮条にある「朝鮮在明雖稱屬國，而無異域内」²との記載からも窺うことができる。このような密接な政治的・文化的なつながりの中で、朝鮮半島は歴代にわたり漢語教育を重視してきた。朝鮮三国時代³の高句麗小獸林王二年(372年)には既に「太学」⁴が設立され、新羅でも7世紀に「国学」⁵が設立され、「五経(『易経』、『書経』、『詩経』、『礼記』、『春秋』)」「史記」「漢書」などの儒家の經典が教授されていた。朝鮮時代(1392-1910)⁶に入ると、「事大」⁷政策の確立に伴い、漢学教育はさらに全盛期を迎え、多数の朝漢対音資料⁸が編纂された。

朝鮮の対音資料は金基石(1999)の考証により、大きく韻書類、辞書類、教科書類に分けられる。韻書類には、『東国正韻』『華音正韻通釈』『華東叶音通釈』『三韻声匯』『奎章全韻』など、ハングルで音注をつけた朝鮮漢字音韻書と、『洪武正韻訳訓』¹⁰『四声通考』『四声通解』など漢語習得を目指す漢朝対音韻書がある。辞書類には『訳語類解』『訳語類解補』『方言集釈』『漢清文鑑』

¹ <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00023634>

² 臺灣開明書店(1962)、『二十四史・明史』・外国一を参照。

³ 紀元前1世紀頃から7世紀中頃まで、朝鮮半島において高句麗・百濟・新羅の三国が並立していた時代である。

⁴ 朝鮮王朝時代に設置された最高学府であり、主に貴族階層の子弟が儒学や官吏としての教養を学ぶための教育機関である。

⁵ 太学に対して、地方の学生や一般庶民の子弟が学ぶ地方教育機関であり、儒学の基礎教育を提供する学校である。

⁶ 中国の明清時代に相当。本稿では中国の明代(1368-1644)を朝鮮時代の前期、清代(1644-1911)を朝鮮時代の中・後期に区分する。朝鮮時代に編纂された漢語教科書の時期区分もこれに準じる。

⁷ 「事大」とはもともと儒教に由来する外交理念であり、孫衛国(2002)の解釈によると、弱小な国家や政権がより強大な勢力に対して忠誠や服従の態度を示すことで、自国の安全や存続を図る戦略である。《孟子・梁惠王章句下》にも「事大」という政治政策の記録が見られる。「齊宣王問曰：『交鄰國有道乎？』孟子對曰：『有。惟仁者為能以大事小，是故湯事葛，文王事昆夷；惟智者為能以小事大，故大王事獯鬻，勾踐事吳。以大事小者，樂天者也；以小事大者，畏天者也。樂天者保天下，畏天者保其國。詩云：『畏天之威，於時保之。』』」

この「事大」の外交政策は東アジアの伝統的な国際秩序において重要な役割を果たしてきた。朝鮮半島においては、特に明・清朝に対して事大政策を採用し、この政策は朝鮮の外交・内政に大きな影響を与え、漢学教育の強化や文化交流の活発化にもつながった。

⁸ 朝鮮半島において中国語を学習・教授するために編纂された資料の中で、漢字や中国語の語句に対してハングルで朝鮮語の音注を付した資料を指す。これらの資料は主に朝鮮時代に作られ、『老乞大諺解』『朴通事諺解』『華音啓蒙諺解』などの諺解類がその代表である。朝漢対音資料当時の中国語の音韻体系の認識するうえで非常に重要な資料とされる。

⁹ 唐作藩(1962)の解釈によると、「韻書とは韻母の順序によって、配列された中国の古い時代の一種の字典であって、それは詩や詞等の韻文を作る際、どんな字が押韻できるかをしらべる便利のために作られたものである。」換言すれば、語学者たちが当時の音韻体系に基づいて作り上げた「発音辞典」あるいは「詩歌の韻を調べるための辞書」である。

¹⁰ 申叔舟等によって『洪武正韻』にハングル音注を添加し、1445年に成立された韻書である。『洪武正韻』は明洪武8年(1375年)に、楽韶鳳や宋濂など11人の学者によって勅撰された官方韻書。全16巻。

『古今釈林』『中国語類抄』などがある。また、教科書類は『老乞大』¹¹『朴通事』¹²『翻訳老乞大』¹³『翻訳朴通事』¹³、『老乞大諺解』『朴通事諺解』『旧刊老乞大諺解』『老乞大新釈』『朴通事新釈』『朴通事新釈諺解』『重刊老乞大』『重刊老乞大諺解』『伍倫全備諺解』『華音啓蒙諺解』などが挙げられる。

汪榮宝(1923)が「夫古之聲音既不可得而聞、而文字又不足以相印、則慾解此疑問者、惟有從他國之記音文字中求其與中國古音有關者而取為旁證而已。(昔の発音は今では直接聞くこともできず、文字の記録も十分な証拠とはなり得ないため、この疑問を解くには、他国の記音資料の中から中国古音に関係するものを傍証として用いるほかない。一筆者記。)」と述べたことを念頭に置くと、中国語母語話者ではない朝鮮人が作成したこれらの対音資料は当時の中国語音体系を把握するための貴重な資料として、独自の価値を有していることが分かる。

特に朝鮮時代に編纂された資料の研究価値について蔣紹愚(2005)は「這些教科書都力求用地道的漢語口語來寫、而且使用當時通行、而不是已經過時的口語來寫、所以即使是同一種教科書、也要不斷的加以修改。這就給我們留下了一批十分難得的、貼近當時漢語口語的語言資料。(これらの教科書はすべて本場の漢語の口語で書くことが求められ、しかも時代遅れの口語ではなく当時用いられていた口語で書くことになったのである。同じ教科書でも、継続的な修正が行われていたゆえに当時の極めて貴重な漢語の口頭表現に近い言語資料を残した。一筆者記。)」と明記したこともある。

金基石(1999)もまた、朝鮮の対音資料が中国の近代音資料の欠を補うものであり、近代音研究の重要な問題は朝鮮対音資料を利用してはじめて解決できると指摘している。例えば、中国語の入声¹⁴韻尾¹⁵の消失について、申叔舟が『四声通考・凡例第8条』で述べるように、15世紀までの中国語北方方言には入声の痕跡と見なせる喉塞音韻尾¹⁶が残っていた。しかし、『翻訳老乞大・朴通事』における右音¹⁷の喉塞音韻尾の姿が消えたことは16世紀には中国北方方言の入声韻尾が完

¹¹ 小倉進平(1999)は『老乞大』の書名の理解上の注意点について、次のように指摘した。「而して『老乞大』なる名稱の意義は未だ明かでないが、漢語の外、日本語・満洲語・蒙古語にも此の名稱を冠した書がある。但し満洲語の『老乞大』は後世のものであり、『經國大典』には日・漢・蒙の三者があらはれて居るだけである。また此の日・漢・蒙三種の『老乞大』中何れが最も早く世に出でたかは問題であるが、形式・内容とも略々同一であることは注意を要する。」岳輝(2008)は『乞大』について「契丹」でモンゴル語「hitat」または「hitad」の音訳であると指摘した。

¹² 漢語本の『朴通事』は今まで発見されていない。

¹³ 上巻のみ。

¹⁴ 古代中国語四声(四つの声調)の一つで、発音が短くて急である。現代中国語の標準語には入声がない。入声以外を舒声と呼ぶ。

¹⁵ 中国語の音節構造は声母と母音を中心とした韻母に分けられる。韻母はさらに韻頭・韻腹・韻尾に3分される。韻腹は音節の中心となる音節主音のことで主母音とも呼ばれ、韻尾はそれに続く補助的な母音あるいは子音のことである(母音を韻尾とするのはゼロ韻尾)。

¹⁶ 音節の末尾に現れる声門閉鎖音 [ʔ] を指す。中古や近世漢語の段階では、入声韻尾 -p, -t, -k がしばしば声門閉鎖音 [ʔ] に変化、融合して消失する過程を経た。現代の方言の中でも、例えば閩南語や客家語などでは依然として声門閉鎖音 [ʔ] が音節末に保持されているが、北京官話では完全に失われた。

¹⁷ 諺解本教科書の中には漢字の下にハングルで二種類の音注が付されている。そのうち、左側に記された音(左側音または左音と呼ぶ)は、申叔舟の著した『四声通考』に記された「俗音(=左側音)」をそのまま参照し、転載したものであり、右側に記された音は崔世珍が当時の「正音」に従って朝鮮語表記の方法で記録したものである。右側音は中国語を勉強する初心者のために、当時朝鮮半島で通用していた訓民正音(ハングル)と傍点で中国語の音声に似た音を使った簡単な音注である。中村雅之(2006b)によると、右側音では当時中国の北方音に従って、全清

全に失われたことを示している。また、近代音の「入派三声」¹⁸の分布にも朝鮮資料は重要な示唆を与えている。『中原音韻』では全濁声母¹⁹が陽平、次濁声母²⁰が去声、清声母が上声に配属されているが、金基石(1999)は崔世珍が『翻譯老乞大・朴通事』で入声を陽平と去声にのみ派入し、上声への派入はほとんどないことから、崔世珍の分派は『中原音韻』と異なるが、『等韻図経』など北京音資料とは一致すると指摘している²¹。更に、見曉精組²²の声母における口蓋化²³の現象も関連する朝鮮資料において確認されており、これらの資料の音声記録が当時の中国語における実際の音韻変化を研究する上で直接的な参考価値を有していることを示している。

中国の韻書は漢字の発音を描写する辞書であるが、主に「賦詩押韻」のため編纂されたものである。『切韻』『広韻』などの韻書は主に規範的な讀書音を反映しており、これらの韻書の音韻体系は当時の実際の口語音とは一定の差異があった。また、元代の周德清による『中原音韻』や明代の蘭茂の『韻略易通』²⁴は北方方言の特徴を反映しているものの、ある程度当時の口語とのずれが見られる。例えば、『広韻』は中古漢語の全濁声母体系を保持しており、「白」という字は「傍陌切」として記され、その声母は[b]に対応している。しかし、元代の『中原音韻』では全濁音はほぼ消失し、清音または次濁音へと変化している。韻母に関しても、『広韻』では「支」「脂」「祭」などの韻をそれぞれ異なる韻部に分類されているのに対し、明代の『韻略易通』ではこれらの韻類が簡略化されており、当時の北方口語における韻母の合流傾向を示している。

これとは異なり、朝鮮半島の中国語学習は主に「事大」のためであり、対音文献を編纂する目的は「押韻」のためではなく、中国語通事育成のための実用的な手段を提供することにあった。また、朝鮮の漢学者は中国の韻書を翻訳し中国語の教材を編纂する際に、「不可強存而泥古(古い慣習に固執し、すでに時代にそぐわなくなった古代の注音方式を安易に踏襲すべきではない。―筆者訳、『洪武正韻訳訓序』を参照)」という態度を取る傾向があった。韻書や辞書類の資料は編纂された時に中国韻書の体系に依拠するケースが多いが、教科書類は会話形式で展開されることが多く、使用された中国語が当時の日常生活により近いものであった。さらに、同一教科書でも「質正」²⁵によって更新されるため、その記録した中国語の発音は当時の実際の発音により近く、音韻研究の見地からは極めて価値が高い。

音・次清音が区別されている。

¹⁸ 古代漢語の入声を陰入・陽入・上入の三つに分類した概念で、音韻体系の理解に重要である。

¹⁹ 有声の破裂音・摩擦音・破擦音を指す。

²⁰ 中古漢語の声母分類の一つで、例えば鼻音、流音、半母音などである。

²¹ しかし、実際には、『翻譯老乞大・朴通事』の入声は、遠藤光暁(1984)によれば、左音は声母の条件に関わらず「一点」に対応し、右音は韻母の条件により「一点」または「二点」を取るという特徴がある。

²² 漢語の声母分類の用語で、見曉組は主に現代中国語(普通話)の声母 g、k、h のことで、精組は z、c、s 声母を指す。

²³ 発音の際に舌先を硬口蓋に近づけ、子音に舌面音的な音色が加わる言語現象を指す。例えば、漢語の古声母 g、k、h は、介音 i の影響下で j、q、x に変化した。

²⁴ 1442年(明)蘭茂が著した韻書(辞書)であり、明初期の漢語官話が系統的に記録されているため、中国音韻学において重要な地位を占めている。『韻略易通』の20個の声母体系を反映する詩である。全文は「東 t 風 f 破 ph 早 ts 梅 m, 向 x 暖 n 一枝 ts 開 kh, 冰 p 雪 s 無 v 人 z 見 k, 春 ts^h 從 ts^h 天 th 上 s 來 l。」(麥耘(2009)『音韻学概論』第3章を参照。)

²⁵ 質正制度については、第5章の6.2で詳しく述べる。

2 研究対象と研究目的

朝鮮時代には、中国語の発音をハングルで記した会話用教科書や学習資料が複数編纂されていた。これらの資料には詳細なハングル音注が付されており、当時の中国語の口語音を比較的忠実に反映しているため、中国語音韻史研究において極めて重要な資料とみなされている。しかし、これらの中国語教科書の編纂者および使用者は主として朝鮮語を母語とする学習者であったため、発音の記録や転写の過程において、朝鮮語の音韻体系や言語習慣の影響を受け、当時の中国語の実際の音声・文法・語彙規範とは必ずしも一致しない表現形式が現れることは避けられなかった。このような現象はすでに学界でも注目され、それに対して多様な用語による定義が試みられてきた。中国の学界について言えば、こうした現象について劉堅(1992/2005)²⁶は「外国語による中国語への影響の痕跡」、張美蘭(1998)は「混合中国語」、汪維輝(2003)は「非漢語用法」などとそれぞれ呼んでいる。本稿では、このように漢語の一般的な用法に合致しない、または慣用から外れた表現を「慣用外中国語」と呼ぶ。

「慣用外中国語」現象は朝鮮時代に伝わった各種中国語教科書に広く見られ、語彙使用、文法構造、音声表記など、さまざまな側面において顕著に現れている。特に朝鮮時代後期に編纂された中国語教科書は、時期的に現代中国語に極めて近く、当時の中国語音韻の実態を反映している点で非常に貴重な資料である。このため、これらの教科書に現れる特殊な音声現象は特に注目すべきである。本稿では、朝鮮時代後期に成立した中国語教科書である『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』『学清』『華音撮要』の4種の教科書を研究資料とし、その音注における中国語本来の音韻体系には存在しない「濃音」表記という特殊な音声注記に焦点を当てて考察を行う。

「濃音」表記とは、朝鮮語の学習者が漢字に注音を施す際、朝鮮語において濃音²⁷を表す子音字母(㄄ ss, ㄱ gg, ㅈ jj, ㅃ bb など)を使用することを指す。その中でも、後期の教科書では特に㄄ ss および ㄱ gg の使用が多く見られる。これらの字母は発音時に声門が強く閉じ、音声的緊張が高まるタイプの子音を表し、音声学的には「声門閉鎖音」に分類される。現代朝鮮語の濃音にはㄱ gg, ㄷ dd, ㅃ bb, ㄄ ss, ㅈ jj などが含まれ、清音(平音)であるㄱ g, ㄷ d, ㅂ b, ㅅ s, ㅈ j などや、有気音(激音)であるㅋ k, ㅌ t, ㅍ p, ㅊ c などとともに、朝鮮語特有の「三系列子音対立体系」を構成している。

『訓民正音』²⁸が創制される以前、朝鮮語には独自の文字体系がなく、言語の記録には主に漢字が用いられていた²⁹。1443年、世宗大王により『訓民正音』が創制され、1446年に公布されたこ

²⁶ 原文は1992年に完成したものであり、本稿では2005年に『劉堅文集』に収録された原稿を参照した。

²⁷ 緊喉音、된소리、緊音、剛音とも呼ぶ。

²⁸ ハングルとも言われる。15世紀の朝鮮王朝で作ら、朝鮮独自の文字である。1443年に完成、1446年に公表された。母音11字、子音17字のあわせて28字(現在は24字)の表音文字。姜信沆(1993)『ハングルの成立と歴史』により、ハングル創設の動機を要約すると、以下のようである。「我が民族はあらゆる音を自由に表記することが出来る表音文字を持つようになり」「漢文で書かれた書籍も容易に解釈出来るようになって、文義の把握も可能になり」「司法行政等で一般庶民の意思も十分に分かるようになり」「漢字の音(字音)も清濁等をはっきりと区別することが出来るようになり」「音楽の律呂も整えることが可能になる」。

²⁹ 李基文(1975)『韓国語の歴史』は「漢字がわが民族の先祖が接した最初の文字であった。我国に固有の古代文字があったという説はありはするが信ずるに足らない。漢字は古代東アジアの唯一の文字である。これが周辺民

とで、朝鮮語の専用文字体系が提供されることとなった。この『訓民正音』では「並書」という形式が設けられており、「緊音」(濃音)³⁰を表記する時にも主にこの「並書」の形式が用いられた。

「並書」とは同一あるいは異なる子音字母を組み合わせて書くことで、単一字母とは異なる特殊な音価を表す方法である。大きく分けて同じ字母を重ねる「各自並書」(ㄴ ss, ㄷ gg, ㅂ jj など)と異なる字母を組み合わせる「合用並書」の二種類に分類される。「合用並書」は更にㄴ s 系・ㅂ b 系・ㄷ bs 系の3系列に分けられる。これらの並書の分類および構成については、以下の表1にまとめて示す。

表1 「各自並書」と「合用並書」³¹

各自並書	合用並書	
ㄷ, ㄷ, ㅂ, ㅂ, ㅂ, ㅂ, ㅂ, ㅂ gg, dd, bb, ss, jj, hh	ㄴ s 系	ㄴㄷ sg, ㄴㅂ sd, ㄴㅂ sb
	ㅂ b 系	ㅂㅂ bd, ㅂㄴ bs(ㅂ ss), ㅂㅂ bj, ㅂㅂ nt
	ㅂ bs 系	ㅂㄴㄷ bsg, ㅂㅂㅂ bsd

朝鮮時代後期の漢語教科書のハングル音注に見られる濃音表記は主にㄴㄷ(sg・gg)やㅂ(ss)であり、それぞれ現代中国語の g 声母と s・x・sh 声母に対応する。現代中国語には濃音は存在せず、異なる声母は通常、異なる記号で表記される。s・x・sh 声母は朝鮮の対音資料では通常ハングル字母ㄴ(s)で表され、現代中国語の g 声母は通常ㄷ(g)で表記される。しかし、朝鮮時代後期の漢語教科書ではㄴ(s)やㄷ(g)のほかㄴㄷ(sg)、ㅂ(ss)といった濃音表記が現代中国語の s・x・sh 及び g 声母に対応する音注として用いられている。

朝鮮時代後期の対音資料の漢字音の注音に使用された「濃音」表記は研究に値する重要な現象として、研究者の関心を集めていた。韓国の学者李基文(1975)や蔡瑛純(2002)などによっても論じられてきた。愼鏞權(2014)は「『華諺』에서 나타나는 "ㄴ, ㅂ" 표기는 해당 漢語音を 된소리로 인식하였음을 보여주는데, 특정한 일부 글자만을 이처럼 표기한 이유에 대해서는 보다 세심한 고찰이 필요하다.」(『華諺』³²に現れる「ㄴ sg, ㅂ ss」の表記は漢語音を濃音と認識したことを見せているが、特定の一部の字だけをこのように表記する理由に対してはより繊細な考察が必要である。一筆者訳)と述べ、濃音表記の使用理由についてさらに検討する意義があることを明確に指摘している。

朝鮮時代後期の漢語教科書に用いられた濃音表記をより深く理解するには、その体系的な分析が不可欠であると思う。そこで本稿では、これまでの先行研究の成果を踏まえ、朝鮮時代後期に編纂された中国語官話³³教科書に現れる濃音表記を網羅的に整理し、記述統計の方法を用いてそ

族間に広がる過程で一番最初に根をおろしたのが我国であった。」と述べている。

³⁰ 「語頭子音群」とも呼ぶ。

³¹ 表1は姚駿(2008)頁20をまとめたものである。

³² 『華諺』は『華音啓蒙諺解』である。

³³ 「官話」とは明代以降、中国語共通語に対する呼称である。朝鮮時代の漢語官話教科書も例外ではないと思う。朝鮮初期、朝鮮人は漢民族共通語を「漢兒言語」と呼んで、1761年『老乞大新釈』からは「中国の話」「官話」

の使用状況と特徴を整理・対照する。まず、教科書の言語的基盤を全体的に把握し、その上で、教科書別に濃音表記の使用状況とその特徴を整理・比較し、朝鮮時代後期の教材に頻出する濃音表記の背景と音韻的意味を明らかにすることを目的とする。同時に、中国音韻学の理論枠組みを参照するとともに、第二言語習得の視点も取り入れ、濃音表記の使用について多角的に検討を行う。

3 研究資料

本稿の研究資料は『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』『学清』および『華音撮要』の4資料である。現存する朝鮮時代後期の漢語資料の中で、『華音啓蒙諺解』は判読性の高い刊本であり、文字が明瞭であるだけでなく、構成も整然としており、さらに序文を備えていることから、対音資料としてきわめて高い参照価値を有している。『你呢貴姓』『学清』『華音撮要』もまた、同時期の代表的な漢語学習書として知られている。更科（2005）は『華音撮要』が、濃音表記の使用や、山撰三四等開口字の見母字に-ian 韻母を用いる点など、音注形式の面で『華音啓蒙諺解』と一定の類似性を示すのみならず、会話内容の面でも『你呢貴姓』と共通点を有することを指摘している。さらに、これら四種の資料は成書または書写年代が近いため、対照研究にきわめて適した資料群であると考えられる。

以下は本稿で取り扱う研究資料の概要的な紹介であり、これら4資料に見られる音韻体系については、第5章において詳しく紹介することとする。

3.1 『華音啓蒙諺解』

現存する『華音啓蒙』には漢語本とその諺解³⁴本の二種類が存在する。漢語本『華音啓蒙』の本文は漢字のみで構成され、ハングル音注は付されていない。ただし、巻末の付録にはハングルの音注が見られ、特に「華音正俗変異」と題された部分には正音と俗音の両方が併記されている³⁵。漢語本『華音啓蒙』は李応憲によって編纂され、高宗20年（清光緒9年、1883年）に刊行された版本である。汪維輝（2005b）の考証によれば、李応憲（字：稚章）は金山の出身で、朝鮮憲宗4年（清道光18年、1838年）に生まれ、朝鮮哲宗6年（1855年、清咸豊5年）に科挙に登第し、その後、漢学教戒知枢や通津府使などの官職を歴任した。

これに対し、『華音啓蒙諺解』は漢語本『華音啓蒙』の本文（会話文）に対して、ハングルによる翻訳及び音注からなる諺解を施したものである。それ以前の諺解本とは異なり、『華音啓蒙諺解』は巻末の「華音正俗変異」部分（左右二音がある）を除くと、他の内容の音注には一音のみが記

と呼ばれることになった。その中で後期の「官話」が最も多く使われている。

³⁴ 朝鮮資料において、「諺(オン)」は漢語に相対して朝鮮語を指す。「諺解」とは朝鮮語を利用して漢語を分かりやすく解説したものである。『老乞大諺解』『重刊老乞大諺解』『朴通事諺解』『朴通事新訳諺解』『華音啓蒙諺解』などが挙げられる。

³⁵ 伊藤（2002）も「こうした二元的注音法は朝鮮王朝最末期の高宗代の漢学書『華音啓蒙諺解』に至って始めて破棄され、ただ一種の字音のみが表記されるようになった。」と指摘した。

され、声調を示す傍点も付されていない。本文では文と文の区切りに「○」が用いられ、その直後にハングルで文意の訳注が添えられている。汪維輝（2005b）によれば、韓国蔵書閣に所蔵されている『華音啓蒙諺解』には「光緒九年癸未印出」との記載が見られることから、諺解本と漢語本はいずれも 1883 年に同時刊行されたことが確認されている。

『華音啓蒙諺解』の構成は、巻頭の尹泰駿による序文、本文、巻末の付録（千字文・百家姓・干支・二十八宿・算数・華音正俗変異など）から成り、全体は上下 2 巻に分かれている。会話文の内容は朝鮮の使臣が北京を訪れ、宿泊、公務としての朝貢、そして旧友を訪ねるに至る過程を描いたもので、活発な移動と交流の様子が特徴的である。

『華音啓蒙諺解』の序文には音注が付されていないが、その序文からは、当該書の編纂理念や音注の性質をうかがい知ることができる。尹泰駿の序文に見られる「今李知樞應憲、取常行實用之語、略加編輯、名之曰《華音啓蒙》。若千字文、百家姓、並用燕京話、譯之以東諺、開卷瞭然、如置莊獄而求齊語。（現在、知樞の李應憲は、当時日常的に用いられていた実用性の高い言語を採り上げ、これに適度な整理・編纂を加えて『華音啓蒙』と名づけた。また、『千字文』『百家姓』についても、燕京一帯で実際に使用されていた口語を採用し、東諺（すなわち朝鮮語）によって翻訳している。読者は書を開けば直ちに理解することができ、その理解のあり方は、あたかも現地の言語環境に身を置き、直接その言語を学ぶかのようなものである。―筆者訳）」という記述から、当該書で採用されている音注が当時実際に使用されていた中国語の口語表現であり、書面語的で日常的使用に乏しい表現ではないことが明らかとなる。また、「略加編集」という語句から推察すると、当該書は当時の中国語の実際の発音に極めて忠実となるよう編集されたものであり、発音記録としても高い価値を有していると考えられる。

漢語本『華音啓蒙』には、木活字本・木版本・写本が存在し、その具体的な所蔵先については、遠藤光暁ほか（2009）『譯學書文獻目録』140 頁を参照されたい。『華音啓蒙諺解』には、古活字本・木版本・写本・影印本が存在し、その所蔵先については、遠藤光暁ほか（2009）同書 141 頁を参照されたい。

なお、漢語本『華音啓蒙』の本文には音注が付されていないため、音韻研究の資料として用いることはできない。そこで本稿では、『華音啓蒙諺解』を分析対象とし、主として『朝鮮時代漢語教科書叢刊』所収の影印本及び東京大学文学部小倉文庫所蔵の電子画像³⁶L44740 を参照資料として用いる。

3.2 『你呢貴姓』『学清』

『你呢貴姓』と『学清』もまた、朝鮮時代後期を代表する中国語教科書である。両書はいずれも写本として伝わり、成立年代は確定されていない。学界では『你呢貴姓』表紙の「大正八年(1919)己未十一月日修繕」及び『学清』表紙の「乙未（1895）四月初二日筆」に記された年号がともに朝鮮高宗時代のものであることを根拠に、両書は高宗年間（1864-1906 年）に成立したと推定さ

³⁶ <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogura/document/43651306-7b95-4ca6-87b8-23d4c9f4c37d#?c=0&m=0&s=0&cv=2&xywh=1651%2C8%2C2615%2C1560>

れている³⁷。『你呢貴姓』の表紙題記「大正八年己未十一月日修繕」と、『学清』の表紙題記「乙未四月初二日筆」とを比較すると、一見して『学清』の書写時期のほうが早いようにも見える。しかし、『你呢貴姓』の表紙題記に見られる「修繕」は書写時期を示すものではなく、修繕作業の完了時期を明示する語であるため、題記のみに基づいて両書の書写時期の先後関係を判断することはできない。

まず、『你呢貴姓』についてである。該書は現在韓国精神文化研究院に所蔵されており、巻頭には「李王家図書之章」の印章が押されている。表紙には「你呢貴姓 全」と題され、2 ページ目の「千字文」の前には「大正八年己未十一月日修繕」と記されていることから、該書が1919年に修繕を終えたことは確認できるものの、書写年代についてはなお確定できない。書名は会話文冒頭の語句から取られたもので、汪維輝(2005b)の考証によれば「你呢」は「你」の敬称にあたり、現代中国語の「您」に相当する。本文の前後には初学者向けの基礎教材や語彙表・俗語表が配されている。各ページは左・中央・右の三列構成となっており、中央に原文の漢字本文、右列に各漢字に対応するハングル音注、左列に漢字文の韓国語訳(文章・語彙・俗語・慣用句の解釈)が記されている。内容は冒頭の7 ページまでの「千字文」「百家姓」「干支」「二十八宿」「算数」など基礎的な文字・語彙学習内容、8~20 ページまでの会話文及び巻末の単語表や俗語表、独立語彙・語句などの整理という三つの部分から構成されている。

一方、『学清』は全体が会話文のみで構成されており、表紙には「乙未四月初二日筆」との記載があることから、1895年(乙未年)に書写された写本であると考えられる。各ページは上下二段に分かれており、上段には漢字原文とそのハングル音注、下段にはその意味をハングルで解釈した内容が記されている。文中には俗字や当て字が多用され、例えば「사(啥)」「디구(嘀咕)」などのように漢字の代わりにハングルを用いた例も見られる。

『華音啓蒙諺解』が朝鮮の使臣が上京して朝貢し、旧友を訪ねる内容であるのとは異なり、『你呢貴姓』『学清』の会話は「邊門口」³⁸という特定の場所に固定されている。両書ともに、遼東から来た雑貨商が「邊門口」で朝鮮の商人と牛革の取引を行った経緯を描いている点で共通している。全体として、両書の会話部分には多くの共通点が認められ、会話文の内容は非常に類似している。そのため、同一教材の異本あるいは改訂版として捉えることも可能であるが、一方で一部には差異も見られる。例えば、『你呢貴姓』には「母親是早去世，只有父親在家啊」という表現があるのに対し、『学清』では「父親是早棄世，只有一位母親在家兒」といった異なる文言が使われている。両書の会話文部分に見られる差異については、第3章において改めて紹介する。

これら二書の性質について、汪維輝(2005b)は『你呢貴姓・学清』の解題において次のように述べている。

“总体而言，这两种书的内容属于‘商贾庸谈’，是实用会话课本，编者应为朝鲜人(推测可能经过中国人的审定)，精通东北口语而文化修养不高，书中大量使用俗字和记音字可以证明这一点。”(全

³⁷ しかし、「大正八年」は日本の年号であり1919年に当たり、高宗の没年(1907年)とは時期が異なるため、「大正八年己未」の記載は修繕や追記の年代と考えられ、成立年代の判断には注意が必要である。

³⁸ 現在の中国遼寧省鳳城付近。

体的に見れば、これら二書は「商人同士の日常会話」に属する実用的な会話テキストであり、編纂者は朝鮮人であったと考えられる(中国人の監修を経ている可能性もある)。東北方言に通じてはいるが、文化的な素養はそれほど高くなかったことがうかがえる。書中に俗字や記音字が多用されていることが、これを裏づけている。―筆者訳)

汪維輝(2005b)は特に『学清』の編纂者は中国語の習熟度が低い朝鮮人であった可能性が高いと指摘する一方で、このような朝鮮語による代用や記音字の使用が、当時の口語に最も近い実態を記録しており、言語研究において非常に貴重な資料であることを強調している。『你呢貴姓』及び『学清』は、現時点において異本の存在は確認されていない。本稿では汪維輝(2005a)による影印本『你呢貴姓』『学清』のほか、朴在淵・周発祥(2002)の校注本『你呢貴姓・学清』も参照する。

3.3 『華音撮要』

『華音撮要』も朝鮮時代後期の代表的な中国語学習資料である。写本で、全1冊から成る。現在は東京大学文学部の小倉文庫に所蔵されている。『華音撮要』の内容は大きく3つの部分に分かれる。第1部分は1aから24bまで「不無宗志」と題された部分であり、主に朝鮮の商人と中国の商人の商談のやり取りの過程である。本文中のすべての漢字にはハングルによる音注と注釈が付され、文末には近代韓国語の助詞や語尾が添えられている。24bの末尾には「光緒三年丁丑菊月十六日 仁洞」と記されており、光緒3年(1877年)9月に書写されたことがわかる。また、その左側には朱書の「合二十四張」と書かれている。

第2部分は25a-52bにかけて収められた部分である。52bの末尾には「光緒三年丁丑菊月日終書」と記されている。この部分は第1部分の内容とおおむね一致しているが、個別の漢字以外、ハングル音注と注釈が施されていない。汪維輝(2011)はこの部分に一部の漢字にのみハングルによる注釈や韓国語の助詞・語尾が存在するのは書写者が完全に書き上げられていないためであると推測している。

第3部分は53a-66bに相当し、「伏兵答問」「開市問答」「勅使問答」などの短い会話文、「日行語」と題された慣用句、及び「日用雑語」と称する単語集の主に5つのカテゴリーから構成されている。各漢字の左側にはハングルでの注音があり、文の下にはその文意を示すハングル訳が添えられている。この第3部分は第1部分および第2部分の会話文と比較すると、内容のみならず体裁においても明確な差異が見られ、朝鮮語の助詞や語尾も付されていない点が特徴である。

本稿が参照するのは『朝鮮時代漢語教科書續編』所収の影印本及び東京大学文学部の小倉文庫に所蔵の写本の写真ファイル³⁹⁾L174580である。『華音撮要』も写本であるが、本書には明らかに異なる書写様式(漢字の大小、書体など)が確認される。例えば、表紙(0002.jpg)⁴⁰⁾には「丁丑菊月 日 仁洞」および「不無宗誌 全部」との記載が見られるが、「全部」の二字を除いた他の文

³⁹⁾ <https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogura/document/f8f74306-a40f-4d7d-9305-4a8f076ce039#?c=0&m=0&s=0&cv=0&xywh=-680%2C-209%2C6974%2C4160>

⁴⁰⁾ (0000.jpg)は小倉文庫『華音撮要』の画像ファイルの番号である。

字はいずれも左右二列に分けて重ね書きされている。「丁丑菊月 日 仁洞」という部分では、左列の漢字が全体に幅広く丸みを帯びているのに対し、右列は細長い印象を与え、特に「菊」「日」の二字においてその差異が顕著である。また、「仁」字に含まれる「二」の書き方は、右列ではやや波打つような筆勢を示している。「洞」字の水偏について、左右二列で異なる書写形態が確認される。さらに「不無宗誌」の部分では、「不」字の書き方の差異がとくに顕著であり、その相違は主に縦画および撇画に現れている。また、書名の二列のうち、右側は薄くて、左側は相対的に濃い状態である。これはおそらく右側が最初のもので、経年により薄れてきたため、左側が後人が補筆をして新たに書いた可能性があると考ええる。

書頭見返し(0005. jpg)には右より左へ順に「你不用和我花馬吊嘴巧言伶色办事不准也」「動靜無違表裡交正」「仁洞」「加未令術湯」「鄭 知事宅」「丁亥至月二十一日」「癸未九月十二日所洞」「癸未十一月」「徐順昌 丁丑菊月 日 仁洞」「徐順昌」「丁丑菊月日仁洞過存理」といった複数の題記及び書き込みが確認できる。このうち「加未令術湯」は二回出現しており、両者の書写様式には明確な差異が見られる。また、書頭の最左側には書名「華音撮要」が三列の縦書きで記されているが、その中でも漢字「華」と「要」の筆致の差異が比較的顕著である。この縦書きの三列の書名の並びについて、汪維輝(2011)は中央の一行を除き、左右二列に記された書名は後人が模写的に書き加えられたものであると指摘している。

しかし、本稿の検討によれば、書写様式の差異は表紙や書頭に限られるものではない。『華音撮要』の本文においても、字体や筆致の差異が見られる箇所が複数存在する。例えば、第1部分の11a(0016. jpg)-11b(0017. jpg)、19b(0025. jpg)-20a(0025. jpg)、第3部分の55b(0061. jpg)-56a(0061. jpg)、62a(0067. jpg)-62b(0068. jpg)などが挙げられる。これらの該当箇所に関する画像の対照は付録1を参照されたい。なお、この点については第4章で検討を加える。

『華音撮要』には序文が付されていないため、当書の書写過程を直接知る手がかりは得られない。しかし、表紙および書頭に「鄭知事」「徐順昌」という二名の人名が記されていることから、少なくとも両者が当書と関与していた可能性を推測される。会話文の書写様式の差異が生じた具体的な要因について、現時点では完全に明らかにすることは困難である。また、『華音撮要』全書に朱筆の「、」や「。」などが見られ、朱筆の意味の判明も難しい。ただし、一部の朱筆の「、」や「。」は句読点として用いられたと考えられる。更に、前後表紙の裏側に当たる0005. jpgの右側と0072. jpgの左側は反古紙を利用した点も注目すべきところである。以上のような『華音撮要』に見られる特異な書写状況を踏まえると、その分析にあたっては、より慎重な検討が必要である。

4 先行研究

4.1 朝鮮時代漢語教科書の研究概要

朝鮮人によって編纂された漢語官話教科書を利用した中国語研究は多岐にわたる様々な視野を備えて先駆的な研究が行われており、中国の研究者のみならず、日本や韓国の研究者もこれらの対訳資料に注目してきた。「1 研究背景」に既に述べたように、朝鮮時代の中国語教科書は母語

が中国語でない外国人学習者である朝鮮人が編纂した中国語資料として、独自の資料的価値を持つため、中国語研究において重要な役割を果たしてきた。現時点で、朝鮮時代の漢語官話教科書に関する研究成果は比較的豊富であり、特に『老乞大』『朴通事』『訓世評話』などを対象とした研究は教科書の版本考証、語彙・文法の分析、さらには音韻体系の検討に至るまで、幅広い領域で高度に進展している。

4.1.1 朝鮮時代初期漢語教科書の研究概要

朝鮮時代に編纂された中国語教科書の研究は最初、主に初期資料である『老乞大』や『朴通事』を中心に進められたが、特に1998年に旧本『老乞大』が発見されたことにより、日中韓三国の研究者の関心が一層高まった。太田辰夫(1953)は『老乞大集覧』の注釈や『世宗実録』の関連記録に基づき、『老乞大』は中国の明代、即ちおよそ朝鮮世宗5-16年(1423-1434)の間に成立し、朝鮮成宗11-14年(1480-1483)に初めて改訂されたこと、さらに崔世珍が諺解本や『老乞大集覧』、『単字解』などを編纂したことを指摘している。また、『老乞大諺解』と『老乞大集覧』の対照により、太田(1953)は崔世珍による諺解本が新本を基にしており、内容上の大きな改変はなく、本文は明初に改訂された原形を保持していると結論づけている。語彙・文法に関しても、同氏は『元曲選』や『元朝秘史』など同時代の資料との共時的な比較分析を通じて、『老乞大』に見られる言語が北朝以来中国北方で形成された「漢兒言語」⁴¹であると指摘している。

胡明揚(1984)は日本の京城帝国大学が1944年に影印「奎章閣叢書」に収録した『老乞大』を主要な研究対象として、その中に見られる複句⁴²を体系的に分析して、この資料における統語的側面の基本的特徴を明らかにした。一方、李泰洙(2000a)は『旧本老乞大』『老乞大諺解』『老乞大新釈』及び『重刊老乞大』という四種の異なる版本の『老乞大』を研究資料として、これらの資料に見られる複句の句末の助詞について詳細な考察を行った。李泰洙(2000a)はこのように複句の末尾に置かれる助詞の主要な機能は語気上の一時的な停頓や転換を表す点にあると指摘している。

朝鮮時代初期の中国語教科書は漢語本が多く、発音の記録がないため、初期中国語教科書に関する研究は主に版本考証及び語彙、文法に集中していた。『訓民正音』の登場により、諺解本に発音の記録が現れ、音韻に関する研究も進展した。これらの研究は主に諺解類教科書の音韻体系を分析し、当時の中国語の音声的特徴を明らかにするものである。例えば、胡明揚(1980)は『老乞大諺解』と『朴通事諺解』の対音研究を通じて、両者それぞれの音韻体系を整理した。遠藤(1984)は『翻訳老乞大』や『朴通事』における声調の調値⁴³を推定し、入声の分化や変調条件を分析した結果、これらの入声は北京—中原—帯の方言とは一致しないと指摘した。さらに遠藤(1984)は、

⁴¹ 『李朝実録』にも記録が残される。「宣諭聖旨曰：“(前略)你那裏使臣再来時、漢兒話省的著他来、一發不省的不要来。(中略)著他漢兒話省得宰相来我這裏説。『太祖実録』卷十一、六年三月辛酉。」「官話」を使う記録も見られる。例えば、「頭目葛貴見《直解小學》曰：“反譯甚好、而間有古語、不合時用、且不是官話、無人認聽。『成宗實録』卷一百五十八、十四年九月二十九日己未」

⁴² 単文(主語と述語が一つずつの文)とは異なって、二つ以上の主語・述語をもつ文が結合する文のこと。並列、因果、条件、選択、譲歩などの関係で複数の節が組み合わさった文を指す。

⁴³ 声調の音高や変化を数値化したもの。

明初の都が南京に置かれ、『洪武正韻』が南京語を基準としていたことから、『翻訳老乞大』『朴通事』の右側音は南京語に由来し、当時北京周辺で使われていた官話を反映していると推測した。

李泰洙(2000b)は初めて四種類の『老乞大』を比較研究の対象とし、中国語とモンゴル語の接触および相互影響の特徴を明らかにした。佐藤(2002)は、現代中国語を基準として、1998年に韓国・大邱で発見された旧本『老乞大』に記された語彙について研究を行い、旧本『老乞大』の中国語史研究における資料的価値について論じた。

張美蘭(1998)は『訓世評話』の白話部分に対する具体的な分析を通じて、当書が宋代以降、特に元・明時代の中国語の口語的特徴を反映していると指摘している。しかし、当時の朝鮮人によって使用された一部の語彙の用法や意味に「混合漢語」のような言語的状态が見られるとも述べている。例えば、「妖怪」という語は現代中国語においては怪物を意味する名詞として使われるが、『訓世評話』では形容詞として「奇妙な」「不思議な」、あるいは動詞として「奇異に感じる」「不思議に思う」といった意味で使用されている。また、「錢糧」という語は通常「お金と穀物」を意味するが、『訓世評話』の中では偏義複詞として「金銭」や「財産」の意味で用いられている。さらに、「好歹」という語は元・明時代の漢語においては「どうしても」「いかなる場合でも」といった意味を持っていたが、『訓世評話』では副詞として「必ず」あるいは「間違いなく」「確実に」といった強い確信を表す語気で作られている。汪維輝(2018)は『訓世評話』の語彙体系を『老乞大』や『朴通事』と比較し、明代以降における南方官話と北方官話の融合が現代中国語の共通語における語彙的基盤を形成したと結論している。

朝鮮時代の中国語教科書は当時の中国語の実態を把握するために有益であるだけでなく、その編纂過程自体が第二言語習得研究においても重要な参考資料となっている。近年では第二言語習得の視点からこれらの教科書を分析する研究も見られるようになっている。例えば、程相文(2001)「『老乞大』和『朴通事』在漢語第二語言教学發展史上的地位」や、黄明明(2004)「600多年前的漢語對外教學觀」、李可・邢永革(2018)「從『原本老乞大』和『朴通事』看朝鮮時代漢語教學情況」などが挙げられる。

また、朝鮮時代に編纂された多くの官話教科書は会話形式で構成されており、使節の朝貢や商人の貿易といった生活場面を多く含んでいるため、当時の中国と朝鮮半島との政治的・経済的交流を理解する上でも貴重な資料であり、歴史学の研究にも資する。具体的には、陳高華(1995)の『从『老乞大』『朴通事』看元与高麗的經濟文化交流』、蘇力(2004)『原本『老乞大』歷史学研究』などが挙げられる。

現在、『老乞大』『朴通事』などの資料に関する研究成果を体系的に整理した研究も見られる。例えば、曾昭聡(2007)は汪維輝(2005a)編『朝鮮時代漢語教科書叢刊』に収録された各種中国語教科書に関する言語研究の成果を整理・紹介している。遠藤光暁等(2009)『訳学書文献目録』は朝鮮時代の各漢語資料の研究成果を包括的にまとめた文献目録として重要である。また、魏洪(2012)は2012年までの約30年間における『老乞大』の各版本に関する研究成果を整理しており、音韻・語彙・文法・統語構造、さらには総合的な研究に至るまで多岐にわたる内容を扱っている。なお、本稿の主たる関心は朝鮮時代後期の資料に置かれているため、朝鮮時代初期および中期の中国語

教科書に関する研究についてはここでは詳述せず、魏洪(2012)及び遠藤光暁等の研究を参照されたい。

4.1.2 朝鮮時代中、後期期漢語教科書の研究概要

姜信沆(1978)『華音啓蒙諺解』の中の字音体系において、日母字の注音が「△」から「○」になった原因について論じたときに、この変化を中国東北の地方音の反映だと指摘している。鶴殿(1992)、(1994)、(1995)は『華音啓蒙』の千字文部分と『華音啓蒙諺解』の入声字の音注に一部表記の差異が見られることを踏まえ、 이-으 (i-y), 이-이 (ie-ie), u- 이 , 이-이 の書き分けについて考察を行っている。 이-이 (ie-ie)について、鶴殿(1992)は『華音啓蒙』の「千字文」の音注とその諺解本において現代的北京語の韻母 ie を持つ漢字に対して 이-이 (ie-ie) の2種類の音注が当てられていることに注目している。

鶴殿(1992)は、この2種類の音注が使われている漢字が主に假攝三等・蟹攝二等和山攝・咸攝三四等で、しかもその2種類の書き分けが舒声字/入声字の両方に見られると述べた。鶴殿(1992)の考察によると、非入声字の韻母の区別は中国の現代方言の区別と一致性がある。入声字 ie-ie については、鶴殿(1992)は中国の現代方言から説明しにくいと考えているが、「華音」の音注に見られる山攝・咸攝三四等の発音表記の特異な書き方は舒声字/入声字にかかわらず、呉語や客家語と共通した要素を持つと述べている。呉語や客家語の要素がなぜ『華音』に現れるかについて鶴殿(1992)は山攝以外の入声字の検討が必要であると指摘した。鶴殿(1994)は 이-으 (i-y) の書き分けについて、「j, c, s を声母とする止攝“止”“之”“脂”韻は、韻母が“i”または“y”となる。」と述べている。

岳輝(2006)は音韻と語彙から考察を行い、『華音』と『你呢』の言語的基盤は東北官話を基礎とし、その中でも特に遼東方言に近い特徴を持つと結論づけている。鋤田(2007)は東洋文庫本およびソウル大学奎章閣蔵本の『重刊老乞大諺解』を用いて、上声の連読変調に関わる傍点の用法を考察した。

何亜南と蘇恩希(2007)は語彙・文法・音韻の面から『你呢』と『学清』の資料的価値について論じた。また、この2冊は分量こそ多くないが、音声・語彙・文法・方言の理解において、貴重な言語資料を提供していると評価している。何・蘇両氏は『你呢』と『学清』の記述する中国語が当時の口語とほぼ一致しており、すでに現代中国語にかなり近い形になっていること、そして明らかな東北方言の特徴を持っていることを指摘している。

また、竹越孝(2018)は漢語の動詞「是」が本来の繫辞用法を越え、『訓世評話』『象院題語』『華音啓蒙』、『你呢貴姓』などにおいて例えば「遼東宴是我們赴京時往來都有。(『象院題語』23b)」のように動詞性述語と結びつき、日本語の「は」のような主題を表す機能を担う話題標識として機能している点から、朝鮮時代の教科書に見られる文法的差異を指摘している。

4.1.3 まとめ

以上に挙げた先行研究からもわかるように、朝鮮時代に編纂された中国語教科書を対象とした研究は非常に充実している。しかしながら、これらの朝鮮時代の中国語教科書に関する先行研究にはなおいくつかの問題点がある。

まず、全体的に見ると、朝鮮初期、中期の中国語官話教科書に対する研究にしても、後期資料に対する研究にしても、主に版本考証、語彙、文法の分野に集中して、音韻の研究が相対的に少ない。特に、朝鮮時代の中国語教科書に関する研究の多くは『老乞大』『朴通事』などの特定の教科書を研究対象としている。即ち、単一資料に集中して、音韻体系が類似する教科書間におけるクロスデータの対照が欠けている。

次に、音韻研究に関して言えば、教科書における音韻体系の把握という点では、特に朝鮮初期・中期の官話教科書に対する研究が比較的充実していると言える。発見時期がやや遅れている朝鮮後期の教科書でさえ、なおその音韻体系に関する研究はかなり成熟していると言える。しかし、これらの音韻研究は主に教科書に反映された音韻体系を整理・把握することに重点が置かれており、個々の音声現象についての議論は十分とはいえない。特に、朝鮮人が使用した特別な注音表記に対する関心はまだ十分とは言えない。

4.2 「慣用外中国語」に関する研究

朝鮮時代に編纂された中国語教科書は当時の中国語の音韻的特徴の理解や確認にとって非常に参考価値の高い資料である。しかし、これらの教科書は中国語を母語としない朝鮮人によって編纂されたものであるため、その表現の中に中国語の本来の用法とは異なるものが含まれている。母語が中国語でない朝鮮人の教科書編纂者がいくら中国語に習熟していたとしても、外国語の学習や使用の過程において母語の影響を完全に避けることは難しいと考えられる。このような当時の標準的な中国語の用法とは異なる「慣用外中国語」表現（文法・語彙・音声の面を含む）は朝鮮時代の初期・中期・後期にわたる中国語官話教科書の中に見られ、当時の漢語の実態を理解する上で極めて貴重な手がかりとなる。特に音声の面では、これらの「慣用外中国語」現象は、音韻の変化を理解するための直接的な根拠となり得る。そのため、中国語学の研究者たちの注目を集め、研究が進められてきた。以下ではその代表的な研究成果について概述する。

朝鮮時代初期、中期の資料に見られる「慣用外中国語」現象については現存する研究の多くが『訓世評話』を中心に展開されている。例えば、劉堅（1992/2005）や張美蘭（1998）は『訓世評話』にいくつかの「非漢語用法」が見られることを指摘している。汪維輝（2003）も『訓世評話』に見られる「非漢語用法」に注目している。例えば、人名や地名の後に用いられる「道的」によって「～と呼ばれる」の意味を表す用法は「非漢語用法」であり、著者の母語の影響、あるいは当時のモンゴル語の影響が考えられるが、更に研究が必要であると指摘している。遇笑容・曹広順（2013）は、この「人名・地名+道的」による「～と呼ばれる」の意味を表す用法のほか、「呵」

による仮定の意味を表す用法など、『訓世評話』に見られる特別な言語現象についても分析を行っている。

『訓世評話』には、「看-見」「聞-听」の混用、「丁」を助数詞として用いることのほか、原文中の「街坊」が「近所」、「操練」が「訓練」と記された例も見られる。汪維輝(2003)はこれらの用例が著者の母語の影響や偶然の誤用によるものと考えている。つまり、作者が自身の第一言語の音韻体系や語彙的感觉を元に漢語を用いた結果として、原文の意味からずれた用法が現れていると説明できる。

また、「妖怪」は『訓世評話』では全て形容詞「おかしい」の意味で使われている。「妖怪」が形容詞「おかしい」としての用法について、汪維輝(2003)は中国語文献には見られず、韓国語の言葉であると指摘していたが、丁喜霞(2018)は『訓世評話』の「妖怪」「感動」「拜謝」「晨早」などの言葉を対象に、中国語文献中の意義と使い方の考察によって、このような表現は文言性質と南方方言の言葉であり、「非中国語用法」ではないと推察した。例えば、丁喜霞(2018)は『漢紀』『十六国春秋』などの中国の文言文の文献の中で「妖怪」が形容詞として使用されている例を発見しただけでなく、『漢語方言大辞典』により、広東語にもこのような「妖怪」を形容詞に使う場合があることを発見し、「妖怪」は「非中国語用法」ではないと主張した。また、「拜謝」を「謝拜」、「早晨」を「晨早」と書くなど丁(2018)も中国の文献にその用例を確認した。このように、丁喜霞(2018)は『訓世評話』に出現した「妖怪」「感動」「拜謝」「晨早」などの言葉は「非中国語用法」ではなく中国語の文言文の状態と見なすべきだと結論した。また、同氏は、中国語母語話者ではない外国人が編纂した中国語教科書の中には母語の影響などに起因する非中国語的表現と中国の方言と文言を持つ部分の両方が存在する可能性があるため、中国語の固有用法(中国語の各方言と文言表現を含む)を「非中国語用法」と誤解しないように慎重でなければならないと指摘した。

一方、朝鮮時代後期の資料に見られる「慣用外中国語」の用法についても、研究者の関心を集めつつある。何亜男・蘇恩希(2007)は『你呢』や『学清』において、文法・語彙・音韻の各方面で韓国語の影響を受けた痕跡が見られると述べている。また、岳輝・李無未(2007)も『華音』や『你呢』の中に「慣用外中国語」の表現が存在すると指摘している。

岳輝(2008)は『老乞大』『老乞大新釈』『重刊老乞大』『朴通事』『朴通事新釈』『訓世評話』『華音啓蒙』『翻訳老乞大』『老乞大諺解新釈』『重刊老乞大諺解』『翻訳朴通事諺解』『朴通事新釈諺解』『華音啓蒙諺解』『你呢貴姓』を含むほとんどの朝鮮時代の官話教科書に対して体系的な考察を行った。岳輝(2008)の研究は官話の特徴と変化及び朝鮮官話教科書の内容の変更にについて検討しただけでなく、その中の「慣用外中国語」現象についても、語彙、文法、音声などの角度から議論を展開した。

岳輝(2008)によると、これらの「慣用外中国語」の一部は元末明初のアルタイ語族(主にモンゴル語)の影響で生じた「漢児言語⁴⁴」に由来している。両宋時期、漢族は遼、西夏、金の北方少

⁴⁴「漢児言語」とは標準的な中国語とは異なる表現のことで、元末明初の特定の歴史段階における蒙漢言語の接触と浸透の産物であり、当時の実際的な中国語の口語を反映するものと見られる。

数民族と約 300 年間対峙しており、各民族は雑居し、文化的接触や言語交流は密接であったため、北方方言はアルタイ語族から深刻な衝撃を受け、特に元代に入って、モンゴル語に多大な影響を受けた。このようにして形成された「漢児言語」は、当時の中国語の実際の反映であり、主に初期の朝鮮の中国語官話教科書によく見られる。朝鮮中期の中国語官話教科書における「慣用外中国語」は、モンゴル語、朝鮮語、梵語の外来語に由来する部分が存在する。岳輝（2008）はモンゴル語由来の言葉、例えば「乞大」は、学界では「契丹」の音転であると一般的に考えられているが、「契丹」はモンゴル語「hitat」または「hitad」の音訳であると指摘した。また、「戸洞、衙衙」「阿的」「搭護、搭忽」などもモンゴル語の言葉で、モンゴル語に由来する言葉は主に『翻訳老乞大』『翻訳朴通事』『老乞大諺解』『朴通事諺解』に出現し、また『訓世評語』にも少数の例が見られる。朝鮮語に由来する言葉は主に『訓世評語』に登場し、例えば、岳輝（2008）は「洞」が『韓国漢字辞典』において「村庄」「田舎」「地方」などの意味を持ち、また「洞」が韓国の地方行政区画の一つであり、中国の府、郡、県に類似していることを考証した。岳輝はさらに『訓世評語』第 45 話の文言の「有一老嫗有女，年十八，居古洞寺。」や「我是居洞口老女也」といった用例を根拠に、ここでの「洞」は朝鮮漢字語における「洞」に該当すると判断した。同氏はまた、初期の朝鮮では「洞居」は集落の単位で、集落の発展に伴い、その規模は徐々に拡大したと指摘し、「洞」が「村庄」「地方」を意味するのは朝鮮語に由来すると述べている。岳輝（2008）は崔世珍の『朴通事集覧』にある「毛施布」についての「此即本国人呼苧麻布之称，漢人皆呼曰苧麻布，亦曰麻布。」という解釈により、「毛施布」も朝鮮語に由来する言葉であると考えている。また、梵語に由来する言葉は主に仏教用語で、例えば「刹土」があり、幡柱などを意味する音訳である。岳輝（2008）は、朝鮮時代の中国語官話教科書に現れる中国語表現に合わない表現に対して、慎重な態度を取らなければならないと強調した。

また、朝鮮時代後期の漢語教科書に現れた有気音を無気音に、「来母 l」を「娘母 n」に誤読した現象は音声上の「慣用外中国語」表現として、岳輝（2008）の中で指摘された。例えば、本来「片（音 pian）」という漢字は有気音であるが、『華音』では「bian」と読まれて無気音となり、同様に「苦（k）」も本来有気音であるが、『你呢』では無気音になっている。「来母 l」を「娘母 n」に発音する場合では、「来母 l」の「回来再惱（唠）罷。——『華音』「這個是再不能惱（落，音 lao）下来的老實價錢哪。——『你呢』の「唠（音 lao）」、拿（拉）倒の「拉（音 la）」を「惱（音 nao）」「拿（音 na）」と読んで「娘母 n」になった。朝鮮語では、来母「ㄹ(l)」が語の最初の音節の初声（声母）となる場合、語頭で「ㄹ(l)」の発音を避け、娘母「ㄴ(n)」に置き換えて発音するという母語の習慣があった。そのため、当時の朝鮮人が[l]声母を[n]と誤読しても不思議ではない。これによって、岳輝（2008）はこのような「来母 l」を「娘母 n」に発音した漢語の影響ではなく L1 の朝鮮語に影響された負の移転であると主張している。

任玉函（2013）は『騎著一匹』『華音撮要』『閒話略抄』『華音啓蒙』『你呢貴姓』などの朝鮮時代後期の資料に対して言語分析を行う中で、それらに見られる文法的・音韻的な「慣用外中国語」の用法にも注目している。任（2013）は中国語の副詞「就」は通常、文中で状語として主語の後に置かれるのが一般的であるのに対し、朝鮮語においては「就」に相当する語が主に接続詞とし

て機能し、主語の前に置かれることが多いと指摘している。任玉函(2013)が挙げる例は、「一説说你卻是必明白著(『騎著一匹』3a)」、「那麼就咱們不必打賭, 你篩我敬, 儘量兒喝吧(『華音啓蒙』下10b)」などである。任玉函(2013)もまた、朝鮮後期の中国語資料において見られる b-p-f の混同や n-l 不分の現象がいずれも朝鮮語の影響によるものであると指摘している。

以上のように、朝鮮時代の中国語官話教科書に見られる「慣用外中国語」現象については長らく研究者の関心を集め、さまざまな角度からの研究が行われてきたことがわかる。特に朝鮮時代漢語教科書の語彙に見られる「慣用外中国語」用法に関する研究は比較的進んでおり、豊富な成果が蓄積されている。しかしながら、これらの研究は特定の教科書を対象としており、同時代の他の中国語教科書との対照研究が不足している。朝鮮時代に成立した異なる教科書を対照した岳輝(2008)の研究は単一教科書の研究に対する補充と言えるが、語彙と文法の部分に集中していた。朝鮮時代の漢語教科書の「慣用外中国語」用法の音声面に対して、岳輝(2008)は、有気音「p」が無気音「b」として表記されることや、「来母 l」が「娘母 n」として示されることを指摘している。任玉函(2013)も音声の面において岳輝(2008)と同様なことを指摘している。しかし、音声音韻の面から「慣用外中国語」表現を扱った研究は依然として少なく、今後更なる議論が必要である。例えば、朝鮮時代後期の漢語教科書に見られる濃音表記は音声面における「慣用外中国語」表現の一種だと考えられる。この現象についても、研究者によって注目され、一定の研究が行われている。以下、4.3 で具体的に紹介する。

4.3 濃音表記についての先行研究

朝鮮時代後期の中国語教科書の漢語音の音注に見られる濃音表記は、「慣用外中国語」の音韻音声上の具体的な表現の一つとして漢語研究者の関心を惹き、議論が展開されているがそれほど多くはないのが現状である。鶴殿(1985)『『華音啓蒙諺解』の漢字音注の特質』においては、『華音啓蒙諺解』の漢字の声母、韻母表記に現れた主な音韻特徴を検討する中で、その中に現れた濃音表記への言及がなされている。鶴殿(1985)は、声母の表記要素部分における平音と濃音の使い分けが g-sg、s-ss だけに現れることに注目している。鶴殿(1985)は、sg-表記について、鼻音終わりの中広母音韻母 an、ang、yn、yng の場合にのみ用いられると結論し、また、ss-表記に関しては「s と ss の書き分けは、いわゆる細音⁴⁵に先立つ場合に多く見られる」と指摘した。

更科(2005)「19世紀末朝鮮の北方漢語資料『華音撮要』の研究—ハングル音注を中心に—」では、『華音撮要』(1877)(以下『撮要』と略す)の sg-、ss-表記の出現原因及び特徴に触れている。sg-の出現について、更科(2005)は、音写者が g-声母を濃音的に聞いたことにより、『撮要』の「幹」「趕」「跟」「墾」「剛」「更」という6字に固定されたと推測している。ss-に対しても、更科(2005)は sg-の場合と同様に音写者が s-を濃音的に聞き取ったと推測した。声母に見られる s-ss のような表記の揺れについて、更科(2005)は、語頭では濃音表記、非語頭の強勢のない位置

⁴⁵ 韻母が発音する時口腔の開きが大きいのは「洪音」、閉じているのは細音となる。また、硬口蓋介音 i があれば細音で、ないと洪音である。

では平音表記という使い分けの傾向を読み取ることができると結論づけた。

林智凱(2021)は『華音啓蒙諺解』を研究文献とし、陰平、陽平、上声、去声の声調によって整理し、カイ二乗検定⁴⁶という推測統計学の方法を導入して分析を展開した。設定自由度は3の前提で、期待確率P値は0.1073となった結果から、「硬音⁴⁷的使用與聲調並無關係(硬音の使用は声調と関係がない。一筆者訳)」との結論に達した。

このように、朝鮮対訳資料の漢字音における濃音表記に関する研究は一定程度進んでいるが、現段階では充実しているとは言えず、更なる発展が望まれる。鶴殿(1985)は『華音啓蒙諺解』の漢字音注に対する全体的な考察であるが、濃音表記の認識についての展開は十分とは言えない。なお、鶴殿(1985)が提起したs-とss-の書き分けが細音に先立つ場合に多く見られるという結論については、再検討の余地があると思われる。

林智凱(2021)が用いたカイ二乗検定という分析方法は朝鮮対訳資料の研究方法に対して革新的で、参考に値するが、『華音』の分析に適しているかどうかは更に考慮の必要があると思われる。カイ二乗検定が行われる必須条件の一つは n (各グループのサンプル数) ≥ 40 である。林智凱(2021)の研究において、s-表記のデータは100例あるのに対して、ss-表記は合計36でサンプル数の最小限に達していない。また、林智凱(2021)の声調とss-表記の「硬音の使用與聲調並無關係」という結論について、なお考慮の余地が残されている。カイ二乗検定は二つの質的変数が独立であるか、あるいは連関があるかを確かめる方法で、AとBの間に関係がないという結論を導くことが難しいからである。また、林智凱(2021)は濃音表記に対しての貴重な発展であるが、声調の単一視点に止まっているだけで、他の音韻特徴、例文分析などの考察は見られない。

以上のように、朝鮮時代後期の中国語教科書の音注に見られる濃音表記は特別な現れとして既に研究者の関心を引き、ある程度の研究が進められてきた。これらの研究は濃音表記が研究に値する対象であることを示すと同時に、今後のさらなる検討の基盤を提供している。全体的に見ると、濃音表記に対しての研究は依然として限られ、まだ十分とは言えず、濃音表記sg-、ss-を中心としての展開も見られない。現段階で把握できる先行研究においては朝鮮後期の各種中国語資料における濃音表記の性質について、多くの研究者が共識に至っており、それは主に強い語気、感情、または動作を表すために用いられているというものである。濃音表記の基本的な性質については、既存の研究の中で確かに一定の共通理解が見られるものの、その使用理由や語用的特徴についての把握はまだ十分に至っていない。特に、朝鮮対訳資料の漢語音に見られる濃音表記の出現原因に対しての分析を更に検討する必要がある。そして、既存の研究では濃音表記の具体的な用例に対する体系的な整理と詳細な分析が全般的に欠けており、用例の提示と論証においてもなお不十分な状態である。

さらに、既存の研究は一冊の教科書に焦点を当てたものが多く、同時代に編纂された他の朝鮮

⁴⁶ χ^2 検定。観察データと期待データの差が偶然かどうかを統計的に検証する方法で、主にカテゴリーデータの適合度や独立性の確認に用いられる。カイ二乗検定はサンプル数が十分に大きいことが前提で、一般的には全体の $n \geq 40$ かつ各セルの期待度数 ≥ 5 が目安とされる。

⁴⁷ 濃音のことである。

時代後期の中国語教科書に見られる濃音表記との横断的な比較研究は未だ十分に行われていない。また、濃音表記の分析も多くの場合は単一の音素や音節レベルにとどまっており、語単位や文単位といったより大きな言語単位に基づく分析が欠けている。濃音の特徴に関する理解も、基本的には音韻論の枠内にとどまり、第二言語習得といった他の多様な視点からの説明や検討はほとんど見られない。そのため、濃音表記の用例整理、具体的な用例の語用的機能の分析、各教科書間の比較、そして学際的な視点の導入など、多角的な側面から研究をさらなる深化と拡張が求められる。これにより、濃音表記に対するより深い理解が期待される。

4.4 まとめ

以上のことから、朝鮮時代に編纂された中国語教科書は、中朝間の言語交流において重要な価値を有するだけでなく、当時(19世紀末)の中国語の使用状況を知るための貴重な一次資料でもあることがわかる。しかし、これらの教科書は母語が中国語ではない朝鮮人学習者によって編纂されたため、中国語本来の規範体系とは必ずしも一致しない用法が避けられない。朝鮮の対音資料に見られるこうした特殊な表現もまた、研究者が注目してきた重要な対象である。しかし、既存研究の全体的な傾向を見ると、「慣用外中国語」表現に関する研究は主にその語彙・文法面に集中しており、これに対して、音声や音注に現れる特殊表記に関する研究は相対的に少なく、なお大きな発展の余地が残されている。特に濃音表記の使用は朝鮮時代後期の中国語資料に共通して見られる現象であり、より体系的かつ詳細な検討が求められる。

現在、一部の研究者は濃音表記の問題に注目し、さらなる研究の必要性を指摘しているものの、体系的な整理・分析はまだ行われていない。現存する研究は単一資料を対象とするものが多く、音韻体系が類似する同時期の他の資料を比較する試みはほとんど見られない。また、関連する議論は主に音韻学の視点に限られ、多角的分析や学際的な検討や分析は十分とは言えない。したがって、朝鮮時代後期の資料に見られる濃音表記を体系的に整理・分析することは、この既に明確化された研究課題に対して、重要な学術的意義と研究の発展にもつながる。

前述の研究上の不足を踏まえると、朝鮮時代後期の中国語資料における濃音表記を体系的に研究することは、これら特殊な音注が形成された原因、即ち漢語の音韻変化によるものか、学習者の母語による影響かを明らかにする上で有益である。これにより、ハングル音注に反映された中国語の音声面の実態をより把握できるだけでなく、朝鮮時代後期の対音資料研究、特に音声面の研究を進展させることにもつながる。また、濃音表記の体系的整理と分析は、朝鮮時代の漢語教育実践の理解をさらに深め、漢朝間の言語接触研究に新たな資料を提供することを可能にする。更に、異なる資料に現れる類似している現象を対照分析することにより、第二言語習得研究における重要な参照資料を提供することも可能である。

第2章 『華音啓蒙諺解』の漢語音における濃音表記 sg-、ss-

『華音』は朝鮮時代後期に公式に編纂された漢語教科書であり、その構成と印刷は整然としており、内容も体系的であるため、高い学術的価値を有している。特に、当該書に記載された諺文（ハングル）による発音表記は当時の漢語音韻体系を研究する上で極めて貴重な資料である。

しかしながら、『華音』は母語が漢語ではない朝鮮人学習者によって編纂されたものであり、整然とした体裁や構成を備えているものの、一部の内容には違和感を覚える表記も見受けられる。また、当時の朝鮮人が漢語の発音を記録する際に使用した諺文は音素文字であるのに対し、漢字は音節単位で表記される表語文字⁴⁸である。このような文字体系の相違が音韻記録における一定のズレや独自の表記法を生じさせる要因となったと考えられる。その代表例として、朝鮮時代後期の漢語資料に見られる濃音表記 sg- および ss- の使用が挙げられる。

現存する数少ない朝鮮時代後期の漢語教科書の公刊本の一つである『華音』は、濃音表記の使用実態およびその漢語音韻表記における機能を解明する上で極めて重要な参考資料となる。特に、他の手書き資料と比較する際、『華音』の音韻記録は相対的に安定しており、濃音表記の使用目的やその特徴を分析する上でより信頼性の高い根拠を提供し得る。そこで、本章では『華音』に見られる sg- および ss- の濃音表記について体系的に整理し、その特徴を分析することで、朝鮮人漢語学習者が漢語の発音を記録する過程における濃音表記の役割を明らかにし、その使用目的についても探求してみたい。

1 濃音表記 sg-

1.1 音韻地位から見る sg- 表記

朝鮮対訳資料に濃音表記 sg- が初めて確認されるのは、『華音』である。これ以前の初、中期朝鮮時代の漢語教科書に sg- 表記が見られないことについては、韓国の蔡瑛純(2002)がその著書『李朝朝漢対音』51 頁において、「李基文先生(1980:132, 193)指出, ㄱ是 15 世紀中葉以後在朝鮮語的聲母為了表現剛音⁴⁹而開始用的, 十七世紀中葉以後朝鮮語裏又產生ㄱㅅ, ㄱㅅㅅㅅ等的變體, 於十八世紀前後加以混用。但朝鮮對譯資料中, 只有ㄱㅅ在 19 世紀出現, 這就是ㅅ的剛音。(朝鮮側の対訳資料の中、ㄱㅅ(sg-) だけが 19 世紀に現れ、それはつまりㅅ(g-) の濃音である。一筆者訳)」と記している。蔡氏の指摘から、濃音表記 sg が漢語音の表記に用いられる現象は朝鮮時代後期の資料に特有のものであるといえる。『華音』には声調に関する直接的な記述はない⁵⁰が、林智凱(2021)は Kim (2000) が指摘した現代韓国語における濃音の音高⁵¹が普通の子音より高いという特徴に

⁴⁸ 「英 logogram. 漢字において 1 字 1 語の原則が確立したのは、もともと漢字の表す中国語の単語が単音節・孤立語の特徴をもっていたので、音声の面でも形態の面でも、言語の単位である単語が単位として比較的抽出しやすかったことによる。」—『言語学大辞典、第 6 巻・術語編』、1114。

⁴⁹ 濃音のこと。

⁵⁰ 朝鮮時代初期、中期の漢語教科書、例えば『翻訳老乞大』や『翻訳朴通事』では、傍点を用いて声調を示していた。後期の資料になると、声調に関する注記は一切見られなくなる。

⁵¹ 音の高さ(pitch)。主に音波の周波数に依存している。—『言語学大辞典、第 6 巻・術語編』、139。

に基づき、『華音』における濃音表記の使用は音高の違いを表すことと関係している可能性があると考えている。そのため、林智凱（2021）は声調と『華音』に現れた濃音表記の使用について研究を行っており、本章では声調の部分については扱わない。sg-表記の使用と特徴を把握するために、漢語の中古音⁵²体系を参照してその例字の音韻地位を確認してみた。以下、資料中には sg-表記が全部で 9 字現れた。これらの漢字のハングル音注のローマ字転写⁵³と中古音韻地位⁵⁴を表 2 に示す。

表 2 『華音』の sg-例字

例字	転写	音韻地位
剛	sgang	見唐開一平宕
缸	sgang	見唐開一平宕
乾	sgan	見寒開一平山
懇	sgyn	溪很開一上臻
更	sgyng	見庚開二平梗
肯	sgyng	溪等開一上曾
亘	sgyng	見嶺開一去曾
柑	sgan	見談開一平咸
根	sgyn	見痕開一平臻

表 2 に示した 9 字の声母は主に見母で、現代漢語（漢語ピンイン）の g 声母に対応する。『華音』の g-表記の例字は 61 字（紙幅の都合上、例は省略する）で、確認された 58 例字⁵⁵のうち、「跪」guei、「共」gung、「狂」goang の 3 字は群母である。ただし、「狂」が、「跪」「共」とは異なり、平声字で、現代漢語では有気音 k-になる。「跪」「共」「狂」の 3 字以外の 55 字は全て見母である。即ち、g-sg 表記のいずれも主に現代漢語の g-声母に相当する。ただし、「懇」sgyn、「肯」sgyng は他の 7 字と異なり、溪母で現代漢語（漢語ピンイン）の k-声母に対応する。『華音』において、k-声母に当たる漢字は合わせて 22 字があり、全部ㄱ(k-)で表記されていることから、漢語の有気音声母 k-と無気音声母 g-の対立は既に当時の朝鮮人に認識され、『華音』の音韻体系にも反映されている。

⁵² 普通、漢語の時代区分を行う際、先秦時期を「上古音」、隋唐時期を「中古音」、宋代を「近古音」、元明を「近代音」と呼ぶ。なお、「中古音」とは主に『切韻』を代表とする音系を指す。

⁵³ 本稿のハングルをローマ字に転写する方式は次の通りである。

子音：ㅏ b/ㅑ p/ㅓ m/ㅕ f/ㅗ c/ㅛ t/ㅜ n/ㅝ s/ㅟ ㅜ c/ㅟ s/ㅟ ss/ㅟ g/ㅟ k/ㅟ ng/ㅟ h/ㅟ/ㅟ'ㅟ r.

母音：ㅏ @/ㅑ y/ㅓ i/ㅕ o/ㅗ a/ㅛ u/ㅜ e/ㅟ io/ㅟ ia/ㅟ iu/ㅟ ie.

⁵⁴ 音韻地位とは、隋唐時代の中国語音である中古音での音韻の類別のことで、各時代の中国語における漢字音の区別を論じる時の基準となるものである。音韻地位の確認は漢語の中古音体系を参照するのが一般的であるため、本稿は『漢字古音手冊』、『古今字音対照手冊』『中原音韻』による。表 2 の「剛」を例として、「見唐開一平宕」の「見」は声母(見母)を、次の「唐」は韻類(唐韻)を、次の「開」はいわゆる開合(開口)を、次の「一」は等(一等)を、次の「平」は声調(平声)を、最後の「宕」は摂(宕摂)をそれぞれ表す。

⁵⁵ g-表記の例字のうち、「赶」「棍」「哽」の 3 字の音韻地位が確認されないため、音韻地位の統計対象外である。

河野 (1968) が朝鮮漢字音を考察した時指摘したように、中国語の見母、溪母、群母は朝鮮漢字音においてほぼ全ての文字が無気音 g- で表記されるのが原則である。同様に、李徳春 (2003) も朝鮮漢字音を議論した時、中国語の「溪母之字大多變為見母」と指摘し、愼鏞權 (2014) は『華音』の溪母字「懇」「肯」は朝鮮漢字音で共に「ㄱ gyng」の無気音に発音されていると指摘した。したがって、『華音』の溪母字「懇」「肯」が無気音で表記されるのは朝鮮漢字音のこの原則による可能性が高い。

一方、sg-表記の例字の韻母は ang、an、yn、yng で、いずれも鼻音終わりの中広母音韻母⁵⁶で、鶴殿(1985)が提出した「g と gg⁵⁷との書き分けがあるのは、鼻音終わりの中広母音韻母 an、ang、un⁵⁸、ung⁵⁹の場合に限られる。」という結論と一致している。

sg-表記の例字の韻母は鶴殿(1985)が指摘した鼻音終わりの中広母音韻母の場合に限られるという結論と一致している。しかし、鶴殿 (1985) は具体的な例を挙げていないだけでなく、g-表記との対照も行っていない。表3は、鼻音終わりの中広母音韻母を持っている g-表記の例字と対照する結果である。

表3 鼻音終わりの中広母音韻母の g-sg 表記例字

sg-例字	g-例字	音韻地位
乾 sgan	干 gan	見寒開一平山
根 sgyn	跟 gyn	見痕開一平臻
更 sgyng	庚 gyng	見庚開二平梗

『華音』の g-表記例字には、韻母 ang を持つ例字はないが、an、yn、yng を持つ例字はいくつかが見られる。例えば、「赶」gan、「幹」gan、「干」gan、「跟」gyn、「庚」gyng が挙げられる。表3に示したように、「干」gan、「跟」gyn、「庚」gyng と「乾」sgan、「根」sgyn、「更」sgyng は、声母表記に g-sg だけが異なっていて、音韻地位は完全に一致している。即ち、鼻音終わりの中広母音韻母を持つ場合、g-sg 表記例字の音韻地位等価であることから、中広母音韻母は g-sg の使い分けの原因ではないと推定できる。

1.2 文の焦点から見る sg-表記

sg-表記の性質について、蔡瑛純(2002 : 91 頁)が「(前略)但當時 (19 世紀—筆者注) 朝鮮使用剛音，只是為了強調動作與語氣，實際上與ㄱ並沒有甚麼差別⁶⁰。(前略)しかし当時の朝鮮で剛音

⁵⁶ 鶴殿 (1985) は中広母音韻母について具体的な説明をしていない。おそらく広母音と半広母音の間に位置する韻母を指すものである。

⁵⁷ 鶴殿(1985)原文のまま、『華音』の実際の表記は sg-である。

⁵⁸ 本稿での転写は yn。

⁵⁹ 本稿での転写は yng。

⁶⁰ 蔡氏の原文の記述はあまり明確ではないため、ここでの「沒有甚麼差別」は主として漢語音注におけるㄱとㄱの間に区別がないことを指していると筆者は考える。

が用いられたのは動作やニュアンスを強調するためにすぎず、実際にはㄅ (g-) と区別されていなかった。一筆者訳)」と指摘しているように、19 世紀の朝鮮人が対訳資料で濃音表記を使用したのは主に一部の内容を強めるためであったと考えられる。したがって、本稿では濃音表記の使用は文の中での強調される部分と関連している可能性があるという仮説を立て、本節では『華音』に見られる sg-表記を含む文の焦点を分析し、濃音表記の使用が強調との関わりを更に確認する。

徐烈炯・潘海華 (2005) によれば、通常、文の中の重要な部分、際立った部分、または強調される部分は「焦点 (focus)」を指す。徐烈炯・潘海華 (2005) は「焦点」とは主に「从文字和情景中都无法推出的信息(文字や文脈状況から推測することができない情報—筆者訳)」、即ち「新情報」⁶¹を意味するものと指摘している。ただし、新情報を伝達する語が必ずしも文の中で初めて現れる語とは限らない点に注意する必要があり、この点に関しては中国語の場合においても同様に適用される。「焦点」は主に情報焦点 (informational focus) ⁶²と対比焦点 (contrastive focus) ⁶³の二種類に分けられる。このうち、「情報焦点」は中国の一部の研究者によって「常规焦点」(張伯江・方梅 1996) や「自然焦点」(徐烈炯・劉丹青 1998) とも呼ばれている。徐烈炯・潘海華 (2005) は更に「信息焦点是每句中必有有的，而对比焦点不是必有有的。任何一句话都不能没有新信息，但并非每句话都要做对比。(情報焦点は文の中に必ず存在するが、対比焦点は必ずしも存在するわけではない。どの文にも新情報は不可欠であるが、すべての文が対比を伴うとは限らない。一筆者訳)」と述べている。したがって、本節では主に濃音表記が現れる例文における情報焦点を中心に考察する。

中国語の文においては、主述構造の述語、修飾構造の定語(連体修飾語)と状語(連用修飾語)、動目構造の目的語、動補構造の補語、更に指示代名詞や疑問代名詞といった成分が新情報を担うことが多いとされる。そのため、これらの部分は文の情報焦点として機能することが一般的であり、重音もまたこれらの成分に置かれる場合が多く見られる。ただし、これらの成分が新情報を担うことが多いとはいえ、それは必ずしも絶対的な基準ではない。例えば、動目構造の文において目的語ではなく、その動詞自体が新情報となる場合に、重音はその動詞に移る可能性が高い。以上の点を基にして、本稿では、通常新情報を担うとされる **a** 述語、**b** 定語(連体修飾語)と状語(連用修飾語)、**c** 目的語、**d** 補語、**e** 指示代名詞と疑問代名詞といった文の成分に基づき、『華音』において sg で表記されている漢字が現れる例文を対象として、その焦点分析を行った。また、前後の文脈(コンテクスト)をも考慮しつつ、その中に対比焦点⁶⁴が存在するかどうかの確認も合わせて行った。その分析結果を表 4 及び表 5 に示す。

⁶¹「新情報」と「旧情報」の定義について、徐烈炯・潘海華 (2005) は Halliday (1967) を踏まえ、旧情報を「anaphorically recoverable」、新情報を「textually and situationally underivable information」と述べている。

⁶² 文中で新しい情報や聞き手にとって未知の情報を示す部分のこと。

⁶³ 文中で他の可能性や選択肢と対比して強調される部分のこと。

⁶⁴ 対比焦点は下線で提示する。

表 4 sg-表記字を含む例文の焦点状況

剛 sgang (3 例)	(1) 我是 a(長來長往的), b(剛 sgang) 懂 dung 得 b(幾句眼前的)c(話兒)。(上 7b) (2) 所以 b(來往的) 老爺們 b(都)a(要吃) 呢 b(纔剛 sgang) 打魚船上, 買來 c(一條魚) 有 c(一尺多長的)。(上 8b) (3) e(怎麼)a(說) 呢, 我們 b(剛 sgang) 出 c(鳳凰城地方), 到 c(遼東界) 上, 下咧 a(三天一夜的)c(大雪)。(下 20a-b)
缸 sgang (1 例)	(4) 有 a(一尺多長的), b(咳) 在水缸 sgang 裏活着呢。(上 8b)
乾 sgan (2 例)	(5) 把 c(那箇魚) 先 a(割肚子刮鱗), b(多) 洗 d(兩會兒) 教 c(他)a(乾 sgan 淨些兒), 擱 b(着刀板上) 剝成 d(塊兒)。(上 8b-9a) (6) 賣的 e(甚麼) 酒。紹興黃酒乾 sgan 白燒酒五加皮玫瑰露狀元紅翰林春史國公各樣藥酒 b(都)a(有) 咧。(上 9b)
懇 sgyn (1 例)	(7) 今年 b(要往京裏)a(考會試去), 他 b(再三再四)a(懇 sgyn 求)c(我), b(同他一塊兒)a(去考)。(上 17a)
更 sgyng (2 例)	(8) 我 b(本來)a(無心進京), 排不得 c(朋友的臉), b(巴不得) 隨 c(他) 走, 那麼 b(就更 sgyng)a(好)。(上 17a-17b) (9) b(咳) 有 b(一種)c(造化)b(更 sgyng)a(好看), 拿 b(一箇)c(銅盆) 盛 b(一盆)c(水), 把 c(石頭) 沉 b(得那盆裏), b(立刻就) 發雲發霧的, 好像 c(神仙洞裏) 一般樣。(下 26b)
肯 sgyng (1 例)	(10) 他 b(本) 是 c(聾子), 我 a(說)c(東) 他 a(說)c(西), b(高聲) 說 c(他) 他 a(肯 sgyng 胡塗), 教 c(我) 氣 d(死) 說 d(不出)c(話) 來。(上 21a)
亘 sgyng (1 例)	(11) 我們是 b(亘 sgyng 古以來終沒有)a(改過) 咧 所以算 c(我們東國) 是 c(都叫小中華)。(下 7b-8a)
柑 sgan (1 例)	(12) 這是 b(便易)a(酒飯), 沒有 e(甚麼)c(可口的), b(不過) 是 b(西洋)c(葡萄酒), b(安徽的)c(竹筴), b(杭州的)c(柑 sgan 子), b(玉田的)c(火腿), b(松江的)c(鱸魚), 沒有 e(甚麼)c(山珍海味)。(下 9b-10a)
根 sgyn (3 例)	(13) 我聽說 b(你們那邊土產的)c(靈草), 有 b(一種)c(人蔘) 是 b(我們南方要緊所用的) 東西, 你把 a(那箇)c(根 sgyn 底)a(講一講) 罷。(下 10b-11a) (14) 嚶啲 b(這箇石頭的)c(原根 sgyn), 說 d(起來)b(真是)c(稀罕的) 咧。(下 23b-24a) (15) b(要往家裏走) 的時候兒, 打 c(西邊) 來 b(一位) 道士, 身穿 b(一件黑紗)c(道袍), 拿 b(一根 sgyn)c(拐棍)。(下 27b)

表4の15例のうち、例文(6)の「乾 sgan 白燒酒」という sg 表記を含む部分には「情報焦点」と「対比焦点」のどちらも見られない。「情報焦点」について、**a** 述語に属しているのは例文(5)「乾 sgan 淨些兒」、例文(7)「懇 sgyn 求」、例文(10)「肯 sgyng 胡塗」の3例である。例文(1)と例文(3)「剛 sgang」、例文(2)「纔剛 sgang」、例文(4)「咳在水缸 sgang 裏」、例文(8)「就更 sgyng」、例文(9)「更 sgyng」、例文(11)「亘 sgyng 古以來終沒有」及び例文(15)「一根 sgyn」は**b** 定語で、例文(12)「柑 sgan 子」、例文(13)「根 sgyn 底」、例文(14)「原根 sgyn」とは**c** 目的語に属す。「情報焦点」の**d** 補語、**e** 代名詞パターンは sg 表記例文において見られない。「対比焦点」については、例文(1)と(3)の「剛 sgang」、例文(9)「更 sgyng」と例文(11)「亘 sgyng 古 gu 以來終沒有」の4例しか見られない。

『華音』における sg 表記を含む全15例の例文のうち、例文(6)を除く14例では、sg で表記された漢字はいずれも文の中の焦点部分に現れている。これは濃音表記の出現位置が文の焦点、即ち強調されるべき部分と直接的に関わっていることを示していると考えられる。そして、これらの焦点部分においては、一部の音節が更に強く際立たされる場合があり、それが音節上のプロミネンス⁶⁵として現れる可能性がある。音注の記録から見ると、このような音節上のプロミネンスは濃音表記 sg によって示されている可能性がある。ただし、文献資料の音注記録はプロミネンスの存在を推測することはできるものの、音の高さ・強さ・長さといったパラメータを直接的に数値化することはできない。このような量的測定は実験音声学の手法によってのみ可能である。

文焦点の分析の結果と音注に基づいた結果、sg 表記の使用は「焦点」や音節上のプロミネンスと関連している可能性が推測されるが、g-表記を含む漢字の例文においても、sg 表記の例文と類似している焦点分布が見られる場合があり、例えば、下記の表5に示される通りである。

表5 g-表記字を含む例文の焦点状況

貴	(1) 請問 e (這) c (位) a (貴 <u>gui</u> 姓)。(上 1a)
官	(2) 我 b (不) a (是) c (做京官 goan 的), a (是) b (候補的) c (道台) 咧。(上 2a)
赶	(3) 你 a (去叫) c (我) e (那箇 ge) c (赶 gan 車的), 把 c (牲口) a (套上) b (快些兒) a (走) 罷。(上 18a)
怪	(4) e (這箇) 石頭 a (古 <u>gu</u> 怪 <u>goai</u>) 的 d (狠)。(下 24a)
改	(5) 天氣 b (不) a (早), b (改 <u>gai</u> 日再) a (會) 罷。(下 16b)
盖	(6) 你 b (先) a (倒) b (一碗) c (開水) a (來), 把 c (茶葉) a (攪) b (得碗裏頭), 盖 <u>gai</u> 上 c (碗盖) b (多) 悶 d (一候兒), a (別) 教 c (他) a (出氣) 罷。(上 7b-8a)

表5の例文(6)は表4の例文(6)と同様に、「情報焦点」と「対比焦点」のいずれも見られない。例文(1)「貴 gui 姓」、例(4)「古 gu 怪 goai」は、「情報焦点」**a** 述語で、例文(5)「改 gai 日」は

⁶⁵ プロミネンスは「文中の局所の強調の韻律的特徴(武田・市川(1991))」で、その特徴は音の強さを高め、音域を拡大し、発音の持続時間を延長することに表れているので、極めてはっきりと聞こえる。即ち、特定の要素を音声的に強調する。

b 定語であるとともに、「対比焦点」でもあるが、濃音表記 sg-ではなくお平音表記 g-が用いられる。例文(2)「倣京官 goan 的」という部分は c 目的語に属するが、濃音表記は使用されていない。また、例文(3)の c 目的語「赶 gan 車的」、e 代名詞「那箇 ge」も「情報焦点」に該当しているが、それにもかかわらず、濃音表記が使用されていない。表 4 及び表 5 の対照により、焦点部分のパターンが同様の場合において、g-sg 表記の両方が使われることから、文の焦点や音節上のプロミネンスは g-sg 書き分けの直接的な原因ではないと分かる。文の焦点や音節上のプロミネンスが濃音と平音表記の使い分けの直接的な原因ではないものの、濃音表記の使用は文や音節上の強調部分と明確に関連している。

1.3 語の重音から見る sg-表記

中国語では、文の焦点・プロミネンスだけでなく、語やフレーズ単位での重音 (stress)⁶⁶も存在しており、sg 表記の使用を理解する上で重要である。語のストレスとは、多音節語の中で、特定の音節が他の音節よりも強く発音され際立っている現象を指す。音韻論の観点から、趙元任 (1979) は中国語のストレスを「正常重音 (普通重音)」と「対比重音」及び「弱重音」の三種類に分類している。そのうち、「対比重音」は「正常重音」とは異なり、音高の幅が広く、持続時間も長く、かつ音の強さも増す傾向がある。「対比重音」について、趙元任 (1979) は次のような具体的な例を挙げて詳しく説明している。例えば、人名「黄種強」の「正常重音」は「種」に置かれるが、もし姓の「黄」を「王」と聞き間違えた場合、誤りを訂正するために「不是王种强, 是黄种强。(王種強じゃなくて、黄種強だよ。一筆者訳)」と強調することがある。この場合、重音は「種」から「王」と「黄」に移行し、「王」と「黄」が「対比重音」となるのである。このような「対比重音」の性質に基づき、本稿では、明確な「対比重音」がみられない語彙やフレーズの分析には主に「正常重音」を対象とする。

「正常重音」について、趙元任 (1979) は「实际上, 在没有中间停顿的一连串的带正常重音的音节中, 不论是一个短语还是复合词, 其实际轻重程度不是完全相同的, 其中最末一个音节最重, 其次是第一个音节, 中间的音节最轻。(実際には、中断のない一連の正常重音を伴う音節においては、フレーズであれ複合語であれ、各音節の強さは完全に均等ではなく、最終の音節が最も強く、次に第 1 音節で、中間の音節が最も弱い。一筆者訳)」と指摘している。つまり、趙元任 (1979) によれば、明確な韻律パターンが存在しない場合、二音節語は基本的に「軽重」パターン、三音節語は「中軽重」パターン、四音節語では第 1 音節から第 4 音節まで順に軽から重へと音節の強さが変化するということである。ただし、趙元任 (1979) の一般的な説明とは異なり、『華音』において sg 表記で現れる語では、重軽パターンも確認される。

「弱重音」について、趙元任 (1979) は「弱重音」は主に軽声を指すと指摘している。同氏は更にほとんどの場合、「弱重音」は後附音節 (enclitic)⁶⁷に現れると説明している。ごく少数の

⁶⁶ ストレスと呼ばれるのが普通であるが、本稿では中国語の習慣に従い、「重音」を使う。

⁶⁷ 音声上で独立した強勢を持たず、その直前の語や音節と一緒に発音される音節のこと。

場合には「弱重音」が重音音節の直前に置かれることがあり、この場合は前附音節 (proclitic)⁶⁸に位置する。前附音節に置かれる「弱重音」は通常、代名詞や、例えば「或者」のような一部の接続詞である。また、趙元任 (1979) は接尾辞や助詞も常に軽声であることを指摘している。

このように、漢語の重音は語の中の位置に応じて提示することができる。例えば、第1音節に重音が置かれる場合は「前重式 (重軽格式)」、第2音節に重音が置かれる場合は「後重式 (軽重格式)」、2音節語の両音節とも重音が置かれる場合は「重重式 (重重格式)」などのようである。本節では、主に趙元任 (1979) の漢語の重音に関する説明に基づき、「軽重」「重軽」「重重」などの形に従って、『華音』においての sg 表記が現れた語の重音を整理し、その結果を表6に示す。ここで注意すべきことは現代中国語の語の重音は19世紀当時のものと異なる可能性があるため、現代中国語の重音パターンは参照として用いるものであり、最終的な基準ではないということである。

表6 sg-を含むフレーズの重音分布状況

品詞/位置	語頭 (第一字) ⁶⁹		非語頭 (第一字以外)	
副詞	剛 (3例)	剛 sgang 懂得 (重中軽) 纔剛 sgang (重軽) 剛 sgang 出 (重軽)		
	更 (2例)	更 sgyng 好 (重軽) 更 sgyng 好看 (重軽中)		
名詞	乾 (1例)	乾 sgan 白燒 ssiao 酒 (軽軽中重)	缸 (1例)	水缸 sgang (軽重)
	柑 (1例)	柑 sgan 子 (重軽)	根 (1例)	原根 sgyn (軽重)
	根 (1例)	根 sgyn 底 (軽重)		
形容詞	乾 (1例)	乾 sgan 淨 (軽重)		
動詞	亘 (1例)	亘 sgyng 古 (重軽)		
	肯 (1例)	肯 sgyng 胡塗 (中重軽)		
	懇 (1例)	懇 sgyn 求 (軽重)		
量詞	根 (1例)	一根 sgyn (軽重)		

表6に示された15例の sg-表記語の出現位置を見ると、13例は語頭 (語の最初の文字または音) に、2例は非語頭 (第一字以外) に現れている。非語頭 (第一字以外) に現れる「水缸 sgang (1例)」および「原根 sgyn (1例)」の2例は、中国語の語の重音から見ると、いずれも二音節語の「後重式 (軽重格式)」である。この2例は趙元任 (1979) によると、明確な韻律パターンが

⁶⁸ 主音節の前に現れる短音節で、通常は独立した語義を持たない。

⁶⁹ sg-表記が現れた位置。

存在しない場合、二音節語は基本的に「軽重」パターンである。また、「水缸 sgang」の場合、「缸」は核心語⁷⁰であり、重音はこの文字に置かれている。「原根 sgyn」は例文の文脈から「この石の由来・起源」を意味しており、「根」が語の核心的な意味を担い、「根源」「起源」を表すのに対し、「原」は単なる修飾語として「元の」「本来の」という意味を付加している。そのため、「原根」は後重式（軽重格式）に分類され、重音は「根」に置かれると考えられる。

「剛 sgang 懂得」と「剛 sgang 出鳳凰城地方」における「剛」はいずれも副詞であり、時間的な接近性を強調している。中国語においては、副詞は特に形容詞や動詞を修飾する場合、しばしば音的に強調されることがあり、このような発音の強調は副詞の機能を明確にするために行われるものである。「更 syng 好」および「更 syng 好看」の2例に見られる「更」は程度を表す副詞で、「さらに～である」という意味を持ち、形容詞「好」または「好看」を修飾し、程度の変化を際立たせる役割を果たしている。「亘 syng 古」という例が書面語であり、「亘」は本来「延びる」「横切る」といった意味の動詞であるが、この語においては副詞化した修飾語のような役割で名詞「古」を修飾して時間の継続性を強調している。「亘 syng 古」の意味から見ると「古」のような時間的なカテゴリーを表す語が語の中心となることが多いが、それを修飾する前置要素は音的にはより強く発音される傾向がある。

「乾白」は「乾白葡萄酒（ドライ白ワイン）」の略称を指す場合もあるが、『華音』においては「焼酒」と合わせて「乾白焼酒」という一つの語彙として用いられている。この語において核心語となるのは「焼酒」であり、趙元任（1979）の説明によれば、この語には明確な韻律規則が存在せず、その重音パターンは「軽軽中重」で、「焼」と「酒」の2音節が相対的に強く読まれると考えられる。特に「焼」は『華音』の音注で ssiao と記されており、濃音表記 ss が用いられている点から、これは重読を示す可能性がある。ただし、「酒」については音注上に特別な表記は見られない。更に、「乾 sgan 白焼 ssiao 酒」という語において、「乾 sgan」も濃音表記で記されており、これもまた重読を示す一種の手段と考えられる。語の品詞的観点から見ると、「乾」は形容詞であり、酒の「甘くない」味の特徴、即ち「ドライ型」を表すものである。「白」も同じく形容詞で、酒の色が「白」であることを表す。形容詞が2つ連続する場合に語頭の音節が強く発音される傾向があり、特に「乾」は酒の種類を区別する上で重要な意味的機能を担っているため、強調されやすい。一方、「白」は単に酒の色を説明する補足的な要素であり、音的に強調される必要性はそれほど高くない。

「乾 sgan 淨」という語については特に注意が必要である。この語には明確な韻律規則が見られず、趙元任（1979）によれば、明確な韻律規則をもたない二音節語は基本的に「軽重」となり、即ち「淨」に重音が置かれるとされる。しかし、「淨」は現代漢語では第四声である一方、北京話では軽声で発音される。『華音』には声調の記録はないが、その音注を確認する限り、「淨」には特別な表記の記号が用いられておらず、むしろ「乾 sgan」に濃音表記 sg で表記されている。したがって、「乾 sgan 淨」は『華音』においては北京話の発音に近い、即ち「淨」が軽声で読まれ

⁷⁰ 中国語では中心語（head word）とも呼ばれ、主に偏正（主従）構造の語を指す。主要な語を指す。例えば、「紅花」では「花」が中心語である。

ていた可能性が高いと考えられる。

馮勝利 (2000) は「如果语言中某项规则要求[A B]里的“B”重, 其实现方法有两种: (1) 加强“B”的韵律分量; (2) 减轻“A”的韵律分量。在[A B]两个成分中, 无论什么原因, 如果“B”的分量相对不足, 它都意味着“A”的分量的加强。(言語におけるある規則が[A B]構造の「B」に重読を要求する場合、その実現方法には(1)「B」の韻律的分量を強める、(2)「A」の韻律的分量を弱めるという2つの方法がある。[A B]の2成分のうち、いかなる理由であれ「B」の分量が相対的に不足する場合、それは「A」の分量の強化を意味する。一筆者訳)」と指摘している。馮勝利 (2000) に基づけば、「B」に相当する「淨」が軽声で読まれる場合、その韻律的分量は相対的に不足していることになり、このとき「A」成分の「乾 sgan」が相対的に強化されることを意味する。同様に、「柑子」の「子」は接尾辞であり、通常は軽声で読まれる。この場合、「柑」が相対的に強調されると同時に、「柑」は語の核心的要素でもあるため、この字は基本的に重読されることになる。

また、「肯 sgyng 胡塗」は「混乱しやすい」という意味を表す。「肯」は主語の傾向性や習慣的特徴を表す能願動詞 (modal verb) または補助動詞として機能していて、現代中国語における「容易 (～しやすい)」に近い意味である。一方、「胡塗」はこの語の核心的な意味を担い、主語の状態・性質を表しているため、通常であれば語の重音は「胡塗」に置かれると考えられる。しかし、話し手が「肯」の傾向性、すなわち「その人が確かに混乱しやすい、あるいは常に混乱している状態」というニュアンスを強調したい場合に「肯」により強い重音が置かれることになり、結果として中重軽格式が形成され、前重式に近い状態である。なお、前重式 (重軽格式) で、「纔剛 sgang」という語はやや特殊な例である。「纔剛 sgang」は中国語において「纔」に重音が置かれるが、『華音』の音注によると、『華音』の編纂者は語重音を「剛」に置いていた可能性が極めて高いことがわかる。「纔剛 sgang」という語の語重音が中国語と異なるのは、おそらく「剛 sgang」の他の用例がすべて sg で表記されていることに合わせた、人為的な統一の結果であると考えられる。

「乾 sgan 淨」以外、語頭用例において、後重式 (軽重格式) の用例は3例がある。中国語では数詞+量詞の構造は通常、後重式となり、重音は量詞に置かれるが、場合によっては数詞に重音が置かれることもある。例えば、「一根 sgyn」はこのような例である。「根 sgyn 底」は、中国語の語重音の観点から見ると後重式 (軽重格式) に当たり、即ち「底」に重音が置かれるべきである。しかし、『華音』の音注を見ると、「底」には特別な表記の記号が用いられておらず、これに対して「根」に濃音表記 sg が使用されている。このことは、他の「根」字の用例との統一を図るためであり、語重音の位置でなくても濃音 sg が使用された可能性が高いと考えられる。「懇 sgyn 求」も中国語では後重式に分類されるが、『華音』では第一字の「懇」に濃音が付されている。「懇 sgyn 求」は懇切で誠実な態度を示す動詞「懇」と、求めるという意味の動詞「求」から成る複合動詞である。馮勝利 (2000) が指摘した「双音动词的重音都在第二个音节上」のように、二音節の複合動詞は第2音節に重音が置かれることが多く、複合動詞は通常後重式 (軽重格式) に該当する。そのため、「懇 sgyn 求」の重音、本来「求」に置かれるべきである。しかし、最初の動詞が強調や修飾 (状態や程度など) としての機能を持つ場合には、前重式 (重軽格式) が形成されること

もある。

表6の分析結果から見ると、全体として、sg 表記が付された漢字の大部分は語の重音音節に位置しており、『華音』における sg 表記は語の重音を示す役割を果たしていた可能性が高いことがわかる。具体的には、語頭に sg が現れる 13 例のうち、9 例は第一音節に重音が置かれる前重式（重軽格式）に該当しており、これは漢語の語重音の分布と一致している。一方、残りの 4 例の後重式に「一根」以外の 3 例は語頭 sg 表記であり、実際の語重音は第 2 音節にあるにもかかわらず、sg は第 1 音節に付されている。これは編纂者が一部の漢字の音注を統一するために意識的に調整した結果であると考えられる。以上を総じて言えば、sg の使用は語の重音と一定の関連性を持っており、特に前重式の語彙においてその傾向がより顕著である。話者が実際の会話の際には、必ずしも各語の品詞や構造を意識しているわけではないかもしれないが、当時の朝鮮人が教科書を編纂する際に発音の再現を非常に重視していたため、聴覚上の強弱の差は認識され、注意されていたと考えられる。これによって、発音上の強弱への注意がハングル音注にも直接反映され、一部の例字で濃音表記 sg が用いられた理由になった可能性がある。

2 濃音表記 ss-

2.1 音韻地位から見る ss-表記

最初、声母が二つ並ぶ ss-のような「並書」は朝鮮語には存在しない中国語の「全濁声母」⁷¹を表すために作られたものであった。しかし、全濁声母は中国語の北方方言の一特徴として 14 世紀頃既に無声化されていたため、1883 年に成立された『華音』における ss-表記は明らかに全濁声母ではない。現代漢語(普通話)の s-, x-, sh-に当たる諸声母は『華音』において主にハングルの平音表記 s-で表記されるが、「上」ssiang、「下」ssia、「少」ssiao、「十」ssi など 40 字の音注に濃音表記 ss-が見られる。本節も第 1 節と同様に、まず音韻地位から検討する。資料中 ss-表記が現れた漢字のハングル音注と中古音韻地位は表 7 に示す通りである。

表 7 『華音』の ss-例字（一部の例字には二通りの表記が存在する）

例字	表記 1	表記 2	音韻地位
上 (66 例)	ssiang		禪養開三上宕
下 (43 例)	ssia (41 例)	ssa (2 例)	匣馬開二去假
少 (29 例)	ssiao		書小開三上效
十 (33 例)	ssi (32 例)	si (1 例)	禪緝開三入深
現 (6 例)	ssien		匣霰開四去山
三 (24 例)	ssian (21 例)	ssan (3 例)	心談開一平咸
四 (14 例)	ssy		心至開三去止

⁷¹ 有声の破裂音・摩擦音・摩擦音。

世 (4 例)	ssi		書祭開三去蟹
兄 (13 例)	ssiung		曉庚合三平梗
山 (7 例)	ssian		山山開二平山
算 (10 例)	ssoan		心緩合一上山
小 (24 例)	ssiao (23 例)	siao (1 例)	心小開三上效
閒 (5 例)	ssien		匣山開二平山
燒 (2 例)	ssiao		書宵開三平效
史 (1 例)	ssy		山止開三上止
撒 (2 例)	ssia (1 例)	ssa (1 例)	山曷開一入山
散 (1 例)	ssan		心旱開一上山
使 (8 例)	ssy (7 例)	sy (1 例)	山止開三上止
縣 (7 例)	ssien		匣霰合四去山
殺 (1 例)	ssia		山黠開二入山
死 (4 例)	ssy		心旨開三上止
響 (2 例)	ssiang		曉養開三上宕
孫 (2 例)	ssun		心魂合一平臻
扇 (1 例)	ssan		書線開三去山
歇 (2 例)	ssie		曉月開三入山
紗 (2 例)	ssia		山麻開二平假
羨 (1 例)	ssien		邪線開三去山
鄉 (7 例)	ssiang		曉陽開三平宕
訓 (1 例)	ssiun		曉問合三去臻
笑 (1 例)	ssiao		心笑開三去效
爽 (1 例)	ssiang		山養開三上宕
篩 (1 例)	ssiai		生佳開二平蟹
蓼 (2 例)	ssyn		山侵開三平深
箱 (1 例)	ssiang		心陽開三平宕
洗 (2 例)	ssi (1 例)	si (1 例)	心霽開四上蟹
尚 (1 例)	ssiang		禪漾開三去宕
寺 (2 例)	ssy (1 例)	sy (1 例)	邪志開三去止
香 (1 例)	ssiang		曉陽開三平宕
險 (1 例)	ssien		曉琰開三上咸
師 (1 例)	ssy		山脂開三平止

「下」ssia~ssa、「十」ssi~si、「三」ssian~ssan、「小」ssiao~siao、「使」ssy~sy、「撒」ssia~ssa、「洗」ssi~si、「寺」ssy~syの8字には二通りの読みが現れる。この内、「下」ssia~ssa、「三」ssian~ssan、「撒」ssia~ssaの3字はi介音 (medial)⁷²の有無のみが異なっておりs~ss表記の揺れがない。『華音』において、「下」「十」「三」「小」「使」は主に表記1を採用したのが一般的な傾向である。「些」は表記2の「sie」で書かれたのは26例で、「ssie」で表記されるのは1例しか存在しないため、「些」の場合は「s」表記を使うのが一般的である。

「撒」「洗」「寺」の用例は少ないため、平音-濃音表記の使用揺れに特別な傾向が見出されない。

「撒」は「撒ssia在一塊」「撒sa謊」の2例で、いずれも動詞として用いられており、語頭の位置に現れる。「洗」は「洗ssi耳敬聽」「多洗si兩會」の2例で、動詞として用いられ、それぞれ語頭と語中の位置である。「寺」は「永明寺ssy」「隆福寺ssy」の2例で、共に名詞であり、非語頭の位置にある。「撒」「洗」「寺」はそれぞれの二種の読みが、同じく音声的・語用的条件の下にs~ssという表記が同時に現れ、その使用上の揺れには明確な規則性が見当たらない。

表7から分かるように、ss-表記の声母は心母・邪母・山母・書母・禅母・曉母・匣母で、s-表記が対応する禅母・匣母・書母・心母・曉母・山母・邪母・崇母・船母・溪母に含まれている。ss-表記の韻母は10攝⁷³があり、同様にs-表記の16攝に含まれている。韻母が同じ場合、平音表記s-と濃音表記ss-の使い分けに定まった規則性がないため、『華音』の濃音表記ss-の使用は中国語の韻母条件に制限されていないことがわかる。

2.2 文の焦点から見るss-表記

音節単位のみで濃音の使用を分析するだけでは十分とはいえず、また、朝鮮語における濃音そのものが強制的な性質を帯びていることを考慮する必要がある。そのため、本節も本章1.2と同様に、『華音』における濃音表記ssを用いて示されている漢字が現れる例文を取り上げ、文を分析単位として、濃音表記の使用を再考する。本節における例文分析の枠組みも1.2節と一致しており、即ちa 述語、b 定語(連体修飾語)と状語(連用修飾語)、c 目的語、d 補語、e 指示代名詞と疑問代名詞といった新情報を担いやすい文の構成要素に着目して、焦点分析を行うと共に、その中の対比焦点についても合わせて検討する。

『華音』においてssで表記された40字の漢字のうち、12字の用例は中国語の文焦点のパターンと完全に一致している。これら12字は「現」「殺」「死」「扇」「紗」「羨」「訓」「篩」「箱」「尚」「香」「險」である。これに対して、同じくssで表記された40字の中には、中国語の文の焦点のパターンと完全に対応しないのは10字があり、それは「史」「撒」「散」「響」「孫」「歇」「笑」「爽」「夢」「師」である。以上のこの両種類に属する計22字については、中国語の文の焦点のパターンとの対応関係が比較的明確であるため、ここでは具体的な用例の提示を省略し、その詳細については付録2の整理を参照されたい。

⁷² 韻頭とも呼ばれ、声母と韻腹の間に入る高母音 [i][u][y] を指す。

⁷³ 等韻学の学者は、主要母音と韻尾が同じ、または近い韻を、四声を含めてそれぞれ分類し、「韻攝」とした。

残りの「上」「下」「少」「十」「三」「四」「世」「兄」「山」「筭」「小」「閒」「燒」「使」「縣」「鄉」「洗」「寺」の18字については、その状況がやや複雑である。これらの漢字の用例には、中国語の文焦点のパターンと一致する場合もあれば、一致しない場合も存在する。特に注目すべきことは、同一の漢字が同一の用法で用いられている場合においても、文焦点と一致する例と一致しない例とが併存するという状態が確認された点である。

例えば、「上」は合わせて64例が確認され、その音注はいずれも ssiang で、声母はすべて ss が用いられ、濃音と平音表記の混用は見られない。「上」の64例のうち、42例は中国語の文焦点と一致しているが、なお12例は同じく濃音表記 ss によって表記されながらも、その出現位置が中国語の文焦点のパターンに示される位置と一致していない。「上」の用例の中には、前述のように、同一漢字が同一の用法で現れるにもかかわらず、文焦点と一致する場合と一致しない場合とが併存する現象も見られる。例えば、「上」が方位詞として用いられる場合、地名を表す固有名詞の場合、また動詞として用いられる場合などにおいても、このような現象が確認される。以下では、関連する用例を部分的に挙げて説明する。

「上」が方位詞として用いられた例：

「**b**(多)洗 **d**(兩會)教 **c**(他) **a**(乾淨些兒)，攞 **b**(着刀板上)剝成 **d**(塊兒)。」『上 9a』

「天道 **b**(好不大) **a**(離索)，**b**(隔一天)下 **c**(一天)雨，**b**(在半道上)耽 dan 悞 **b**(幾天) **c**(功夫)咧。」『上 26a-26b』

「你瞧 **d**(不出) **e**(這)帽子上亮藍頂子麼。」『下 2a』

「對岸上 **a**(盖起了) **c**(兩三層樓)，樓前邊拴了 **b**(許多的)船隻兒，**b**(滿)藏了 **b**(各樣的)貨物發賣呢。」『下 4a-4b』

「上」が方位詞として用いられる場合、その前にはいずれも名詞が接続し、用法は完全に一致しており、音注もすべて同一である。しかし、これらの用例において「上」が必ずしも中国語の文のプロミネンスのパターンに示される強調または強勢を必要とする部分と一致するわけではない。

「上」が固有名詞として用いられた例：

「他們是打 **c**(上海)來的，聽說是 **a**(進京趕考) **d**(去)咧。」『上 10b-11a』

「我在 **c**(本國)時候兒，**b**(長)聽着他們講究，**e**(這)上海是 **b**(好大) **c**(去處)。」『上 28a』

「上」が動詞として用いられた例：

「你呢今天 **b**(不) **a**(上) **c**(部 bu 裏) **d**(去)麼。」『下 6a』

「我 **b**(要) **a**(上) **c**(廣東)的。」『下 30b』

「**b**(特)派 **c**(小的們)來請 **c**(大老爺)，上 **c**(我們府裏) **d**(去)呢。」『下 18a』

「我打 **c**(王京)上咧 **c**(火輪船)。」『上 27b』

また、「上」が固有名詞や動詞として用いられる場合でも、その用法や音注が完全に一致しているが、中国語の文焦点のパターンと完全に対応しない用例が見られる。このような不一致が存在するにもかかわらず、「上」の用例において、濃音 ss で表記された漢字の例文中での出現位置は中国語の文焦点のパターンと高い一致度を示している。これは濃音表記 ss の使用と中国語の文焦点の機能との間に密接な対応関係があることを直接的に示している。

「下」は全部で 44 例確認され、そのうち 22 例は中国語の文焦点のパターンと一致している。主に方位詞や動詞として用いられるが、その用法及び音注が同一である場合でも、文焦点と一致する用例と一致しない用例の両方が存在する。例えば、以下のような例が挙げられる。

「下」が方位詞として用いられた例:

「橋底下水有 c(三尺來深), 打 e(那裏) b(能) a(過) g(得去) 呢。」『上 20a』

「噯啲提起 e(這箇) c(地方) d(來), 好 d(的狠), 城底下有箇 b(潮水來往的) 大同江。」『下 3b』

「教 c(底下們), 叫 e(那箇) c(厨房的), 預備 b(各樣) c(點心葷素酒菜) d(來) 罷。」『下 9b』

「下」が動詞として用いられた例:

「我們打 c(天津) 往 c(這裏) a(來), 天道 b(好不大) a(離疎), b(隔一天) 下 c(一天) 雨, b(在半道上) 耽悞 b(幾天) c(工夫) 咧」『上 26a』

「今天是 b(下班的) 閒日子, 公事 b(不) a(在) b(我的) c(身上), 所以 a(無拘無束) 的。」『下 6a』

「昨兒箇打 c(禮部裏) a(下來) c(文書), 教 c(我們) a(交) c(貢) 呢。」『下 13a』

「橋底下」(上 20a)、「城底下」(下 3b)、「底下」(下 9b) はいずれも「下」が方位詞として用いられた例である。前の 2 例は濃音で表記されているものの、中国語の文において強調されるべき位置とは一致していない。同様に、「下」が動詞として用いられる場合も、中国語の文焦点と完全には一致しない。しかし、「下」の 44 例の用例の中での 22 例は文の焦点と重なっており、このことは濃音 ss の使用が文中の一部の内容の強調と関連していることを示している。

「少」は全部で 28 例確認され、そのうち 25 例は中国語の文焦点のパターンと一致している。これら 25 例のうち、21 例は「多少」で、疑問代名詞として用いられ、残りの 4 例は状態を表す「不少」として用いられている。一方、主に動詞として使用されている 3 例は文焦点と一致しない。以下、例を挙げて示す。

「少」:

「咱們 e(那) a(怕) c(他辛苦) 呢, 給 c(他們) a(擺過去) 罷, b(橫豎) 少 d(不了) b(我們的) 酒錢。」『上 25a』

「你 e(這箇) 珠子少咧 c(一塊), b(咳不) 跟 c(我) e(這箇) 好。」『下 38a』

「e(這箇) 珠子 b(本來) 少 c(一個), 所以 b(不) 算 c(全套的)。」『下 38b』

「少」の音注も非常に統一されており、いずれも ssiao で表記され、声母における濃音と平音表記の混用も見られない。その用例の大部分は中国語の文において強調される可能性のある部分と高い一致性を示している。「少」も濃音 ss の使用が文中での部分的な内容の強調と明確に関連していることを明らかに示している。

「小」は合わせて 24 例があり、その中の 14 例は文焦点と対応しているが、残りの 10 例は対応関係が見られない。この 24 例の中でも、同一漢字の同一用法であるにもかかわらず、5 つの情報焦点のパターンと対応する用例と対応しない用例が同時に存在する。以下、その一部を示す。

「小」:

「請問當今皇太后萬歲爺，**b**(聖明)德政布滿 **c**(四海)，所以 **b**(連海外的)小 siao 邦 **b**(也都)來賓服，這不是大清家洪福齊天麼。」『上 2b』

「我 **b**(打那行門口)一走，**a**(有)**b**(一箇年青的)**c**(小子)，出來 **a**(讓)**c**(我)**b**(到裏頭)坐着。」『上 31a-31b』

「你 **e**(這)箇貨好倒好，不是 **b**(全套的)小一箇數兒。」『下 37a-37b』

「小」の 24 例の用例は主に形容詞として用いられている。『下 37a-37b』の「小一箇數兒」は動詞として用いられ、比較動詞「少」に相当する用法である。この 24 例の中で、『上 2b』の「小 siao 邦」は比較的特殊で、濃音 ss ではなく平音 s で表記されている。この用例は「小」の用例の中で唯一平音で表記された例であるだけでなく、唯一の対比的焦点と対応する用例でもある。

「小 siao 邦」のような特殊な用例については、2.4 節の単語または語句を単位としての分析で詳しく説明する。

更に、「十」「三」「四」はいずれも数詞として用いられ、その用法は比較的安定している。「十」は全部で 33 例あり、そのうち 22 例が情報焦点のパターンと対応している。「三」は 24 例中 16 例、「四」は 14 例の中の 9 例が中国語の文の情報焦点と一致している。数詞として用いられる「十」「三」「四」の用法は比較的安定しているため、ここでは具体的な用例を省略し、詳細については付録 2 の整理を参照されたい。また、「世」「兄」「山」「簪」「間」「焼」「使」「縣」「郷」「洗」「寺」の 11 字については、全体の用例が少なく、音注にも濃音と平音の混用は見られないが、これらの 11 字は中国語の文の焦点のパターンとの対応があまり見られない。この点については、2.4 節で具体的に論じる。

『華音』における ss 表記の用例を分析した結果、全体として、文焦点が濃音 ss の使用理由であるとは言えないことが明らかになった。しかし、それでも濃音 ss で表記された漢字の出現位置はなお文焦点とかなりの程度で一致していることが確認できる。つまり、濃音表記の使用は中国語の文焦点の規則によって規定されているわけではなく、部分的な用例では情報焦点の分布と完全に一致しない場合も存在するが、全体的な傾向としては、濃音表記が音声上の「強調—顕著化」の状態と関係していることが示される。更に、文中の強調すべき内容を示すために、一部の音節

が更に強く際立たされ音節上のプロミネンスとして濃音表記 ss が用いられた可能性が高い。この点については、他の朝鮮時代後期の3資料との更なる対照が必要である。

2.3 ss-表記の出現傾向

『華音』に使われた ss-表記には主に以下のような使い分けの傾向を見出しうる。

第一、位置を指す方位詞および動作を表す方位補語は ss-になる場合が多い。

例えば、「上」ssiang、「下」ssia-ssa などである。ただし、「上」の用例には、例(2)に示されるように、固有名詞として現れる場合にも濃音表記 ss が用いられている例が存在する。これは伊藤(2007)が指摘した朝鮮漢字音における声母の類推の影響によるものと考えられるほか、音節制約の一種だと理解することもできる。『華音』において「上」の用例の大部分が方位詞や方向補語として現れており、固有名詞としての用例は方位詞や方向補語に比べてはるかに少ない。そのため、固有名詞に現れる場合であっても「上」において濃音表記 ss も用いられたのである。

- (1) 纔剛打魚船上 ssiang (船の上から、方位詞)、買來一條魚。『上 8b』
- (2) 他們是打 da 上 ssiang 海 (固有名詞の一部、地名) 來的, 聽說是進京趕考去咧。『上 10b-11a』
- (3) 我打王京上 ssiang (方向補語、動作の方向や結果を表す、乗った) 咧火輪船。『上 27b』
- (4) 走沒有一二十裏地兒, 日頭快要黑呢, 找一箇客店住下 ssia (「住」は「泊まる」の意味で、「下」は定着を表す方向補語) 咧。』『上 13a』
- (5) 橋底下 ssia (橋の下、位置を指す) 水有三尺來深, 打那裏能過得去呢。『上 20a』

第二、数詞「三」「四」「十」はほとんどが濃音表記 ss-となる。

- (6) 你呢今年貴庚, 齒長三 ssian 十五歲咧。『上 3a』
- (7) 今年屬甚麼, 纔二土 ssi 五歲咧。『上 27a』
- (8) 我要買幾塊時表三 ssian 四 ssy 箇掛鐘呢。『上 32a』

第三、状態を表現する副詞と形容詞は濃音表記 ss-を使う傾向が見られる。

例えば、副詞「現」(現時点・現在・今は)、形容詞「少」(少ない、大したことではない)、「閒」(暇である、余っている)、「險」(危ないところで、今少し)、「小」(若い)、「爽快」(気分が爽やかになる)などが挙げられる。

- (9) 今天行路的客人們忒多, 店裏沒有' i-u 閒 ssien 屋' u 子 (形容詞、余った部屋) 咧。『上 6a』
- (10) 我是現 ssien 任北京禮部裏郎中 (副詞、現在北京禮部郎中に務めるという現時点の状態を表す), 你瞧不出這帽子上亮藍頂戴麼。『下 2a』
- (11) 說得這些箇話兒, 教我心裏爽 ssiang 快 (爽やかな気持ち) 的狠。『下 8a』
- (12) 打屋裏出來一箇小 ssiao 媳婦 (形容詞、若い女性), 年紀不上十五六歲。『上 21a』

第四、比較を表す動詞「小」のほとんどが濃音表記 ss- で表記される。

(13) 你這箇貨好倒好，不是全套的小 ssiao (比較動詞、一個足りない) 一箇數兒。『下 37a-37b』

2.4 ss+i 介音について

『華音』の ss- 表記には一つ注目すべき所があつて、それはしばしば i 介音が後続することである。2.1 の表 7 から見られるように、「四」 ssy、「算」 ssoan、「史」 ssy、「散」 ssan、「使」 ssy、「死」 ssy、「孫」 ssun、「扇」 ssan、「蓼」 ssyn、「寺」 ssy、「師」 ssy の 11 字以外の 29 字はいずれも ss+i 介音のパターンで、その比率が全体の 72.5% に達している。i 介音について、鶴殿(1985) は「s と ss の書き分けは、いわゆる細音に先立つ場合に多く見られる」と指摘したが、『華音』において「姓」 sing、「鮮」 sien、「像」 siang、「失」 si、「歳」 siui のような s- 表記の例字においても i 介音を持つ例も数多く存在する。合計 124 字の s- 表記例字の中、s+i パターンは 85 例があり、全体の 68.5% に達していることから s- 表記も細音に先立つ場合が多いと分かる。

また、i 介音を持つ ss- 表記の韻母は 10 韻があり、s- 表記の 17 韻に含まれる。s-ss 例字が共通する韻母は ia、iao、i、ien、ie、iun、iang である。例を挙げて対照すると以下のようである。

ia

ss- : 請問這位貴姓，不敢在下 ssia 姓李。『上 1a』

s- : 那箇名帖拜匣 sia 也擱得車裏頭，所用的東西一件也別忘罷。『下 18b』

iao

ss- : 都種甚麼。粳子稻子穀子稗子大麥小 ssiao 麥各樣豆子都有咧。『上 4b-5a』

s- : 老爺們是外方的人，不曉 siao 得這河的利害。『上 24a』

i

ss- : 走咧多少日子麼，走有上 ssi 來天的工夫咧。『上 1a』

s- : 噯啲失 si 敬你咧。『上 2a』

ien

ss- : 這箇對子是也不現 ssien 寫的，是一箇古人的遺跡啊。『下 22b-23a』

s- : 從那裏來呢。打朝鮮 sien 國來咧。『上 1a』

ie

ss- : 好些歇 ssie 歇 ssie 罷，明日再來領教。『上 35b』

s- : 回國的時候兒再來謝 sie 謝 sie 大人。『下 12b』

iun

ss-: 咱們講到半天的話, 咳沒有領過教訓_{ss}iun, 請大人開金口發玉言, 把那箇江南的好處講一講
『下 5a』

s-: 我在順_{ss}iun 治門外, 大街路東禮部做官的宅裏。『下 12b』

iang

ss-: 你們府上_{ss}iang 人口多少麼。『上 4a』

s-: 我們是坐輪船來往的, 所以不像_{ss}iang 從前起早來的時候兒。『上 1b』

以上、s-ss 表記の例文の対照を通して、韻母が同じ場合に平音表記 s-と濃音表記 ss-のいずれも細音に先立つ例が多く存在しているため、まず i 介音の有無は s-ss が使い分けられる原因ではないことが明らかになった。ss+i パターンを詳しく探究するため、以下 ss+i を含む漢字についてさらに詳細な整理を行う。

前述の通り、『華音』における ss 表記は現代中国語の声母 s、x、sh に対応しているため、以下ではこのような対応関係に基づき、『華音』中の ss+i パターンを持つ 29 字を分類して整理する。表 8 は現代中国語の s 声母に対応する漢字、表 9 は x 声母に対応する漢字、表 10 は sh 声母に対応する漢字をそれぞれ示す。

表 8 s 声母に対応する ss-漢字

例字	表記 1	表記 2	音韻地位
三 (24 例)	ssian (21 例)	ssan (3 例)	心談開一平咸
撒 (2 例)	ssia (1 例)	ssa (1 例)	山曷開一入山

「三」「撒」は現代中国語の s 声母に対応するものである。s 声母は通常 i 介音を含む韻母と直接結びつくことができず、s 声母が i で始まる韻母と結合する場合には s は舌面音である x に変化する必要がある。また、咸摂の談韻および山摂の曷韻は一般に i 介音を持たないとされ、その韻母の状態は『華音』における「三」「撒」の表記 2 「an」や「a」といった韻母に一致していると考えられる。そのため、「三」「撒」の音注に i 介音が付加されているのは明らかに中国の官話の音韻体系と一致しない表記である。東北方言の特徴の一つとして、平舌音とそり舌音 (retroflex sound) ⁷⁴の区別が曖昧であり、しばしば混用される傾向がある。すなわち、s が sh のように発音される場合がある。『華音』の序文では「京音」(北京語)を基準とすると明記されているものの、東北方言もまた朝鮮人が日常的に接触していた言語であり、「三」や「撒」が本来は平舌音であるにもかかわらず、そり舌音として発音された可能性がある。音注に用いられている i は単な

⁷⁴ 舌尖を硬口蓋前部または歯茎後部に反らせて発音される母音や子音をそり舌音と総称する。子音の場合は、舌尖を歯茎後部に反らせ、空気の流れを制御して発音される。主に現代漢語の zh・ch・sh・r が該当する。

る介音ではなく、むしろ舌尖後母音（舌尖後元音）を示す記号的役割を果たしていると考えられるからである。

表9 x 声母に対応する ss-漢字

例字	表記1	表記2	音韻地位
下 (43 例)	ssia (41 例)	ssa (2 例)	匣馬開二去假
現 (6 例)	ssien		匣霰開四去山
兄 (13 例)	ssiung		曉庚合三平梗
小 (24 例)	ssiao (23 例)	siao (1 例)	心小開三上效
間 (5 例)	ssien		匣山開二平山
縣 (7 例)	ssien		匣霰合四去山
響 (2 例)	ssiang		曉養開三上宕
歇 (2 例)	ssie		曉月開三入山
羨 (1 例)	ssien		邪線開三去山
鄉 (7 例)	ssiang		曉陽開三平宕
訓 (1 例)	ssiun		曉問合三去臻
笑 (1 例)	ssiao		心笑開三去效
箱 (1 例)	ssiang		心陽開三平宕
洗 (2 例)	ssi (1 例)	si (1 例)	心齊開四上蟹
香 (1 例)	ssiang		曉陽開三平宕
險 (1 例)	ssien		曉琰開三上咸

『華音』における ss 表記の例字に現代中国語の x 声母に対応する漢字は表9に示された16字である。これらの声母は匣母（4字）、曉母（7字）、心母（4字）、邪母（1字）に分類される。その中、心母と邪母は歯音⁷⁵声母であり、匣母と曉母は喉音⁷⁶声母に属す。蔡瑛純（2002：93頁）の研究によれば、19世紀の朝鮮資料（『華音』と『華語類抄』一筆者注）では字音の平仄に関わらず、心母に属す多くの漢字の声母が濃音化して、ss で表記された。また、16世紀以降、心母と邪母が合流し、邪母も濃音 ss を用いるようになった。さらに、匣母と曉母に関しても、心母と同様に、19世紀の資料中で口蓋化した字の多くが濃音 ss で表記されており、これらの ss の実際的な音価は s とほとんど差がないとされる。一方、現代中国語の x 声母に対応するこれら16字の韻母は假攝、山攝、梗攝、効攝、宕攝、臻攝、蟹攝、咸攝に属している。「下」は假攝開口二等の麻韻に属し、韻母は本来「a」と記されるべきであるが、中古音の麻韻-a が牙音⁷⁷・喉音と結合すると

⁷⁵ 舌先が上歯または歯茎に触れて発音される声母で、精母・清母・從母・心母・邪母を含む。

⁷⁶ 喉で発音される声母で、影母・云母・以母・曉母・匣母を含む。

⁷⁷ 舌根が軟口蓋に触れて発音される声母で、見母・溪母・群母・疑母を含む。

朝鮮資料での多くが-i 介音を付加し、「-ia」として注記されている。『華音』における「下」の音注もこの現象を反映したものであり、濃音表記のために特別に介音 i を加えたわけではない。

「現」は山攝開口四等匣母字で、19 世紀の朝鮮資料においてその韻母は主に ien として記録されている。また、山攝開口二等刪山韻の牙音・喉音字も朝鮮資料では主に ien や ian として記されており、「聞」の韻母が ien であることと一致している。山攝に属する「縣」「歇」「羨」はそれぞれ韻母が ien、ie、ien であり、いずれも韻母が i 介音を含んでいる。

「兄」は梗攝合口三等庚韻に属し、朝鮮資料では一般に ing または iung と注記される。効攝の「小」「笑」は 19 世紀の朝鮮資料において主に iao と記されており、これも i 介音を含む韻母である。宕攝開口三等陽韻についても、正齒音以外の声母と結合する際に主に、iang として記録されており、宕攝の「響」「郷」「箱」「香」も韻母自体が i 介音を含んでいる。さらに、臻攝・蟹攝・咸攝に属する例字のいずれも韻母に i 介音が含まれている。したがって、現代中国語の x 声母に対応する 16 字において見られる「ss+i」パターンは濃音表記である ss に起因して i 介音が追加されたものではなく、もともと韻母の一部として i 介音が存在していたと考えられる。

表 10 sh 声母に対応する ss-漢字

例字	表記 1	表記 2	音韻地位
上 (66 例)	ssiang		禪養開三上宕
少 (29 例)	ssiao		書小開三上效
十 (33 例)	ssi (32 例)	si (1 例)	禪緝開三入深
世 (4 例)	ssi		書祭開三去蟹
山 (7 例)	ssian		山山開二平山
燒 (2 例)	ssiao		書宵開三平效
殺 (1 例)	ssia		山黠開二入山
紗 (2 例)	ssia		山麻開二平假
爽 (1 例)	ssiang		山養開三上宕
篩 (1 例)	ssiai		生佳開二平蟹
尚 (1 例)	ssiang		禪漾開三去宕

『華音』における ss 表記の例字に現代中国語の sh 声母に対応する漢字は表 10 に示された 11 字である。蔡琰純 (2002 : 103 頁) の研究によれば、中古漢語の生母字に属する「山」「殺」「紗」

「爽」「篩」などは 19 世紀の朝鮮資料において濃音表記 ss および i 介音を伴う二重母音によって表記されており、これは朝鮮人にとって馴染みのないそり舌音を表すための努力であったとされている。書母字においても同様の現象が見られる。したがって、現代中国語の sh 声母に対応する『華音』の ss 表記字においての「ss+i」介音の組み合わせが見られるのは比較的特殊な表記法であり、主に声母のそり舌音化を表す目的で i 介音が付加されたものと考えられる。音注につ

けた i は、実際に中国語における「舌尖後母音」に相当する。舌尖母音は独立で音節を形成できず、特定の声母と結びついて発音可能となるという特徴があるからである。

以上総じて見ると、『華音』において多数見られる「ss+i」パターンの出現には主に二つの原因があると考えられる。第一は表 9 に示されたように、韻母自体がもともと i 介音を含んでいる場合である。こういう場合に「ss+i」という構造は特別な表記ではない。第二は表 8 および表 10 に示されたように、中国語におけるそり舌声母に関連するものである。表 8、表 10 の例字音注においての i 介音は特別に付加され、濃音 ss と組み合わせられることによって、中国語のそり舌声母を表現しようとする手段が認められる。つまり、「ss+i」パターンのうち、音注上で i 介音が特別に加えられているのは表 8 および表 10 に挙げられている漢字に限られており、それらは濃音表記と i 介音の組み合わせによって、そり舌声母の発音を表現するための特殊な表記である。

2.5 語の重音から見る ss-表記

第 2 章の 1.3 に既に述べたように、中国語には文の焦点の他にも、「語の重音」も存在して、濃音表記の使用を理解する上で重要なものとなっている。本節では「語の重音」についての分析も趙元任（1979）の説明に基づき、「軽重」「重軽」「重重」などの形で『華音』においての ss 表記が現れた語の重音を整理し、その結果を以下表 11 に示す。

表 11 ss-を含むフレーズの重音分布状況

品詞/位置	語頭（第一字）		非語頭（第一字以外）	
名詞	上（10 例）	上 ssiang 海（7 例）（軽重） 上 ssiang 邊（2 例）（重軽） 上 ssiang 頭（1 例）（重軽）	上（33 例）	府上 ssiang（2 例）（重軽） 魚船上 ssiang（1 例）（中重軽） 刀板上 ssiang（1 例）（中重軽） 炕上 ssiang（1 例）（重軽） 橋上 ssiang（1 例）（重軽） 往上 ssiang（3 例）（軽重） 半道上 ssiang（1 例）（中重軽） 一路上 ssiang（2 例）（中重軽） 船上 ssiang（2 例）（重軽） 樓上 ssiang（1 例）（重軽） 身上 ssiang（3 例）（重軽） 椅子上 ssiang（1 例）（重軽中） 帽子上 ssiang（1 例）（重軽中） 十五歳上 ssiang（1 例）（重重中軽）

				對岸 上 ssiang (1 例) (中重輕) 天上 ssiang (2 例) (重輕) 西湖 上 ssiang (1 例) (中重輕) 在上 ssiang (1 例) (輕重) (遼東) 界 上 ssiang (1 例) (重輕) 大高嶺 上 ssiang (1 例) (重中重輕) 卓子 上 ssiang (1 例) (重輕中) 石頭 上 ssiang (1 例) (重輕中) 石頂 上 ssaing (1 例) (中重輕) 水面 上 ssiang (1 例) (中重輕) 青嶸山 上 ssiang (1 例) (重中重輕)
	下 (2 例)	下 ssa 半 截 (1 例) (中輕重) 下 ssia 次 (輕重)	下 (16 例)	在下 ssia (5 例) (輕重) 地下 ssia (1 例) (重輕) 橋底 下 ssia (1 例) (中重輕) 底下 ssia (2 例) (重輕) 城底 下 ssia (1 例) (中重輕) 天底 下 ssia (1 例) (中重輕) 天下 ssia (4 例) (輕重) 四下 ssia 里 (中輕重)
			少 (19 例)	多少 ssiao (19 例) (重輕)
	現 (1 例)	現 ssien 在 (輕重)		
	世 (2 例)	王世 ssi 子 (中輕重) 世 ssi 子 (輕重)	世 (2 例)	去世 ssi (輕重) 在世 ssi (輕重)
	兄 (11 例)	兄 ssiung 弟 (10 例) (重輕) 兄 ssiung 台 (輕重)	兄 (2 例)	弟兄 ssiung (重輕)
	山 (2 例)	山 ssian 清水秀 (輕重輕重) 山 ssian 珍海味 (輕重輕重)	山 (5 例)	有眼不識 泰山 ssian (輕重輕重中重) 唐山 ssian 縣 (中輕重) 人 山 ssian 人 海 (輕重輕重) 滿山 ssian 滿溝 (輕重輕重) 青嶸山 ssian (中輕重)
	史 (1 例)	史 ssy 國公 (中輕重)		
			使 (1 例)	差使 sy (輕重)

	縣 (5 例)	縣 ssien 官 (4 例) (輕重) 縣 ssien 裏 (重輕)	縣 (2 例)	唐山縣 ssien (中輕重) 知縣 ssien (輕重)
			死 (1 例)	起死 ssy 回生 (輕重輕重)
			孫 (2 例)	王子公孫 ssun (輕重輕重) 王孫 ssun 公子 (輕重輕重)
	扇 (1 例)	扇 ssan 子 (重輕)		
			紗 (2 例)	烏紗 ssia 帽 (中輕重) 黑紗 ssia (輕重)
	鄉 (2 例)	鄉 ssiang 試 (2 例) (輕重)	鄉 (5 例)	哪鄉 ssiang (輕重) 本鄉 ssiang (2 例) (輕重) 人離鄉 ssiang 賤, 物離鄉貴 (重輕 中重, 重輕中重) 人離鄉賤, 物離鄉 ssiang 貴 (重輕 中重, 重輕中重)
			訓 (1 例)	教訓 ssion (輕重)
			蔘 (2 例)	人蔘 ssyn (2 例) (輕重)
	箱 (1 例)	箱 ssiang 子 (重輕)		
			寺 (2 例)	永明寺 sy (中輕重) 隆福寺 ssy (中輕重)
			香 (1 例)	燒香 ssiang (輕重)
	師 (1 例)	師 ssy 傳 (輕重)		
動詞	上 (9 例)	上 ssiang (咧火輪船) 上 ssiang (那裏-) 上 ssiang (我們府裏去) 上 ssiang (隆福寺) 上 ssiang (我們府裏來) 上 ssiang (福建) 上 ssiang (那裏) 上 ssiang (廣東) 上 ssiang (外國)	上 (11 例)	蓋上 ssiang (重輕) 用不上 ssiang (中輕重) 套上 ssiang (重輕) 不上 ssiang (十五六歲) (輕重) 一上 ssiang 一下 (輕重輕重) 斟上 ssiang (茶) (重輕) 不上 ssiang (部裏) (輕重) 比不上 ssiang (中輕重) 套上 ssiang (重輕) 封上 ssiang (重輕) 添不上 ssiang (半文錢) (中輕重)
	下 (11 例)	下 ssia 船 (2 例) (輕重) 下 ssia 來 (2 例) (重輕) 下 ssia (一天雨) (1 例)	下 (14 例)	住不下 ssia (1 例) (中輕重) 住下 ssia (4 例) (重輕) 剩下 ssia (2 例) (重輕)

	下 ssia 班 (1 例) (輕重) 下 ssia (多大雪) (1 例) 下 ssia (咧三天一夜的大雪) (1 例) 下 ssia (箇大雪) (1 例) 下 ssia 雨 (2 例) (輕重)		一上一下 ssia (1 例) (輕重輕重) 坐下 ssia (1 例) (重輕) 使不下 ssia 去 (3 例) (重中重輕) 吊下 ssia 來 (1 例) (重中輕) 滴下 ssia (雨來) (1 例) (重輕)
少 (4 例)	少 ssiao (帶幾箇人) 少 ssiao 不了 (中輕重) 少 ssiao (咧一塊) 少 ssiao (一個)		
現 (1 例)	現 ssien 任 (輕重)		
算 (7 例)	算 ssoan 起來 (重輕中) 算 ssoan (6 例) (重輕)	算 (3 例)	打算 ssoan (2 例) (輕重) 不算 ssoan (全套) (輕重)
小 (1 例)	小 ssiao (一箇數兒)		
燒 (2 例)	燒 ssiao 酒 (輕重) 燒 ssiao 香 (輕重)		
撒 (2 例)	撒 ssa 謊 (輕重) 撒 ssia (在)		
散 (1 例)	分散 ssan (輕重)		
使 (7 例)	住一天使 ssy (是) 一天 使 ssy 不下去 (2 例) (重輕中重) 使 ssy 不得 (重輕中) 使 ssy 用 (輕重) 使 ssy 船 (2 例) (輕重)		
		殺 (1 例)	要殺 ssia 要剛 (輕重輕重)
		死 (3 例)	氣死 ssy (重輕) 不死 ssy (輕重) 真死 ssy 咧 (輕重中)
		響 (2 例)	(呼呼) 一響 ssiang (輕重) (鐘) 一響 ssiang (輕重)
歇 (1 例)	歇 ssie 歇 (重輕)	歇 (1 例)	歇歇 ssie (重輕)
		羨 (1 例)	可敬可羨 ssien (輕重輕重)
		笑 (1 例)	見笑 ssiao (輕重)
		篩 (1 例)	你篩 ssiai 我敬 (輕重輕重)

	洗 (2 例)	(多) 洗 si (兩會) 洗 ssi 耳敬聽 (重輕中重)		
	尚 (1 例)	尚 ssiang 書 (輕重)		
副詞	上 (1 例)	上 ssiang 萬數 (輕重中)		
	現 (2 例)	現 ssien 寫 (輕重) 現 ssien 去 (輕重)		
形容詞	現 (2 例)	現 ssien 銀子 (2 例) (中重輕)		
			少 (5 例)	不少 ssiao (5 例) (輕重)
	小 (17 例)	小 ssiao 邦 (輕重) 小 ssiao 麥 (輕重) 小 ssiao 媳婦 (中重輕) 小 ssiao 河 (輕重) 小 ssiao 子 (2 例) (重輕) 小 ssiao 車子 (中重輕) 小 ssiao 官兒 (中重輕) 小 ssiao 中華 (中輕重) 小 ssiao 車 (輕重) 小 ssiao 的們 (中輕重) 小 ssiao 眼 (2 例) (輕重) 小 ssiao 珠子 (2 例) (中重輕) 小 ssiao 的 (2 例) (重輕)	小 (6 例)	大呼小 ssiao 叫 (輕重輕重) 大同小 ssiao 異 (輕重輕重) 大小 ssiao (3 例) (輕重) 不小 ssiao (輕重)
	閒 (5 例)	閒 ssien 屋子 (中重輕) 閒 ssien 日子 (中重輕) 閒 ssien 話 (輕重) 閒 ssien 工夫 (中重輕) 閒 ssien 人 (輕重)		
	爽 (1 例)	爽 ssiang 快 (重輕)		
	險 (1 例)	險 ssien 些 (重輕)		
量詞			下 (1 例)	十下 ssia (輕重)
數詞	十 (16 例)	十 ssi 來天 (1 例) (中輕重) 十 ssi 成 (1 例) (輕重) 十 ssi 分 (1 例) (輕重)	十 (17 例)	三十 ssi (3 例) (輕重) 三十 si 五歲 (1 例) (中輕中重) 四十 ssi (1 例) (輕重)

		十 ssi 來箇 (2 例) (中輕重) 十 ssi 斤 (1 例) (輕重) 十 ssi 五六歲 (1 例) (中輕中重) 十 ssi 箇 (2 例) (輕重) 十 ssi 五歲 (1 例) (中輕重) 十 ssi 六歲 (1 例) (中輕重) 十 ssi 八歲 (1 例) (中輕重) 十 ssi 九歲 (1 例) (中輕重) 十 ssi 下 (1 例) (輕重) 十 ssi 塊錢 (1 例) (中輕重) 十 ssi 萬八萬 (1 例) (輕重輕重)		百十 ssi 多担 (1 例) (中輕中重) 一二十 ssi (1 例) (中輕重) 九十 ssi 九歲 (1 例) (中輕中重) 二十 ssi 五歲 (2 例) (中輕中重) 二十 ssi 一歲 (1 例) (中輕中重) 三十 ssi 六 (1 例) (中輕重) 二十 ssi 八 (1 例) (中輕重) 一五一十 ssi (1 例) (輕重輕重) 七十 ssi (1 例) (輕重) 七十 ssi 二 (1 例) (中輕重) 三七二十 ssi 一 (1 例) (輕重輕輕重)
	三 (20 例)	三 ssan 品 (輕重) 三 ssan 十 (2 例) (輕重) 三 ssian 十五歲 (中輕中重) 三 ssian 箇 (輕重) 三 ssian 兄弟 (第三个兄弟) (重中輕) 三 ssian 百兩 (中輕重) 三 ssian 尺 (輕重) 三 ssian 市六街 (2 例) (輕重輕重) 三 ssian 四箇 (中輕重) 三 ssian 套 (輕重) 三 ssian 月 (輕重) 三 ssian 年 (輕重) 三 ssian 大人 (同「三兄弟」) (重中輕) 三 ssian 天一夜 (輕重輕重) 三 ssian 十六箇 (中輕中重) 三 ssian 十塊 (中輕重) 三 ssian 七二十一 (輕重輕輕重) 左三 ssian 右四 (輕重輕重)	三 (4 例)	三 ssan 更 (輕重) 再三 ssian 再四 (輕重輕重) 三 ssian 錢銀子 (中重中輕) 兩三 ssan 層樓 (中輕中重)

	四 (7 例)	四 ssy 海 (軽重) 四 ssy 十 (軽重) 四 ssy 下里 (中軽重) 四 ssy 通五達 (軽重軽重) 三四 ssy 箇 (中軽重) 四 ssy 書五經 (軽重軽重) 四 ssy 千兩 (中軽重)	四 (7 例)	再三再四 ssy (軽重軽重) 東四 ssy 牌樓 (中軽中重) 張老四 ssy (3 例) (中軽重) 眼空四 ssy 海 (軽重軽重) 左三右四 ssy (軽重軽重)
--	---------	--	---------	---

2.5.1 名詞として用いられる濃音表記 ss-漢字

名詞として用いられる漢字は合計で 21 字がある。そのうち「史」「使」「死」「孫」「扇」「訓」「蓼」「箱」「寺」「香」の 10 字は、語の中の位置にかかわらず、その用例のいずれも漢語の語重音と一致している。ただし、「寺」には平音 sy と濃音 ssy の 2 種類の音注があり、それぞれ「永明寺 sy」と「隆福寺 ssy」という用例である。この 2 例の用法は完全に同じであり、濃音と平音が混用されているのは印刷上の誤刻の可能性が高いと思われる。また、これは当時の音注において s と ss は同一音素であることを示し、音韻的な差異はなかったことを示している。また、「使」については、「差使 sy」の 1 例は本来「差事」と書かれるべきであり、重音は第 2 音節の「使(事)」に置かれるべきであるが、この例では平音表記 s が用いられている。一方、動詞としての「使」はすべて濃音表記が用いられ、漢字の意味や用法に応じて表記を区別する傾向が見られる。

残りの 11 字の名詞用例においては、漢語の語重音と一致する用例と一致しない用例の両方が見られる。例えば、「上」の語彙用例の語重音パターンおよび文法構造には一定の規則性が見られる。まず、「上海」のように固有名詞や地名を構成する場合、語全体が名詞化され、不可分の語彙単位となっており、重音パターンは「軽重」、すなわち「上」は軽く、「海」は重く発音される。このような固有名詞における「上」はもはや「方位」や「方向」といった本来の機能を失っており、「上海」は「海の方へ向かう上方」を意味するのではなく、独立した地名として用いられている。

次に、「炕上」「橋上」「船上」「帽子上」など、名詞+方位詞「上」の構造は場所を表す前置詞の部分であり、位置を示す機能を持つ。この場合に中心語は名詞の部分であり、音声的に重音を担っている。また、「往上」や「在上」のように動詞（あるいは前置詞）+「上」の構造では「上」は依然として方位詞ではあるが、名詞に付属する補語成分としてではなく、動作の方向や結果の状態を示す独立した要素として機能している。このような場合の「上」は意味的な中心を担うため、強く読まれる。

漢語の語重音から見ると、『華音』に見られる「上」の用例の大部分は本来軽読されるべきである。

「下」の用例にも、「炕上」「橋上」など、名詞+方位詞の構造が多く見られる。例えば、「地下」

「橋底下」「天底下」などである。これらはいずれも名詞の部分が重読されるが、『華音』ではこれら名詞部分に特別な表記記号は用いられていない。「下」の用例のうち、語重音が漢語と一致するのは「下半截」の1例のみである。漢語の語重音の観点から分析すると、方位名詞として用いられる「上」「下」の大部分は語の重音ではないが、『華音』では「上」「下」の音注は全部濃音 ss で表記されている。濃音 ss の使用は漢語のそり舌音を示す可能性だけでなく、「上」と「下」が対照的な方位詞の一組として用いられる場合、その方位的対比の状態を強調するために、特殊な濃音記号を用いた可能性もある。

「世」「縣」「郷」の3字は全部濃音 ss で表記され、第1音節以外の位置に現れる用例はいずれも漢語の語重音と対応している。また、「山」の第1音節以外の用例も基本的に漢語の語重音と対応している。さらに、「山」の音注において濃音が用いられるのはそり舌音 sh を示すための可能性もある。「少」「世」「紗」「師」も同様に、そり舌音 sh を示すために濃音表記が使われた可能性がある。ただし、「師傅」という語については、漢語の語重音の規則に従えば「傳」に重音が置かれるはずであるが、実際の発音では「師（第一声/軽声）傳（軽声）」のようになる場合がある。馮勝利（2000）によれば、[A B] の二成分において、何らかの理由で「B」の分量が相対的に不足する場合、それは「A」の分量が強められていることを意味する。この場合、「師」は聴覚的に延長されたように聞こえられ、「傳」よりも強調される。こうした発音上の延長感を示すために、特殊な表記符号が用いられることもある。また、「現」「兄」「郷」の3字が語の第1音節に現れる場合、漢語の語重音との対応は少なく、そり舌音にも対応していないにもかかわらず、濃音 ss が使用されている。

2.5.2 動詞として用いられる濃音表記 ss-漢字

動詞として用いられる濃音 ss 表記の漢字は全部で19字がある。そのうち「算」「散」「殺」「死」「響」「歇」「羨」「笑」「篩」「洗」の10字は漢語の語重音と一致している。「歇」字は「歇歇」の1例のみで、音注は ssie であるが、語重音は第1音節にのみ置かれ、第2音節は軽声である。「洗」字については、語重音を分析できる用例は実際に「洗 ssi 耳敬聽」の1例のみであり、漢語の語重音に従えば「洗」が重読されている。また、もう1例『上 8b-9a』の「多洗兩會教他乾淨些兒」の「洗」は単音節語であるため、語重音の分析はできない。

また、動詞として用いられる「上」は第1音節に現れる用例はすべて単音節語であり、語の重音を分析することはできない。「上」字が第1音節以外に現れる用例には、動補構造のものが多く見られ、例えば「盖上」「套上」「封上」などが挙げられる。中国語の動補構造では、動詞が重く読まれ、補語は軽く読むのが一般的であるため、ここでの用例もすべて、中国語の動補構造の通常の重音パターンに従って「重軽」と記している。しかし、補語が動作の結果や完了状態を表す場合、意味的に補語が重要となり、重音を担うことも可能である。したがって、『華音』に見られる「盖上」「套上」「封上」といった例では、方向補語としての「上」が重く読まれることも可能であり、音注上にも「上」に特殊な濃音記号 ss が用いられている。一方、「用不上」「比不上」「添

不上」などの否定的表現の用例は中国語の語重音に対応している。全体として、動詞としての「上」の用例の多くは中国語の語重音と対応している。

「下」が動詞として用いられる場合の状況は「上」と比較的類似している。「下」が第1音節に現れる用例にも単音節語が多く存在していて、語の重音を分析することはできない。馮勝利(2000)によれば、中国語の動目構造では「宾语永远比动词强（目的語は常に動詞より強く読まれる。一筆者訳）」とされるが、同時に「如果宾语是代词一类的隐形（轻读）成分，那么动词就强于宾语。

（もし目的語が代名詞のような軽く読む成分である場合、動詞が目的語よりも強くなる。一筆者訳）」ともする。「下船」「下班」「下雨」といった動目構造の用例では、これらの目的語はいわゆる「軽読成分」ではないため、「船」「班」「雨」は重音音節となる。類似の用例は「現」「燒」「撒」「使」「尚」などの用例にも見られ、例えば、「燒香」「撒謊」「使船」「尚書」などが挙げられる。

「上」には、「用不上」「比不上」「添不上」といった用例もある。動補構造に属すが、これらの用例での「上」は「方向補語」より「可能補語・結果補語」となり、意味上の中心はその前の動詞ではなく、「上」が表す「成立可能性」や「結果」にある。この場合、「上」は重く読まれる必要がある。「下」「少」「使」においても同様の用例があり、例えば「少不了」「住不下」「使不下去」などが該当する。名詞として使用される ss 表記漢字の場合と比べると、動詞として使用される ss 表記漢字は中国語の語重音との対応がより明確であり、濃音表記 ss の使用と重音と一定の関連性があることが示される。

2.5.3 副詞、量詞として用いられる濃音表記 ss-漢字

「上」と「現」は副詞として用いられる用例のいずれも偏正構造⁷⁸である。偏正構造では通常、重音は中心語に置かれるが、修飾語が強調的意味を担う場合には、修飾語が重読されることもある。中国語の語重音の一般的な規則に従えば、「上萬數」の核心語は「萬數」の部分にある。しかし、『華音』の音注を見ると、「上」字に特別な濃音表記が使用され、ここでは「萬數を超える」という意味を強調するため、修飾語が強化されている可能性が高いと考えられる。同様に、「現寫」「現去」も偏正構造であり、「現」は副詞として用いられている。この2例では語重音は通常「寫」「去」という動詞に置かれるが、「現在」という状態を強調したい場合には修飾語が重読され得る。『華音』の音注において「現 ssien」は特別な濃音表記が施されていることから確認できる。

量詞として用いられる例は「赶十下鐘走也是得」に見られる「十下」の1例のみである。この「十下」は数詞+量詞から成る偏正構造であり、量詞「下」は動作の回数を示す語である。このような構造では、通常、量詞が語の意味的中心となるため、重読される。『華音』におけるこの「下」の用例は、漢語の語重音の分布と一致している。

⁷⁸ 修飾語+中心語の構造。

2.5.4 形容詞として用いられる濃音表記 ss-漢字

形容詞として用いられる ss 表記の漢字には「現」「少」「小」「閒」「爽」「險」の6字がある。このうち、「現銀子」「不少」「爽快」「險些」といった用例に見られる「現」「少」「爽」「險」の4字はいずれも中国語の語重音の位置に現れ、濃音表記 ss も用いられている。これら4字においては濃音表記 ss の使用と語の重音との対応関係が極めて明確である。

『華音』における形容詞性の濃音表記例字の用例の多くは偏正構造（修飾語＋中心語）に属している。中国語においてはこのような構造では文法的な機能の中心は通常中心語が担うとされている。例えば、「小邦」「小河」「小車」「閒話」「閒人」などの2音節語では、中国語の語重音の習慣によれば、「邦」「河」「車」「話」「人」といった名詞の部分が重音音節となる。しかし、『華音』の音注には、修飾語の部分に特別な濃音表記が使用されている。また、「小」「閒」「險」のような形容詞として用いられる漢字はいずれも中国語の x 声母に対応している。そのため、これらの漢字の音注に使われた濃音表記 ss は中国語のそり舌声母を表記するための工夫ではないことが明らかである。

しかし、3音節の偏正構造においては、韻律的リズムの均衡を保つため、修飾語がやや強調される傾向がある。例えば、「小媳婦」「小車子」「閒日子」などはいずれも「中重軽」のパターンを示し、修飾語がやや重く発音されている。また、「大呼小叫」「大同小異」といった四字熟語はその韻律形式が比較的固定しており、基本的に「軽重軽重」のパターンである。これら形容詞の用例を見ると、濃音 ss で表記されている漢字の多くは中国語の語重音が示す重音音節の位置に現れている。このことから、濃音表記の機能と語重音の機能と密接に関連していることがうかがえる。

2.5.5 数詞として用いられる濃音表記 ss-漢字

『華音』においては、数詞のうち「三」「四」「十」のみ濃音表記 ss が用いされている。これらの数詞の用例には、「十斤」「十箇」「三品」「三尺」「三更」「四海」など、多くの二音節語があり、いずれも「数詞＋量詞／名詞」の構造で現れている。第2章1.3で述べたように、中国語では量詞は語の中において通常重読される。一方、三音節語については、趙元任（1979）によれば、基本的に「中軽重」のパターンを示す。また、四音節語も比較的安定しており、基本的には「軽重軽重」のパターンである。数詞「三」「四」「十」の用例においても、中国語の語重音の位置と対応している用例が相当の数で存在している。しかし、『華音』では「三」「四」「十」が語の中のどの位置に現れても、または数詞が連続して現れる場合、例えば「三十五歳」「三十六個」などにおいても、一律に濃音表記 ss が使用されている。これは特殊な表記上の規定を反映したものと考えられる。総じてみると、濃音 ss で表記された数詞は語の中での位置が相当程度に中国語の語の重音と対応していることが確認できる。

2.5.6 小結

以上の分析からわかるように、語重音の観点から『華音』における ss 表記の例字を検討すると、ss の使用は必ずしも現代中国語の語重音規則と完全に一致するわけではないものの、全体として語重音との間に明確な対応関係が見られる。これは当時の朝鮮人が中国語における重音の存在を一定の程度で認識していた可能性を示唆している。ただし、音声を書き記述する際に朝鮮語自体の音韻体系や聴覚的知覚の影響を受けていたと考えられる。このような差異は、朝鮮人の中国語学習者による聴覚上の偏りに起因する可能性があるほか、音声の記述が中国語母語話者の実際の語感とは異なることを反映しているとも考えられる。特に実際の語音を記録する時、朝鮮人学習者は例えば中国語のそり舌音のような聴覚的に「強く聞こえる」音節を語重音と誤認し、それを ss などの特殊な記号を用いて提示する可能性が高い。

3 まとめ

本章では 19 世紀朝鮮後期の漢語学習資料『華音』に見られる濃音表記 sg-、ss- について考察した。まず、sg- 表記について、『華音』において sg- で表記されている漢字は全部で 9 字あり、主に中古音の「見母」に対応し、現代中国語のピンインでは g- 声母に該当する。同資料における g- 表記と基本的に同じ声母に対応している。「懇」「肯」など一部の溪母字においても sg- が使われているのは韓国漢字音の無気音化の原則によった表記である可能性が高い。次に、韻母の特徴から見ると、sg- だけではなく、g- 表記も鼻音終わりの中広母音韻母 (an, ang, un, ung) と共起する。同じ条件下で g-sg 両方の表記例が存在することから、鼻音終わりの中広母音韻母は g-sg の書き分けの音韻的な要因ではないことが確認された。

また、本章では『華音』における sg- を含む 15 例の例文についても考察を行った。その結果、sg- で表記された漢字の多くは述語・定語・目的語などの文の焦点部分に現れ、濃音表記の使用は強調と関係している。しかし、平音表記 g- で表記された漢字の用例にも同様の構造が見られたため、焦点が g-sg 表記を使い分ける決定要因ではないことを確認した。更に、語重音との関係も検討した結果、sg- 表記された語の多くは中国語の語の重音音節と対応し、語重音との関連がより明確である。sg- 表記は音韻的区別ではなく、意味・語用的機能に使われた可能性が高い。

本章では、ss- 表記について音韻的な立場からも考察を行った。sg- の場合と同様に、声母や韻母はいずれも s-ss の使い分けの要因とはなっていないことが明らかになった。また、ss- の用例に見られる使用傾向についても整理した。更に、ss を含む文の焦点及び中国語の語重音についても分析を加え、文の中で強調される部分や語の重音音節に ss- 表記が現れることが多いという結果を得た。即ち、濃音表記 ss- の使用は重音、語の重音と顕著な関連性を示していることである。

また、ss- で表記される例字の大部分は i 介音を伴っているが、s- 表記にも同様の傾向が見られるため、i 介音の有無が s-ss の使い分けの決定要因であるとは言えない。『華音』においては、ss+i という形式の表記が現代中国語における s・x・sh 声母に対応する漢字に多く見られる。『華

音』に収録された 29 例の ss+i 形式の漢字を検討した結果、ss+i 構造の形成には主に二つの理由がある。第一、「下」「現」「小」などのように、韻母自体に i 介音が含まれており、ss+i が通常の音節構造として成立している。第二、「三」「撒」「上」「十」など、現代中国語では韻母に i 介音を含まない漢字が、『華音』では ss+i の形で記されている例は i を用いて舌尖後母音を示し、漢語のそり舌音声母 sh を反映させる意図があると考えられる。

第3章 『你呢』『学清』の漢語音注における濃音表記 sg-、ss-

朝鮮時代後期の代表的な中国語教科書としては『你呢』や『学清』も挙げられる。これら両資料は写本ではあるが、ハングル音注が付されており、その音注には濃音表記の使用も見られるため、朝鮮時代後期の中国語教科書の音注における濃音表記を理解する上でも極めて高い参考価値を有している。朴在淵(2002)⁷⁹は『学清』においての韓国語の動詞語尾が一律にㅅ@다と書かれているのに対し、『你呢』ではすべて하다⁸⁰と表記されている点に着目し、この違いに基づいて『学清』の書写年代⁸¹は『你呢』よりも早いと推定している。『学清』は会話文の部分のみが現存しているが、その内容は『你呢』の会話文と非常に類似しているため、本章ではこの二つの資料を合わせて考察することとする。ただし、全体としてこれら二つの資料の会話文の部分には高い一致性を示すものの、文の順序、用語の使用などの面になお一部の相違点も見られる。例えば：

文の順序の違い：

『你 14a』：我這個稀鬆的生意，如何攔得住呢，**寔在担不住呀**。

『学 7a-7b』：**寔在担不住呀**。我這個稀鬆的生意，如何攔得住呢。

用語の違い：

『你 8b』：母親是早去世，只有父親在家啊。

『学 1a-1b』：父親是早棄世，只有一位母親在家兒⁸²。

『你 17a』：我在邊門口作過三十多年的賣買。

『学 11a』：你在过门⁸³口作過三十多年的生意。

文末語気助詞の違い：

『你 8a』：你呢貴姓**啊**。

『学 1a』：你呢貴姓**呵**。

『你 9a-9b』：我的哥哥是在瀋陽禮部裡當差，家裡只有兩個兄弟，一个是種地，一个是在書房念書**呀**。

『学 2a』：哥哥是在瀋陽禮部裡當差，一个是種地，一个是在書房念書**呵**。

『你 10a』：甚嗎也都有**啊**。

『学 2b』：甚嗎也都有**呀**。

⁷⁹ 朴在淵・周發祥(2002)『你呢貴姓・學清』の序文を参照。

⁸⁰ 「하다」は「～する」に相当し、主に名詞の後について動作を表す。『学清』に見られる「ㅅ@다」も「하다」と同様に「～する」に相当し、表記上の違いに過ぎないと考えられる。

⁸¹ これら二つの資料の編纂や成立過程に関する記録が一切残されていないため、具体的な成立年代の確定はできない状態である。

⁸² 兒化を提示する記号。

⁸³ 邊門。

テキスト内容の違い：

『你 11b』：你這個牛皮不大狠好，再拿別的好的來罷。

『学 4a』：你這個牛皮不大狠好，再拿別的來罷。

『你 10a-10b』：那個裡頭看中的東西否咧，只管性我說罷，我給你留下，再不敢應許別人哪。

『学 2b-3a』：那個裡頭若有看中的東西否咧，只管性我言語些。我給你留下，再不敢應許別人哪。

また、会話文の中には『你呢』に存在し、『学清』には見られない内容も含まれている。例えば：

『你 9b-10a』：

「你們家裡一年的照顧著多少啊。不算粮食寡吃穿使用的打得一塊算起來嗎，著个三百來的銀子。家有多小天的地嗎。地却是多不過二十多成地，赶到秋天收成粮食，就現賣一半打咧人家的吸[口荒]，剩下一半剛勾一年吃。」

本章では、以上の差異を把握した上で、この2資料に見られる濃音表記の特徴について検討を行う。

1 『你呢』『学清』の濃音表記 sg-

1.1 音韻地位から見る『你呢』『学清』の sg-表記

『你呢』（会話文、巻末付録部分⁸⁴）では「更」と「跡」の2字のみに濃音表記 sg-が用いられている。一方、『学清』では「更」「高」の2字のみに濃音表記 sg-が見られる。以下、資料中に sg-表記が見られる漢字のハングル音注のローマ字転写及び中古音での音韻的地位を表12に示す。

表12 『你呢』の sg-例字

資料	例字	転写1	転写2	音韻地位
『你呢』	更	sgyng	gyng	見庚開二平梗
	跡	ggei		精昔開三入梗
『学清』	更	ggyng		見庚開二平梗
	高	sge		見豪開一平效

『你呢』と『学清』の両資料において、濃音表記 sg が用いられている例字の数は極めて限られているため、その声母や韻母などの音韻的特徴から明確な規則性や使用理由を見出すことは困難である。しかし、注意すべき点として、『華音』の音注では g 声母の濃音が安定して sg によって表記されているのに対し、『你呢』と『学清』の音注では sg に加えて gg という表記形式も見られ

⁸⁴ 会話文以降の部分指す。本稿では付録部分と呼ぶ。

る。ここで注目すべきなのは、sg と gg は表記形式上に違いがあるものの、音韻的な機能において実質的な差異はなく、いずれも g 声母の濃音を表しているということである。

具体的には、『你呢』では会話文中の「更」という漢字に sg 表記が用いられているのに対し、付録の俗語「話風筆有跡」⁸⁵では「跡」という漢字に gg 表記が用いられる。朴在淵・周發祥(2002)の校注本では「跡」字の音注を「jiei」と記している。本稿では影印本資料に基づき、「跡」字は『你呢』では濃音表記の gg (sg) が用いられ、その音注を「ggei」と転写する。同様に、『学清』においても中国語の g 声母に対して sg と gg の二つの形式の濃音表記が使用されている。「更」は『学清』において sg ではなく gg が用いられている。

『学清』における「高」は、やや特殊な濃音表記の形が用いられている漢字である。『学清』では「高」字の用例が2例確認され、いずれも「死 ssys 高 ge 麗 ni」である。通常、濃音を示す場合、音節の中に直接濃音声母を使う。例えば「死 ssy」のように声母において平音の s ではなく濃音の ss を直接的に使うのが一般的である。しかし、『学清』では、「高」の場合、前の漢字の注音の末尾に s が付加され、その後続く ge と結び付ける形で「高」の濃音を示している。李基文(1975)によれば、このように前の字の音節末に現れる s は実際には次の字を濃音で発音することを示唆する「濃音符号 s」であり、「間の s」と呼ばれている。また、李基文(1975)は「間の s」がいつ頃から現れたのかは記録がなく考証できないが、少なくとも15世紀中葉には濃音記号 s としての「間の s」が存在していたと指摘している。この「間の s」のような形で示した濃音表記は朝鮮時代後期に編纂された中国語の資料が朝鮮語の影響を受けた直接的な現れと言える。なお、『華音』や『你呢』にはこのような濃音を表す表記は見られず、これは『学清』の書写年代が『你呢』よりも早いことを示している可能性が高い。

韓国の研究者蔡瑛純(2002)は sg という表記形式は19世紀の朝鮮対訳資料にのみ見られ、g 声母の濃音を表すために用いられていることを指摘している。つまり、19世紀以前の朝鮮対訳資料においては、g の濃音を sg で表記した用例は確認されていない。『你呢』の音注体系においては会話文の中の「更」という字には sg が用いられている一方、付録部分の例字「跡」には gg が用いられ、g 声母の濃音に対して sg と gg の2種類の表記が併存している。両漢字はいずれも g 声母に対応しているにもかかわらず、異なる濃音表記がなされているのである。これに対して、『学清』には gg という表記形式のみが見られ、sg を用いた用例は確認されていない。もし蔡氏の指摘通り、sg 表記が漢語音の記録において19世紀以降の対訳資料にのみ現れるのであれば、濃音表記の使用状況から見ても、『学清』に sg が見られず⁸⁶、gg 表記のみが用いられているという事実は『学清』の成立時期が比較的早いことを裏付ける有力な傍証の一つとなり得る。一方、『你呢』において sg と gg が併存している点、特に会話文と付録部分で表記に不一致が見られる点は sg 表記が当時まだ使用の初期段階にあり、その使用が安定していなかったことを反映していると考えられる。そのため、実際の使用において一定の混用や過渡的な現象が生じていた可能性が高い。

⁸⁵ ことばは風で、筆は跡があるという意味の可能性が高い。張魯原(2011)により、中国語には「口是跡，筆如風」という諺があり、「話す時に根拠を持ち、筆を執れば風のように速やかである」という意味である。

⁸⁶ 「間の s」は『華音』や『你呢』のような sg と見なすことはできない。

『你呢』における「更」字の用例は2例確認される。そのうち、16bの「管他誰也更 (gyng) 不肯依你作。」では平音表記 g が用いられている。一方、18bの「我咳比你更 (sgyng) 喜歡哪。」では、同じ「更」字に対して濃音表記 sg が用いられており、同一漢字の音注において平音と濃音の音注が併存している状況が見られる。これに対して、『学清』における「更」字にも同様に2つの用例があり、それぞれ8b「管他誰也更 (ggyng) 不肯依你作。」および11a「我咳比你更 (ggyng) 喜歡哪。」である。いずれの例においても濃音表記 gg が用いられており、『你呢』に見られるような平音と濃音の混用は確認されない。この点から判断すると、『学清』における「更」の音注は濃音表記として定着した可能性が高いと考えられる。

同時に、『華音』において「更」字は一貫して濃音表記の sg が用いられ、濃音と平音の混用は見られないことから、朝鮮後期の漢語教科書において「更」の音注は主に濃音で表記される傾向があったと推測される。それに対して、写本である『你呢』および『学清』では伝写の過程において表記の不一致が生じた可能性がある。例えば、『你呢』16bに見られる「更」に平音表記 g が用いられている点については、書写者による誤記の可能性と、当時「更」字の発音が濃音と平音の間でまだ安定していなかった可能性と、当時の朝鮮語の濃音体系に何らかの変化が生じていた可能性のいずれも想定しうるが、現時点の資料からはそのいずれかに確定することは難しい。

もう一つ注目すべき点は、『你呢』の付録部分に見られる「跡」字の音注である。「跡」は『学清』には確認されないが、『華音』には「這箇對子也不是現寫的，是一箇古人的遺跡 (ji) 啊。」という一例のみが確認される。「更」字が『華音』と『你呢』『学清』において、声母の濃音・平音表記の混用にとどまっているのに対し、「跡」字は『你呢』と『華音』の両方に共通して現れるものの、音注において声母のみならず韻母にも明確な差異が確認される。

朝鮮時代後期の漢語音韻体系においては、見系⁸⁷および精系⁸⁸声母の口蓋化がすでにほぼ完成していたとされる。したがって、『華音』における「跡」字の音注が「ji」と記されているのは精系声母の口蓋化がかなり進んでいたことを示すものである。「ji」という表記は精系の口蓋化が高度に完成していることを反映しているだけでなく、現代中国語における「跡」の発音にも非常に近いものである。一方、『你呢』巻末に収録されている単語および慣用句の部分では「跡」の音注は濃音表記の「ggei」と記されており、声母には濃音表記の gg が用いられている。このような注音の差異は、書写者が口蓋化された精系声母を同じく口蓋化された見系声母と誤って認識した結果であると考えられる。このことから、『你呢』が書写された時点では、見系と精系の口蓋化は徐々に定着しつつあったものの、書写者の音韻的認識においてはなおある程度の曖昧さや混乱が残されていたことがうかがえる。さらに、『華音』は公的に刊行された教科書であることから、その音注体系はより規範的で統一されたものであった可能性も考えられる。

⁸⁷ 舌根音に属し、見母・溪母・群母・疑母を含む。主に現代普通話では g、k、h 声母に対応する。

⁸⁸ 舌尖前音に属し、精母・清母・從母・心母・邪母を含む。主に現代普通話では z、c、s に対応する。

1.2 文の焦点から見る『你呢』『学清』の sg-表記

朝鮮時代後期の中国語教科書における音注での濃音表記の使用状況について、本稿第2章では、それが中国語の「文の焦点」と関連している可能性があるという仮説を提示した。本節ではこの仮説をさらに検証するため、「焦点」の観点から分析を続ける。具体的には **a** 主述構造の述語、**b** 修飾構造の定語(連体修飾語)と状語(連用修飾語)、**c** 動目構造の目的語、**d** 動補構造の補語、**e** 指示代名詞と疑問代名詞という五つのパターンを参照し、対比的焦点も併せて、『你呢』および『学清』という2冊の教科書に見られる濃音表記が現れた漢字の例文について焦点の分析を行った。両資料に対する分析結果は以下の表13に示す。

表13 sg-表記字を含む例文の焦点状況

『你呢』	更 sg yng	(1) 我 a (瞧) b (你那个)防想兒, b (不要別的, 只要現銀子的)意思呢, 你那嗎 b (寡) a (想) c (便宜)咧, b (別) a (說是) c (我)啊, 管他 e (誰)也 b (更 (g yng) 不肯依你)作。『15a』 (2) 俗言 a (道), b (先) a (斷) b (後) a (不難), 咱們 b (嗎 (口尚) 嘯理都) a (打開瞧一瞧), b (寡) a (調出) c (不好的) d (來), 剩不多小 a (算) c (多小), a (點點) c (數兒) a (起) c (票) d (來), 却不省 b (明个的)嘮道嗎, 那怕連 c (一張)也 a (沒有) e (甚嗎) c (調頭兒)否咧, 我 b (咳比你更 (sg yng)) a (喜歡)哪。『16a-16b』
	跡 ggei	話是風筆有跡 ggei 『29b』
『学清』	更 ggyng	(3) 我 a (瞧) b (你那个)防想兒, b (不要別的, 只要現銀子的)意思呢。你那个 b (寡) a (想) c (便宜)咧, b (別) a (說是) c (我)呀, 管他 e (誰)也 b (更 (ggyng) 不肯依你)作。『8b』 (4) 俗言 a (道) c (先斷後不難), 咱們 b (嗎啲嘯理都) a (打開瞧), b (寡) a (調出) c (不好的) d (來), 剩下的多小 a (算) c (多小), a (點點) c (數兒) a (起) c (標 (票)) d (來), 却不省 b (明个的)嘮道嗎。那怕連 c (一張)也 a (沒有) e (甚嗎) c (〔調一脫字、筆者注〕頭)否咧, 我 b (咳比你更 (ggyng)) a (喜歡)哪。『10b-11a』
	高(s) ge	(5) c (王大哥) b (寡) a (聽見) b (死 ssys 高 de 麗) c (的話), b (却) b (就)不能的 b (寡)我 b (死 ssys 高 ge 麗) a (胡弄) d (去)罷。『13b』

『你呢』の付録に見られる「話是風筆有跡」は慣用句のため、「跡」は情報焦点に該当しない。

一方、「更」字は『你呢』と『学清』の両資料にそれぞれ2例ずつ確認される。『你呢』の例文(1)のみが平音表記gが用いられているのに対し、それ以外の3例ではいずれも濃音表記(sg または gg) が使用されている。表13からも明らかのように、『你呢』の例文(1)・(2)と『学清』の例文(3)・(4)は内容面でほぼ完全に一致しており、用字や句読点にわずかな差異が見られる程度である。これら4例における「更」字はすべて情報焦点になりやすい**b**の修飾構造における定語(連体修飾語)または状語(連用修飾語)に該当する。「高」字の例文において、「死 ssys 高 ge 麗」の部分は**b**構造に当たり、強調されやすい部分である。このように強調が求められる部分では一部の音節が際立って発音され、音節上のプロミネンスとして現れる場合がある。音注の状況から見ても、「更」の音注に特別な濃音表記が使われ、実際の音声表現において強さを伴って発音され、強調の役割を果たしていた可能性が高い。当時の書写者は意味の強調や感情的ニュアンスを表現する手段として、濃音表記を用いて意味上の突出性を際立たせようとする傾向があったと推測される。『你呢』および『学清』におけるsgの使用例そのものは多くはないものの、これらの例文から、濃音 sg の使用が意味的な焦点や強調表現と一定の関連性を有している可能性が示唆される。

1.3 語の重音から見る『你呢』『学清』のsg表記

文の焦点の分析に加え、本章では第2章の1.3と同様に、趙元任(1979)を参照し、「前重式(重軽格式)」「後重式(軽重格式)」「重重式(重重格式)」「中重式(中重格式)」などのような語の重音を提示する形で、『你呢』及び『学清』に見られるsg表記が見られた語彙についても、語の重音の観点から整理・分析を行った。分析結果は表14に示す。なお、これらの語の重音の各パターンについては第2章の1.3節で詳しく説明しているため、ここで省略する。

表14 sgを含むフレーズの重音分布状況

品詞/位置	資料	語頭(第一字)		非語頭(第一字以外)	
副詞	『你呢』	更(2例)	更 gyng 不肯(中軽重) 更 sgyng 喜歡(中軽重)		
	『学清』	更(2例)	更 ggyng 不肯(中軽重) 更 ggyng 喜歡(中軽重)		
名詞	『你呢』			跡(1例)	筆有跡 ggei (軽中重)
	『学清』			高(2例)	死 ssys 高 ge 麗(中軽重)

「更」字については、『你呢』と『学清』の両資料における語彙用例および語重音のパターンが完全に一致しているため、本節では両資料を区別せずにまとめて考察する。両書に見られる「更」

の用例はいずれも程度を表す副詞であり、「更不肯」は否定形式の動詞述語「不肯」を修飾する構造であり、「更喜欢」は副詞が形容詞を修飾する構造である。なお、ここでの「更喜欢」は実際には「更喜欢（よりいっそう嬉しい）」の意味の意図を持ち、「私はあなたよりもっと嬉しい、もっと喜んでいいる」といった感情の程度を強調する表現であると解釈される。中国語において、程度を表す副詞は音声的に強調される傾向がある。『你呢』『学清』に見られる「更」の「更不肯」「更喜欢」は比較の意味を際立たせるため、「更」は強調して発音される傾向がある。ただし、『你呢』の否定表現を伴う「更不肯」という1例では濃音表記ではなく平音のgが用いられ、漢字の用法や意味によって表記を使い分ける状態が見られる。しかし、同一用例が見られる『学清』では濃音表記のggが用いられ、漢字の用法の差異によって異なる表記を使うことが見られない。全体的に見ると、「更」の後続部分が肯定的であれ否定的であれ、程度を強調する副詞として使用される場合には、濃音表記sg（またはgg）が多く使われることがうかがえる。

また、「死ssys 高ge 麗」も3音節語で、その語の重音パターンが趙元任（1979）によれば「中軽重」とされ、「高」は軽声のはずである。『学清』には「死ssys 高ge 麗」が2例確認され、中国語における語の重音とは一致していない。また、『学清』の音注によれば、前の音節末に付加されたsは朝鮮語の濃音記号の「間のs」であり、このような表記上の仕組みは朝鮮語に影響された直接的な表現である。

一方、「話は風筆有跡」という慣用句は口に出た言葉は風のように消失しやすくて、筆で記録した内容は残されるという意味である。「跡」は「痕跡」や「印」などの意味を表している中心的な意味を担う語であり、文の中核をなす成分として機能している。特にこの慣用句において「風」と「跡」は状態の対照をなしている。強調される部分は強く発音されて表記上にも激しい感情やニュアンスを表現するために濃音表記のggが使われた。

以上、表14の分析結果から明らかになるように、全体的に見て『你呢』および『学清』においてsg表記が付された漢字は多くの場合、語の重音が置かれる音節に位置している。このような使用傾向はsg表記が朝鮮時代後期の中国語教科書においては語の重音や強い語気を示すための一種の記号として機能していた可能性があると考えられる。

2 『你呢』『学清』の濃音表記ss-

2.1 音韻地位から見る『你呢』のss-表記

第2章の2.1に既に述べたように、朝鮮時代後期の中国語教科書に用いられている「並書」のss表記は、中国語の全濁声母を示す機能を果たしていない。現代中国語の普通話においてs-, x-, sh-などの声母に対応する漢字は、朝鮮時代後期の教科書では基本的にハングル平音表記s-によって注音されている。

しかし、『你呢』および『学清』の両書には『華音』と同様に、本来であれば平音表記sが用いられるべき漢字に対して、濃音表記ssが使用されている例が一部確認される。このような表記の現象はこれら後期の中国語教科書におけるss表記が異なる機能を有していた可能性を示唆して

おり、その音韻的特徴や文脈、語彙的特徴などとの関連を踏まえて、より詳細な検討が求められる。

そこで本節では、第1節の分析手法を踏襲し、まず音韻的観点から関連する例字の整理と考察を行うこととする。『你呢』と『学清』は会話文の内容において高度な類似性⁸⁹があり、ss表記が施された漢字にも重複が見られるが、ss表記の例字数はsgよりやや多く、また両書における音注の状況も比較的複雑である。そのため、本章では両書に見られるss表記の例字を資料ごとに分けて、それぞれ分析を行う。以下の表15、16は『你呢』の会話文と付録に見られるss表記の漢字のハングル音注および中古音における音韻的地位である。

表15 『你呢』 会話文の ss-例字（一部の例字には複数の表記が存在する）

例字	転写1	転写2	転写3	音韻地位
三	ssan (5 例)			心談開一平咸
四	ssy (3 例)	si		心至開三去止
上	ssiang (1 例)	sang (2 例)	siang (1 例)	禪養開三上宕
下	ssia (2 例)	sia (8 例)	sa (1 例)	匣馬開二去假
十	ssi (1 例)	si (5 例)	sy (1 例)	禪緝開三入深
使	ssy (4 例)			山止開三上止
死	ssy (2 例)	san		心旨開三上止

表16 『你呢』 付録の ss-例字（一部の例字には二通りの表記が存在する）

例字	転写1	転写2	音韻地位
噪	ssiang (1 例)	ssang (1 例)	
送	ssiung (3 例)		心送合一去通
喪	ssang (1 例)		心宕開一去宕
摔	ssoi (1 例)		
下	ssar (1 例)	ssa (2 例)	匣馬開二去假
香	ssiang (1 例)	ssang (1 例)	曉陽開三平宕
鮮	ssuien (1 例)		心彌開三上山
使	ssy (1 例)		山止開三上止
死	ssy (1 例)		心旨開三上止

⁸⁹ 具体的には本章の冒頭部分を参照されたい。

三	ssan (5 例)		心談開一平咸
事	ssy (3 例)		崇志開三去止
似	ssy (1 例)		邪止開三上止
小	ssao (1 例)		心小開三上效
善	ssien (1 例)		禪彌開三上山
燠	ssun (1 例)		曉文合三平臻
四	ssy (2 例)		心至開三去止
雄	ssiung (1 例)		雲東合三平通
蔘	ssyn (1 例)		山侵開三平深

表 15 は『你呢』の会話文中に見られる濃音 ss で表記された漢字 7 字を示したものである。これら 7 字のうち、複数の注音形式が存在するのは 5 字である。その中で、四 ssy-si、死 ssy-san の 2 字はそれぞれ 2 通りの音注を持つ。「死」の字に対する音注の一つに san があり、これはこの字の一般的な発音とは一致しない。現在のところ音韻体系上から合理的な説明を見出すことはできず、誤記である可能性が高いと推測される。「上」「下」「十」の三字は音注の状況が特殊であり、それぞれ 3 種類の異なる音注形式が確認される。これらの 3 字には、声母において ss-と s-のような濃音と平音の併用が見られるだけでなく、韻母の表記にも一定の差異が存在している。「上」の字に見られる ssiang および siang という 2 種類の音注における i 介音の付加は濃音表記 ss と i 介音を組み合わせることによって、朝鮮人にとって馴染みのないそり舌音を表現するための試みと見なすことができる。この i 介音は中国語における舌尖後元音⁹⁰に相当するものと考えられる。

表 16 は『你呢』の付録部分において濃音 ss 表記が用いられている例字を示したものである。『你呢』の付録に出現する 18 字の ss 例字のうち、「嚟」「下」「香」の 3 字を除けば、いずれも 1 種類の濃音表記の音注しか見られない。そのうち「下」字の 2 通りの音注は兒化尾の違いのみで、声母と韻母は同一である。また「下」字は『你呢』の会話文とは異なり、付録部分にのみ濃音表記が使われており、韻母には介音 i が付いていない。「嚟」「香」の 2 字の異なる音注は i 介音の有無の違いだけである。

また、付録の中で、「三」「四」「下」「使」「死」という 5 字は表 15 の会話文部分にも見られる重複した字である。「三」「四」「使」「死」の 4 字については付録における注音は会話文のものと概ね一致している。しかし、「下」については付録において会話文とは異なる 2 種類の注音形式、すなわち ssar と ssa が見られる付録中の「下」はいずれも濃音 ss で表記されており、i 介音は付加されていない。そのうちの一つの形式には、さらに兒化音を示す記号が付加されている。このことは、『你呢』が書写された当時、中国語にすでに兒化音が存在しており、それが朝鮮人の書

⁹⁰ 舌尖を歯茎付近に近づけたまま、口腔の後方で発音される母音。現代中国語では、zhi、chi、shi、ri の韻母に相当する音。

写者によって認識され、記録されていたことを示している。表 16 に示される「送」「鮮」「事」「善」の四字は『華音』では平音で表記されているのに対し、『你呢』では濃音表記が使われている。「事」は『你呢』の付録部分において平音と濃音表記が混在しており、さらに児化韻尾が付加されている点が特徴的である。一方、「死」「四」「蓼」の三字については附録と『華音』における音注が一致している。

ss 例字における数詞の使用は『華音』と『你呢』で異なっている。数詞「三」は『華音』では「十」が後続する場合、「三」「十」とともに濃音 ss で表記されるが、『你呢』では「三」に「十」が後続する用例が 3 例あり、そのうち「ssan ssi」と両方とも濃音で表記されたのは 1 例のみで、残りの 2 例では「三」の後に続く「十」はすべて平音の s で表記されている。

「四」は『你呢』において「三」と同様な使用傾向が見られ、例えば「四 ssy 十 si 五」や「四 ssy 十 si」のように数詞が連続する場合、最初の数詞だけが濃音で表記されている。「十」は『你呢』で単語やフレーズの最初の音節に現れる用例はなく、基本的に平音の s で表記されている。このように、数詞の連続において第 1 字のみが濃音で表記される傾向が示されており、これは濃音が発音時に喉頭の緊張を伴い強い気流で発音されるため、連続する 2 つの声母がともに濃音となるのは発音上不便である可能性が考えられる。

濃音表記に i 介音が後続する場合は『你呢』においては少ない。例えば「下」字は『華音』では主に ssia であるが、『你呢』で介音 i が付いていない。ss+i 介音の例字は『華音』の中で主に禪母、匣母、書母、心母、曉母、山母、邪母と生母である。その中、匣母、心母、曉母、邪母は現代漢語の x 声母に対応し、書母と生母は現代漢語の sh 声母に対応している。山母は現代漢語の s と sh 声母に対応している。『你呢』において濃音表記 ss に介音 i が後続するのは主に心母、曉母、禪母、雲母であり、主に現代漢語の s と sh 声母も対応している。金基石(2003)は中古生母字篩、山、紗、爽、参などは 19 世紀に韻母が介音 i に加わったと指摘した。蔡瑛純(2002)は、中古生母字篩、山、殺、紗、爽、参などの音注にわざわざ介音 i を使うのは、朝鮮人がうまく把握されていないそり舌音を表記するための努力だと指摘した。

蔡瑛純(2002)によると、19 世紀の朝鮮資料の心母字のかなりが濃音化し、ss で表記されているが、これは字音の平仄とは関係がない。蔡瑛純(2002)は朝鮮語における声母 bs と ss が実際に同じ音価を持つ濃音表記で、朝鮮国語史における bs 表記は 19 世紀になって使用され、ss と混用されたと指摘した。15 世紀から、ほとんどの生母字はそり舌音化し始めた。禪母字の多くの口蓋化字は 19 世紀の資料でも濃音 ss で表記されている。蔡瑛純(2002)は 19 世紀の朝鮮対音資料に濃音表記と復母音(i+単母音)をわざと使用したことは、中国語のそり舌音化を表現しようとしたことであると指摘した。

2.2 音韻地位から見る『学清』の ss-表記

『学清』に ss で表記される漢字は 5 字あり、それぞれのハングル音注および中古音での音韻的地位は表 17 の通りである。

表 17 『学清』 会話文の ss-例字（一部の例字には複数の表記が存在する）

例字	転写 1	転写 2	転写 3	音韻地位
三	ssam (2 例)	ssan (1 例)	bsian (1 例)	心談開一平咸
四	ssy (1 例)	bsy (1 例)		心至開三去止
十	ssi (1 例)	si (2 例)	sy (1 例)	禪緝開三入深
使	ssy (3 例)			山止開三上止
死	ssy (2 例)			心旨開三上止

『学清』の内容は『你呢』の会話文とほぼ一致しているが、ss 例字の使用に関してはいくつかの違いが見られる。両資料に共通する ss 例字は「三」「四」「十」「使」「死」の 5 字である。以下では、これらの共通する ss 例字について対照を行う。『学清』における「三」の用例は「三 ssan 十 ssi 多個人家口」「四 bsy 十 si 多間大房」「三 bsian 十 sy 多個人」「三 ssam 十 si 多年」の 4 例であり、1 例目の「三 ssan 十 ssi 多個人家口」を除けば、2 番目の数詞である「十」はいずれも平音の s で表記されている。「三」は『学清』では 4 例、『你呢』では 5 例と、用例数に大きな差は見られないが、音注の安定性においては『你呢』のほうがより安定しており、すべて ssan で統一されているのに対し、『学清』では ssam (2 例)、ssan (1 例)、bsian (1 例) の 3 種類の音注が混在している。「三」の韻尾は通常 n であるが、『学清』では /-m/ 韻尾の音注も見られる。

中国語の北方官話における中古漢語の /-m/ 韻尾の消失は近代漢語の特徴的な音韻変化の一つであり、その消失時期については現在も学界で定説が確立されていない。王力 (1980) は『西儒耳目資』⁹¹において /-m/ 韻尾が見られないことを根拠として、中国北方語における /-m/ 韻尾の消失は 16 世紀を遅れることはないと主張している。楊耐思 (1991) も 16 世紀以前に漢語の共通語における /-m/ 韻尾はすべて /-n/ 韻尾に変化したと考えている。李新魁 (1983) は明代李登の『書文音義便考私編』(1586) の記述に基づき、/-m/ 韻尾が /-n/ 韻尾へと変化した始めた時期として 16 世紀を挙げている。金基石 (1997) は朝鮮の韻書に反映された対音表記の検討を通じて、/-m/ 韻尾はすでに『四声通考』(1455) の時代に消失していた（「右音」は /-n/）、そして『翻訳乞大朴通事』(16 世紀初) の時代には「左音」すら /-n/ 韻尾に変化していたことを指摘している。ただし、「怎」「甚」の 2 字だけは『伍倫全備記諺解』(1721) まで /-m/ 韻尾を保持していた。朝鮮時代後期の漢語資料においては /-m/ 韻尾が現れることは本来あり得ない。実際、『華音』の会話文にも /-m/ 韻尾は確認されていない。しかし、『你呢』には「甚」と「怎」も /-m/ 韻尾が現れ、『学清』における「三」字の音注に /-m/ 韻尾が見られる。これは『你呢』『学清』の年代がやや早い反映だと考えられる。『学清』の「三」の音注に使われた /-m/ 韻尾は朝鮮漢字音の混入で、実際には『華音』や『你呢』と同様に /-n/ 韻尾であったと考えられる。

「三」字に見られるもう 2 種類の音注である ssan (1 例) と bsian (1 例) については、本稿で

⁹¹ 『西儒耳目資』はフランスの宣教師ニコラ・トリゴー（中国名：金尼閣）が明末の天啓 6 年(1626 年)に編纂したローマ字注音の韻書で、ローマ字を用いて中国語の発音を記述した。明代官話の音韻を研究する上で重要な資料である。

はbsを濃音表記ssとみなし、i介音の有無に関しては『華音』の「三」字の音注と一致していると考え。bs=ssと解釈するならば、「四」字についても濃音表記のみが確認され、平音sとの混用は見られない。この点は『華音』および『你呢』の「四」字の音注と一致している。「十」字については『学清』にも3通りの音注が見られ、その音注が『你呢』と完全に一致している。

『学清』には「四 bsy 十 si」という例が一つあり、数詞の連続の中でも最初の字だけが濃音で使われている。

「十」字の全体的な用例を見ると、『華音』ではほとんどが濃音表記ssを用いているのとは異なり、『你呢』および『学清』では平音表記sが多く用いられている。「使」字に関しては、『学清』と『你呢』の両方で濃音表記ssyが用いられており、一致している。『華音』における「使」字の用例のうち、1例のみが平音のsyで表記されているが、『你呢』および『学清』の例と照らし合わせると、これは印刷時の誤刻である可能性が高い。「死」字については、『你呢』『学清』のいずれにも2例ずつしか見られないが、声母がすべて濃音表記ssで表記されており、『華音』と完全に一致している。

『你呢』におけるss例字の声母は心母、匣母、曉母、山母、崇母、邪母、禪母、雲母である。一方、『学清』では心母、禪母、山母の字のみに濃音表記ssが用いられている。心母、匣母、曉母、山母、邪母、禪母の6つの声母においてsとssの表記揺れが見られる点は『你呢』が『華音』と一致している。しかし、『你呢』には『華音』には見られない崇母と雲母のss例字が含まれており、この2母については『華音』ではいずれも平音のsで表記されている。また、『你呢』のss例字には『学清』と共通するものも多いが、音注が一致しない例も少なくない。総じて見ると、『学清』における濃音表記ssの使用例は『你呢』よりも少なく、濃音表記を用いる傾向が比較的弱いことが示されている。これは『学清』が会話文のみから成り、全体の分量が比較的少ないことによる可能性がある。もう一つの可能性として、本稿第1章の3.2と本章1.1の考察により、『学清』の編纂年代が『你呢』よりやや早い可能性もあり、その当時は漢語の音注における濃音表記の使用がまだそれほど一般化していなかったことも考えられる。

2.3 文の焦点から見る『你呢』『学清』のss-表記

音韻の視点から『你呢』『学清』における濃音表記の漢字を全体的に把握したことにより、やはり音節を単位としての分析では濃音使用は明らかにできないため、本節では分析単位を広げて、文単位で再確認する。通常、新情報を担うとされるa述語、b定語(連体修飾語)と状語(連用修飾語)、c目的語、d補語、e指示代名詞と疑問代名詞といった文の成分によって、『你呢』『学清』における濃音で表記される漢字が現れる例文を対象として、その焦点分析を行った。その結果は付録3を参照されたい。

『你呢』における数詞「三」は10例あり、このうち会話文の5例はいずれも情報焦点のcに属す。情報焦点・対比的焦点の両方に該当する例も3例確認される。慣用句の5例の中、29b、30a、31aの3例は中国語の焦点の規則と一致する。「三」字は主にcとbで、『華音』と一致した焦点

の分布を示す。また、「三 ssan 停走一停」や「寔心任事結己奉公陡陞三 ssan 級」の2例は焦点には該当しないが、なお濃音表記が用いられている。

「四」字は5例があり、いずれも濃音表記 ss である。例文 8b-9a と慣用句 31b は濃音表記を使っているが、中国語の焦点パターンに合わない。「上」は『你呢』で9例あり、平音・濃音が混在するが、このうち8例は焦点とは一致しない。時間を表す副詞「嗎 (口+尚)」1例のみが焦点に当たるが、平音 s で表記される。一方、『華音』では「上」は主に方位詞として用いられ、濃音表記 ss が多く用いられている。

『你呢』における「下」は、15例中6例が中国語の情報焦点の d パターンに属し、「隧下 ssar 来」「摘下 siar 来」などがこれに該当する。残る8例については、いずれも焦点には一致しない。

「十」は10例中、33aを除くすべてが中国語の文の焦点部分に合致し、「a(四十 si 五歳)」「b(三十 ssi 多个)家口」「b(四十 si 多間)大房子」などがこれに含まれる。「使」は『你呢』に5例がある。18a と 27b を除いて、すべて焦点に該当する部分がある。「死」は3例があり、2例目の「寡我死高麗胡弄 d(去)罷」以外、全部 b パターンである。

「送 ssiung」は3例あり、いずれも濃音表記の ss が用いられている。その中には焦点の規則と一致する例もあれば、一致しない例も含まれる。「香」「事」も同様の傾向が見られる。「小」の用例には、例えば「家 a(有)e(多小 siao)c(天地)地嗎。」や「載 a(多)車 a(小 sau)」などがあり、焦点の部分に該当するにもかかわらず、平音表記の s が用いられている。「似 ssi」 「燻 ssun」 「雄 ssiung」 は各1例見られ、いずれも焦点部分と一致している。「嚟 ssiang-ssang」 「喪 ssang」 「摔 ssoi」 「鮮 ssuien」 「善 ssien」 「蓼 ssyn」 の6字の用例に焦点の部分に該当しない。

『学清』における「三」の用例は4例あり、いずれも濃音表記の ss または bs によって表記されており、すべて情報焦点の c パターンに該当する。「十」は4例すべてが b パターンに属するが、そのうち濃音表記 ssi が用いられているのは1例のみで、それ以外はすべて平音で表記されている。「四」「使」「死」については、いずれも濃音で表記されているが、それぞれの用例には情報焦点のパターンに一致する例と一致しない例の両方が含まれている。

『你呢』および『学清』の全文における濃音表記の用例について、その焦点の状況を把握した結果、全体として、これらの両資料に濃音表記 ss が使用されている漢字のかかなりの部分が文の焦点部分に現れていることが分かった。これは濃音表記の使用が内容やニュアンスを強調する手段として用いられていることの可能性が高い。また、『華音』と同様に、これら両資料でも、焦点に該当する部分で平音表記が用いられる例がある一方、焦点に該当しない部分で濃音表記が用いられる例も確認された。これによって、濃音表記の使用は強調と関連しているが、中国語の焦点は濃音と平音の使い分けの決定要因ではないことが、更に明確になった。

2.4 語の重音から見る ss-表記

2.4.1 語の重音から見る『你呢』の ss-表記

第2章で述べたように、語を単位としての分析も濃音表記の使用を理解する上で参考の価値が

ある。本節では語を単位として、『你呢』および『学清』において濃音表記 ss が用いられた用例を取り上げ、それぞれの語重音を分析する。語重音のタイプについては第2章の1.3で紹介した「前重式（重軽構造）」「後重式（軽重構造）」「中重式（中重構造）」などといった形で提示する。表18は『你呢』（会話文と巻末の語彙、語句の部分）において ss で表記された語句の用例とそれに対応する語の重音の状況を示したものである。重音に当たる部分は太字で提示する。

表18 『你呢』 ss-を含むフレーズの重音分布状況

品詞/位置	語頭（第一字）		非語頭（第一字以外）	
名詞	上（2例）	上 ssiang 下 ssia（重軽） 上 sang 頭（1例）（重軽）	上（2例）	案上 sang（重軽） 錦上 sang 添花（軽重軽重）
	下（2例）	下 sa 塘（軽重） 下 sia 次（軽重）	下（2例）	上 ssiang 下 ssia（軽重） 天下 ssa（軽重）
	噪（2例）	噪 ssiang 子（2例）（重軽）		
			香（1例）	借香 ssang 燒佛爺（軽中重中軽）
			事（9例）	恒事 sy（軽重） 一件事 sy 看事 syr 作事 syr（2例）（軽重軽重） 閑事 sy（軽重） 人無信，事 ssy 不齊 當中沒有人，事 ssy 不成 講事 sy（軽重） 寔心任事 ssy（軽重軽重）
			善（1例）	行善 ssien（軽重）
			雄（1例）	英雄 ssiung 好漢（軽重軽重）
			蔘（1例）	白蔘 ssyn（軽重）
動詞	上（2例）	上 siang 我的儻 上 sang 稅的（中重軽）	上（2例）	二不上 sang（中軽重） 札上 sang（重軽）
	下（3例）	下 sia 短（重軽） 下 sia 不來（重軽） 下 ssa 槽（重軽）	下（9例）	住得下 ssia（軽重） 住不下 sia（軽重） 剩下 sia（2例）（軽重） 留下 sia（軽重） 惱下 sia 來（軽重） 剩下 sia 的（銀子）（軽重） 摘下 siar 來（軽重）

				隧 ⁹² 下 ssar 來 (軽重)
	使 (5 例)	使 ssy 用 (軽重) 使 ssy 換 (軽重) 使 ssy 得過 (中軽重) 使 ssy 不着 (中軽重) 使 ssy 船 (軽重)		
	送 (1 例)	送 ssiung 行 (軽重)	送 (2 例)	一送 ssiung (軽重) 饋送 ssiung (軽重)
	喪 (1 例)	喪 ssang 氣 (重軽)		
	摔 (1 例)	摔 ssoi 他		
			似 (1 例)	得意狐兔強似 ssy 虎
	小 (3 例)	小 siao 不賣 (中軽重) 小 siao 一点 (中軽重) 小 siao 他不得		
			燻 (1 例)	利慾燻 ssun 心 (軽軽中重)
副詞			上 (1 例)	馬上 ⁹³ sang (重軽)
形容詞	死 (3 例)	死 ssy 高麗 (2 例) (中軽重) 死 ssy 水裡翻船 (軽重中軽重)		
			香 (1 例)	一臭一香 ssiang (軽重軽重)
	鮮 (1 例)	鮮 ssuien 紅 (軽重)		
	小 (1 例)	小 ssao 河 (軽重)	小 (8 例)	多小 siao (6 例) (重軽) 載多車小 sau (軽重軽重) 酒逢知己千盃小 siao
数詞	三 (10 例)	三 ssan 百 (2 例) (軽重) 三 ssan 十 ssi (軽重) 三 ssan 十 sy (軽重) 三 ssan 十 si (軽重) 三 ssan 停走一停 (軽重中軽重) 三 ssan 七二十 si 一 (軽重軽中重) 三 ssan 家 (軽重) 三 ssan 門子 (窮親) (中重軽) 三 ssan 級 (軽重)		

⁹² 「隧」字は福田(1995b)を参照。

⁹³ 馬上の「上」は「副詞の一部」として用いられるため、ここで副詞とみなす。

			十 (10 例)	二十 si (2 例) (軽重) 四 ssy 十 si 五歳 (中軽中重) 三 ssan 十 ssi (軽重) 三 ssan 十 sy (軽重) 三 ssan 十 si (軽重) 四 ssy 十 si (軽重) 一五十一 si (軽重軽重) 三七二十 si 一 (軽重軽中重) 八九不離十 si (軽重中軽重)
	四 (5 例)	四 ssy 十 si 五歳 (中軽中重) 四 ssy 个 (軽重) 四 ssy 十 si (軽重) 四 ssy 角 (軽重) 四 ssy 塊 (軽重)		

『華音』で ss-表記される漢字には表記の揺れがほとんどないのに対し、『你呢』では同一の漢字に対して濃音 ss と平音 s が混在して使用される場合も見られる。「上」「下」「事」「小」の 4 字を除き、『你呢』のその他の 16 字に関しては声母の注記において比較的安定して濃音表記 ss が用いられており、s と ss の混用は確認されていない。

『你呢』において「上」字は全部で 8 例見られ、そのうち濃音 ss で表記されているのは「上 ssiang 下 ssia」の 1 例のみであり、残りの 7 例はいずれも平音 s で表記されている。「上下」という語の語重音は普通「上」に置かれている。これは「上下」のような並列構造の二音節語⁹⁴において、中国語では重音が第 1 音節に置かれるのが一般的であるためである。一方、「上」字の残り 7 例のうち、名詞「案上 sang」では「案」が重音を担い、「上」は相対的に強く読まれない。それ以外の 6 例では「上」が本来強く読まれる位置に現れているにもかかわらず、『你呢』においてはいずれも平音表記 s が用いられている。

「下」は名詞として語の第 1 音節位置にのみ現れる「下塘」「下次」の 2 例では語重音のパターンが「軽重」となっており、「下」は語重音の位置に置かれず、濃音 ss も使用されていない。一方、残りの 13 例においての「下」は名詞であれ動詞であれ、また、語の中の位置にかかわらず漢語の語重音が置かれる音節に位置している。しかし、この 13 例のうち、漢語の語重音の位置にあるにもかかわらず、濃音 ss が使用されているのは「上下」「天下」「下槽」「住得下」「隧下来」の 5 例のみであり、その他の用例はすべて平音 s で表記されている。現段階では、『你呢』における濃音と平音の混用の具体的な理由は明らかになっていない。

また、名詞として用いられる「事」の用例はすべて漢語の語重音パターンに一致しており、基

⁹⁴ 例えば、中国語においての「東西」「多少」「高低」なども同様の例として挙げられる。

本的に重音音節の位置に現れている。それにもかかわらず、「事」字は「寔心任事 ssy」の1例で濃音 ss が用いられている以外、その他の用例はすべて平音で表記されている。一方、名詞として用いられる「嚙」「香」「善」「雄」「蓼」の5字は、語の中で現れる位置がいずれも漢語の語重音音節に位置しており、すべて濃音 ss で表記されている。これら5字には濃音と平音の混用は見られず、語の重音パターンと高度な対応性を示している。

動詞において、「捧」字は単音節語としての用例が1例しかないため、語重音の分析はできない。また、「似」字は「得意狐兔強似虎」の1例で短文の中に現れるため、これも語重音の分析を行うことはできない。動詞として用いられる濃音 ss の漢字のうち、漢語の語重音音節と完全に一致するのは「喪」「小」「燠」の3字である。『你呢』における「小」字は形容詞として用いられた1例を除き、大部分の用例が「小不賣」は「少不賣」、「小一点」は「少一点」に相当するように、現代中国語における「少」の意味に近い用法となっている。ただし、「小」字はすべて平音 s で表記されている。「送」字は語の第1音節に現れる場合は漢語の語重音音節と一致しないが、第2音節に現れる場合はすべて漢語の語重音音節と一致している。全体的に見れば、動詞において濃音 ss で表記される漢字の大部分は漢語の語重音音節と一致しており、濃音表記と語の重音との間に明確な対応関係が見られる。

形容詞として使用された濃音 ss の漢字のうち、「香」は漢語の語重音と完全に一致している。「死」の用例では「死 ssy 高麗」の1例が漢語の語重音音節と一致している。「小」が形容詞として用いられる場合、語の第1音節に現れる「小 ssao 河」の1例のみが濃音表記 ss を用いている。第1音節以外に現れる「小」の用例はすべて平音 s で表記されているが、これらの用例はいずれも漢語の語重音に対応している。

数詞の「三」「四」「十」について、「三」と「四」はすべて濃音 ss で表記されている。しかし、「四」の用例のうち「四 ssy 十 si 五歳」の1例だけが相対的に重読される音節に位置しており、それ以外の「三」「四」の用例はいずれも漢語の語重音音節と一致していない。「三」「四」が比較的安定して濃音 ss で表記されるのに対し、数詞「十」は『你呢』では主に平音で表記されており、濃音 ss が使われるのは「三 ssan 十 ssi」の1例のみである。『你呢』において、数詞が連続して現れる場合、通常は最初の数詞にのみ濃音 ss を使用し、以降の数詞は主に平音 s で表記される傾向が確認される。「十」の用例が語の第1音節の位置に現れず、前に数詞が接続して数詞の連続を形成していることが多いため、『你呢』ではほとんど濃音で表記されない。

以上の分析から見ると、『你呢』における濃音 ss 表記の用例の語重音の状況を把握すると、一部の漢字の中に濃音 ss と平音 s が混用されている例があることが確認できる。平音 s で表記されている用例の中にも中国語の語重音の規則に一致するものが存在することが見られる。それにもかかわらず、『你呢』で濃音 ss によって表記された漢字の多くの用例は、漢語の語重音音節が現れる位置と一致しており、特に動詞においてその傾向が明確である。したがって、濃音 ss の使用は重音を示す役割を持っている可能性が高く、語重音との間に密接な関連性があると考えられる。

2.4.2 語の重音から見る『学清』の ss-表記

『学清』において、濃音表記 ss が用いられている漢字はわずか5字である。これら5字が現れる語を分析すると以下表19の結果となる。

表19 『学清』 ss-を含むフレーズの重音分布状況

品詞/位置	語頭 (第一字)		非語頭 (第一字以外)	
形容詞	死 (2例)	死 ssy 高麗 (中軽重)		
動詞	使 (3例)	使 ssy 換 (軽重) 使 ssy 得過 (中軽重) 使 ssy 不着 (中軽重)		
数詞	三 (4例)	三 scam 百 (軽重) 三 ssan 十 ssi (軽重) 三 bsian 十 sy (軽重) 三 ssam 十 si (軽重)	十 (4例)	三 ssan 十 ssi (軽重) 四 bsy 十 si (軽重) 三 bsian 十 sy (軽重) 三 ssam 十 si (軽重)
	四 (2例)	四 ssy 个 (軽重) 四 bsy 十 si (軽重)		

「死」は形容詞として用いられ、ここで「嫌な、卑劣な」といった意味を表しており、比較的強く読まれる位置に置かれている。「使」はすべて動詞として用いられており、そのうち2音節語が1例あり、「使 ssy 換」である。趙元任 (1979) によれば、漢語の語重音パターンから見ると、この用例では「換」に重音が置かれるべきであり、語重音のパターンは「軽重」となる。そのため、「使」は相対的に軽く読まれて、この1例は漢語の語重音のパターンと一致しない。一方、残りの2例の「使」字の用例はいずれも3音節語であり、語重音のパターンは「中軽重」で、「使」字はいずれも比較的重読される位置に置かれている。

数詞について、『学清』には「三」「四」「十」の三字がある。このうち「三」と「四」はいずれも語の第1音節位置にのみ現れており、声母にすべて濃音 ss で表記されている。しかし、第1音節に位置する数詞は、漢語において相対的に強く読まれる音節ではなく、「三」「四」二字のすべての用例は漢語の語重音と対応していない。一方、「十」は『你呢』と同様に語の第1音節の位置に現れる用例はなく、全4例はいずれも2音節語で、かつ2つの数詞が連続する構造となっている。『学清』における「十」字の語の中での出現位置は漢語の語重音音節と完全に一致している。ただし、『学清』及び『你呢』の両資料においては、数詞が第1音節以外の位置に現れるとき、平音の s で表記される傾向があり、この傾向は『你呢』における「十」の用例にも明確に見られる。ただし、「三 ssan 十 ssi 多个人」という一例のみがこの傾向から外れている点に注意する必要がある。

これら全13例の用例のうち、9例は重音が置かれる音節に位置しており、全体として見ると漢

語の語重音の位置と比較的よく対応している。ただし、この9例のうち4例は「十」の用例であり、いずれも濃音ではなく平音で表記されている。『学清』に見られるこのような状態はやや特異であり、手書きの写本であることや、本稿で扱う朝鮮時代後期の資料の中で比較的早い時期に書写されたものであることが関係している可能性がある。

3 まとめ

sg 表記の例字は『你呢』『学清』においてわずか2字しか残っておらず、その使用条件を特定するのは極めて困難である。ss 表記の例字も『你呢』では21字にとどまり、『華音』の約半数に過ぎない。sg、ssのいずれにしても、『你呢』『学清』の漢字音注における使用頻度は低い。さらに、両資料における濃音表記を含む用例の焦点から分析すると、濃音表記の使用はしばしば強調や強い感情・ニュアンスの表現と結びついており、特に語の重音部分においてその傾向が顕著に現れていることが確認できる。

『你呢』および『学清』に見られる濃音表記の例字を比較したことによって、朝鮮時代後期の漢語教科書における濃音表記の使用が極めて不安定であったことが明らかになる。同一の漢字であっても、内容が高度に類似しているこの両資料においても、濃音表記の使用状況には明確な差異が存在する。『華音』においては「上」「下」などの方位詞は基本的に濃音表記ssが用いられているが、『你呢』ではこれらは主に平音表記sで記されており、『学清』ではすべて平音表記となっている。『華音』では濃音表記ssが多用される傾向がある状態を表す副詞や形容詞も『你呢』『学清』では基本的に平音sが用いられている。例えば「今、すぐに」を意味する副詞・形容詞「現」は『華音』ではすべて濃音表記ssであるのに対し、『你呢』『学清』ではいずれも平音表記sとなっている。また、比較を表す動詞「小」についても、『華音』では濃音表記が使用される傾向がある一方で、『你呢』『学清』ではすべて平音表記sが用いられている。このことは『学清』や『你呢』はいずれも写本資料であるため、その濃音表記の不安定さは伝写の過程で生じた誤記に起因する可能性もあれば、書写者の表記方法や中国語運用能力の差異を反映している可能性もあると考えられる。これに対して、刊本である『華音』の濃音表記は比較的安定している。

朝鮮時代後期の漢語教科書には、公式な編纂過程や改訂に関する記録がほとんど残されていないため、当時なぜ濃音表記のような特殊な表記法が用いられたのかについて、朝鮮側の史料からは把握することができない。中国音韻学の観点から見ると、一部のss表記の使用は当時の朝鮮人が朝鮮語の濃音表記を用いて漢語のそり舌音声母を表現しようとした可能性がある。また、一部の音注にi介音を加える例も見られ、これもそり舌音声母の特徴を表そうとする試みと解釈できる。また、『華音』『你呢』『学清』に登場する濃音表記が固定的な使用基準を形成しておらず、一定の揺れや混乱が見られることが分かる。このような濃音表記の混乱は編集者個人の漢語知識の差異などに起因していると考えられる。

第4章 『華音撮要』における濃音表記 sg- と ss-

『華音』『你呢』『学清』のほかに、『華音撮要』（以下『撮要』と略す）も代表的な後期朝鮮時代の漢語教科書の一つである。その中の漢語音注には濃音表記 sg- と ss- の使用も確認される。また、『撮要』の漢語音韻体系は前述の三書と接近しているだけでなく、会話文においてもと共通または極めて類似する部分が存在し、対照研究の価値を有する。更科(2005)もまた、『撮要』において濃音で表記されている漢字の多くが『華音』と共通している点に注目すべきであると指摘している。本章では、東京大学文学部小倉文庫に所蔵されている『撮要』の電子ファイル⁹⁵及び汪維輝主編(2011)の『朝鮮時代漢語教科書叢刊續編』に収録された影印本を資料とし、その漢語音に見られる濃音表記を中心に検討を行う。

序論の資料紹介でも述べたように、『撮要』は大きく三つの部分に分かれている。第1部分(1a-24b)は商取引に関する会話文で構成されており、ハングルによる注釈は付されていないが、漢字の横にはハングルによる音注が施されている。第2部分(25a-52b)は漢字のみから成り、朝鮮語の注釈やハングル音注は見られない。第3部分(53a-66b)は短い会話文、慣用句、語彙などから構成されており、ハングル音注とともに朝鮮語による注釈も付されている。第2部分にはハングル音注が付されておらず、発音の実態を確認することが困難であるため、本章では第1部分および第3部分を対象として考察を行う。

1 『撮要』の sg- 表記

1.1 音韻地位から見る sg- 表記

sg で表記される例字について、『撮要』における sg 表記は跟、剛、更、懇、赶、乾という6字の音注に限られている。その音注のローマ字転写と音韻上の地位を表20に示す。

表20 『撮要』の sg- 例字

例字	転写1	転写2	転写3	音韻地位
跟	sgyn (5例)	gyn (2例)		見痕開一平臻
剛	sgang (1例)	gang (2例)		見唐開一平宕
更	sgyng (1例)	ging (1例)	gyng (3例)	見庚開二平梗
懇 ⁹⁶	sgyn (1例)			溪很開一上臻
赶	sgan (2例)	gan		見寒開一平山
乾	sgan (1例)			見寒開一平山

⁹⁵

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogura/document/f8f74306-a40f-4d7d-9305-4a8f076ce039#?c=0&m=0&s=0&cv=3&xywh=-331%2C0%2C6276%2C3743>

⁹⁶ 『華音』の「懇」のもう一種の書き方。

『撮要』では、濃音表記 sg が用いられている漢字が6字確認されており、『華音』を除けば、本稿で扱う4資料の中で sg 表記の例字数が最も多い。『你呢』『学清』と比較すると、『撮要』と『華音』は sg 例字の数が相対的に多いだけでなく、両資料には多数の共通する例字が確認される。これは両書の書写・刊行時期が近いことと関係している可能性がある。『撮要』の書写年代は1877年で、『華音』の刊行年代は1883年であり、時間的な隔たりが大きくないため、両書が反映する音韻体系の差異も相対的に限定的であったと考えられる。その結果、一部の漢字の音注に同様の表記方式が用いられた可能性がある。なお、『撮要』では濃音を表す表記に sg のみが用いられ、gg⁹⁷という表記形式は確認されない点は注目される。

『華音』と共通しているのは「剛」「乾」「懇」「更」の4字である。このうち「更」はこれらの4冊すべてに共通して濃音表記 sg として用いられている例字である。「更」は『撮要』において sgng、gng、ging という3種類の音注が使われる。

「剛」は『撮要』において濃音と平音の混用が見られ、平音表記を用いる例のほうがやや多い。この字は『華音』ではすべて濃音表記 sg が用いられているが、『你呢』および『学清』ではすべて平音表記 gang で表されている。

「乾」は21bの「半夜受冷凍手凍足拿不起鞭子來，惱成一塊乾 sgan 木頭的身子來呢。」の1例のみである。『華音』では「乾淨」「乾白」の2例がいずれも濃音表記 sgan で記されている。「趕」は『華音』『你呢』『学清』のいずれにも使用例がない。

『撮要』の「懇」は『華音』の「懇」と用例、音注が同じで、いずれも「懇/懇 sgyn 求」という語の中に現れている。表記上は異なるものの、実際には同一の漢字と考えられる。この字は『你呢』『学清』では使用例が見られない。「懇/懇」は溪母⁹⁸字であり、『撮要』と『華音』の音注はいずれも無気音声母 g の濃音で表記されている点で、朝鮮漢字音における溪母字は主に無気音 g で表記されるという原則と一致している。

「跟」は『華音』に9例、『你呢』および『学清』にもそれぞれ1例ずつ見られ、いずれも平音表記の gyn が用いられている。『撮要』と『華音』に共通して現れる漢字には他に「根」があるが、『華音』では濃音表記 sgyn が使われているのに対し、『撮要』では平音表記 gyn が用いられている。たとえば『撮要』21aの例文「你呢，暫住車望一望山根 gyn 底些兒，若有住家的否咧，咱們趕進去烤一候兒火吃一袋煙暖和身子再走罷。」がその一例である。「跟」は『撮要』に7例の用例があり、そのうち第1部分の会話文に属する5例ではすべて濃音表記 sg が用いられている一方で、第3部分の2例では平音表記 gyn が用いられている。なお、この字は他の3資料（『華音』『你呢』『学清』）においてはすべて平音表記 gyn で記されている。

「趕」は『華音』に13例が見られ、いずれも平音表記の gan である。『你呢』の7例および『学清』の2例もすべて平音表記 gan が用いられている。『撮要』では、8aの「小甬子否咧，趕 sgan 子拿小傢伙装上的。」および19bの「趕 sgan 子⁹⁹半夜走路的不照亮兒誰能走得呢。」の2例のみが

⁹⁷ sg と同じ音素であり、表記が異なるだけである。

⁹⁸ 現代漢語のピンインの k 声母と対応する。

⁹⁹ 「自ら」という意味

濃音表記 sg で、それ以外の用例はすべて平音表記 gan である。以上のことから、「赶」は主に平音 g によって表記される傾向が強いと考えられる。

更科 (2005) は『撮要』のハングル音注を考察する中で、同書に見られる濃音表記についても言及し、『撮要』における 6 字の sg 表記は中国語側と朝鮮語綴り方上の特別な理由を特定することができず、偶然にその 6 字に固定された結果であると結論づけている。しかし、『華音』『你呢』『学清』の 3 冊に見られる sg 例字を把握すると、朝鮮時代後期の漢語教科書におけるハングル音注としての sg 表記は必ずしも固定的ではなく、むしろ不安定なものであったことが明らかとなる。ただし、一部の漢字については、これら四種の資料すべてにおいて音注が比較的安定しており、たとえば「更」の字には、いずれの資料でも一貫して濃音表記 sg が用いられている。

『撮要』において、濃音表記は依然として見母字に多く見られ、特に唐・寒・痕の三韻部に集中している。後期のいくつかの資料では、sg 表記の漢字の使用数自体が全体的に少ないため、音韻体系の観点からのみでは、その使用が中国語の音韻構造の影響をどの程度受けているかを明確に判断するのは困難である。また、『撮要』で sg 表記が用いられている例字のうち、跟、剛、更、赶の 4 字には複数の音注形式が併記されており、sg に関する音注の状況はこれらの資料の中でも特に複雑である。一方、『華音』『你呢』『学清』の三資料における sg 例字は、基本的に sg 一種の音注形式のみで記されており、相対的に安定した傾向を示している。

1.2 文の焦点からみる『撮要』の sg-表記

『撮要』における sg 表記の例字については、音韻からでは濃音表記の使用理由を明確に判断することは依然として困難である。そこで本節では分析の単位をさらに広げ、『撮要』における sg 表記の例文を検討する。例文の分析は漢語の文の焦点規則の情報焦点の **a** 主述構造の述語、**b** 修飾構造の定語¹⁰⁰と状語¹⁰¹、**c** 動目構造の目的語、**d** 動補構造の補語、**e** 指示代名詞と疑問代名詞と対比的焦点に基づいて展開される。

表 21 sg-表記字を含む例文の焦点状況

漢字	文焦点
跟 sgyn/gyn	(1) 你要 e(那些个) 作 e(甚嗎)。京裡大人們跟 sgyn 前送禮的，可以看 d(得過) 樣兒的 b(纔) 中用啊。『5b』 (2) 別人跟 sgyn 前問 e(這個) 裡兒，回來 b(勾我) a(噪嚷) 罷。『10a』 (3) 憑你 e(怎嗎) 惱罷，你呢惱得 e(那裡) d(去)，我跟 sgyn 得 e(那裡) d(去) 呢。『10a』 (4) 雇一个人跟 sgyn 我 b(徃門上) a(才+着) c(錢)¹⁰² d(去) 罷。『18b』

¹⁰⁰ 連体修飾語。

¹⁰¹ 連用修飾語。

¹⁰² 中国語の「取錢」。お金をおろす。

	(5) 罷呀, e(那个)纔多大意思, 不好意思的b(跟 sgyn 你)a(取)c(錢)嗎。『18b』 (6) 我們府尹大老爺b(跟 gyn 前)a(告訴)b(後頭)a(拿來)啊。『53b』 (7) b(自家養活的)狗b(還)a(咬)c(腳後跟 gyn) 『61b』
剛 sgang/gang	(1) 你若e(那嗎)說, b(一個小)桶子否咧, b(剛 sgang)a(勾)c(二十斤)的, 也b(給人家)退十斤的a(有)嗎。『8a』 (2) b(纔)e(多大)意思, 何b(敢对你太)a(剛 gang)嗎。『10a』 (3) b(一个)叫化子否咧, b(勾他)a(剛 gang 口兒)e(怎嗎)呢。『14b』
更 ging sgyng gyng	(1) 橫豎用d(不了)a(三更 ging 天的)工夫b(可 ke 以)a(到)c(門上)d(去)。『16a』 (2) 是得, 我b(還比你更 sgyng)a(忙)啊。『20a』 (3) e(這個)時候兒a(有)c(二更 gyng 天)咧a(沒有)啊。『20a』 (4) e(那裡)a(有)c(二更 gyng 天), 連一更 gyng 天也b(還)a(沒有)呢。『20a』
恳 sgyn	(1) 他一个b(恳 sgyn 求你)拿去的嗎。『10b』
赶 sgan/gan	(1) 小甬子否咧, 赶 sgan 子b(拿小傢伙)裝上的。『8a』 (2) 他說是赶 gan 過年正月初頭。『10b』 (3) 橫豎他的這塘赶 gan 上就是咧。『11a』 (4) 听着說你 e(那个)赶 gan 車的 b(在東廂屋裡)a(害病), 想來是沒有人 b(給我)a(赶車)罷。橫豎我 b(給你)a(雇)b(一个)c(赶車的), 你呢 a(張擲)c(別的)d(去)罷。『12b』 (5) 听着說你 e(那个)赶車的 b(在東廂屋裡)a(害病), 想來是沒有人 b(給我)a(赶 gan 車)罷。橫豎我 b(給你)a(雇)b(一个)c(赶車的), 你呢 a(張擲)c(別的)d(去)罷。『12b』 (6) 听着說你 e(那个)赶車的 b(在東廂屋裡)a(害病), 想來是沒有人 b(給我)a(赶 gan 車)罷。橫豎我b(給你)a(雇)b(一个)c(赶 gan 車的), 你呢a(張擲)c(別的)d(去)罷。『12b』 (7) 你們 e(這裡)王法是 a(打)d(死)c(討錢的)也是給償命的規矩 a(有)嗎, 赶 gan 子 e(這)是小 d(不得)的。『14b-15a』 (8) b(点燈籠的)爝也 b(別)a(忘)罷, 点枝爝 b(好生)a(拿)d(起來)罷, 赶 gan 子半夜走路的b(不照亮兒)e(誰)b(能)a(走)d(得)呢。『19b』 (9) 赶 gan 車的我和你做个 b(一半天的)伴兒, b(還沒有)a(問)c(你)姓 e(甚嗎)的呢。『21b-22a』 (10) 咱們 a(赶 gan)d(進去)罷。『23a』 (11) b(往何家店)a(赶 gan)d(進去)罷。『24b』
乾 sgyng	(1) 半夜受冷凍手凍足 a(拿)d(不起)c(鞭子)來, 惱成 b(一塊乾 sgan 木頭的)身子 d(來)呢。『21b』

「跟」は全部で7例が確認される。そのうち第3部分の53bと61bの2例は情報焦点のパターン**b**に該当するが、いずれも濃音表記は用いられていない。一方、会話文においては5例が確認されており、これらはすべて濃音表記 sg が使用されている。ただし、その中で18b「不好意思的**b**(跟 sgyn 你)**a**(取)**c**(錢)嗎。」のみが濃音表記を用いると同時に、中国語の文の焦点にも適合している。それ以外の4例は、音注上は sg 表記が見られるものの、焦点の原則とは一致していない。「跟」の文の焦点分析から、その濃音表記の使用は中国語の焦点規則と明確な対応関係を持たないことがわかる。

「剛」は全部で3例があり、いずれも会話文に登場する。そのうち、8aの「剛 sgang 勾二十斤的」では「剛」は程度副詞として用いられ、濃音表記が使われており、情報焦点の**b**パターンに一致している。一方、10aと14bの「剛」は程度副詞ではなく、平音表記の g が用いられているが、情報焦点の**a**パターンに一致している。

また、「更」や「赶」の用例においても、濃音と平音の使用は文の焦点との明確な関連性を示していない。「懇」と「乾」についてはそれぞれ1例ずつあり、いずれも濃音表記が用いられ、中国語の文の焦点の位置に一致している。全体として、sg 表記の漢字は強い語気や感情、動作の性質を反映する場合が多く、『撮要』における sg 例字の濃音表記の使用は中国語の文の焦点と一定の対応関係が確認された。

1.3 語の重音から見る sg-表記

前節の例文における文焦点の議論から濃音 sg で表記されている漢字の出現位置は文の焦点の部分と一定の関連性を持つことが確認された。文を単位として以外、中国語には語において強く読む音節が存在するため、本節では引き続き趙元任(1979)と馮勝利(2000)を参照して、『撮要』における sg 表記の用例を語重音の観点から整理・分析した。語における重音音節は「前重式(重軽パターン)」「後重式(軽重パターン)」「中重式(中重パターン)」などといった形で語の重音パターンを提示する。以下表22は『撮要』における sg 表記漢字の用例の語の重音の分析結果である。

表22 語の重音から見る ss-表記

品詞/位置	語頭 (第一字)		非語頭 (第一字以外)	
名詞	跟 (3例)	跟 sgyn 前 (2例) (軽重) 跟 gyn 前 (軽重)	跟 (1例)	腳後跟 gyn (中軽重)
			更 (3例)	三更 ¹⁰³ ging 天 (軽中重) 二更 gyng 天 (軽中重)

¹⁰³ 古代中国の時刻制度における時間単位である。一般的に一晚は五更または六更に分けられ、それぞれ約2時間に相当する。「一更」は夜の最初の時間帯、「二更」「三更」は順に夜の後半に近づく時間帯を示す。

				一更 gyng 天 (軽中重)
介詞	跟 (3 例)	跟 sgyn 得 跟 sgyn 我…去 跟 sgyn 你 (取錢)		
動詞	赶 (11 例)	赶 sgan 子 (重軽) 赶 gan 過年 (中軽重) 赶 gan 上 (軽重) 赶 gan 車的 ¹⁰⁴ (3 例) (中軽重) 赶 gan 車 ¹⁰⁵ (軽重) 赶 gan 子 (2 例) (重軽) 赶 gan 進去 (2 例) (中軽重)		
副詞	剛 (1 例)	剛 sgang 勾二十斤		
	恳 (1 例)	恳 sgyn 求 (軽重)		
	更 (1 例)	更 sgyng 忙 (重軽)		
形容詞	剛 (1 例)	剛 gang 口兒 ¹⁰⁶ (中重軽)	剛 (1 例)	太剛 gang (軽重)
	乾 (1 例)	乾 sgan 木頭 (中重軽)		

名詞として用いられるのは主に「跟」と「更」の二字である。そのうち「跟」が第一音節の位置に現れる用例は「跟前」である。しかし、同じ用例においても「跟」には sgyn と gyn という 2 種類の異なる音注が存在するため、表 22 では同じ用例でも別々に記載されている。「跟前」は「そば、近く、目の前」という意味を持って、趙元任 (1979) によれば、中国語において二音節語は普通に軽重の重音パターンである。そのため、「跟前」では強く読む音節は「前」であり、「跟」は重音音節ではない。しかし、三音節語「脚跟跟 gyn (中軽重)」の用例では、「跟」は中国語の語重音の位置にあるにもかかわらず、平音 g が用いられている。名詞としての「跟」における濃音-平音の混用と中国語の語重音との関係は明確ではない。介詞としての「跟」の用例は一つの語とは見なせないため、語重音の分析はできない。しかも、介詞は中国語において通常重音音節にはならない。

名詞として用いられ、時間を表す「更」の『撮要』における用例は、すべて中国語の語重音の位置と対応している。しかし、「一更天」「二更天」「三更天」では「更」に濃音表記が使用されていない。一方、程度を表す副詞として用いられる「更」の用例である「更 sgyng 忙」では、濃音表記が用いられているだけでなく、その出現位置も中国語における語重音の位置と一致している。

¹⁰⁴ 馬車を操る人、即ち車夫を指す。名詞化の標識であり、「人」という語を省略した形に相当する。「的」はここで核心名詞「人」を表す役割を担っているため、文法構造上は中心語である。

¹⁰⁵ 注釈 104 とは異なり、ここでは「動詞+目的語」の構造であり、動作を表している。

¹⁰⁶ 東北地方の方言で、主に「口論する」「言い争う」「強く反論する」という意味を持つ表現である。この語は日常会話で使われ、議論や衝突を避けたい場合によく用いられる。

「更」は現代漢語では多音字であり、意味に応じて geng と jing の2通りの発音があるため、『撮要』の「更」の音注は実際の漢語の発音を忠実に反映したものである。「更」は『華音』に「更 sgyng 好」と「sgyng 更好看」、『你呢』に「更 gyng 不肯」と「更 sgyng 喜歡」のそれぞれ2例があり、『学清』にも「更 ggyng 不肯」「更 ggyng 喜歡」という2例が確認される。全体的に見ると、程度を表す副詞としての「更」は濃音表記が一般的であるのに対し、時間を表す名詞としての「更」は語気の強調が弱いいため、通常は平音表記が用いられている可能性が高い。

動詞として用いられているのは「赶」の一字のみであり、その用例の中で濃音表記 sg が用いられているのは「赶 sgan 子」の一例である。「赶子」という語は「自ら」という意味を持ち、実際には動詞が副詞的に用いられた用法である。この語において「子」は後綴として一般に軽声で読まれるため、「赶」は相対的に重読される。この例では「赶」が漢語における語重音の音節に対応しており、同時に濃音表記も用いられている。しかし、『撮要』には同じ意味を表す「赶 gan 子」という例もあり、この場合も「赶」は語重音の音節に位置するが、平音表記が用いられている。

「赶上」「赶車」という二音節語では第2音節が重音である。三音節語の「赶過年」「赶车的」「赶进去」はいずれも中軽重のパターンで、「赶」は比較的強く読む位置にあるにもかかわらず、平音 g が用いられている。

副詞として用いられる「剛」は、『撮要』における用例では実は単音節語であり、語重音の分析を行うことはできない。一方、形容詞として用いられる「刚」は、いずれも中国語の語重音の音節に対応しているが、すべて平音表記 s が用いられている。「刚口兒」「太刚」の「刚」は「強硬な、強烈な」という意味を表している。形容詞としての用例の中では、「乾 sgan 木頭」の一例のみ、「乾」が相対的に強く読む音節に位置すると同時に濃音表記が用いられている。

『撮要』において濃音表記 sg が用いられた漢字の語例を対象に語重音の分析を行った結果、『撮要』の濃音表記と漢語の語重音との対応関係は後期の4資料の中で最も不明確であることが明らかとなった。これは『撮要』の音注表記が比較的複雑であり、同一の漢字に対して最大6種類の異なる表記が見られるのに対し、他の3資料では2、3種類の異なる音注が存在する場合もあるものの、表記上に全体としては比較的安定していることによると考えられる。特に濃音表記が用いられる漢字については、『華音』などでは比較的安定している。

2 『撮要』の ss-表記

2.1 音韻地位から見る ss-表記

更科 (2005) には、『撮要』における ss 例字の平音 s と濃音 ss の揺れに関する考察も見られる。特に「十」「少」「想」の3字を中心に議論が展開されている。「十」の前に数詞が付かない場合は濃音 ss で表記されることが多く、数詞がある場合は平音 s が多く用いられること、「少」は通常濃音で表記されるが、「多少」の場合には平音で表記される例が多いことを、更科 (2005) は指摘している。また、全体的に見ると、語頭では濃音表記が多く、非語頭かつ強勢のない位置では平音表記が用いられる傾向があると述べている。

本節では、更科（2005）の指摘を参考にしながら、『撮要』における ss 表記の実態を検討する。
『撮要』第 1 部分および第 3 部分に見られる ss 表記の例字数は『華音』と比べて大幅に少なく、
20 例にとどまっている。その転写結果および音韻的地位は、以下の表 23 に示す通りである。

表 23 『撮要』の ss-例字

例字	転写 1	転写 2	転写 3	転写 4	転写 5	転写 6	音韻地位
三	ssan (7 例)	ssar (1 例)	ssian (2 例)	san (2 例)			心談開一平咸
使	ssy (13 例)	sy (2 例)					山止開三上止
筭	ssan (7 例)	ssian (2 例)	soian (3 例)				心緩合一上山
十	ssi (7 例)	si (8 例)	sir (1 例)				禪緝開三入深
下	ssia (14 例)	sia (2 例)	ssar (1 例)				匣馬開二去假
送	ssiung (7 例)						心送合一去通
現	ssien (5 例)						匣霰開四去山
先	ssien (5 例)	sien (2 例)					心霰開四去山
笑	ssiau (1 例)	siau (1 例)	ssau (1 例)				心笑開三去效
小	ssia (6 例)	ssiau (15 例)	ssau (1 例)	ssiao (1 例)	sao (1 例)	siao (2 例)	心小開三上效
向	ssiang (1 例)	hiang (1 例)					曉漾開三去宕
少	ssia (1 例)	ssiau (4 例)	siau (5 例)	siao (2 例)			書小開三上效
死	ssy (5 例)	ssyr (1 例)					心旨開三上止
四	ssy (10 例)	sy (1 例)					心至開三去止
兄	ssiung						曉庚合三平梗

	(4 例)						
想	ssiang (1 例)	siang (3 例)					心養開三上宕
山	ssian (2 例)	san (9 例)					山山開二平山
嫌	ssien (1 例)						匣添開四平咸
事	ssy (1 例)	sy (8 例)	syr (1 例)				崇志開三去止
駟	ssy (1 例)						心至開三去止

「三」は『撮要』に ssan・ssar・ssian の 3 種の音注があるが、ssan と ssar¹⁰⁷は児韻尾¹⁰⁸の有無のみの違いで、声母と韻母は同一である。児化現象は普通話や北方方言、特に北京語に顕著で、発音時には母音の変化や語尾の軽い「r」音として現れ、名詞や形容詞の語尾によく見られる。一方、『華音』における「三」の音注は ssian (21 例) と ssan (3 例) で、主に i 介音の有無による違いであり、児化音は示されていない。

「使」の音注は比較的安定しており、『華音』の 1 例の平音表記 sy を除いて、この 4 種類の資料で主に濃音表記 ss を使用している。「筭」は『你呢』『学清』では平音 soan、『華音』では全て濃音 ssoan で表記される。『撮要』では ssan と ssian の音注があり、いずれも濃音 ss を用いるが、韻母は他の 3 書と異なる。同一漢字に複数の音注が付く現象は他の 3 資料にも見られるが、『華音』『你呢』『学清』では明確な規則性がないのに対し、『撮要』では一定の分節的傾向が見られる。

『撮要』では、1a-3b の「筭」は ssan、4a-7b は i 介音を加えた ssian、8a-11a は平音表記の soian で、11b-24b では soan が用いられ、i 介音もなく平音 s で記される。通常、同一漢字の音注の違いは資料間の音韻体系の変化や、刊行・書写時の誤りに起因するが、『撮要』の場合、音注の分節的使用には意味があると考えられる。しかも、短編である本書の書写期間中に体系的変化が起きた可能性は低く、この分節傾向は書写者による個人差を示していると見られる。

「十」は『撮要』で ssi と sir (1 例のみ)¹⁰⁹の 2 種の音注が見られ、平音と濃音の混在だけでなく、児化尾の出現も示している。「十」の音注における s-ss の混用は『華音』『你呢』『学清』にも見られるが、児化尾は用いられていない。「下」は『撮要』の会話文ではすべて濃音 ssia で表記されている。一方、第 3 部分では 62b-63a 「秀才不出門，廣知天下 hia 事」と 65a 「下 sia 飯的東西」の 2 例があり、いずれも濃音ではない。伊藤 (2007) の考証によれば、「下」は中期朝鮮

¹⁰⁷ 你呢叫底些兒們扛一點劈柴火，三 ssar 領席子一面鍋給我送來罷。『2b-3a』

¹⁰⁸ 語尾に「-r」音を付け加えることで発音される。

¹⁰⁹ 若說是短你們十 sir 來吊錢否咧，那個倒好說，百數兒來的錢否咧還算小的嗎。『18b』

語資料、たとえば『全韻玉篇』の「下下之 hia 俗」¹¹⁰⁾にも見られるように、当初は hia とされ、のちに sia へと変化したものである。

「送」の音注は『撮要』『你呢』ともに介音 i を含む ssiung であるが、『華音』では平音表記の sung となっている。「現」は『撮要』と『華音』で一致しているが、『你呢』『学清』では平音表記で、一部には介音 i を欠いた sen の例も見られる。

「先」は『撮要』のみ濃音 ss で表記され、他の 3 資料はすべて平音の sien で表記されている。

「笑」には s-ss の混用が見られるが、韻母はいずれも iau である。『華音』では ssiao のみが見られ、『你呢』ではすべて平音の siao で、声母のみが異なり韻母は一致している。これに対し、『学清』では sau と表記され、より古い時期の漢語の韻母状態を示している。

『撮要』における「小」は ssia と記されている。『華音』ではほとんどが濃音 ssiao、『你呢』では平音 siao である。『学清』でも平音 s が用いられ、siau (4 例)、siao (1 例)、sau (3 例)、sau (1 例) の 4 種類の音注が見られる。『学清』には一定の混乱があるが、韻尾はいずれも円唇母音¹¹¹⁾である。『華音』『你呢』『学清』を比較すると、「小」の韻尾は基本的に円唇母音であり、『撮要』の a は非円唇であることから、書写時の脱落の可能性が高く、実際には ssiao または ssiau だったと考えられる。写本は系統的な校正が行われていない可能性があり、音注の誤記も起こりうると考えられる。「少」字には ssia と記された例が 1 例あり、それは 8a の「皮子不少 ssia」である。これに対し、「小」字に ssia と記された 6 例のうち、5a の「小 ssia 不得」と 8a の「東西小 ssia」の 2 例はこの用法と類似して、「少」字のこの 1 例の注音を参照した可能性がある。しかし、残りの 4 例において ssia と注された「小」字の用例は、基本的に「小 ssia 桶子」「小 ssia 傢伙」といった、「小」字が形容詞として用いられているものであり、これらの用例は「少」字 8a の音注を参照したことによって解釈できない。

「向」は『撮要』の会話文では濃音表記 ss が用いられているが、第 3 部分では h を用いて声母を表している。更科(2005)によれば、これは第 1 部分と第 3 部分で参照した方言が異なることによるのである。本稿ではもう一つの可能性として、『撮要』が書写された時点において、漢語の見曉組の口蓋化が朝鮮語漢字音においてまだ統一されておらず、混乱が見られる段階にあったと考える。

「少」の音注は『撮要』では混乱しており、会話文には ssia、ssiau、siau、siao の 4 種が見られる。第 3 部分ではすべて平音表記 s が用いられているが、韻母は会話文 14a 以降と異なり、siao である。例えば、「死不在老少 siao (62b)」、「少 siao 債快説謊 (64a)」などがある。

「死」は 4 種の資料すべてで使用例は多くないが、音注は一致しており、いずれも濃音表記 ssy で安定している。「四」も同様で、第 3 部分では「張三喫酒李四 sy 醉 (61b)」の 1 例のみだが、これは会話文の「何老四 ssy」「李四 ssy 爺」などの人名用法と一致している。会話文では一貫して濃音 ssy が使われている一方、第 3 部分では平音 s で表記される傾向が見られる。

¹¹⁰⁾ 『朝鮮漢字音研究』116 頁「3.2.2.1 麻韻 2 等開口」を参照。

¹¹¹⁾ 発音する時に唇を丸く突き出すことで形成される母音。例えば、現代漢語のピンインの u、ü、o などが挙げられる。

「兄」の音注は『撮要』と『華音』で一致しており、いずれも濃音表記 ssiung である。一方、『你呢』『学清』ではすべて平音表記 s が用いられている。「想」は『撮要』のみ濃音 ss で記され、他の3資料ではすべて平音 s である。

「山」の音注は『撮要』では ssian、『華音』では ssian (21 例) と ssan (3 例) の2種が見られるが、いずれも声母は濃音である。『你呢』では i 介音のない平音 san で統一されており、『学清』には使用例がない。

「事」は『撮要』の会話文では 24a 「吳當家的是有事 ssy 出門咧。」を除き、すべて平音表記 s が用いられている。12a 「你有甚嗎勾當去, 為閑事 syr 去啊。」では兒化尾が見られる。第3部分の4例もすべて平音表記で sy である。「事」は『撮要』では主に平音 s で表記される傾向にある。

「駟」は第3部分 61a 「丈夫一言駟 ssy 馬難走」に1例あるのみで、他の3資料には用例がなく、対照はできない。

2.2 文の焦点から見る『撮要』の ss-表記

朝鮮時代後期の中国語教科書における音注に見られる濃音表記の使用について、本文の第2章ではそれが中国語の文の焦点と関係している可能性があるという仮説を提示した。本節ではその仮説をさらに検証するために、焦点の観点から『撮要』における ss 表記の例文を分析する。分析の枠組みとしては引き続き情報焦点の **a** 主述構造の述語、**b** 修飾構造の定語(連体修飾語)と状語(連用修飾語)、**c** 動目構造の目的語、**d** 動補構造の補語、**e** 指示代名詞と疑問代名詞に基づき、対比的焦点も併せて考察を行った。具体的な分析結果については、付録5を参照されたい。

『撮要』において ss 表記が用いられている漢字のうち、「兄」と「駟」はすべて濃音で表記されているが、これらの用例はいずれも中国語の情報焦点のパターンと一致していない。一方、すべての用例が濃音表記であり、かつ中国語の焦点パターンと一致しているのは「嫌」である。「想」は音注において濃音表記と平音表記の両方が見られるが、いずれの用例も焦点の部分とは一致しない。「三」は『撮要』中に12例の用例があり、そのうち10例が濃音 ss 表記である。この10例のうち7例、例えば 1a、9a、9b などは中国語の文の焦点部分と一致しており、すべて情報焦点の **b** パターンに属する。残りの2例 59b および 61b は平音 s により「san」と注音されており、これらは中国語の文の焦点とは一致していない。

「使」という字については、6a の「b(使 ssy 筋)嚼也嚼不動」という用例の「使 ssy 筋」が上平焦点の **b** パターンに該当し、また 17a の「使」はも **a** パターンに一致する以外の用例は、濃音・平音を問わずいずれも焦点部分に該当しない。「筭」は全部で11例の用例があり、そのうち例文

(1) (2) (3) の3例が濃音表記 ss を用いているが、この中で情報焦点の **a** パターンに一致しているのは例文 (1) のみである。残りの8例は平音で表記されており、その中では例文 (8) の1例のみが情報焦点の **a** パターンに該当し、それ以外はすべて中国語の文の焦点に一致しない。「十」という字は『撮要』において全部で14例の用例があり、そのうち5例は濃音表記 ssi と表記されている。この5例のうち、文の焦点に該当するのは例文 (5) と (6) の2例のみである。一方、

残りの9例は平音表記の si を用いているが、そのうち8例は情報焦点と一致し、ただ 8b の「十 sir 來吊錢」の1例だけが該当しない。『撮要』では「十」は数詞が連続する構造の中に多く見られる。この資料における数詞が連続する場合、第二字以降を平音で表記する傾向が強く、「十」の用例においてその傾向が特に顕著である。そのため、『撮要』で「十」を平音 s で表記する用例が多いことは理解し得る。しかし、他の3資料では「十」は基本的に濃音表記の ss で表記されており、たとえ数詞が連続する構造の用例であっても例外はほとんど見られない。したがって、『撮要』における特有な数詞表記の傾向を除けば、「十」と情報焦点との対応関係はかなり明確であるといえる。

「下」は『撮要』において17例があり、そのうち15例は濃音表記 ss が用いられている。これら15例の中で、例文 (12) (13) (14) (15) (16) の5例は情報焦点に一致しているが、それ以外の用例は濃音で表記されているものの、中国語の文の焦点との対応は見られない。また、平音 s による用例は例文 (2) (17) の2例であり、このうち例文 (17) の「b (下 sia 飯的) 東西」は情報焦点の b パターンに該当する。「送」はすべての用例において濃音表記が用いられており、例文 5b の「你要 e (那) 些箇作 e (甚麼)。京裡大人們跟前送 ssiung 禮的。」のみが情報焦点に対応していないが、それ以外の用例はすべて文の焦点の a パターンまたは b パターンに該当している。また、「現」はすべて濃音表記であり、用例の使用法もほぼ一貫している。ただし、例文 (3) (4) のみが情報焦点に合致しており、その他の用例については濃音表記であるにもかかわらず、情報焦点との対応関係は見られない。

「先」は『撮要』において7例が確認され、そのうち5例は濃音表記 ssien、2例は平音表記 sien である。例文 3b の「我說的 a (是) e (這) b (關東一處的) 光景, 先 ssien 不知關裡 e (怎嗎) 箇兒的呢。」を除き、第3部分に登場する2つの平音表記の用例も含めの残りの6例はすべて中国語の文の焦点に該当している。

「笑」は合計3例があり、そのうち2例が濃音表記 ss で、例文 (3) 「你也是 b (會) a (說笑 ssau 話) 咧」は情報焦点の a パターンに該当する。一方、もう1例は平音表記 s による例文 (2) 「我 e (這個) 話是過不是 b (向 ssiang 你頑笑 siau 的) 話」は平音で表記されているにもかかわらず、中国語の情報焦点に一致している。また、濃音と平音が混在している例字のうち、濃音・平音いずれの用例にも文の焦点に一致する例が見られるのは「小」「少」「四」「山」「事」の5字がある。

「向」は『撮要』において2例が見られる。そのうち、付録 65b の「向 hiang 他」という例は特殊であり、これは濃音と平音の混用を示すものではなく、中国語の見曉組における口蓋化が完成していない混乱を反映していると考えられる。したがって、「向」字のもう1例「我 e (這個) 話是過不是 b (向 ssiang 你頑笑 siau 的) 話, 你呢 b (別) a (恠) c (我) 罷。」のみを参照すると、この字は中国語の焦点に一致している。また、「死」は『撮要』の第1部分と第3部分に合計6例が登場し、いずれも濃音表記 ss である。62b の「死 ssy 不在老少」を除き、その他の例はすべて重音規則に一致している。

以上の考察から、『撮要』において ss で表記された漢字の用例を分析した結果、濃音 ss の使用と中国語における文の焦点の規則との対応関係は必ずしも一致していないことが明らかとなっ

た。例えば、「兄」「駟」「想」などの字は多くが濃音表記で現れるものの、その用例はいずれも中国語の重音規則には合致していない。一方、「三」「十」「送」「下」などの一部の用例において濃音表記と焦点との間に一定の対応関係が確認できる。特に「十」については、『撮要』に見られる数詞の連続構造における特殊な表記傾向を除けば、この字と情報焦点との対応は比較的明確である。また、「使」「筭」「現」などの字についても、一部の用例は焦点と一致するが、全体としてその対応性が弱い。したがって、『撮要』における濃音 ss の使用には中国語の文の焦点の規則と一致する部分も見られるが、その使用の根拠は必ずしも重音規則に基づいたものではないと考えられる。特に、『撮要』の音注体系そのものが比較的混乱しているため、濃音 ss の使用と中国語の焦点との規則的対応をさらに弱めている。

2.3 語の重音から見る ss-表記

『撮要』の第 1、3 部分には ss 表記が用いられた漢字は合わせて 20 字があり、それらの語例における重音の分布状況を表 24 に示す。

表 24 語重音から見る ss-表記

品詞/位置	語頭 (第一字)		非語頭 (第一字以外)	
名詞			使 (2 例)	遠接使 ^{sy112} (中軽重) 節度使 ^{sy113} (中軽重)
	筭 (1 例)	筭 ssian 盤 (軽重)		
	下 (5 例)	下 ssia 塘 (3 例) (重軽) 下 sia 次 (重軽) 下 ssia 季子 (重中軽)		
	笑 (1 例)	笑 ssau 話 (軽重)		
	兄 (4 例)	兄 ssiung 弟 (4 例) (重軽)		
			想 (1 例)	防想 siang 兒 (重中軽)
	山 (5 例)	山 ssian 根底 (中軽重) 山 ssian 根地 (中軽重) 山 san 高水低 (軽重軽重) 山 san 高遮不得太陽	山 (6 例)	堆的如山 san (2 例) (中軽中重) 管山 san 喫山 san (軽重軽重) 管山 san 喫山 san (軽重軽重) 青山 san (軽重)

¹¹² 唐代における外交使節の一種で、特定の国家や地域と交渉・連絡するために派遣される臨時の官職。

¹¹³ 唐代に設置された地方の最高軍政官。軍事、行政を統括し、節度区と呼ばれる地方を治める。

		山 san 高上不去 (中重中軽重)		日頭壓山 san (中軽中重)
	事 (4 例)	有事 ssy (軽重) 天下事 sy (中軽重) 萬事 sy (2 例) (軽重)		
	先 (2 例)	先 ¹¹⁴ sien 皇 (軽重) 先 sien 帝 (軽重)		
	駟 (1 例)	駟 ssy 馬難走 (軽重軽重)		
動詞	使 (11 例)	使 ssy 用 (軽重) 使 ssy 得過 (中軽重) 使 ssy 換 (軽重) 使 ssy 不得 (重軽中) 使 ssy 得 (軽重) 使 ssy 筋 (軽重) 使 ssy 去 (重軽) 使 ssy 得來回 (重軽) 使 ssy 不下去 (3 例) (重軽中重)	使 (2 例)	多使 ssy (軽重) 使 ssy 船 (重軽)
	筭 (11 例)	筭 ssan 甚嗎 (重中軽) 筭 ssian 是 (重軽) 該怎嗎筭 soian 筭 soian 起來 (重軽中) 筭 soian 是 (重軽) 筭 soan 是 (重軽) 筭 soan 筭 soan (賬) (軽重) 筭 soan 筭 soan (賬) (軽重) 筭 soan 現成的 筭 soan 小 (少) 的 筭 soan (不得人)		
	下 (6 例)	下 ssia 不來 (重軽) 下 ssia 眼 (軽重) 下 ssia (一場大雪) 下 ssia (這嗎大雪) 下 ssia (這一場風雪)	下 (6 例)	受 (收) 下 ssia (重軽) 攔下 ssia (2 例) (重軽) 使不下 ssar 去 (重中重軽) 使不下 ssia 去 (2 例) (重中重軽)

¹¹⁴ ここでの「先」は「故人の」「以前の」という意味で、名詞「皇」「帝」を修飾し、現代中国語の「已故の皇帝」を表す。副詞 (例えば、「先走一步」の「先」) や名詞 (例えば、「祖先」の「先」) ではない。

		下 sia 飯 (軽重)		
	送 (5 例)	送 ssiung 來 (重軽) 送 ssiung 文書 (中軽重) 送 ssiung 信 (2 例) (軽重) 送 ssiung 禮 (軽重)		
			笑 (1 例)	頑笑 siau (軽重)
	少 (3 例)	少 ssiau 不了 (中軽重) 少 ssiau 不得 (中軽重) 少 siao 債快說謊		
	小 (6 例)	小 (少) ssia 不得 (中軽重) 小 ssiau (少) 來幾包 (2 例) 小 (少) ssiau 不得 (3 例) (中軽重)		
	向 (2 例)	向 ssiang 你 (軽重) 向 hiang 他 (軽重)		
	死 (1 例)	死 ssy 不在老少	死 (1 例)	打死 ssyr (重軽) 打死 ssy (重軽) 病死 ssy (重軽) 压不死 ssy (中軽重)
	想 (2 例)	想 ssiang 來 (軽重) 想 siang 着 (重軽)	想 (1 例)	人不可貌想 ¹¹⁵ siang
	嫌 (1 例)	嫌 ssien 冷 (軽重)		
副詞	先 (5 例)	先 ssien 不知 (中軽重) 先 ssien 沒有 (2 例) (中軽重) 先 ssien 不用 (中軽重) 先 ssien 別焦急		
代詞			小 (1 例)	多小 ssiau (少) (重軽)
			少 (4 例)	多少 siau (4 例) (重軽)
形容詞	現 (5 例)	現 ssien 成的 (2 例) (中軽重) 現 ssien 錢 (2 例) (軽重) 現 ssien 銀子 (中重軽)		
	笑 (1 例)	(好) 笑 ssiau 話 ¹¹⁶ (重軽)		
	小 (13 例)	小 ssiau 夥計 (3 例) (中重軽)	小 (6 例)	東西小 ssia (少)

¹¹⁵ 「人不可貌相」と同じ。

¹¹⁶ ここでの「笑話」は「可笑しい」という意味であり、形容詞に分類される。

		小 ssia 桶子 (2 例) (中重軽) 小甬子 ¹¹⁷ (中重軽) 小 ssia 傢伙 (中重軽) 小 ssiau 錢 (軽重) 小 ssiau 車 (軽重) 小 ssau 夥計 (中重軽) 小 ssiau 財 (重軽) 小 ssiau 難 (乱) 子 (中重軽) 小 ssiau 嶺 (重軽)		筭小 (少) ssiau (軽重) 不小 (少) ssiao (軽重) 大驚小 sao 恠 (軽重軽重) 人貪志小 siao (軽重) 大小 siao (軽重)
	少 (1 例)	少 ssiau 來 (軽重)	少 (4 例)	不少 ssia (軽重) (海菜) 少 ssiau 不少 siao (軽重) 死不在老少 siao
	死 (1 例)	死 ssy 高麗 (中軽重)		
数詞	三 (9 例)	三 ssan 種 (軽重) 三 ssanr 領 (席子) (軽重) 三 ssian 十八 (中軽重) 三 ssan 十 (軽重) 三 ssian 十 (軽重) 三 ssan 四 ssy 年 (中軽重) 三 ssan 更天 (中軽重) 三 san 遍 (軽重) 三 ssan 年 (軽重)	三 (3 例)	再三 ssan 再四 ssy (軽重軽重) 吳老三 ssan (中軽重) 張三 san (軽重)
	十 (5 例)	十 ssi 包 (2 例) (軽重) 十 ssi 斤 (軽重) 十 sir 來吊 ¹¹⁸ (錢) (中軽重) 十 si 箇 (軽重)	十 (9)	五十 si (軽重) 一十 ssi (2 例) (軽重) 二十 si 五歲 (中軽中重) 三十 si (軽重) 八十 si 九歲 (中軽中重) 一百一十 si (軽重軽重) 一百一十 si 八 (軽重軽中重) 二十 si 五歲 (中軽中重)
	四 (2 例)	四 ssy 斤 (軽重) 四 ssy 爺 (軽重)	四 (9 例)	何老四 ssy (5 例) (中軽重) 再三 ssan 再四 ssy (軽重軽重)

¹¹⁷ 「小桶子」と同じ。

¹¹⁸ 「吊」は錢貨の単位であり、銅錢は千枚を繩で通して一束にしたものを指す。ただし時代や地域によって実際の枚数は異なる場合がある。

				三 ssan 四 ssy 年 (中軽重) 李四 ssy 爺 (中軽重) 李四 sy (軽重)
--	--	--	--	--

まず、名詞としての用例を見てみると、「使」が名詞として用いられているのは「遠接使 sy」「節度使 sy」の2例のみである。この2例では「使」字はいずれも中国語の語重音の音節に現れているが、すべて平音 s で表記されている。これは同一の漢字が異なる意味を示す場合に、その意味の差異を示すために異なる表記を用いるためである可能性がある。『撮要』の動詞として用いられる「使」字はすべて濃音表記 ss が用いられている。また、これら2例が名詞として平音表記になっているのは、『撮要』第1部分と第3部分で音注の使用上に大きく異なっていることによる可能性が高い。実際、平音で表記されている「使」の用例はすべて第3部分に現れている。

「使」と同様の状況は、「山」と「事」の2字が挙げられる。「山」は語重音の分析が可能な用例において基本的に中国語の語重音の音節に位置しているが、第1部分の会話文にある「山 ssian 根底」「山 ssian 根地」の2例のみが濃音表記 ss であり、それ以外の用例はすべて第3部分に属し、平音 s で表記されている。「事」字も同様に、第1部分の会話文における「有事 ssy」の1例を除き、その他の用例はすべて第3部分のもので、すべて中国語の語重音音節に位置しているにもかかわらず、平音 s で表記されている。

「筭」「笑」「先」の3字はいずれも2音節語の用例しかなく、すべて語の第1音節に位置している。趙元任 (1979) によれば、中国語の2音節語は通常「軽重」という語重音パターンを持つため、これら3字はいずれも中国語の語重音と対応していない。しかし、「筭」「笑」の2字はいずれも濃音 ss で表記されており、その理由は現時点では特定できていない。第3部分に濃音で表記される漢字が比較的に少ないが、「駟 ssy」はその一字である。この字は中国語の語重音や文の焦点との対応がなく、用例数も極めて少ないため、その使用理由を特定することは難しい。書写者の個人的な偏好によるものと推測せざるを得ない。

名詞として用いられる漢字の中で、「兄」の音注表記は比較的安定しており、すべて ssiung である。また、すべての用例は漢語の語重音音節に位置しており、その濃音表記の使用は漢語の語重音との対応関係が比較的明確である。「下」の用例の全てが中国語の語重音の音節に位置しているが、「下 sia 次」の1例のみ平音表記である。「下」の用例はほとんどが「今度」という意味で用いられ、用法もほぼ同一であるため、「下 sia 次」の1例のみ平音 s が用いられているのかは明確ではない。「想」も中国語の語重音の音節に位置しているが、平音 s で表記されている。

一方、動詞として使用されている「使」は『撮要』ではすべて濃音 ss で表記されている。これは名詞の部分に述べたように、漢字の意味に大きな差異がある場合、平音と濃音などのような異なる音注を用いてそれを提示しようとした傾向と一致している。「使」が動詞として用いられている用例の中で、「使用」「使換」「使得」「使筋」の4例における「使」は中国語の語重音の音節には位置していない。それ以外の用例ではすべて中国語の語重音の位置に現れており、「使」の用例においても、中国語の語重音との比較的明確な対応関係が示されている。

『撮要』では「筭」の音注が 1a-7b では濃音 ss、8a-24b ではすべて平音 s が用いられている。そのため、音注に不一致が見られるものの、全体として見れば、「筭」は動詞用法において中国語の語重音の音節と対応していると考えられる。

「下」が動詞として用いられる場合、3 音節語「下 ssia 不来」と 4 音節語「使不下 ssar/ssia 去」の 2 例のみの「下」は中国語の語重音の重音位置にある。それ以外の用例では中国語の語重音の音節と対応していない。しかし、第 1 部分の会話文に現れる「下」はすべて濃音 ss で表記され、第 3 部分の「下 sia 飯」のみが平音 s で表記されている。

「送」はすべて濃音表記で記されているが、そのうち中国語の語重音の重音と対応しているのは「送来」と「送文書」の 2 例のみである。馮勝利 (2000) ¹¹⁹によれば、動目構造では一般的に目的語部分を強く読むとされており、「送信」や「送禮」の 2 例においても重音の部分は動詞の「送」ではなく、目的語の「信」や「礼」である。「送」の濃音表記 ss の使用は一定の程度で中国語の語重音の音節との対応を示している。

「笑」は動詞としての用例が 1 例のみあり、「笑」は語重音の位置にあるにもかかわらず、平音 s で表記されている。「少」は動詞として使用されたすべての用例が語重音と一致しているが、第 3 部分の「少 siao 債快説謊」の 1 例では平音で表記されている。「想」も同様に、用例の多くは語重音と一致しているが、音注上では濃音と平音が混在しており、表記に揺れが見られる。また、「死」のすべての用例は濃音 ss で表記されているが、「打死」「病死」の 2 例では、「打」および「病」が死亡の原因を示す主要な動詞であるため、重読される部分となっている。

「少」と「小」が動詞として用いられる場合、『撮要』では基本的に 3 音節語であり、いずれも比較的強く読む音節に位置している。しかも、全ての用例は濃音表記 ss が用いられている。この 2 字の用例からも濃音 ss の使用が語重音の提示と一定の関連性を持っていることが窺える。一方、動詞として用いられる濃音表記漢字のうち、「向」と「嫌」の 2 字はいずれも 2 音節語の動目構造であり、動詞は強く読む部分ではない。

副詞として使用されている「先」の用例は基本的に中国語の語重音の音節と一致しており、しかもいずれも濃音 ss で表記されていることから、濃音表記 ss の使用と語重音との対応関係が非常に明確に示されている。疑問代名詞である「多少」および「多小 (少)」では「多」が語重音を担っており、「小」や「少」は重読部分ではない。「多小 (少)」の「小」の音注が「ssiau」と濃音で注記されているのは他の「小」の用例が濃音 ss で表記されているため、それに合わせて統一的に濃音で表記された可能性がある。

形容詞としての用例では「笑」「死」の 2 字は中国語の語重音と一致しており、すべて濃音 ss で表記されていることから、濃音と語重音との間に明確な対応関係が見られる。「現」と「小」は 3 音節語においてのみ比較的強く読まれる音節に位置しており、2 音節語では名詞部分が重音の音節となっている。「小」は附録中の「大驚小 sao 恠」「人貪志小 siao」「大小」の 3 例は平音 s で表記されている。それ以外の用例はすべて濃音 ss である。また、「少」が語の第 1 音節以外に現

¹¹⁹ 『漢語韻律句法学』114-120 を参照。

れる場合は、すべて中国語の語重音と対応している。

数詞「三」は「三 san 遍」と「張三 san」の2例を除き、いずれも濃音表記 ss が用いられている。「三 san 遍」と「張三 san」の2例において平音 s が用いられている理由については、現時点で明確な音韻的または意味的な要因は確認できず、書写者の個人的な傾向や誤記などによる可能性が高いと考えられる。残りの「三」の用例では、2音節語においては「三」が名詞を修飾する場合であっても、また数詞の連続に現れる場合であっても、中国語の語重音の音節には位置していない。これに対して、3音節語の「三十八」や4音節語の「再三再四」のような例では「三」が中国語の語重音に相当する音節に位置している。「四」と「三」についても同様であり、2音節語ではほとんど語重音の音節には位置していない。

数詞「十」はその用例のほとんどにおいて語重音を担っているが、『撮要』では数詞が語の第1音節以外に現れる場合、平音で表記される傾向があり、「十」はその影響を受けて平音 s で表記される例が多く見られる。ただし、他の3種の資料における「十」の音注を参照すると、この字も濃音と語重音の対応関係が見られる。「四」は「李四 sy」の1例のみが平音 s で表記されており、それ以外はすべて濃音 ss で表記されている。

以上総じて見ると、『撮要』における濃音 ss の使用は中国語の語重音との比較的明確な対応関係を示している。濃音表記 ss が語重音の位置を示唆する機能を有している可能性が高いと考えられる。

2.4 ss-表記の使用傾向

『撮要』に使われた ss-表記には主に以下のような使い分けの傾向が見られる。

「使」は『撮要』において一定の使用傾向が見られる。それは動詞として用いられる場合に濃音表記 ss を用い、名詞として用いられる場合には平音表記 s を用いて区別する傾向がある。これは品詞や意味の違いを示すために異なる表記を使い分けている例と考えられる。伊藤 (2007)¹²⁰によれば、同一の漢字であっても意味が大きく異なる場合、声母やアクセントの変化によって意味の違いを区別する「意味分化」の現象が見られる。例えば、「使 ssy 用」、「使 ssy 換」、「使 ssy 不得」「看風使 ssy 船」などでは、「使」はすべて動詞として用いられており、濃音表記 ss が使用されている。一方、「遠接使」「節度使」のような官職名など名詞として用いられている場合には平音表記 s が用いられている。『撮要』における濃音表記漢字、特に ss 表記が用いられている一部の漢字にも、このような意味分化の特徴が認められる。

『撮要』の「十」の音注での濃音表記の使用について、更科 (2005) は「十」の前に数詞があるかどうかに関係していると指摘している。しかし実際には、『撮要』は『你呢』と同様に、数詞の位置ではなく、数詞が連続して用いられる場合に、2字目の数詞に濃音表記を用いない傾向が見られる。これは、濃音の発音には喉頭の緊張を伴うため、連続する語に濃音を用いると発音上

¹²⁰ 『朝鮮漢字音研究』54頁「③朝鮮漢字音における意味分化」を参照。

の困難を生じることがあると考えられる。『撮要』においての「十」は9bの部分以降、数詞「十」の前に他の数詞があるかどうかにかかわらず、平音表記の si が用いられている。第3部分においても、「十 si 箇看守的難制防一箇賊。(62b)」の平音表記 s が使用されている例が確認される。

「現」は「現在的」あるいは「現有的」という状態を表す時、その音注は比較的安定している。『撮要』においては、すべて濃音表記の ssien が用いられている。『撮要』には否定表現を伴う「先」の用例には「我說的是這關東一處的光景，先 ssien 不知關裡怎嗎箇兒的呢 (3b)」、「昨兒个往遼東要帳去，先 ssien 沒有回來咧 (4a-4b)」、および「那个先 ssien 不用講究些兒 (20a)」の3例が確認される。これらはすべて「先」に否定表現が後続するパターンである。一方、否定表現を伴わない場合にはすべて平音表記 s が用いられていることから、本資料における「先」には、否定表現が後続する際に濃音表記 ss を用いる傾向が認められる。

『撮要』における「小」の音注には、会話文(第1部分)では韻母に ia、iau、au などの違いが見られるものの、声母はいずれも濃音表記 ss が用いられている。一方、第3部分では韻母が ao、iao の2種類あるが、声母はいずれも平音表記 s が用いられている。例えば、「大驚小 saio 恠¹²¹ (58a)」、「人貪志小 siao (58b)」、「留得青山在不怕柴火大小 siao (61a)」などの例が挙げられる。このように、「小」の音注には第1部分では基本的に濃音が使用され、第3部分では主に平音が用いられる傾向が確認される。

「向」は他の3資料には用例が見られないため、比較対象とはならない。ただし、第3部分の日常用語 65b に見られる「向 hiang 他」では「向」の声母が h で表記されている。一方、会話文 5b の「我這個話是過不是向 ssiang 你頑笑的話，你呢別恠我罷。」のような用例では、「向」の音注は ssiang であり、声母にはすでに明確な口蓋化が確認できる。これに対し、65b の「向 hiang 他」では声母に口蓋化がまだ見られず、音注の上で一定の揺れが存在することが分かる。

また、「焼」と「香」の2字も、同様に口蓋化の過程を反映していると考えられる。「焼」と「香」は『華音』においてそれぞれ1例ずつ用例があり、「焼 ssiao 香 ssiang」という語句として現れており、いずれも濃音表記 ss が用いられている。一方、『撮要』にも1例があり、61b の慣用語「閒時不焼 siao 香 hiang，急來抱佛腳。」である。「焼」は『撮要』では平音表記 s を用いており、「香」の声母は h と表記されている。これは、『撮要』が書かれた当時、漢語見曉組の口蓋化が朝鮮語漢字音にまだ完全に定着しておらず、音注上にある程度の混乱が見られる段階にあったことを示唆している。『撮要』の書写年代と『華音』の刊行年代は約五年しか隔たっていないが、音注表記の状況から見ると、『華音』のハングル音注に反映された漢語の見曉組の口蓋化は『撮要』に見られる音注と比較して、より安定した、あるいは完成度の高い段階にあったと考えられる。

『撮要』の「少」の音注も「筭」と同様に、使用上の部分別状態を示している。会話文の 10 a までの部分はすべて ssia、10a-13a はすべて ssiau、13b 以降はすべて siau のような平音表記が用いられている。即ち 13a までは濃音表記 ss、13a 以降は平音表記 s である。ただし、『撮要』8a の「赶子小傢伙裝上的自然是東西小的時候兒，皮子不少 ssia 嗎。」の一例は ssia という濃音表記

¹²¹ 「怪」と同じ。

が用いられている点が注目される。

「想」の s-ss 揺れについて、更科 (2005) は『撮要』において「想来」には濃音表記が用いられ、概算や予算を表す「妨想儿」には平音表記が使用されることを指摘している。本章では『撮要』の第 1、3 部分の用例を検討した結果、「想」の音注における平音 s と濃音 ss の使用傾向は意味より語彙や短文に現れる位置と関係していることが明らかになった。即ち、「想」が語またはフレーズの先頭（最初の字）に現れる場合には濃音表記 ss が用いられ、それ以外の位置では平音表記 s が用いられる傾向がある。例えば、12b「听着說你那个赶車的在東廂屋裡害病，想 ssiang 來是沒有人給我赶車罷。」では「想」が「想来」という語彙の最初の字に現れており、濃音表記 ss が用いられている。一方、20a「赶車的你的防想 siang 兒嗎。」、56b「老爺可憐我們的這一條性命再想 siang 着罷。」と 59b「人不可貌想 siang 海不可斗量」などの用例では「想」は 1 字目の位置には現れず、語中や語末に現れ、いずれも平音表記 s が用いられている。したがって、本稿では「想」の s-ss 揺れはその出現位置によって影響され则认为している。

『撮要』における濃音と平音の分節的使用傾向¹²²は特に「山」という漢字に顕著に見られる。

「山」は会話文中に 2 例があり、いずれも「山 ssian 根底」という言葉に現れており、すべて濃音表記が用いられている。一方、第 3 部分ではこの字の用例が 8 例確認され、その多くが慣用句の中に含まれている。例えば、「山 san 高水低 (57b)」、「管山 san 喫山 san 管水喫水 (60a)」、「山 san 高遮不得太陽牛大压不死 ssy 駱駝 (60b)」、「水深過不得，山 san 高上不去 (63a)」など、すべて平音表記 s が用いられている。

このように、「山」における声母の濃音・平音の使い分けには第 1 部分と第 3 部分の間で明確な分節的使用傾向が認められる。

3 まとめ

以上、『撮要』における濃音表記 sg および ss に関する全体的な考察である。まず、sg で表記されている例字について見ると、主に見母と一部の溪母字に対応していることが確認される。「跟」の字においては、会話文中では濃音表記を用い、第 3 部分では平音表記が用いられるという使い分けの傾向が見られたが、それ以外の sg 濃音表記に関しては、濃音 sg の使用特徴はあまり確認されなかった。一方、『撮要』における ss で表記された例字は「向」と「想」を除けば、他はすべて『華音』と共通する例字である。全体的に見ると、『撮要』の ss 例字の多くは i 介音を伴っていることが認められる。この「ss+i」という構造は『華音』とも一致している。

また、『撮要』における濃音表記にも一定の使用傾向が見受けられる。『華音』に見られる 41 字の ss 表記例字のうち、8 字が 2 種類の異なる音注を持っているが、それらの音注には大きな差異は見られない。例えば、『華音』の「下」ssia (41 例) → ssa (2 例)、「三」ssian (21 例) → ssan (3

¹²² 本稿でいう「分節的使用傾向」とは、主に『撮要』の音注において、同一漢字が資料中の異なる位置に現れる場合に、異なる表記が用いられる傾向を指す。例えば、「少」は会話文の 10a 以前では音注が ssia、10-13a では ssiau、13a 以降では siau となるという傾向である。

例)、「撒」ssia (1 例) -ssa (1 例) などは介音 i のみの異なりで、「十」ssi (32 例) -si (1 例)、「使」ssy (7 例) -sy (1 例) などは声母の平音-濃音表記の使用の揺れである。このような濃音表記の音注における揺れは『你呢』や『学清』といった資料にも見られるが、これら 2 冊における表記の揺れには特定の規則性が認められず、一定のパターンを見出すことは難しい。それに対して、『撮要』における音注の混乱には、比較的是っきりとした 3 つの使用傾向が存在している。

第 1 に、会話文において同一の漢字に異なる表記が見られる点が挙げられる。この現象は、『撮要』が複数の書写者によって作成された写本であるという書写背景と関係している可能性があり、一定程度の書写者間の個人差が反映されていると考えられる。『華音』『你呢』『学清』とは異なり、『撮要』では同一漢字に対する sg および ss 表記の使用において、第 1 部分と第 3 部分で音注に差異が見られるという特徴がある。例えば、sg で表記されている「跟」は計 7 例が確認されており、そのうち 5 例は会話文に現れる用例で、いずれも濃音の sgyn で表記されている。「京裡大人們跟 sgyn 前送禮的 (5b)」「我跟 sgyn 得那裡去呢。(10a)」などの例が挙げられる。一方、第 3 部分における短い会話文の用例である「我們府尹大老爺跟 gyn 前告訴後頭拿來啊。(53b)」および「自家養活的狗還咬腳後跟 gyn。(61b)」の 2 例は、いずれも平音の g で表記されている。また、ss で表記されている「先」についても、会話文における 4 例のすべてが濃音 ss で表記されている。例えば、3b「先 ssien 不知關裡怎嗎箇兒的呢。」、4b「先 ssien 沒有回來咧。」などが挙げられる。これに対し、第 3 部分ではすべて平音 s で表記されており、例えば、56a「這個禮數之不是我們高麗從來遵守的規矩，也是先 sien 皇先 sien 帝的規矩。」がその一例である。さらに、「下」という字も同様の傾向を示しており、会話文ではすべて濃音表記 ss が使用されている一方で、第 3 部分ではすべて平音表記 s が用いられている。

第 2 に、会話文で主に ss を用いて表記される漢字は第 3 部分においては基本的に平音 s で表記される。第 3 に、第 3 部分では濃音表記がほとんど使用されない。ただし、『撮要』の第 3 部分の音注に見曉組の口蓋化が行われていないという全体的な特徴が見られており、例えば「欽差 (55b)」の「欽」の音注は kin、「京 ging 里太平嗎 (56a)」、「人离鄉 hiang 賤物离鄉 hiang 貴 (58b)」、「閒時不燒香 hiang (61b)」、「睡覺 gao (65b)」などの例はいずれも口蓋化されていない表現である。このように見曉組の音注状態から見ると、『撮要』の第 3 部分は同書の会話文よりもやや古い時期の音韻的狀態を反映している可能性が高いと考えられる。そうであるならば、朝鮮時代後期の比較的初期の段階に作成された漢語資料においては、濃音表記の使用頻度が低かったと推測できる。

『華音』の本文と付録部分についてはそれぞれが異なる音韻体系に基づいていることが明確に記載されており、同一漢字に対して本文と付録で異なる音注が現れるのはそれぞれが記録している音韻体系自体が異なるためである。一方、『撮要』『你呢』『学清』はすべて写本であるが、その中でも『撮要』においては 1a-24b にかけての会話文の部分において、いくつか異なる書写スタイルが確認できる。具体的には、字体が大きく整った筆致で記された部分がある一方で、字体が小さく連筆が多用された部分も見られる。例えば、第 1 部分の 1a (0006. jpg) から 11a (0016. jpg) までの部分は、字が比較的大きく、全体的に整った筆致で書かれている。11b (0017. jpg) から

13a(0018. jpg)にかけては字がやや小さくなり、13b(0019. jpg)以降はさらに異なる書写スタイルが見られる。また、第1部分の19b(0025. jpg)と20a(0025. jpg)も明らかに異なる書写スタイルであることが確認できる。さらに、第3部分の55b(0061. jpg)と56a(0061. jpg)、62a(0067. jpg)と62b(0068. jpg)においても、明らかに異なる筆致が見られる。このような書写の違いは『撮要』の写本が単一の書写者によってではなく、複数の書写者によって完成された可能性を示唆している。

また、児化表現の使用からもうかがい知ることができる。『你呢』には児化表現の使用もあるが、その使用法は比較的統一されており、基本的には音節末に「r」を付加する形で児尾が示されている。それに対して、それに対して、『撮要』における児化表記にはかなりの混乱が見られる。例えば、漢字の下に直接「児」と記すものや、漢字の下に「乙」と書き込むもの、または漢字の下には何も書かれず漢語音注にr表記が用いられる例が挙げられる。例えば、1a-3b までに見られる児化音は主に漢字の下に直接「児」字を添加して表すが、4a-24b では漢字の下に直接「乙」を記して児化音を示す形式が用いられるようになっている。このような変化が見られることから、『撮要』の写本は複数の書写者によって完成された可能性が考えられる。もしそうであるならば、ss 字の音注に現れる混乱は漢語のある例字に対する複数の書写者がそれぞれの聴覚の違いと関係する可能性がある。即ち、書写者の個人差に由来するものと考えられる。

第5章 朝鮮時代後期の四資料における濃音表記 sg-、ss-

第2章から第4章にかけては、『華音』『你呢』『学清』『撮要』という朝鮮時代後期の4種の漢語学習資料の漢語音注に使用された濃音表記について、詳細に整理と分析を行った。濃音表記 sg および ss の使用は『華音』に特有のものではなく、朝鮮後期の複数の漢語学習資料に共通して見られる表記方法である。このような現象が広く確認されることからその出現が偶然ではない可能性が示唆される。

先行研究において、これらの漢語音注に用いられている濃音表記にすでに注目が集まっており、その性質や使用状況について一定の考察がなされてきた。しかし、既存の研究には依然として議論の余地があり、特にその具体的な特徴や使用理由の理解に関しては、さらなる分析が求められている。第2章から第4章では各資料を整理する中で、濃音表記の使用理由について本稿はある程度の検討を加えてきたが、濃音表記は朝鮮時代後期の漢語資料に共通して見られる現象であることから、本章では特にこれら4種の資料に共通して確認される濃音表記の例字に注目し、その使用規則や傾向をさらに明らかにすることを目指す。

1 『華音』『你呢』『学清』『撮要』の言語基礎

朝鮮時代後期の各教科書の漢語音の音注にみられる濃音表記は共通した現象といえる。これらの教科書は近い時期に編纂、書写されたため、音韻体系に大きな差は見られないが、濃音表記の使用をより理解するには、まず各教科書の音韻体系を把握することが必要である。各教科書の音韻体系について簡略的に紹介する。また、各教科書の同音字表は付録6-10を参照されたい。

1.1 『華音』の言語基礎

『華音』の言語基礎については、蔡瑛純（2002）や金基石（2003）などが『華音』序文¹²³に基づき、19世紀の北京音（燕京音）を反映しているとする。北京音を基準とすると、声母の表記はおおむね明瞭である。そのうち、ハングルのㅂ およびㄷ で声母が表記されている漢字は、北京音のㅂ と ㄷ 声母と基本的に一致している。

一方、岳輝（2006）は宮脇（1922）や川瀬（1936）を参照し、韻母に学（iao）、色（ai）、宿（iu）など東北方言の特徴が見られると指摘し、「哈（喝）」「新新」「寡」「啥」などの語彙から、『華音』の言語基礎は清末の東北官話、特に遼東官話であると結論づけた。

本稿も『華音』に東北方言の語彙・音韻特徴が確認できたが、岳輝（2006）とは異なる立場を取る。例えば、見曉組が j、q、x になったなど、北方官話の牙喉音の齊齒呼及び撮口呼¹²⁴の口蓋

¹²³ 「今李知樞應憲，取常行使用之語，略加編輯，名之曰《華音啓蒙》。若《千字文》、《百家姓》，並用燕京話，譯之以東諺，開卷了然，如置莊岳而求齊語。」—『華音啓蒙・序文』

¹²⁴ 齊齒呼は韻母 i を介音とするもの。発音時、齒列をそろえるような形になる。例：「比」「賓」。撮口呼は韻母が

化は東北官話とも一致するが、「人而二耳染」¹²⁵など日母字をゼロ声母で読む点では東北官話は北京官話と異なる。

また、訓民正音の表記システムでは歯頭音と正歯音を明確に区別し、それぞれ異なるハングル字母を用いて表記することで発音部位の違いを反映していた。しかし、『華音』の時期になると歯頭音と正歯音の区別は次第に曖昧になり、ハングル表記上の厳密な対応関係は失われていった。この変化は単に朝鮮での表記法の変遷を示すだけでなく、当時の北方官話の音韻体系の変化を反映している。

また、張美蘭（2011）は清末の朝鮮人以外の外国人が編纂した『官話指南』¹²⁶『官話類編』¹²⁷等や、『西遊記』『紅樓夢』など明清小説にも『華音』『你呢』の東北方言の語彙が見られることから、これを遼東官話特有とするのは妥当でないと指摘した。

林焘（1987）は「もし1つの方言点と北京の市街区の話と音韻体系に目立つ差異がなく同時に、調類¹²⁸が同じ、調値¹²⁹が以ている場合、この方言点が北京市街区の話と同じ北京官話区に属していることとなる。この基準から見ると、北京市の方言は付近の河北省の方言だけでなく、東北方言のほとんども含むことである。北京官話区は北京市を起点として、西から東へ、その範囲が徐々に拡大し、南西に狭く、東北に広いようなラッパ状の区域を形成し、河北省北東部、内モンゴル東部、東北3省のほとんどを含む。」と述べている。太田辰夫・陳曉（2013）は北京語の形成は東北三省、特に瀋陽語や山東語の影響を受けたと述べている。鵜殿（1985）も『華音』の音注に膠東方言との一致が見られるが、膠東話は『中原音韻』に示される北京官話の一形態であると強調した。しかも、『華音』序文に「以燕京話譯之」と明記され、会話文の目的地も北京であることから、本稿も『華音』の言語基礎は主に北京音であると考ええる。

また、『華音』巻末に付属している『華音正俗変異』は正音-俗音対照表で、各字に左右の2音を示している。李得春（2000）は『四声通考』凡例「以圖韻諸書及今中国人所用定其字音，又以中国時音所广用而不合圖韻者逐字書俗音于反切之下。」により、18世紀の俗音が『華音正俗変異』の正音となったと指摘した。『華音正俗変異』に最も顕著な変化はg、k、hがj、q、xに変化する見曉組字の口蓋化である。溪母の「羌 gang」¹³⁰、見母の「甲 gia」¹³¹、曉母の「欣 hin」¹³²を除いて、見曉組字のすべてが口蓋化されたことから、19世紀末に中国語の見曉組字の口蓋化がほぼ完成したことが分かる。

üを介音とするもの。発音時、両唇をすぼめて前に出す。例：「曲」「去」。

¹²⁵ 例字は岳輝（2006）原文のまま。

¹²⁶ 1881年、日本の清国駐在公使館の翻訳官である呉啓太・鄭永邦が、中国人教師の協力を得て編纂した、日本初の北京官話会話教材である。

¹²⁷ 19世紀、アメリカの宣教師マティア（中国名：狄考文）によって編纂され、2017年に北京大学出版社によって整理・出版された書籍。清末の言語接触が盛んな時期に成立し、中国を訪れる外国人のために作られた実用的な口語漢語教材である。

¹²⁸ 中古漢語の声調体系における分類の一つ。漢語の声調は四声（平上去入）に分けられ、それぞれさらに細かく分類される。これらの分類単位を「調類」と呼び、韻書や韻図で音韻体系を整理する際に用いられる。

¹²⁹ 特定の調類に属する音節の具体的な声調の高さ・曲線（音の起伏）を指す。音声学的な実際の音高を表す。

¹³⁰ 『華音正俗変異』1aの左音。

¹³¹ 『華音』巻末部分7aの天干地支。

¹³² 『華音』巻末部分4aの千字文。

1.2 『你呢』『学清』の言語基礎

『你呢』と『学清』に対して、学界では通常、これらの2書は同一資料の異なる写本であると考えられている。したがって、本節では両書の語彙及び音韻についてまとめて紹介することとする。

『你呢』の語彙には「成色」¹³³「唠叨」など意味的に東北方言に合う例もある。福田（1995a）は会話文に登場する「遼東」「辺門口」¹³⁴などの地名を考証し、『你呢』の漢語が遼寧省鳳城一帯の方言を反映している可能性を指摘した。即ち、『你呢』の言語基礎は東北方言に近い。『学清』は会話文のみで、その音韻体系は基本的に『你呢』と類似している。

前期の朝鮮資料では『老乞大諺解』『朴通事諺解』などで尖音¹³⁵と団音¹³⁶の区別が明確に見られるが、後期の『朴通事新解諺解』『華音啓蒙諺解』などでは尖団の区別はほとんど消える。一方、『你呢』では尖団の消失しかかっている状態が窺える。例えば、「家」は卷頭（千字文・百家姓・算数）で ja-jya、会話文で gya と表記されるが、本文では一音節語または複音節語の第1音節で gya、第2音節（例：「人家」）で jya となる。「鶏」は卷頭で ji、本文で gi、「九」は卷頭と本文でそれぞれ jiu/giu と表記される。他に「幾」ji-gi、「叫」jyao-gyao、「教」jyao-gyao など尖団の区別例である。尖音と団音の合流は近代北京語の重要な音韻変化で、その合流時期について、李新魁（1997b）は17世紀明代、唐作藩（2011）は18世紀中葉清代前期、藤堂明保（1960）は19世紀初、王力（1985）は19世紀中葉清代後期とする。前述の通り、『華音』では尖団音は基本的に統合されており、陳曉（2013）も北京語の尖団音合流は『華音』で完成したと指摘する。『撮要』の尖団音合流『華音』と同様である。朝鮮対訳資料からうかがえる尖団音の合流状況は、王力の説と一致する。

日母字¹³⁷は『老乞大諺解』『朴通事諺解』などではハングル「△」で表記されていたが、『華音』ではすべてゼロ声母の「○」に統一された。「人」は rin と表記される以外、『你呢』でも日母字は『華音』と同様にゼロ声母で表記された。また、n と l 声母の混同は中国語の方言や朝鮮漢字音に共通する現象であり、福田（1995a）は『你呢』の n、l 混同は実は中国語の反映であると指摘した。

1.3 『撮要』の言語基礎

『撮要』における幫母はb、滂母はp、並母は平声で p、仄声でbとされ、これは現代北京語な

¹³³ 福田（1995a）によると、「成色」という言葉は、『北京土語辞典』では「金銀的度（金銀の純度）」を意味しているが、『関東方言詞匯』では「商品的質地和色澤（商品の生地と色）」を意味している。『你呢』の「一種牛皮本來並不是一個一個講主，原是好歹瞧着成色，各人看到什麼成色講到甚麼價錢。」という例文によれば、確かに意味的には東北方言に近い。

¹³⁴ 福田（1995a）は清・博明希和『鳳城噴録』の「辺門在鳳凰城東南三十里，鳳凰山之麓（中略）是為通朝鮮之孔道。」により、「辺門」は現在遼寧省鳳城付近と推定した。

¹³⁵ 声母 z、c、s が齊齒呼・撮口呼の韻母（i、ü、または i、ü で始まる韻母）と結合する音。

¹³⁶ 声母 j、q、x が齊齒呼・撮口呼の韻母（i、ü、または i、ü で始まる韻母）と結合する音。

¹³⁷ 現代漢語普通話の r-声母に相当する。例えば「人」「日」などの字がこれに含まれる。

ど北方方言の無気音と有気音の対応と一致する。唇音 m も現代北京語と同様である。ハングルに f 表記がないため、北方方言の f は p で示される。『撮要』では「在 d@i」¹³⁸「得 de」を除き、舌音声母 d、t は現代北京語の声母 d、t と対応する。泥母¹³⁹・来母¹⁴⁰は多く n で表記され、特に『撮要』の来母が多く n で書かれたのは南方方言の「n、l 不分」ではなく、朝鮮語の影響によると更科 (2005) は指摘した。

牙舌音声母 g、k、h は北方方言の g、k、h に対応する。見母と群母 (仄声) の細音が『撮要』で g を保つのは現代北京語と異なり、破擦音化が未発生のためである。精母と從母平声の細音にも g を保つ例が多い。溪・群 (平声)・曉母細音字が k、h ではなく c、s、ss で表記されることで更科 (2005) は『撮要』に尖團音の合流が完成したと指摘した。現代北京語の破擦／摩擦音「z、c、s」「j、q、x」「zh、ch、sh」は全て j、c、s、ss で現れる。また、日母がゼロ声母となるのは東北官話の特徴を反映すると更科 (2005) は指摘した。

『撮要』において、開口呼¹⁴¹韻母は現代北京語と同様に、i、u、ü などでは始まらない。齊齒呼韻母は齒音声母の初声の下で直音が現れる。合口呼¹⁴²に u、o が使われる。撮口呼は朝鮮語到北京語の前舌円唇母音 [y] と対応する字母がないため、ü 韻母を oie-uien、yan を oien-uien などの複合表記で示す。主母音/a/は『撮要』で基本的には a で、ただし現代北京語の ian、yan に相当する韻母では e となる。主母音/e/は e または y で表記され、韻尾がない場合または -i、-r の場合に e のみ、-u、-n、-ng の前に y が一般的である。

現代北京語の i (両点) と対応する韻母は『撮要』では牙音と齒音声母に y で表記される。北京語の ü 韻母は ui、iu、iui で表され、ui は uei に多く使われる。齒音 j、c、s の後ろに iu、ゼロ声母の後ろに iu、iui が現れる。『撮要』の -i、-w、-n、-ng はそれぞれ北京語の -i、-u、-n、-ng 語尾に対応し、-w を除き朝鮮語にも存在する。兒音現象として、二音節が一音節になる兒化韻と、「兒」が独立音節を保つ「兒尾」の両方が見られる。『撮要』の音韻体系には東北、河北などの北方方言の特徴があるが、北京音とほぼ一致するため、『撮要』の言語基礎は北京語と見なせる。

1.4 まとめ

以上の内容に基づき、本稿ではこれら四種の資料の言語的基盤は主に当時の北京語であると考ええる。福田 (1995b) も「朝鮮資料がかなり北京語あるいは北京音を意識している」と同様に指摘

¹³⁸ 「在 d@i」は複合語として使う場合に j@i で、介詞の場合に d@i で表記され、動詞として使われる場合に d@i、j@i の両方も使う。更科 (2005) は福田 (1995a) の研究により、「在」は『你呢貴姓』にも d@i、j@i の二通りの音注が見られるが、『撮要』と異なって、介詞の場合にのみ d@i と読まれて、動詞の場合は j@i となると指摘した。福田 (1995a) は「在」を d@i とするのが北京、天津や東北地方によくあると指摘し、更科 (2005) は更に「在」の方言音を調べ、北方方言のかなり広い地域で「在」を [tai] またはこれと類似する音と読む、例えば北京、済南、武漢、成都などが挙げられる。

¹³⁹ 現代北京語の n 声母。

¹⁴⁰ 現代北京語の l 声母。

¹⁴¹ 介音を持たず、かつ韻母が i / u / ü で始まらないもの。例：「八」「紗」。

¹⁴² 韻母が u を介音とするもの。例：「歩」「舞」。

したことがある。中国に対して「至誠事大」の態度を取っていた朝鮮の漢学者は、「漢音有關事大」のため、漢語音韻に関する時、『洪武正韻』を扱った時のように「不敢輕有變更」¹⁴³とするのが基本的であった。16世紀初期、崔世珍が『四声通解』『翻譯老乞大、朴通事』を編纂した時に漢語の声母体系に一定の変化があったとしても、崔氏はやはり『洪武正韻』の声母体系を使っていた。朝鮮後期の対清態度は明朝には及ばなかったが、「事大」の政策は存続していたため、漢音に対する「不敢輕有變更」という態度も19世紀末まで続いていた可能性が高いだろう。朝鮮時代の漢語教科書、特に初、中期の資料は主に司訳院などの公的機関が主宰して編纂され、しかも編纂者は申叔舟、崔世珍、李辺などが挙げられ、当時の朝鮮半島で最も漢語に精通していた人だと言える。そのため、初、中期の朝鮮対訳資料の音韻体系は比較的規範的であり、更に、初中期の朝鮮は漢音の正確性を保証するために常に質正を行い、これらの資料の規範性はより保証できた。このような北京語を標準あるいは主流とする背景で編纂された漢語教科書はある方言を基準にすることは合理的ではないと思われる。特に初級の入門書で音声の記述が非常に重要視されているため、19世紀末に成立した『華音』『你呢』『学清』『撮要』の言語基礎は北京語であった可能性が高いと推測できるであろう。

一方、鶴殿(1985)は「問題は、音注の注記者は実用的な表記以外、先行の類書の音注の綴りを顧慮しなくてはならなかったであろうという点である。この意味で、「諺解」の音注の表記の中の、体系としては不必要に見える書き分け等は、慣用的な綴りを採用した可能性から見なければならぬものを含むと思われる。ハングルの成立が、漢字音の表記という目的と深く関わり合っているだけに、口語の表記といえども、先例の重みは無視できないものがあつたに違いない。」と指摘したこともある。したがって、朝鮮時代後期の漢語教科書における漢語音の音注を考察する際にも、この点に注意する必要がある。

2 四資料共通 sg-例字について

濃音表記 sg、ss の使用は『華音』『你呢』『学清』『撮要』の4資料のすべてに見られ、資料間で共通する濃音表記の漢字もいくつか確認される。本節では、これらの共通する漢字について対照を行う。まず、表25はこれらの4資料に共通して見られる sg 表記の漢字及びその用例を示したものである。

¹⁴³ 申叔舟(1455)《洪武正韻譯訓序》：我世宗莊憲大王留心韻學，窮研底蘊，創制訓民正音若干字，四方萬物之聲無可不傳。我東方之士，始知四聲七音自無所不具，非特字韻而已也。于是以吾東國世事中華，而語音不通，必賴傳譯，首命譯《洪武正韻》。夫洪武韻用韻並析，悉取于正，而獨七音先後不由其序，然不敢輕有變更，但因其舊，而分入字母于諸韻各字之首，用訓民正音以代反切，其俗音及兩用之音又不可以不知，則分注本字之下，若又有難通者，則略加注釋以示其例，且以世宗所定《四聲通考》別附之頭面，複著凡例為之指南。——この部分は金基石(2003)『朝鮮韻書與明清音系統』第9頁から再引用する。

表 25 四資料に共通する sg-例字

例字	『華音』 (2 例)	『你呢』 (2 例)	『学清』 (2 例)	『撮要』 (4 例)
更	sgyng 更 sgyng 好 (上 17b) 更 sgyng 好看 (下 26b)	gyng (1 例) 更 gyng 不肯 (16b) sgyng (1 例) 更 sgnyng 喜歡 (18b)	ggyng 更 ggyng 不肯 (8b) 更 ggyng 喜歡 (11a)	sgyng (1 例) 更 sgyng 忙 (20a) ging (1 例) 三更 ging 天 (16a) gyng (2 例) 二更 gyng 天 (20a) 一更 gyng 天 (20a)

朝鮮時代後期の漢語教科書における sg で表記された漢字は全体的に少なく、本稿で取り上げる 4 種類の資料の中で、共通した sg で表記された漢字は「更」のみである。表 25 から分かるように、程度副詞として肯定的な表現を後続し、「さらに～」を表す「更」は後期の資料には基本的に「sgyng」と記されている。『学清』ではすべて gg を用いていたが、gg と sg は実は同一音素を表す。『你呢』では 16b の「管他誰也 gyng 更不肯依你作」のような 1 例の平音表記 g を用いた例が見られ、これは「更」が否定表現を後続する用法であり、『你呢』では意味の違いを示すために平音の g を用いたと考えられるが、『学清』ではこのような使い分けは見られない。

「更」は意味に応じて異なる注音が用いられている点が『撮要』にも見られる。例えば、程度を表す『撮要』20a の「更 sgyng 忙」では、他の 3 資料と同様に濃音表記 sg が使用されている。一方、「一更天」「二更天」「三更天」のように時間を示す名詞的用法では、すべて平音の g が用いられる。現代中国語の普通話では夜間の時刻を表す「更」の標準的な発音は「gēng」である。『撮要』における「時間・時刻」を表す名詞としての「更」が 2 種の音注があったのは漢語の文白異読現象の反映だと考えられる。例えば、文語的な書き言葉や詩文、戯曲などで押韻やリズムに合わせるために「更」を「jing」と読むことがあり、日常の口語では「gēng」と読むような使い分けの可能性がある。『撮要』における「時間・時刻」を表す名詞としての「更」が 2 種の音注があったのはこうした漢語の文白異読現象の反映だと考えられる。

『你呢』『学清』における sg で表記された漢字の数は非常に少なく、『華音』と『撮要』の両書に共通する例字もごくわずかである。それに対して、『華音』『撮要』では sg 表記を持つ漢字が比較的多くて、共通する例字も多い。そこで、本節では『華音』と『撮要』に共通する sg 表記の漢字の整理を行い、その結果を以下の表 26 に示した。

表 26 『華音』と『撮要』資料に共通する sg-例字

例字	『華音』	『撮要』
剛	sgang (3 例) 剛 sgang 懂得 (上 7b) 纔剛 sgang (上 8b) 剛 sgang 出 (下 20a)	sgang (1 例) 剛 sgang 勾二十斤 (8a) gang (2 例) (對你) 太剛 gang (10a) 剛 gang 口兒 (14b)
乾	sgan (2 例) 乾 sgan 淨 (上 8b) 乾 sgan 白 (上 9b)	sgan (1 例) 幹 sgan 木頭 (21b)
懇(懇)	sgyn (1 例) 懇 sgyn 求 (上 17a)	sgyn (1 例) 懇 sgyn 求 (10b)
更	sgyng (2 例) 更 sgyng 好 (上 17b) 更 sgyng 好看 (下 26b)	sgyng (1 例) 更 sgyng 忙 (20a) ging (1 例) 三更 ging 天 (16a) gyng (2 例) 二更 gyng 天 (20a) 一更 gyng 天 (20a)

前述のとおり、朝鮮時代後期のこれらの 4 資料のいずれにおける sg で表記された漢字の数は非常に少ない。中では『華音』が最も多くて 9 字があり、次いで『撮要』は 6 字がある。第 2 章と第 4 章にそれぞれ『華音』『撮要』の sg 表記の漢字について整理、分析を行ったため、本節では両資料に共通する sg 表記の漢字に絞って取り上げ、sg 表記の特徴をさらに明らかにしたい。

『華音』と『撮要』に共通する sg 表記の漢字は「剛」「乾」「懇(懇)」「更」の 4 字である。「更」について既に表 25 で述べたため、ここでは省略する。「剛」は『華音』では副詞の用法のみであり、単語やフレーズにおける出現位置にもかかわらず、すべて濃音表記 sg が用いられる。一方、『撮要』では「剛」に 2 通りの用法が確認された。このうち 8a「剛 sgang 勾二十斤」は『華音』と同様に副詞として使われており、その音注も『華音』と一致している。一方、『撮要』の 10a「(對你) 太剛 gang」と 14b「剛 gang 口兒」の 2 例で「剛」は「強硬な」「強烈な」などの意味を持つ

形容詞として使われた場合、いずれも平音 g が使用されている。即ち、『撮要』では「剛」が意味によってその音注の使い分けがあったという特徴が見られる。「乾」は『華音』と『撮要』のいずれも形容詞として使用され、その用法と音注も完全に一致している。「懇（懇）」は『華音』では「懇」、『撮要』では「懇」と記されたが、これは単なる表記上の違いで、実際には同一漢字である。この2書における「懇（懇）」の用法と音注も一致している。

朝鮮時代後期のこの4資料を対照してみると、sg 表記の同一例字はその用法に多くの共通点が見られる。同一漢字が同じ用法で使われた場合、その音注が異なる資料でもある程度の一致性を示しており、これは sg 表記の使用に参照基準があったこと、または当時の朝鮮人が特定の漢字に対する聴覚や発音上の感覚が共通していた可能性も示唆される。さらに、『你呢』と『撮要』では同一漢字が用法の違いにより異なる音注で表記された特徴も確認できた。例えば、『撮要』の「更」は名詞として使われる場合と副詞として使われる場合で g と sg の使い分けがある。また、『你呢』での「更」はすべて副詞として使われているが、その後続の部分により g と sg が混用されている。しかし、中国語には本来このような規則がなく、これは明らかに朝鮮人が中国語を学習する過程で朝鮮語自体の言語体系に基づいて再構築した結果であると考えられる。

3 四資料に共通する ss-例字について

濃音表記 ss の使用も本稿取り上げた四種の朝鮮時代後期の漢語資料『華音』『你呢』『学清』『撮要』のいずれにおいても使用され、共通する漢字も確認された。本節では、本章第2節と同様にこれらの共通する ss で表記された漢字について対照する。以下、表 27 は4資料に共通して見られる ss 表記の漢字とその用例を示したものである。

表 27 四資料に共通する ss-例字

例字	『華音』	『你呢』	『学清』	『撮要』
三	ssian (20) 三 ssian 十五 (上 3a) 三 ssian 四箇 (上 32a) 三 ssian 套 (下 1b) 左三 ssian 右四 (下 40b) ssan (4 例) 三 ssan 品 (上 2a) 三 ssan 十 (上 2b) 夜半三 ssan 更 (上 13a)	ssan (10 例) 三 ssan 百 (8a) 三 ssan 十 (8b) 三 ssan 門子 (31a) 陡陞三 ssan 級 (32a)	ssam (2 例) 三 ssam 百多里 (1a) 三 ssam 十多年 (11a) ssan (1 例) 三 ssan 十多个人 (2a) bsian (1 例) 三 bsian 十多个人	ssan (7 例) 三 ssan 種 (1a) 三 ssan 十多吊錢 (9b) 吳老三 ssan (24b) 三 ssan 年 (61a) ssanr (1 例) 三 ssanr 領席子 (2b)

	兩三 ssan 層 (下 4a)		(2a)	ssian (2 例) 三 ssian 十八吊錢 (9a) 三 ssian 十多吊錢 (11a) san (2 例) 三 san 遍 (59b) 張三 san (61b)
四	ssy (14 例) 四 ssy 海 (上 2a) 東四 ssy 牌樓 (上 33b) 四 ssy 書五經 (下 3a) 張老四 ssy (下 36b)	ssy (5 例) 四 ssy 十五歲 (8b) 四 ssy 个 (8b) 四 ssy 十 (9a) 四 ssy 角 (31b) 四 ssy 塊 (33b)	ssy (1 例) 四 ssy 个 (1b) bsy (1 例) 四 bsy 十多間 (2a)	ssy (10 例) 何老四 ssy (8b) 再三再四 ssy (10b) 四 ssy 斤 (15b) 四 ssy 爺 (16a) sy (1 例) 李四 sy (61b)
十	ssi (32 例) 十 ssi 來天 (上 1a) 十 ssi 箇 (上 31a) 十 ssi 五歲 (下 2a) 三七二十 ssi 一 (下 39b) si (1 例) 三十 si 五歲 (上 3a)	ssi (1 例) 三十 ssi 多个 (8b) si (8 例) 二十 si (8a) 四十 si 五歲 (8b) 三七二十 si 一 (29b) 八九不離十 si (33a) sy (1 例) 三十 sy 多个 (9a)	ssi (1 例) 三十 ssi 多个人 (2a) si (2 例) 四十 si 多間 (2a) 三十 si 多年 (11a) sy (1 例) 三十 sy 多个人 (2a)	ssi (5 例) 十 ssi 包 (2b) 十 ssi 斤 (7b) 一十 ssi (8b) si (8 例) 五十 si 多兩 (4b) 二十 si 五吊 (9b) 二十 si 五歲 (22b) 十 si 箇 (62b) sir (1 例) 十 sir 來吊錢 (18b)
使	ssy (7 例)	ssy (5 例)	ssy (3 例)	ssy (13 例)

	住一天使 ssy 一天 (上 11b) 使 ssy 不下去 (上 33a) 使 ssy 用 (下 20a) 使 ssy 船 (下 30b) sy (1 例) 差使 sy (上 26b)	使 ssy 用 (9b) 使 ssy 換 (11a) 使 ssy 得過 (16a) 使 ssy 不着 (18a) 看風使 ssy 船 (27b)	使 ssy 換 (4a) 使 ssy 得過 (9b) 使 ssy 不着 (12b)	使 ssy 用 (1b) 使 ssy 得過 (2a) 使 ssy 不下去 (18a) 看風使 ssy 船 (57b) sy (2 例) 遠接使 sy (56b) 節度使 sy (56b)
死	ssy (4 例) 氣死 ssy (上 21a) 不死 ssy (上 29b) 真死 ssy 咧 (上 30b) 起死 ssy 回生 (下 11a)	ssy (3 例) 死 ssy 高麗 (2 例) (18b-19a) 死 ssy 水 (28b)	ssy (2 例) 死 ssy 高麗 (2 例) (13b)	ssy (5 例) 死 ssy 高麗 (8a) 打死 ssy (14b) 病死 ssy (54b) 压不死 ssy (60b) 死 ssy 不在老少 (62b) ssyr (1 例) 打死 ssyr (14b)

これら 4 資料の中、『学清』に濃音 ss で表記された漢字の数は最も少なく、「三」「四」「十」「使」「死」の 5 字のみである。この 5 字は 4 資料すべてに共通する ss 表記の漢字でもある。まず、これら 4 資料における「三」の音注に i 介音の有無という差異も見られる。このように ss の後に i 介音が加えられた理由について、第 2 章の 2.4 で既に述べたように、東北方言に見られる平舌とそり舌の混用に影響され、現代中国語の s 声母に相当する音を sh と誤認し、それを表現するために i 介音を加えた可能性がある。付け加えた i 介音は中国語の舌尖後母音を現そうとした結果とも考えられる。

「四」について、「四」はこれら 4 資料を通じてその用法がほぼ同じであり、音注も基本的に ssy で一致している。ただし、『学清』では一部 bs という表記が見られるが、これは ss と同一音素を表すものである。また、『撮要』第 3 部分 61b の「李四 sy」の 1 例のみが平音で表記されている。これは『撮要』第 1 部分で濃音表記が用いられていた同一漢字が第 3 部分で多くの場合、平音表記となった。このような使い分けは『撮要』が複数の書写者によって完成された可能性が高く、第 1 部分と第 3 部分における濃音と平音の使用差異は書写者個人の表記習慣の違いを反映したものと考えられる。

「十」については、『華音』では比較的安定してほとんど濃音 ss で、上巻 3a の「三十 si 五歳」

のみ平音 s 表記されている。ただし、これ以外の『華音』他のすべての年齢を表す用例では「十」は一貫して ssi と表記されているため、本稿では上巻 3a の平音表記は印刷時の誤刻である可能性が高いと考える。『你呢』『学清』『撮要』の 3 資料における「十」は平音 s で表記されているのが比較的多いが、これら 3 資料の用例からは s と ss の混用の明確な理由を特定することはできなかった。用例の中には文脈や用法がほぼ完全に一致しているにもかかわらず、音注が s と ss の両方で記されており、規則性が見られず、表記上の無秩序な印象を与える。

「使」は後期の 4 資料には動詞として使用される場合はすべて濃音表記で、その音注は一律に ssy である。ただし、『華音』上巻 26b 「差使 sy」、『撮要』第 3 部分 56b 「遠接使 sy」「節度使 sy」の 3 例では「使」は名詞として使用され、いずれも平音表記 s で表記されている。「使」は『華音』と『撮要』の両書ともその意味の違いに応じて音注を使い分ける傾向が見られる。

「死」は「起死 ssy 回生」のように名詞として、「死 ssy 高麗」のように形容詞として、また「打死 ssy」「病死 ssy」のように動詞として用いられる用例などが挙げられ、いずれの場合も濃音で ssy である。

これら 4 種類の資料に共通する ss 表記の漢字を比較すると、これらの 5 字に一定の一致性が見られる。特に「四」「使」「死」など、その音注に濃音の使用がかなり安定されていると言える。また、『撮要』と『華音』における一部の例に意味の違いを示すために異なる音注を使い分ける仕組みも見られる。これは sg と同様に、中国語自体には本来存在しない特徴である。

この 4 種類の資料の中で、『学清』の分量は最も少なく、濃音表記 sg や ss を用いた漢字も非常に少ない。それに対して、他の 3 資料では ss で表記される漢字の数が多く、『華音』では 40 字、『你呢』と『撮要』ではそれぞれ 20 字が確認される。本稿で取り上げた 4 資料のうち、『華音』のみが公的刊本であり、正式な序文と付録を備え、体裁や内容の面において比較的整っているため、ss で表記された共通する漢字の比較は基本的に『華音』を基準としている。『華音』『你呢』『撮要』の 3 資料に共通する ss 漢字は表 28 に示した通りである。

表 28 『華音』『你呢』『撮要』に共通する ss-例字

例字	『華音』	『你呢』	『撮要』
下	ssia (42 例) 在下 ssia (上 1a) 住不下 ssia (上 6a) 天下 ssia (下 32a) 下 ssia 雨 (下 33a) ssa (1 例) 住下 ssa (上 11a)	ssia (2 例) 上 ssia 下家眷 (8b) 住得下 ssia (9a) sia (9 例) 住不下 sia (9a) 剩下 sia (10a) 下 sia 不來 (14b) 下 sia 次 (16a)	ssia (15 例) 下 ssia 塘 (2b) 下 ssia 次 (3b) 受下 ssia (4b) 使不下 ssia 去 (18a) 下 ssia (雪) (20b) ssar (1 例) 使不下 ssar 去 (17a)

		sa (1 例) 下 sa 塘 (13b) sia (1 例) 摘下 sia 來 (24a) ssar (1 例) 隧 ssar 下來 (24b) ssa (2 例) 天下 ssa (29a) 下 ssa 槽 (31b)	sia (1 例) 下 sia 飯 (65a)
小	ssiao (23 例) 小 ssiao 麥 (上 4b) 大呼小 ssiao 叫 (上 14a) 小 ssiao 珠子 (下 34a) 小 ssiao 一箇 (下 37b) siao (1 例) 小 siao 邦 (上 2b)	siao (10 例) 多小 siao (8b) 小 siao 不買 (12a) 小 siao 一點 (17b) 小 siao 他不得 (26b) sau (1 例) 載多車小 sau (27b) ssao (1 例) 小 ssao 河 (30b)	ssia (6 例) 小 ssia 不得 (5a) 小 ssia 桶子 (7b) 小 ssia 傢伙 (8a) 東西小 ssia (8a) ssiau (15 例) 小 ssiau 夥計 (6a) 小 ssiau 錢 (11b) 小 ssiau 車 (12b) 小嶺 ssiau (23b) ssau (1 例) 小 ssau 夥計 (14a) ssiao (1 例) 得罪不小 ssiao (55b) sao (1 例)

			大驚小 sao 恠 (58a) siao (2 例) 人貪志小 siao (58b) 大小 siao (61a)
--	--	--	--

表 27 から分かるように、「三」「四」「十」「使」「死」の 5 字は『華音』『你呢』『撮要』の 3 資料に共通して見られる漢字で、これら 5 字について前節で既に議論を行ったため、ここではやはり省略する。また、表 28 でもこれら 5 字の用例は省略している。この 5 字以外に、『華音』『你呢』『撮要』の 3 資料には表 28 に示すように「下」と「小」の 2 字の共通する ss 表記の漢字がある。「下」はこの 3 資料のいずれも名詞と動詞用法の両方が確認され、その用法はおおむね一致している。また、異なる資料にもかかわらず、「下」の用例は極めて類似、あるいは完全に一致した用例も見られる。例えば、動詞として使われた『華音』上巻 6a の「住不下 ssia」、『你呢』9a の「住不下 sia」があり、名詞としては『你呢』16a の「下 sia 次」、『撮要』2b の「下 ssia 塘」、3b の「下 ssia 次」などが挙げられる。「下」は『華音』と『撮要』では基本的に濃音表記が用いられているが、『你呢』では濃音表記 ss が用いられているのはわずか 5 例のみで、残りの 11 例はすべて平音で表記されている。また、『学清』においてもすべて平音で表記されている。これら 3 資料の用例を見ると、『華音』と『撮要』の音注は比較的近く、『你呢』と『学清』は音注の傾向が近いことがうかがえる。「下」は朝鮮時代後期の漢語資料における音注は混乱していた可能性があり、特に写本においてその傾向が顕著であったと考えられる。

「小」は『你呢』において、30b 「小 ssao 河裡存不得大魚」の 1 例のみが濃音表記で、それ以外の 11 例はすべて平音表記である。この点は『学清』の「小」がすべて平音 s で表記されていることと一致しており、『你呢』『学清』の書写時期にこの字の音注が平音 s で表記される傾向にあったと推測される。一方、『華音』では上巻 2b の「小 siao 邦」1 例を除き、それ以外の 23 例すべて濃音表記で、ssiao と記されている。「小 siao 邦」の「小」は形容詞として使われるが、平音を使ったのは、印刷上の誤りか、あるいは自己謙遜を表すために意図的に平音が用いられた可能性も考えられる。『撮要』では「小」に平音 s の用例が 3 例あり、いずれも第 3 部分に現れている。また、『撮要』における「小」の韻母表記は最も混乱しているものの、ある程度の使用傾向も確認できる。例えば、8a までは韻母が ia であり、11b-23b までの部分はほとんどが iau となっている。このような『撮要』の「小」字の音注に見られる韻母の混乱は第 4 章で述べたように、該書が複数の書写者によって完成された可能性と関係していると考えられる。複数の書写者が存在していたとすれば、一部の漢字に対して書写者個人の認識や表記方式に差異が存在していた可能性もある。

『你呢』『撮要』も後期の 4 資料で ss 表記の例字が比較的多く見られる資料である。そのため、

本稿ではこの2書をss漢字が最も多く確認された『華音』と対照し、それぞれの共通するss漢字を整理した。『你呢』と『華音』、及び『撮要』と『華音』のそれぞれ共通するss表記の漢字は以下表29と表30に示す。なお、表29、表30においても、表27で既に示した4資料すべて共通する「三」「四」「十」「使」「死」の5字とその用例は省略する。

表29 『華音』『你呢』に共通するss-例字

例字	『華音』	『你呢』
上	ssiang (64 例) 府上 ssiang (上 4a) 蓋上 ssiang (上 7b) 上 ssiang 海 (35b) 帽子上 ssiang (下 2a) 上 ssiang 外國 (下 39a) 添不上 ssiang (下 40a)	ssiang (1 例) 上 ssiang 下家眷 (8b) sang (7 例) 二不上 sang (12b) 馬上 sang (13a) 上 sang 頭 (16a) 札上 sang (22a) 案上 sang (22b) 錦上 sang 添花 (26a) 上 sang 稅 (32b) siang (1 例) 上 siang 我的儻 (19b)
下	ssia (42 例) 在下 ssia (上 1a) 住不下 ssia (上 6a) 天下 ssia (下 32a) 下 ssia 雨 (下 33a) ssa (1 例) 住下 ssa (上 11a)	ssia (2 例) 上下 ssia 家眷 (8b) 住得下 ssia (9a) sia (9 例) 住不下 sia (9a) 剩下 sia (10a) 下 sia 不來 (14b) 下 sia 次 (16a) sa (1 例) 下 sa 塘 (13b)

		siar (1 例) 摘 下 siar 來 (24a) ssar (1 例) 隧 ¹⁴⁴ ssar 下 來 (24b) ssa (2 例) 天 下 ssa (29a) 下 ssa 槽 (31b)
小	ssiao (23 例) 小 ssiao 麥 (上 4b) 大 呼 小 ssiao 叫 (上 14a) 小 ssiao 珠 子 (下 34a) 小 ssiao 一 箇 (下 37b) siao (1 例) 小 siao 邦 (上 2b)	siao (10 例) 多小 siao (8b) 小 siao 不 買 (12a) 小 siao 一 點 (17b) 小 siao 他 不得 (26b) sau (1 例) 載多車小 sau (27b) ssao (1 例) 小 ssao 河 (30b)
蔘	ssyn (2 例) 人蔘 ssyn (下 10b) 人蔘 ssyn (下 11a)	ssyn 白蔘 ssyn (34a)
香	ssiang (1 例) 燒香 ssiang (下 24b)	ssiang (1 例) 一 臭 一 香 ssiang (26b) ssang (1 例) 借香 ssang 燒佛爺 (28a)

『你呢』の会話文と付録部分には濃音 ss で表記された漢字が 20 字ある。表 27 に示された 5 字以外に、「上」「下」「小」「蔘」「香」の 5 字が『華音』と共通する漢字である。「上」字は『華音』においての用例が最も多く、固有名詞の「上海」、方位名詞の「府上」「帽子上」、また動詞として

¹⁴⁴ 福田(1995b)を参照。

使用されるなどの場合も含め、すべて ssiang で統一され注されている。一方、『你呢』で「上」は 21a 以降の付録部分に 4 例があり、例えば方位名詞としての 26a「錦上 sang 添花」や、動詞としての 32b「上 sang 税」など、用法に関わらず、音注はすべて sang で統一されている。

一方、『你呢』の会話文では、8b「上 ssiang 下家眷」の 1 例のみが濃音表記 ss で記され、それ以外の用例はでは音注が比較的混乱しており、明確な規則性は確認できない。例えば、12b「二不上 sang」と 19b「上 siang 我的儻」のいずれも動詞として用いられているが、音注が一致していない。『華音』においての「上」の音注にはすべて濃音表記 ss に i 介音を加えた。朝鮮人学習者は、ハングルを用いて漢語のそり舌音声母を記録する際に一定の困難が存在し、『華音』では i 介音を後続させる方法によってそり舌音声母が表記されている。つまり、i 介音の添加は主にそり舌音声母を示すための手段であったと考えられる。同様に、『你呢』に見られる ssiang や siang といった表記も、濃音 ss+i であれ平音 s+i であれ、i 介音の添加はやはりそり舌音声母を意識したものと考えられる。この点から見ると、『你呢』が書写された当時、書写者がそり舌音声母に対する認識や表記上の処理は『華音』が印刷された時期ほど安定していなかったと推測される。

「下」は『華音』においても比較的安定しており、ほとんど ssia で表記されている。ただし、上巻 11a の「住下 ssa」の 1 例のみ、i 介音が添加されておらずやや特殊である。上巻 6a の「住不下 ssia」や 7a の「住下 ssia」など、他の類似の用例ではすべて ssia と注音され、また、この字の韻母も本来 ia であるため、上巻 11a の特例は印刷時の誤刻と推測される。『你呢』における

「下」字の音注はかなり混乱しており、その用法から特定の傾向が見出せず、附録部分において同一の用法でも、濃音と平音が混在している。ただし、『你呢』ではこの字は主に平音 s で表記されており、会話文の内容が高度に類似している『学清』でも「下」も主に sia と表記されている点から、「下」は『你呢』『学清』主に sia と記されている。

したがって、『你呢』『学清』が書写された時期に、「下」は主に平音 s で表記されていたと考えられる。しかし、濃音表記 ss が 19 世紀の朝鮮対音資料での復帰により、音注の表記上には一定の混乱が生じたと思われる。「小」も同様で、『華音』では主に濃音 ss が使用されており、上巻 2b の「小 siao 邦」1 例だけは前節で述べたように、印刷上の誤刻、または自謙のため意図的にした可能性がある。一方、『你呢』で「小」は主に平音 s が使用され、濃音と平音の混在は一部に見られるものの、その理由は現段階まだ特定できない。また、「蓼」「香」2 字について、『你呢』『学清』の両資料にはほぼ一致した音注が見られ、声母とともに濃音表記 ss が用いられている。

『你呢』のほか、『撮要』もこれら朝鮮後期の 4 種類の資料の中で ss 表記の漢字が比較的多く確認される資料である。以下表 30 は『撮要』と『華音』に共通する ss 漢字を示したものである。

表 30 『華音』『撮要』に共通する ss-例字

例字	『華音』	『撮要』
下	ssia (42 例) 在下 ssia (上 1a)	ssia (15 例) 下 ssia 塘 (2b)

	住不下 ssia (上 6a) 天下 ssia (下 32a) 下 ssia 雨 (下 33a) ssa (1 例) 住下 ssa (上 11a)	受下 ssia (4b) 使不下 ssia 去 (18a) 下 ssia (雪) (20b) ssar (1 例) 使不下 ssar 去 (17a) sia (1 例) 下 sia 飯 (65a)
現	ssien (6 例) 現 ssien 在 (上 2a) 現 ssien 任 (下 2a) 現 ssien 寫 (下 22b) 現 ssien 銀子 (下 29a) 現 ssien 去 (下 36b) 現 ssien 銀子 (下 39b)	ssien (5 例) 現 ssien 成的 (3a) 現 ssien 成的 (5b) 現 ssien 錢 (18a) 現 ssien 銀子 (18a) 現 ssien 錢 (18b)
兄	ssiung (13 例) 弟兄 ssiung (上 3a) 兄 ssiung 弟 (上 3a) 胡兄 ssiung 弟 (上 11a) 兄 ssuing 台 (上 26a)	ssiung (4 例) 兄 ssiung 弟 (9a) 兄 ssiung 弟 (10a) 兄 ssiung 弟 (11a) 兄 ssiung 弟 (11a)
山	ssian (7 例) 有眼不識泰山 ssian (上 3b) 唐山 ssian 縣 (下 2b) 滿山 ssian 滿溝 (下 20b) 青嵒山 ssian (下 28b)	ssian (2 例) 山 ssian 根底 (21a) 山 ssian 根地 (23a) san (9 例) 山 san 高水低 (57b) 堆的如山 san (58a) 山 san 高上不去 (63a) 日頭壓山 san (66a)
算 (筭)	ssoan (10 例) 算 ssoan 起來 (上 4a)	ssan (1 例) 筭 ssan 甚嗎 (2a)

	打算 ssoan (上 12b) 算 ssoan (是) (下 8a) 不算 ssoan (下 38b)	ssian (2 例) 筭 ssian 是 (4a) 筭 ssian 盪 (4a) soian (3 例) 怎嗎筭 soian (8b) 筭 soian 起來 (9b) 筭 soian 是 (11a) soan (6 例) 筭 soan 是 (11b) 筭 soan 筭 soan 帳 (11b) 筭 soan 小的 (18b) 筭 soan 不得人 (68b)
笑	ssiao (1 例) 見笑 ssiao (下 5a)	ssiau (1 例) 好笑 ssiau 話 (4a) siau (1 例) 頑笑 siau (5b) ssau (1 例) (說) 笑話 ssau (12b)

『撮要』と『華音』に共通する ss 表記の漢字は表 27 に示されたもの以外に、表 30 の 6 字が存在する。「下」は表 29 の議論に既に述べたように、『華音』において比較的安定して、基本的に ssia で表記されている。『撮要』における「下」の用例も『華音』と非常に似ており、例えば、18a「使不下 ssia 去」と『華音』上巻 6a の「住不下 ssia」、20b「下 ssia 雪」と『華音』下巻 33a の「下 ssia 雨」などが挙げられる。このように、『撮要』においての「下」も用法を問わず主に濃音表記 ss が使われている傾向が顕著である。ただし、第 3 部分 65a の「下 sia 飯」だけが平音表記である。『撮要』における第一部分と第三部分のこのような異なる音注の使い分けについて、本稿は『撮要』が複数の書写者によって書写された可能性が高く、異なる書写者が一部の漢字に対する理解に差異があった可能性があると考えられる。

「現」は『華音』と『撮要』において、副詞や形容詞として使用されており、両資料における用法は完全に一致している。用例も非常に類似し、場合によっては完全に一致する例もある。例

例えば、『華音』下巻 2a「現 ssien 任」や『撮要』3a「現 ssien 成的」では副詞として使用され、『華音』下巻 29a「現 ssien 銀子」や『撮要』18a「現 ssien 銀子」では形容詞としての用例である。一方、『你呢』と『学清』では「現」は平音 s で表記されており、『華音』と『撮要』がともに濃音 ss を用いていることから、この字は『華音』『撮要』の時期に主に濃音 ss で表記した傾向があった可能性が高い。「兄」も同様の傾向が見られ、『華音』『撮要』において共に濃音 ssiung で表記されているが、他の 2 資料においてはいずれも平音 s が用いられている。総じて見ると、『你呢』と『学清』の音韻体系は本稿が扱う 4 資料の中の比較的早期の段階を反映しており、『華音』と『撮要』は比較的遅い時期の音韻状態を反映していると考えられる。朝鮮後期の漢語資料に見られる表記の変化は、朝鮮人学習者による中国語のそり舌音声母の表記方法の変化を反映している可能性があると考えられる。このような変化は本稿で扱う一部の資料が写本で、書写者個人の差異による可能性がある一方で、朝鮮語自身の音韻体系の変化とも関係している可能性がある。そのため、同一漢字に対する音注の表記にも違いが生じたと考えられる。

「山」は『華音』と『撮要』の第 1 部分ではすべて濃音 ss で表記されているが、『撮要』の第 3 部分ではすべて平音 s で表記されている。『撮要』におけるこの字の音注には、書中の位置によって分かれる傾向が見られる。「算」は『華音』『你呢』『学清』のすべてにおいて、韻母は oan と記されており、円唇性母音 o を含む形となっている。ただし、『華音』では声母がすべて濃音 ss で統一されているのに対し、『你呢』と『学清』ではすべて平音 s で表記されている。『撮要』では 11b 以降の部分において、声母はすべて平音 s、韻母は oan であり、これは『你呢』『学清』とほぼ一致している。一方、11b 以前の部分では声母に濃音と平音の混用が見られるだけでなく、韻母も an、ian などの非円唇母音が混在している。『撮要』における「算」の用例から見ると、4a 及び 11b 前後の部分に現れた濃音-平音表記や韻母の著しい揺れの原因を現時点で特定することは難しい。こうした同一漢字における表記差が同じ会話文の部分に同時に現れることから、これは複数の書写者による個人的な表記差に起因する可能性が高いと推測される。また、「笑」は『撮要』に 3 例があり、それぞれ形容詞、動詞、名詞として使われている。これらの 3 例はいずれも異なった音注がなされており、用法や意味の違いを示すための仕組みであった可能性がある。

4 韓国語と漢語の音韻体系の差異

朝鮮時代後期の漢字資料に用いられている濃音表記 sg、ss をより深く理解するために、まず、以下のような中国語と韓国語の音韻体系における違いを明確にする必要がある。

漢語の声母体系と韓国語の子音体系には顕著な違いがあり、特に音素の対立方式において大きな差異が見られる。漢語音韻学において、声母は調音部位に基づき、概ね牙音（舌根音）、舌音（舌面音）、唇音、齒音（舌尖音）、喉音の五つに分類される。さらに、半舌音（そり舌音）と半齒音（撮口音）を加えて七カテゴリーがある。さらに、漢語音韻学では、同じ調音部位に属する声母を清濁および送気の有無によって全清・次清・全濁・次濁（不清不濁）の四種類に細分する。

漢語のように有気音と無気音の二項対立とは異なり、韓国語の子音体系は平音、激音、濃音の

三項対立の構造を採用している。韓国語における 平音・濃音・送気音の三項対立は、特に破裂音と破擦音に顕著に現れる。その対応関係が表 31 のようである。

表 31 破裂音（塞音）と破擦音（塞擦音）の三項対立

種類	両唇音	歯茎音	軟口蓋音	塞擦音（歯茎）
平音	ㅍ (p)	ㅌ (t)	ㅋ (k)	ㅍ (pf)
濃音（剛音）	ㅃ (p _h)	ㅊ (t _h)	ㄱ (k _h)	ㅃ (pf _h)
激音	ㅍ (p ^h)	ㅌ (t ^h)	ㅋ (k ^h)	ㅍ (pf ^h)

また、北京官話の音韻体系において、そり舌音、舌面音、舌歯音はそれぞれ音の違いによって単語の意味が区別される音位対立の性質を持つため、独立した弁別素性として機能している。しかし、朝鮮語では、これらの子音は普通に弁別機能を持たず、単なる異音（allophones）として存在するに過ぎない。例えば、韓国語のㄴは音環境によって[s]または [ɕ]ともに発音されるが、この違いによって意味が区別されることはない。例えば、사[sɑ]と시[ɕi]では子音ㄴの発音が異なり、前者は [s]、後者は [ɕ]となるが、このような違いは音位対立ではなく、舌面母音[i]の影響を受けた結果によって生じる音位変異である。韓国語では、このような子音の発音が後続の母音によって変化するのは条件異音（conditioned variation）に分類され、最小対立（minimal pairs）を形成しない。一方、漢語では「西」[ɕi]と「絲」[sɿ]のように、[ɕ]と[s]が語義を区別する音素対立を持つ。同様に、韓国語の舌歯音であるㄷ[t]とㅌ[t^h]の対立は発音部位の違いではなく、気音の有無による違いに基づいている。

李基文（1975）は韓国語の三項対立の子音体系は中古漢語の全清・次清・全濁の区分と比較することができるが、両者の機能には違いがあることを指摘している。姜信沆（1993）も中古漢語の全濁音は朝鮮語の漢字音において有声音としては保存されず、むしろ発音が強化された音位、すなわち「濃音」として定着したと指摘している。また、李基文（1975）によると、韓国語の平音は中古漢語の全清 p, t, k に対応する。激音は中古漢語の次清 p^h, t^h, k^hに対応する。濃音は中古漢語の全濁 b, d, g と一定の対応関係が見られる。一方、摩擦音においてはこの区別は比較的弱く、姜信沆（1993）は、「ㄴ-ㄷ」の対立を除き、韓国語の摩擦音には平音・激音・濃音の三分区別が明確に存在しないことを指摘している。

以上挙げられた漢語と韓国語の音素対立における違いにより、韓国語で漢語音を表記する際には、漢語の発音をそのまま反映することが難しく、韓国語の音韻体系に存在する音を用いて一定の近似的な表記を行うことになる。特に、韓国語の音韻体系には独立したそり舌音が存在しないため、漢語のそり舌音と非そり舌音の対立（例えば、「知」[tʃ]と「基」[tɕ]）を直接表記することが困難である。韓国語では漢語のそり舌音を表記する際にしばしばㅈ[tɕ] やㅊ[tɕ^h]などの舌面音で代用する。例えば、漢字「中」([tʃuŋ])の韓国語における漢字音は「중」[tɕuŋ]と発音され、巻舌破擦音[tʃ]が舌面破擦音[tɕ]に置き換えられていることが分かる。

徳清の『中原音韻』では漢語の声母が二十種類に分類されており、これはこの時期の漢語の口語において全濁音が完全に清音化したことを意味する。

金基石 (2003) の研究によると『翻訳老乞大』および『翻訳朴通事』に見られる声母体系は『四声通解』の 30 声母に比べて簡略化され、全体で 20 の声母のみが保持されている。具体的には全清の見、端、幫、非、精、照母、次清の溪、透、滂、清、穿、曉母、不清不濁の泥、明、微母、および全清の心母と審母が含まれており、その体系は『中原音韻』(1324) や蘭茂の『韻略易通』(1442) に見られる「早梅詩」の声母体系と基本的に一致する。これはこの時期にはすでに全濁声母が完全に消失していたことを示唆している。

中国語の全濁声母が清音化した時期について、学界でいまだに完全に一致な見解が得られていないが、19 世紀の朝鮮時代後期に編纂された漢語資料の時期には、中国語の全濁声母はすでにその清音化が完成され、消失していたことは確かである。本稿で取り上げる朝鮮時代後期のこれらの 4 種類の漢語資料において使用されている濃音表記 sg、ss は明らかに全濁声母を示す存在ではない。

6 中間言語から見る濃音表記

6.1 中間言語と濃音表記

朝鮮時代の初期から中期にかけての漢語対訳資料は比較的規範的であり、その主な理由は当時の音韻体系が中国の韻書、特に当時の漢語の「讀書音」を反映している明代の公的韻書である『洪武正韻』を参照していたことにある。漢語は長期にわたり文白異読の状態が続き、書き言葉と話し言葉の間には顕著な違いが存在し、書面語の変化は口語よりも遅く進行する傾向があった。更に、韻書は官学や学术界によって認定された音韻規範であり、その調整も実際の口語の変化に遅れていた。当時の朝鮮の学者(崔世珍など)は一部の漢語の口語音の変化を意識したものの、なお『洪武正韻』の体系に従って記録していた。しかも、当時の朝鮮人が漢語学習資料を編纂した目的は通訳官の教育にあり、実用性が重視されていた。そのため、朝鮮時代の初、中期の漢語資料は讀書音を保持しつつも、実際の口語音を反映した記録も含まれていた。例えば、朝鮮初期の漢語資料には 2 種類の音注が併記されていることが多い。しかし、朝鮮時代の後期になると、「諺解」類の教科書では左音・右音の両方のハングル音注は用いられなくなり、当時の実際の口語音を反映した一種類の音注のみが記されるようになった。

蔡瑛純 (2002) は、李基文 (1980) ¹⁴⁶の研究をもとに、sg 表記が最初に現れたのは 15 世紀中期で、当時は朝鮮語の濃音を表すために用いられ、19 世紀に入ってから朝鮮の漢語対訳資料に登場していたと指摘している。これによって sg が漢語の実際の発音を記録する目的で創出されたものではなく、朝鮮語の子音体系に使用されていたものが後に漢語の g 声母を表すために転用され

¹⁴⁶ 「ㄱは 15 世紀中葉以後に朝鮮語の聲母為了表現剛音而開始用的，十七世紀中葉以後朝鮮語裏又產生ㄱㅈ，ㄱㅊ 等的變體，於十八世紀前後加以混用。但朝鮮對譯資料中，只有ㄱㅈ在 19 世紀出現，這就是ㅈ的剛音。」—李基文 (1980). 『國語史概説』. 132, 193.

たことが分かった。李基文（1980）は当時¹⁴⁷の朝鮮語において濃音表記は主に動作や語気の強調に用いられ、平音 g とは音韻的な対立を持たなかったと述べている。即ち、19 世紀の朝鮮漢語資料における sg と g の使い分けは異なる音素を区別するものではなく、単なる表記上の変異であった。そのため、朝鮮時代後期の漢語音注に見られる濃音 sg は実際には朝鮮語の音韻変化が漢語の表記に反映されたものであり、必ずしも漢語音体系自体の変化を示すものではないと考えられる。

朝鮮時代後期の 4 種の漢語資料に見られる濃音表記 sg および ss の使用は母語が漢語ではない学習者が第一言語（L1）の影響を受けつつ、目標言語（L2）を習得・処理する過程を反映したものである。このような表記は第二言語習得における学習者が母語（L1）を利用して、目標言語（L2）に接近するための言語表現で、「中間言語（Interlanguage）」の表現である。即ち、非母語話者が漢語を学習・使用する過程で、自身の音韻体系に適応させるために形成された表記手段の一種である。「中間言語（Interlanguage）」という用語は、Selinker（1972）がその論文で最初に提出した概念で、「Interlanguage refers to the separateness of a second language learner's system, a system that has a structurally intermediate status between the native and target languages. (Selinker 1972:209 頁)」と同氏の説明がある。中間言語（Interlanguage）は接辞「inter」と言語「language」から構成されており、その意味は文字通りに「言語の間」、つまり 2 つの言語体系の間にある体系であり、学習者が使用している母語と目標言語の間の過渡的な言語を指す。Selinker（1972）は、「母語—中間言語—目標言語」という発展は外国語習得過程において必ず行われる過程であり、その過程で学習者は母語知識を含むすべての知識を活用して、自身の中間言語体系を発展させることを指摘した。濃音表記の使用は母語の音韻体系・文法・意味構造などの影響を受けた過渡的な状態を示すものである。さらに、後期の資料における濃音表記の使用には一貫性が見られず、一定の混乱が確認される。これは第二言語学習者の中間言語表現が高度に個別化されるという特性によったものがある。即ち、学習者ごとに漢語の音韻体系に対する理解や再現の方法が異なるため、漢語音の表記上にも個人偏向が生じたと考えられる。

中間言語の表現は動的に変化しつつ過渡的な特別な言語体系として、母語から目標言語に段々と近づくのがその基本的な発展方向である。L2 に何か変化や調整が生じれば、中間言語表現も L2 に応じて自然に調整する。李基文（1975）の考証により、ss 表記は漢語北方方言の全濁声母を表すため訓民正音から現れ、全濁声母の消失に伴い、ハングルの ss も共にその機能を失い、15 世紀には徐々に消えていたが、16 世紀に入って語頭音表記の ss として復帰した。16 世紀漢語北方方言の全濁声母が既に失われた状態であるため、この時期に朝鮮側の漢語資料に復帰した ss は L2 の漢語規則の反映ではない。19 世紀の『華音』段階になって、各自並書は訓民正音の時期の ㄱ gg、ㄷ dd、ㅃ bb、ㅅ ss、ㅈ jj、ㅎ hh が存在していた状態から ㅅ(ss) しか残されない状態になった。sg 表記については 19 世紀『華音』の漢語音表記に初めて現れ、sg という声母は元々漢語体系に存在していない、明らかに朝鮮人の母語知識により作られた表現である。

¹⁴⁷ 筆者の理解で、ここでの「当時」は主に 15 世紀中葉を指す。

金基石 (2003) は『華音』や『華語類抄』¹⁴⁸などの朝鮮時代後期の漢語資料におけるハングル
の複合文字の使用方法、特に ss の用法が『朴通事新訳諺解』や『重刊老乞大諺解』などの 15～
17 世紀の文献とは異なることを指摘している。これらの複合文字は朝鮮語の濃音体系と厳密に対
応しているわけでもなく、漢語韻書における全濁声母を完全に表しているわけでもない。つまり、
朝鮮時代後期資料に見られる濃音表記は、朝鮮語の音韻的特徴と完全には一致せず、同時に当時
の漢語音韻の変化を完全には反映したものでもない。これは漢語と朝鮮語の言語接触過程におい
て音韻表記が複雑な変遷をたどったことを裏付けると同時に、第二言語習得において目標言語に
対して適応的な調整が行われるという普遍的な現象を示す事例ともなっている (Odlin, 1989)。

また、これらの資料の編纂者は漢語を学習する過程で、異なる地域の漢語の口語に接していた
可能性があったため、地域方言や個人の発音習慣などの影響を受けて、表記方法が一層多様化し
たと考えられる。さらに、朝鮮時代後期に伝わった多くの漢語資料は写本であり、書写の過程に
おいて、異なる書写者が自身の漢語に関する知識や言語上の感覚に基づき、文字や発音注記を独
自に調整していた可能性がある。そのため、異なる版本間で表記上に差異が生じたと考えられる。
また、これらの写本には書写者自身の聞き取りの誤りや個人的な発音習慣、漢語音韻体系に対す
る理解の違いが反映されていた可能性もあり、そうした要因によって表記の揺れや変異が生じたと
推測される。これにより、音韻表記の不安定性がさらに高まったと考えられる。

したがって、朝鮮時代後期の漢語資料に見られる濃音表記 sg や ss は朝鮮人学習者が漢語を記
録する際、自らの音韻認識に基づいて表記体系を調整した結果であり、漢語自体の音韻体系に本
質的な変化があったことを意味するものではない。すなわち、濃音表記の使用は音韻構造の根本
的な変遷というよりも、表記上の適応的対応の一環と位置づけられるのである。

6.2 「質正」制度と濃音表記

朝鮮半島が歴代、漢文及び漢語教育を重視していることは朝鮮人の漢語の学習に良好な学習環
境を提供した。『新唐書』卷 44 志 34 選舉志上には、「四夷若高麗、百濟、新羅、高昌、吐蕃、相
繼遣子弟入學，遂至八千余人」という記載がある。また、『高麗史』卷 76 に「通文館，忠烈王二
年(1237 年)始置之。令禁內學官等參外年未四十者習漢語……後置司譯院以掌譯語。」という記
載も見られる。以上挙げた漢語に関わる記載から、朝鮮半島の漢語に対する態度が窺われる。

朝鮮時代になって、「然漢音有關事大¹⁴⁹，不可不慮。『世宗實錄』卷 62」という外交上の需要も
あり、漢語官話教科書の正確さを確保し、漢語官話の発展と変化をタイムリーに反映するために、
漢語音声の調整と改善を図る厳密な「質正」制度が設けられた。漢語官話教科書の編纂のため、

¹⁴⁸ 19 世紀末に朝鮮で刊行された漢朝対訳の語彙資料集。全書は天文・地理など 63 のカテゴリーに分かれ、2100 語
以上の漢語語彙を収録している。

¹⁴⁹ 「事大」という言葉は元々儒家の外交理念であり、通常、弱小政権は強大な勢力に対して事大な政策をとり、そ
れにより、自己保全を図るためである。「事大」に対して「字小」(小国を愛護する)ということもある。孫衛國(2002)
の解釈によると、通常、弱小政権は強大な勢力に対して事大な政策をとり、それにより、自己保全を図るためであ
る。

数回の校閲、改訂、質正が行われている。以下「質正」に関する記載の一部を挙げる。

前者承命、質正漢語於頭目戴敬、敬見《老乞大》、《朴通事》曰：“此乃元朝時語也、與今華語頗異、多有未解處。”敬以時語改數節、皆可解讀。請令能漢語者、盡改之。(中略)上曰：“其速刊行、且選其能漢學者、刪改《老乞大》、《朴通事》。”(『成宗實錄』卷122・11年10月乙丑)

命迎接都監郎房貴和、從頭目葛貴校正《老乞大》、《朴通事》。(『成宗實錄』卷158・14年9月庚戌)

世宗朝遼東有一大儒、每行遣申叔舟、成三問等質問、甚有裨益。今遼東有邵奎者、進士出身、曾為眞定知縣、棄官閑居、才德甚高、遼東大人等皆尊敬之。臣入歸時、往觀白塔寺、見壁上有邵奎詩次之。及還來時、臣作律詩六首以贈之、明日邵奎次其詩、且持酒果來尉、與之談話、無所不通。臣意質正官不送中朝、依申叔舟例、使學於邵奎可矣。(『成宗實錄』卷219・19年8月乙卯)

命直集賢殿成三問、應教申叔舟、奉禮郎孫壽山、問韻書於使臣。(『世宗實錄』卷127・32年閏正月戊申)

姜在彦(1996)は「李朝五百年間の対外関係は、基本的には中国(明、清)に対する「事大」、日本「室町および江戸幕府」にたいする「交隣」を二つの柱にしていた。」と述べ、特に「明とのそれは少なくとも観念的には「王道」的自発によるものであった」を強調している。明王朝が倒れたのち、清の時代に入ってから外交面ではなお事大的でありながら、姜在彦(1996)が「人倫および文化面では夷狄視する¹⁵⁰傾向は、近代にいたるまで一貫する潮流となっている。つまり明が清になってからは、中国は「礼楽淪於糞壤、人道入於禽獸。」とみたのである。」と指摘するように、朝鮮半島の「自発的」な大国に仕える「事大」理念は「崇明抑清」¹⁵¹になったことによって、漢語学習の意欲も弱まったであろう。

19世紀の『華音』の時代になると、質正関係の記載は明らかに減少し、質正制度が朝鮮後期において、すでに衰退した状態であることが推測できる。L2学習は外部学習環境、心理的要因、認知方式、語学習ストラテジーなどのさまざまな要因に影響され、学習環境の変化は中間言語に影響を与える重要な要因である。朝鮮時代の漢語質正制度の盛衰はまさに当時朝鮮半島における漢語学習環境が変化していた一例として挙げられる。質正によって漢語学習の正確さ、特に音声上の正確性を保つことで、実際に当時の朝鮮人の外国語学習環境は強化された。質正制度の衰えにより目標言語の漢語からのインプットが減少し、L2の学習環境が弱まっている。加えて、朝鮮人自身の「崇明抑清」の意識の変化に伴い、中間言語体系の停滞を招いており、朝鮮時代後期の漢

¹⁵⁰ 朝鮮半島は清王朝のことを夷狄視する。一筆者注

¹⁵¹ 朝鮮は明、清の藩属国であるが、明王朝と清王朝に対する態度が全く異なる。これは主に朝鮮人が儒学を正統と見なし、明王朝儒学文化へのアイデンティティを持っていたからである。

語資料の音注表記に使われた濃音表記 sg と ss は中間言語の停滞による可能性が高いと推測する。

7 まとめ

『華音』『你呢』『学清』『撮要』の4種の朝鮮時代後期の漢語資料における濃音表記の使用には極めて不均衡な傾向があることが明らかになった。ss 表記と比べて、sg 表記の使用頻度は全体的に少なく、特に『華音』では sg を用いた例字が最も多いものの、それでもわずか9例字にとどまり、しかも各字の用例数も非常に少ない。一方、『你呢』および『学清』では sg 表記が確認されるのは各々1字のみであり、その使用にも明確な音韻的規則性が見られない。また、朝鮮語の音韻体系からも sg の使用を説明する明確な理由は見当たらない。ただし、後期の資料においての g と sg が同一音素として扱われる傾向が強まっていることから、このような表記上の区別は漢語音韻体系そのものの影響によるものではない可能性が高いと考えられる。

漢語の重音の観点から sg および ss の使用例を分析すると、g-sg や s-ss の書き分けは必ずしも漢語の重音規則によって決定されているわけではないことが分かる。それにも関わらず、濃音表記が用いられた例文の中に漢語の重音規則と一致するものが多数存在しており、濃音の使用が強調、強い語気や感情の表現などと密接に関係していることが示唆される。例えば、朝鮮時代後期の四種資料においての「更」が程度副詞として使用される場合にすべての資料で濃音 sg が用いられている。特に、より強い状態を表す際にこの傾向が顕著であることから、濃音 sg の使用がより強い感情や語気を表現することと深く関係していることが裏付けられる。

一方、ss の使用範囲は比較的広く、特に『撮要』や『華音』では ss を用いた例字の一致率が最も高い。これは当時の朝鮮人が漢語の宕攝・假攝・效攝・深攝・山攝・咸攝・止攝・蟹攝・梗攝・臻攝などの韻母を持つ漢字の発音について、ある程度共通の音感を共有していたことを示している。即ち、朝鮮時代後期の漢語学習者においては発音記録の際に個人差が見られる一方で、特定の韻部に関しては共通の知覚的傾向が存在していたと考えられる。

朝鮮語の音韻体系にはそり舌音が存在しないため、漢語の発音を表記する際に現代漢語の s、x、sh に相当する声母は一般的に ㄱ(s) で統一して記される傾向がある。さらに、朝鮮時代後期の漢語資料では ㅅ(ss) も現代漢語の s、x、sh に対応して使用されており、これは当時の朝鮮人が s と ss を基本的に同一音素として捉えていたことを示している。特に注目されるのは後期資料において sh 声母を ss で表記する場合の多くが i 介音を伴っている点である。このことは当時の朝鮮人が ss+i という組み合わせによって sh 声母のそり舌音化の特徴を示そうとした試みであった可能性を示唆している。

『華音』『你呢』『学清』『撮要』の四種の資料における濃音表記 sg や ss の使用状況を比較すると、その分布には明らかな恣意的な傾向が見られる。このような表記の不安定性は主に朝鮮語の表記習慣から生じたものであることが示唆される。同じ濃音表記の例字であっても、資料ごとに音注が異なる理由としては、以下のいくつかの要因が考えられる。まず、各資料が基づく漢語の

音韻体系そのものに一定の差異が存在しており、こうした差異が表記上の相違をもたらした可能性がある。特に写本資料においては、体系的な校正が行われていない場合、誤記が生じる可能性がある。また、当該写本が複数の書写者によって作成された場合には、特定の漢字に対して書写者が異なる理解を持って、それが表記上に個人的な差異が存在していた可能性も考えられる。即ち、写本資料における表記方式、特に濃音表記の使用は書写者が自身の言語感覚や母語などに影響された可能性がある。第二言語の習得過程では学習者ごとに経験や接触する言語環境、母語からの影響が異なるため、それぞれに独自の「中間言語」体系が形成され、その結果結果として表記にも個人差が生じることがある。朝鮮語の音韻体系は漢語とは異なるものの、朝鮮時代後期の漢語学習者はさまざまな表記法を用い、できる限り正確に漢語の音声特徴を記録しようとしていた努力は第二言語学習者が異なる言語間の音韻体系を移行する際に見られる適応的調整の一例と考えられる。

第6章 結論

本稿では、朝鮮時代後期の漢語学習資料である『華音』『你呢』『学清』『撮要』の四資料の音注に見られる濃音表記 sg および ss について、詳細な整理と考察を行った。第2章から第4章では、それぞれの資料における sg と ss 表記の使用状況を整理して分析した。音節レベルにとどまらず、フレーズ、例文のレベルにまで考察の範囲を広げたうえで、中国語の文の焦点や語の重音の規則を合わせて、sg と ss の使用理由とその特徴について検討した。第5章では、これら四資料の音韻的特徴を把握した上で、四資料が共通する sg と ss で表記された漢字に着目し、資料間の比較考察を行った。以下に、本稿の主な結論をまとめる。

1 四資料に見られる濃音 sg-について

朝鮮時代後期の漢語学習資料である『華音』『你呢』『学清』『撮要』の四種類の資料において、濃音表記 sg が用いられている漢字の数は全体として非常に少ない。sg 表記の例字が最も多く見られる『華音』であっても、その数はわずか9字にとどまる。次いで『撮要』には6字が確認されている。一方、『你呢』と『学清』では、「更」のみが sg 表記で表記されている。さらに、『你呢』における「更」には gyng と sgyng の二種類の表記が見られ、平音表記 g と濃音表記 sg が混在しているのに対し、『学清』では ggng に統一されている。これらの四資料において sg 表記が用いられている漢字は主に「見母」字である。「溪母」に属する漢字に sg が使用される例はごくわずかで、これは主に朝鮮の漢字音体系の影響によるものであると考えられる。また、4 資料に共通する「更」字には特定の使用傾向が見られる。表 32 は『華音』『你呢』『学清』『撮要』における「更」の使用例を示したものである。

表 32 『華音』『你呢』『学清』『撮要』における「更」の用例

資料	用例
『華音』 (2 例)	我 b(本來)a(無心進京)，排不得 c(朋友的臉)，b(巴不得)隨 c(他)走，那麼 b(就更 sgyng)a(好)。(上 17a-17b)
	b(咳)有 b(一種)c(造化)b(更 sgyng)a(好看)，拿 b(一箇)c(銅盆)盛 b(一盆)c(水)，把 c(石頭)沉 b(得那盆裏)，b(立刻就)發雲發霧的，好像 c(神仙洞裏)一般樣。(下 26b)
『撮要』 (5 例)	橫豎用 d(不了)a(三更 ging 天的)工夫 b(可 ke 以)a(到)c(門上)d(去)。(16a)
	是得，我 b(還比你更 sgyng)a(忙)啊。(20a)
	e(這個)時候兒 a(有)c(二更 gyng 天)咧 a(沒有)啊。e(那裡)a(有)c(二更天)，連一更 gyng 天也 b(還)a(沒有)呢。(20a)
	e(這個)時候兒 a(有)c(二更 gyng 天)咧 a(沒有)啊。e(那裡)a(有)c(二更 gyng 天)，連一更 gyng 天也 b(還)a(沒有)呢。(20a)

	e(這個)時候兒 a(有)c(二更 gyng 天)咧 a(沒有)啊。e(那裡)a(有)c(二更 gyng 天), 連一更 gyng 天也 b(還)a(沒有)呢。(20a)
『你呢』 (2 例)	我 a(瞧)b(你那個)防想兒, b(不要別的 只要現銀子的)意思呢! 你那嗎 b(寡)a(想)c(便宜)咧, b(別)a(說是)c(我)啊, 管他 e(誰)也 b(更 gyng 不肯依你)作。(15a)
	俗言 a(道), b(先)a(斷)b(後)a(不難), 咱們 b(嗎(口尚) 哺理都)a(打開瞧一瞧), b(寡)a(調出)c(不好的)d(來), 剩不多小 a(算)c(多小), a(點點)c(數兒)a(起)c(票)d(來), 却不省 b(明個的)嘮道嗎, 那怕連 c(一張)也 a(沒有)e(甚嗎)c(調頭兒)否咧, 我 b(咳比你更 sgyng)a(喜歡)哪。(16b)
『学清』 (2 例)	我 a(瞧)b(你那個)防想兒, b(不要別的 只要現銀子的)意思呢。你那個 b(寡)a(想)c(便宜)咧, b(別)a(說是)c(我)呀, 管他 e(誰)也 b(更 ggyng 不肯依你)作。(8b)
	俗言 a(道) b(先)a(斷)b(後)a(不難), 咱們 b(嗎啲哺哩都)a(打開瞧), b(寡)a(調出)c(不好的)d(來), 剩下的多小 a(算)c(多小), a(点点)c(數兒)a(起)c(標)d(來), 却不省 b(明個的)嘮道嗎。那怕連 c(一張)也 a(沒有)e(甚嗎)c(調頭)否咧, 我 b(咳比你更 ggyng)a(喜歡)哪。(10b-11a)

「更」が副詞として否定表現を伴わない場合に濃音表記が使われ、例えば、『華音』の(上 17a-17b)「更好」、(下 26b)の「更好看」、『撮要』の(20a)「更忙」、『你呢』の(16b)「更喜歡」などの例が挙げられる。否定表現を伴う場合には濃音が使われず平音 g で表記されている。例えば、『你呢』(15a)の「管他誰也更(gyng)不肯依你作。」がある。また、量詞として使用される場合には平音表記が用いられる傾向が見られる。『撮要』において、「更」が夜の更次(古代中国の夜間の時刻単位)を表す時間名詞の短語中に現れる場合はすべて平音表記が用いられている。このような量詞としての「更」の用法は『華音』に「睡到夜半三更(jing)裏店裏就叫喚起來咧。(上 13a)」の 1 例も確認された。ただし、量詞としての「更」は『華音』で j が使われ、『撮要』で g が使われた理由として、『華音』が記録する音韻体系が見組の口蓋化の状態をより強く反映したものであった可能性が考えられる。

漢字の意味や用法が明らかに異なる場合、朝鮮人はそれを区別するために異なる表記を用いる傾向があった。「更」の音注に現れた使い分けの現象は当時の朝鮮人が意味の違いに応じて表記を使い分ける習慣を受け継いでいたことを示唆していると考えられる。また、この使い分けは濃音の性質とも関連がある。濃音は強い感情や語気を表現する特徴を持つ。一方、「更」が量詞として時間名詞中に現れる場合に強い語気を伴うことは考えにくい。しかし、程度副詞として使用される場合はその表現に強調のニュアンスが含まれることが多い。そのため、程度を表す副詞「更」には濃音 sg が用いられたと考えられる。

音節を単位としての分析以外に、本稿では漢語の語重音や文の焦点から、語、フレーズ、例文といった単位でも sg 表記が用いられた漢字を考察した。『華音』に見られる 9 字のうち、「缸」「乾」の 2 字を除けば、すべての漢字はその用例がいずれも漢語の文の焦点の位置とほぼ一致しており、濃音表記 sg の使用と文の焦点部分との関連性が示された。また、『華音』において sg 表

記の漢字が現れる語やフレーズにおいて、漢語の語重音との高度な対応関係が確認された。

『你呢』における「更」と「跡」の2字のうち、「跡」は「話是風筆有跡」の1例のみが確認され、これは漢語の文の焦点との一致が見られないが、語重音とは一致している。一方、「更」はその用例が文の焦点と語重音のいずれにも完全に一致している。『学清』では「更」の1字のみが濃音 sg で表記されており、『你呢』と同様に、漢語の文焦点と語重音の両方に対応している。濃音表記 sg の使用はこれらの3資料において、漢語の重音と明確な対応関係が見られるが、『撮要』では異なる傾向が見られる。

『撮要』において sg で表記された漢字は「跟」「剛」「更」「懇」「赶」「乾」の6字が確認された。そのうち「懇」と「乾」の2字の音注の使用状況が比較的安定しており、濃音 sg のみが見られ、濃音と平音の混用は見られない。また、「懇」と「乾」の2字のいずれも漢語の文の焦点部分と対応している。「剛」と「更」の2字もすべての用例が漢語の文の焦点部分と対応しているが、この2字には濃音 sg と平音 g の混用が見られる。特に『撮要』における「更」は声母上の濃音と平音の混用だけでなく、意味の違いによって韻母にも大きな差異が見られる。また、「跟」と「赶」の2字はその音注に濃音・平音の混用が存在しているだけでなく、漢語の文の焦点との対応も少ない。ただし、他の3資料の漢語の文の焦点パターンとの明確な対応傾向が示されているのに対して、『撮要』において漢語の文の焦点パターンとの対応が少ないという状況が見られるのは、同資料の音注がより複雑であることによる可能性が高い。全体的に見ると、朝鮮時代後期の漢語資料における sg 表記は漢語の重音、特に語重音との対応関係がかなり明確であることが分かる。これは sg の使用は漢語の語重音を提示するためであった可能性が高いと考えられる。

全体的に見ると、朝鮮時代後期のこれらの4種の漢語資料における濃音 sg で表記された漢字は非常に少数にとどまり、中でも『華音』は最も安定している。これに対して『撮要』の音注は最も不安定で、同一漢字でも3種類、あるいはそれ以上の異なる表記が使われている。これにより、朝鮮時代後期の漢語資料における濃音 sg の使用が極めて不安定であることが分かる。このような不安定さは『華音』が公式の刊本であるのに対し、他の3資料はすべて写本であることに起因していると考えられる。特に『撮要』は複数の書写者によって完成された可能性が高く、同一漢字に対する異なる音注はまさに書写者の個人的な表記偏向を反映したものと考えられる。

sg の使用について、漢語の音韻体系に基づく明確な使用根拠は見出すことはできず、むしろ漢母字が sg で表記されたことは朝鮮語漢字音と一致している。そのため、本稿は濃音表記 sg の使用は当時の朝鮮人が外国語の漢語を学習する過程で作った「中間言語」現象の一例であると考えられる。

即ち、漢語音注に使用された sg は当時の朝鮮人が第二言語 (L2) である漢語を学習する過程に、母語である朝鮮語 (L1) の下位体系の知識を活用し、目標言語の漢語に近づこうとした努力の結果と理解できる。また、中間言語は学習者個人によって異なるため、漢字に対する聴覚上の感覚や表記上の再現の仕方にも個人差が生じる。したがって、同一の漢字であっても、同一資料内、あるいは異なる資料間において sg と g のような表記の揺れが存在している。

2 四資料に見られる濃音 ss-について

『華音』『你呢』『学清』『撮要』において、ss で表記された例字の数は sg よりもはるかに多い。後期朝鮮の漢語資料では漢語の s、x、sh 声母がすべて入(s)で対応されるため、ss の表記状況はやや複雑である。これらの四種の資料における ss 表記の漢字の音韻的特徴は基本的に『華音』の声母体系および韻攝の範囲内に収まっている。また、sg と同様に、『華音』において ss で表記される漢字の数が最も多く、使用の安定性も相対的に高い。これは『華音』が刊本として流通したことと関係があると考えられる。『撮要』にも ss 表記の漢字が 20 字確認されるが、その注音の状況は非常に混乱している。同じ漢字でも複数の異なる表記が共存しており、例えば「三」は ssan、ssar、ssian、san の 4 種があり、「小」は ssia、ssiau、ssau、ssiao、sao、siao の 6 種の表記が存在している。第 4 章で『撮要』における濃音表記の整理分析を行った際に指摘したように、『撮要』は複数の書写者によって完成された可能性があったため、各書写者の漢語習熟度の違いや特定の漢字に対する音韻的認識の差異があり、このような極めて不安定な表記が混在する結果となったと考えられる。

ss 表記の例字は後期の四種の資料においても一定の使用傾向を示している。特に、数詞「三」「四」「十」は濃音 ss で表記されることが多い。しかし、『華音』では、数詞の連続の有無にかかわらず、「三」「四」「十」という数詞が現れる場合に基本的に濃音 ss を用いた表記が採用されている。例えば、「你們府上人口多少麼。有三 ssian 十 sy 多口人。(上 4a)」、「咳有那丫鬟老媽奴才跟班伺候人等，都在一內算起來，有箇四 ssy 十多口人。(上 4a-4b)」、「我要買幾塊時表三 ssian 四 ssy 箇掛鐘呢。(上 32a)」などが挙げられる。

一方、『華音』以外の 3 冊では数詞が連続して現れる場合に最初の文字のみ濃音表記が用いられ、第 2 字以降では基本的に濃音が使用されない傾向が見られる。例えば、第 3 章で挙げた『学清』の「四 bsy 十 si 多間大房」、「三 ssam 十 si 多個人」、「三 ssan 十 si 多年」などの例から、数詞の最初の文字にのみ濃音表記が用いられ、それ以降の文字には平音が使用される 傾向が確認できる。また、方位詞「下」はこの四種の資料において全て濃音表記が用いられている。しかし、「上」に関しては、『華音』の 66 例すべてが濃音表記であるのに対し、他の三冊では異なる表記傾向が見られる。具体的には、『你呢』の会話文に 1 例のみ濃音「ssiang」で表記された例があるものの、それ以外のすべては平音「s」が使用されている。

また、本稿では濃音表記 ss に i 介音が後続する現象にも注目し、その点についても考察をした。ss+i 介音のパターンは『華音』に最も多く見られる。特に漢語の s 声母に対応する漢字において、音注に i 介音が現れる例が多く確認される。これは、当時の朝鮮人が漢語の東北方言の平舌音とそり舌音を混用して発音した影響を受け、s を sh のように発音したためであると考えられる。このような場合、ss 表記の後に現れる i 介音は舌尖後母音を示す記号と見なすことができると思う。ss 表記において現代漢語の x 声母に対応する漢字は、ss+i の構造を最も多く持っている。ただし、x 声母に対応する漢字において i 介音が音注に現れるのは、濃音表記の使用による追加ではなく、その韻母にもともと i 介音が含まれているためである。例えば「現」「縣」「歇」

などが該当する。このような場合、「ss+i」の構造は特別な表記形式には当たらない。

なお、『華音』において ss で表記され、現代漢語の sh 声母に対応する漢字は全部で 11 字確認されている。中古漢語の生母に属する「山」「殺」「紗」「爽」「篩」などの漢字は、19 世紀の朝鮮資料において濃音表記 ss と i 介音を伴う二重母音の形で表記されている。これは、朝鮮人にとって馴染みのないそり舌音を表現しようとした努力である。書母に属する漢字の表記にも同様の仕組みが見られる。したがって、『華音』において現代中国語の sh 声母に対応する ss 表記の漢字に見られる「ss+i」介音の組み合わせは声母のそり舌音化を示すために i 介音が付加された比較的特殊な表記法といえる。この場合、音注に加えられた i は、実は漢語における「舌尖後母音」に相当するものである。また、『你呢』および『学清』においても、濃音表記 ss の後に i 介音が付く場合は主に s 声母と sh 声母に対応しており、これも漢語のそり舌音を表すためである。さらに、『撮要』に見られる ss 表記の例字の多くも i 介音を伴っており、この ss+i の組み合わせの特徴は『華音』と一致している。

sg 表記の考察と同様に、本稿でも分析の単位を拡張し、ss 表記が用いられた例字を含む例文やフレーズについても分析を行った。その結果、文の焦点部分とはある程度の一致が見られたものの、語重音と濃音表記 ss との対応関係の方がより明確であることが確認された。ただし、注意すべき点として、一部の資料、例えば『撮要』では、同じ重音パターンであっても、同一漢字が濃音 ss と平音 s の両方で表記されている場合がある。これは、s と ss が音素的な対立ではなく、その使用にかなりの恣意性があることを示している。

朝鮮時代後期の漢語資料における ss 表記の使用はある程度まで漢語の音韻変化、例えば、漢語の口蓋化、そり舌音化などの現象を反映することを目的としていたものの、実際にはこのような濃音表記そのものは漢語の音韻体系に基づいたのではなく、むしろ朝鮮語の音韻体系を参照してなされたものである。即ち、学習者が自らの母語体系を活用しながら、できる限り目標言語である漢語に近づこうとした直接的な表れであるといえる。したがって、本稿では ss 表記もまた中間言語の一表現であると考えられる。

しかし、朝鮮時代後期の資料の編纂者や書写者は基本的にすべて朝鮮人であり、同一民族の学習者は同じ、あるいは極めて類似した L1 の下位体系を共有しているため、学習者が漢語を学習する際に共通の困難が生じる可能性がある。例えば、漢語のそり舌音や口蓋化声母の表記などが挙げられ、当時の朝鮮人が L2 の学習における共通の困難を示している。後期の四種の資料において ss で表記される例字の数が多く、しかも共通する例字も多いのは当時の朝鮮人にとって、現代漢語の s、x、sh に相当する声母の処理が難しかったことを物語っている。このような ss を用いた特別な表記の状態も sg と同じく、当時の朝鮮人が漢語を学習する過程で生み出した中間言語の一種である。そして学習者ごとの個体差も指定しているため、同じ ss 表記の漢字であっても、資料ごとに異なる表記が見られるのである。

3 今後の課題

本稿は朝鮮時代後期の漢語資料である『華音』『你呢』『学清』『撮要』という4資料を対象として、これらの資料の漢語音注に見られる濃音表記 sg 及び ss について、詳細な整理と一定の考察を行った。本稿が行った濃音表記の整理は現時点において最も網羅的かつ詳細なものであると考えられる。濃音で表記された各漢字について、ローマ字転写や音韻地位の整理だけでなく、中国語の文の焦点や語重音の観点からすべての用例を分析した。このような資料の詳細な整理は今後、朝鮮後期の漢語資料に見られる濃音表記の使用について研究を進めようとする研究者にとって、本稿の整理結果をさらに深化させるための参考となることを期待している。

朝鮮時代後期の漢語資料における濃音表記の使用はすでに研究者たちの関心を集めているものの、これまでの考察は主に音節を対象とし、漢語音韻学の枠組みに基づいて展開されたものがほとんどであった。これに対し、本稿は従来の音節単位での考察にとどまらず、分析の単位を語彙、フレーズ、更に文単位での分析へと視点を広げ、より広い視角から濃音表記の使用とその特徴について検討してみた。このような研究単位の拡大もまた、今後の研究に参考を提供するものと考ええる。

しかし、本稿では sg および ss の用例について詳細に整理を行ったが、分析の対象は主にこれら4資料の会話文の部分にとどまっている。特に『華音』の付録部分については、本文とは異なり、ハングル音注が一種類ではなく、「左音」と「右音」の両方が記されており、本文よりやや古い音韻の状態を反映している可能性がある。『華音』の付録部分は一般的な資料とは性格を異にするやや特異な資料と見なされ、本稿ではまだ手付かずのままで、今後の研究課題にしたい。

また、見曉組に見られる口蓋化、m 韻尾の消失、そり舌音化など、漢語の音韻変化も本稿で取り上げた4資料において確認されるが、それらの記録には一定の混乱が見られる。このような混乱が生じた理由として、本稿では『華音』を除く『你呢』『学清』『撮要』の3資料がいずれも写本であることが関係していると考えられる。特に『撮要』は複数の書写者によって作成された可能性が高く、書写者が特定の漢語音節に対して持っていた個人的な理解の違いや表記選択上の個人的な偏好が顕著に表れていると推測される。ただし、こうした書写者の個人差に関しては、今後さらなる分析と検証が必要である。更に、本稿では朝鮮時代後期の漢語資料において用いられる濃音表記は中間言語の一表現であると考えている。そのため、sg 及び ss の使用を語彙・語句・文など漢語側からの分析だけでなく、朝鮮語側からも濃音表記の使用を考察することも今後の重要な研究課題の一つであると言える。

朝鮮時代後期のこれら4種の資料においては、sg や ss で表記される例字の中に共通する漢字がいくつか存在する。中には単に濃音表記が一致しているだけでなく、音注そのものが四資料すべてにおいて完全に一致している例も確認される。本稿では、これについて当時の朝鮮人が特定の漢字に対して比較的一貫した聴覚的印象を持っていたことが一因であると考えられる一方、もう一つの可能性として、これらの資料が編纂された際に共通の参照資料が存在していたことも想定される。この点については、朝鮮時代初期及び中期の資料をより包括的に整理・分析する必要がある。

る。これは非常に大規模な課題であるが、同時に今後の明確な研究方向の一つとなる。

更に、『華音』『你呢』『学清』『撮要』はいずれも朝鮮時代後期の代表的な対音資料であり、その中に付されたハングル音注は、ある程度 19 世紀末の近代漢語を直接記録したものとみなすことができる。しかし、19 世紀末の朝鮮半島は歴史上の大きな転換期にあった点にも注意する必要がある。1895 年以降、朝鮮と清王朝との宗藩関係はすでに終焉を迎えていた¹⁵²。このような社会的背景の変化が、朝鮮半島における漢語学習に対する態度にいかなる影響を及ぼしたのかについては、検討に値する今後の課題である。本稿は上記四種の資料に見られるハングル音注に集中しており、朝鮮時代後期の歴史的背景や社会史的要因については論じていない。この点は、今後、朝鮮時代後期の対音資料を研究する際に意識すべき重要な研究方向の一つである。

¹⁵² 『日清両国講和条約・第一條』を参照。

<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F0000000000000016162>

参考文献：

- 伊藤英人(2002)。「高宗代司訳院漢学書字音改正について-「華語類抄」の字音を通して-」,『朝鮮語研究』,1:129-146.
- 伊藤智ゆき(2007).『朝鮮漢字音研究』.東京:汲古書院.54.
- 鵜殿倫次(1985).『華音啓蒙諺解』の漢字音注の特質」.愛知県立大学外国語学部紀要第18号(言語・文字編).153-198.
- 鵜殿倫次(1992).『華音啓蒙諺解』入声字の音注(1)ㄷとㅂの書き分け」.愛知県立大学外国語学部紀要第24号(言語・文字編).232-250.
- 鵜殿倫次(1994).『華音啓蒙諺解』入声字の音注(2)ㅈとㅊの書き分け」.愛知県立大学外国語学部紀要第26号(言語・文字編).218-241.
- 鵜殿倫次(1995).『華音啓蒙諺解』入声字の音注(3)ㅅ, ㅆ, ㅈ(ㅊ)の書き分け」.愛知県立大学外国語学部紀要第27号(言語・文字編).388-409.
- 遠藤光曉(1984).『翻譯老乞大朴通事』里的漢語聲調」.『語言學論叢』,13:162-182.
- 遠藤光曉等(2009).『譯學書文獻目錄』.ソウル:박문사(博文社).
- 延世大學校東方學研究所(1961).『高麗史(中)志・年表、卷76百官』.京畿道坡州市:景仁文化社.678-679.
- 汪榮寶(1923).「歌戈魚虞模古讀考」.『國學季刊』2:241-263.
- 太田辰夫(1953).「老乞大の言語について」.『中国語学研究会論集』1:1-14.
- 小倉進平著・河野六郎補注(1999).『増訂補註朝鮮語学史』.東京:株式会社ゆまに書房.559.
- 王力(1980).『漢語史稿』.北京:中華書局.
- 王力(1985).『漢語語音史』.北京:中国社会科学出版社.
- Odlin, Terence(1989). *Language Transfer: Cross-Linguistic Influence in Language Learning*. Cambridge University Press.
- 王博・王長元(1991).『關東方言詞匯』.長春:吉林教育出版社.
- 王克平(2009).『朝鮮与明外交关系研究—以「詩賦外交」為中心』.延邊大学.【博士論文】
- 汪維輝(2003).「关于『訓世評話』文本的若干問題」.『語言研究』,4:55-61.
- 汪維輝編(2005a).『朝鮮時代漢語教科書叢刊・華音啓蒙諺解』.北京:中華書局.
- 汪維輝編(2005b).『朝鮮時代漢語教科書叢刊・華音啓蒙諺解解題』.北京:中華書局.
- 汪維輝(2005c).『「老乞大」諸版本所反映的基本詞歷時更替』.『中国語文』,6:545-576.
- 汪維輝・遠藤光曉・朴在淵・竹越孝編(2011).『朝鮮時代漢語教科書叢刊續編上・華音撮要解題』.北京:中華書局.173.
- 汪維輝(2018).「近代官話詞彙系統的形成—以『訓世評話』与『老乞大』『朴通事』的比較為出發点」.『南開語言學刊』,1:2-18.
- 太田辰夫・陳曉(2013).「論清代北京話」.『語言學論叢』,2:352-368.
- 川瀬侍郎(1936).『滿洲土語研究』.(筆者未見、岳輝(2006)は参考文献に未収録)

- 學習院東洋文化研究所(1956).『世宗實錄』.卷 62 十五年十一月戊子.東京:學習院東洋文化研究所. 318.
- 學習院東洋文化研究所(1956).『世宗實錄』.卷 127 三十二年閏正月戊申.東京:學習院東洋文化研究所. 713.
- 學習院東洋文化研究所(1958).『成宗實錄』.卷 122 十一年十月乙丑.東京:學習院東洋文化研究所. 480.
- 學習院東洋文化研究所(1958).『成宗實錄』.卷 158 十四年九月庚戌.東京:學習院東洋文化研究所. 100.
- 學習院東洋文化研究所(1958).『成宗實錄』.卷 219 十九年八月乙卯.東京:學習院東洋文化研究所. 668.
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996).『言語学大辞典』第 6 卷・術語編.東京:三省堂. 1114.
- 何亞南・蘇恩希(2007).「試論『你呢貴姓(學清)』的語料價值」.『南京師大學報(社會科學版)』. 2: 154-160.
- 郭錫良編著(2010).『漢字古音手冊』.北京:商務印書館.
- 岳輝(2006).『華音啓蒙諺解』和『你呢貴姓』的語言基礎」.『吉林大學社會科學報』. 4:149-154.
- 岳輝・李無未(2007).「19 世紀朝鮮漢語教科書語言的干擾」.『民族語文』 5: 30-33.
- 岳輝(2008).『朝鮮時代漢語官話教科書研究』.吉林大學.【博士論文】
- 金基石(1997).「朝鮮翻譯韻書中所反映的近代漢語/m/尾韻小時的年代—兼論“怎”“甚”兩字的讀音」.『延邊大學學報(社會科學版)』. 4:130-134.
- 金基石(1999).「朝鮮對音文獻淺論」.『民族語文』. 5:9-18.
- 金基石(2003).『朝鮮韻書與明清音系』.牡丹江:黑龍江朝鮮民族出版社. 13、84-232.
- 魏洪(2012).「近三十年『老乞大』諸版本研究綜述」.『東亞文學與文化研究』. 280-288.
- Kim, Mi-Ryoung(2000). *Segmental and Tonal Interactions in English and Korean: A Phonetic and Phonological Study*. Ph. D. dissertation, The University of Michigan.
- 姜信沆(1978).『華音啓蒙諺解』の中の字音体系」.延世大學校國學研究所.『東方學志』.
- 姜信沆(1993).『ハングルの成立と歴史』.東京:大修館書店. 33.
- 姜在彦(1996).『姜在彦著作選第 III 卷・朝鮮の開化思想』.東京:明石書店. 80.
- 遇笑容・曹廣順(2013).「『訓世評話』中的特殊語言現象及其語言性質」.『歷史語言學研究』:152-161.
- 胡明揚(1980).「『老乞大諺解』和『朴通事諺解』中所見的通考對音」.『語言論集』. 1:66-77.
- 胡明揚(1984).「『老乞大』復句句式」.『語文研究』. 8:35-40.
- 黃明明(2004).「600 多年前的漢語對外教學觀『老乞大』『朴通事』的編寫特點及其理論價值」.『無錫教育學院學報』 4:44-47.
- 河野六郎(1968).『河野六郎著作集 2—朝鮮漢字音の研究』.東京:平凡社.
- 蔡瑛純(2002).『李朝朝漢對音研究』.北京:北京大學出版社. 39-51.
- 佐藤晴彦(2002).「旧本『老乞大』の中国語史における価値」.『中国語学』 卷 249: 20-41.

- 更科慎一(2005).「19世紀末朝鮮の北方漢語資料『華音撮要』の研究—ハングル音注を中心に—」, アジアの歴史と文化卷9, 63-103.
- 蔡夢麒(2021).『廣韻校釋』.北京:中華書局.
- 周祖謨(1966).「宋代汴洛音考(『問學集』下)」.北京:中華書局.
- 蔣紹愚(2005).『朝鮮時代漢語教科書叢刊·序』.北京:中華書局.
- 愼鏞權(신용권)(2014).「『華音啓蒙諺解』의 漢語音 표기 연구」.『中國文學』81: 149-176.
- 徐烈炯·劉丹青(1998).『話題的結構與功能』.上海:上海教育出版社.
- 徐烈炯·潘海華(2005).『焦點結構和意義的研究』.北京:外語教學與研究出版. 11-18.
- 徐世榮(1990).『北京土語辭典』.北京:北京出版社.
- 鋤田智彦(2007).「『重刊老乞大諺解』三本に見える声調を表す傍點について—上声の連讀變調を中心に」『中国文学研究』33:69-82.
- Selinker, Larry(1972). *Interlanguage*. *IRAL: International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 10:209-231.
- 孫衛國(2002).「論事大主義與朝鮮王朝的對明關係」.『南開學報·哲學社會科學版』.04: 67.
- 蘇力(2004).『原本『老乞大』歷史學研究』.中央民族大學.【修士論文】
- 曾昭聰(2007).「『老乞大』等朝鮮時代漢語教科書語言研究綜述」.『綿陽師範學院學報』4:69-73.
- 臺灣開明書店(1962).『二十四史·明史』.外國一·朝鮮.臺北:臺灣開明書店. 7905.
- 竹越孝(2018).「朝鮮時代漢語教材的内部差異—以「是」的用法為例」.『南開語言學刊』1:28-36.
- 武田冒一·市川熹(1991).「日本語文音声におけるプロミネンスの韻律的特徴の解析」.『日本音響學會誌』47(6): 386-396.
- 陳高華(1995).「从『老乞大』『朴通事』看元与高麗的經濟文化交流」.『歷史研究』.3. 45-60.
- 趙元任著·呂淑湘譯(1979).『漢語口語語法』.北京:商務印書館. 23-28.
- 張伯江·方梅(1996).『漢語功能語法研究』.南昌:江西教育出版社.
- 張美蘭(1998).「『訓世評話』的詞語考釋」『南京師大學報(社會科學版)』.3. 135-138.
- 張美蘭(2011).「19世紀末北京官話北京下的兩部朝鮮漢語教材」.『吉林大學社會科學學報』2:63-70.
- 張魯原(2011).『中華古諺語大辭典』.上海:上海大學出版社. 149.
- 中國社會科學院語言研究所詞典編輯室編(2016).『現代漢語詞典』第7版.北京:商務印書館. 546.
- 陳曉(2013).「清朝の北京語の尖音團音について」.『方言』3:166-172.
- 程相文(2001).「『老乞大』和『朴通事』在漢語第二語言教學發展史上的地位」.『漢語學習』2. 55-62.
- 丁喜霞(2018).「關於『訓世評話』中的「非漢語用法」」.『中國語文』2:236-243+256.
- 丁樹聲編錄·李榮參訂(1981).『古今字音對照手冊』.北京:中華書局.
- 唐作藩編著·池田武雄譯(1962).『中國語音韻學研究の手引き』.京都:京都府立大學中國文學研究室. 48.

- 唐作藩(2011).『漢語語音教程』.北京:北京大学出版社.
- 藤堂明保(1960).「ki と tsi の混同は 18 世紀に始まる」.『中国語学』94 : 1-36.
- 中村雅之(2006a).「翻訳老乞大朴通事の左側音の入声表記について」.『KOTONOHA』41 : 1-2.
- 中村雅之(2006b).「翻訳老乞大朴通事の右側音」.『KOTONOHA』42 : 1-3.
- 任玉函(2013).『朝鮮後期漢語教科書語言研究』.浙江大学.【博士論文】
- 日本中国語学会(2022).『中国語学辞典』.東京:岩波書店.
- 朴在淵・周癸祥校注(2002).『你呢貴姓·学清』.韓國, 忠南牙山市:鮮文大學校: 中韓翻譯文獻研究所.
- 麥耘(2009).『音韻學概論』.南京:江蘇教育出版社. 154.
- Halliday, Michael, A. K (1967). *Notes on transitivity and them in English*. *Journal of Linguistics*. 3:199-244.
- 馮勝利(2000).『漢語韻律句法学』.上海:上海教育出版社. 114-120.
- 福田和展(1995a).「『你呢貴姓』の言語に関する初歩的分析」.『語学教育研究論叢』(大東文化大学) 12 : 189-207.
- 福田和展(1995b).「『你呢貴姓』翻字」.東京:好文出版.『中国語学研究・開篇』13:113-134.
- 宮脇賢之介(1922/1995).『家庭支那語』.六角恆廣編『中國語教本類集成』第 5 集第 4 卷¹⁵³. 東京:不二出版.
- 楊耐思(1991).「論近代漢語 m 韻尾消變的時限」.『古漢語研究』4.
- 姚駿(2008).『『老乞大諺解』朝鮮語語音研究』.北京大学.【博士論文】
- 李基文著, 藤本秀夫訳(1975).『韓国語の歴史』.東京:大修館書店. 33、55-56、143.
- 李基文(1980).『國語史概説』.ソウル:塔出版社. 132, 193.
- 李新魁(1983).『中原音韻音系研究』.河南:中州書畫社.
- 李新魁(1991)「漢語全濁聲母的演變」.中国語言學報 3.
- 李新魁(1997a).「近代漢語全濁聲母的演變」.『李新魁音韻學論集』: 181-205.
- 李新魁(1997b).『李新魁音韻學論集・普通話語音發展述略』.汕頭:汕頭大學出版社.
- 李得春(2000).「介紹一份 19 世紀末的漢朝對音資料—『華音啓蒙』卷後的「華音正俗變異」」.『東疆學刊』3 : 84-89.
- 李得春(2003).「韓國漢字音聲母系統的幾個特徵」.『延邊大學學報』. 36 : 94-99.
- 李泰洙(2000a).「『老乞大』四種版本從句句尾助詞研究」.『中國語文』1 : 47-56.
- 李泰洙(2000b).『『老乞大』四種版本語言研究』.中国社会科学院研究生院.【博士論文】
- 李可・邢永革(2018).「從『原本老乞大』和『朴通事諺解』看朝鮮時代的漢語教學情況」.『文學教育』6:166-168.
- 林燾(1987).「北京官話區的划分」.『方言』3:166-172.
- 林智凱(2021).「『華音啓蒙諺解』中的三個音韻議題」.2021 第四屆韓漢語言學國際學術會議後論

¹⁵³ <http://www.fujishuppan.co.jp/wordpress/wp-content/uploads/2011/11/tyugokugokyohonruisyusei.pdf>

文集 臺北：臺灣學生書局. 385-401.

劉堅(1992/2005). 『『訓世評話』中所見明代前期漢語的一些特點』. 『劉堅文集』. 北京:中華書局. 130-142.

[ウェブサイト]

徐居正(1486). 『筆苑雜記』: <https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00023634>

『華音啓蒙諺解』東京大学文学部小倉文庫電子ファイル画像:

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogura/document/43651306-7b95-4ca6-87b8-23d4c9f4c37d#?c=0&m=0&s=0&cv=2&xywh=1651%2C8%2C2615%2C1560>

『華音撮要』東京大学文学部小倉文庫電子ファイル画像:

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogura/document/f8f74306-a40f-4d7d-9305-4a8f076ce039#?c=0&m=0&s=0&cv=0&xywh=-680%2C-209%2C6974%2C4160>

『新唐書卷 44 志 34 選舉誌上』中国社会科学網:

http://www.cssn.cn/shujvkuxiazai/xueshujingdianku/zhongguojingdian/sb/zsl/xts/201311/t20131119_840075.shtml

『日清两国媾和条約』:

<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F00000000000000016162>

付録:

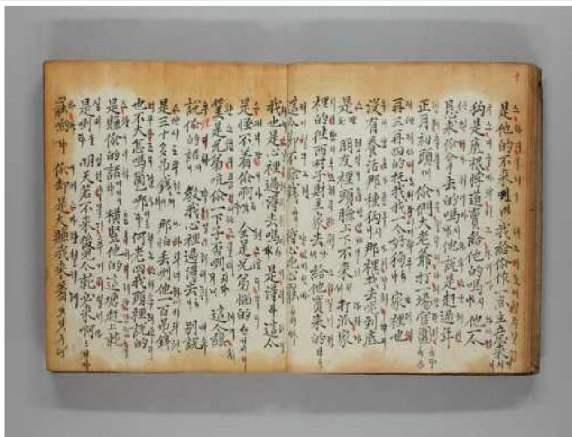
付録1:

画像はすべて東京大学文学部小倉文庫所蔵『華音撮要』の電子ファイルL174580による。

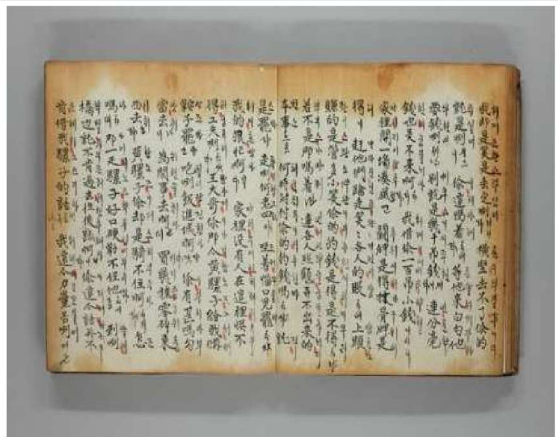
表紙 (0002. jpg)



11a (0016. jpg)

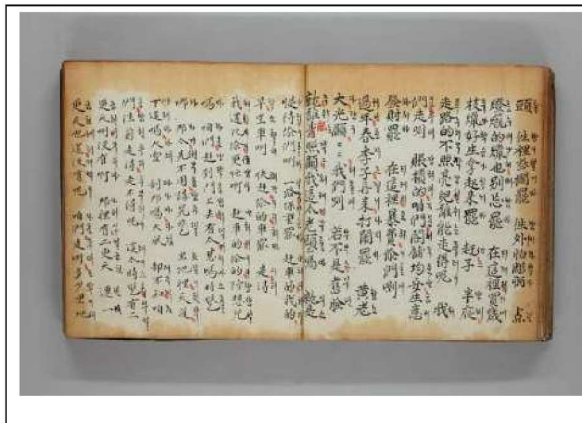


11b (0017. jpg)



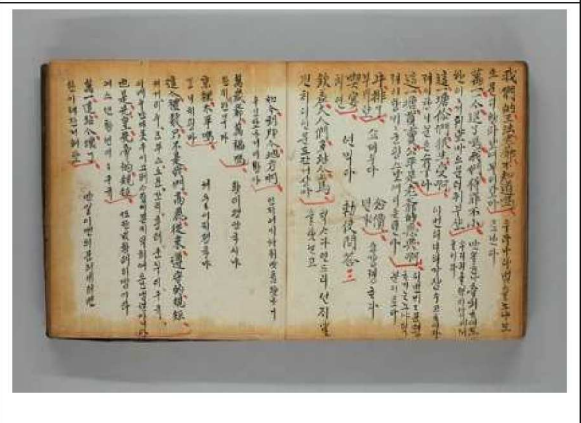
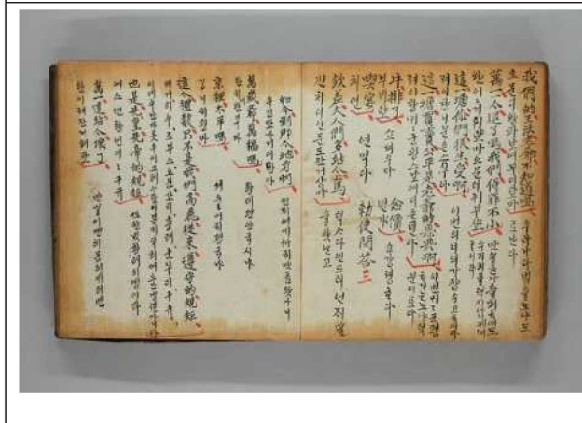
19b (0025. jpg) 右

20a (0025. jpg) 左



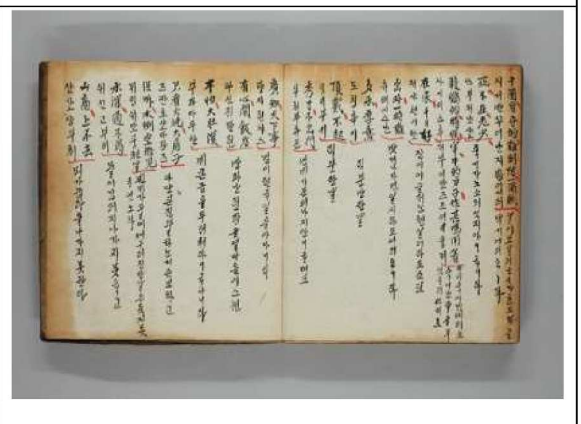
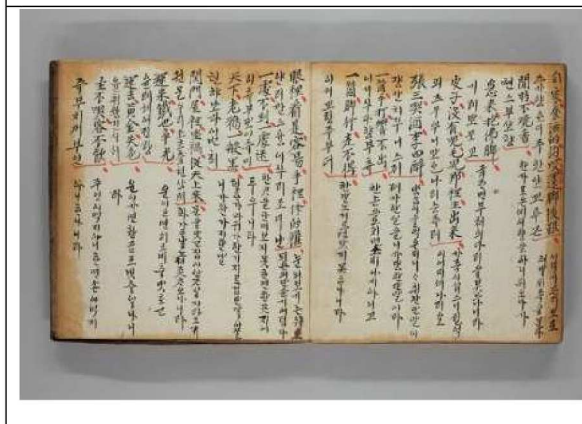
55b (0061. jpg) 右

56a (0061. jpg) 左



62a (0067. jpg)

62b (0068. jpg)



付録2『華音啓蒙諺解』ss 表記を含む漢字の文焦点

漢字	文焦点
上 ssiang 64 例	1. 「你們府上人口 e(多少)麼。」『上 4a』 2. 「攔 b(得碗裏頭), 盖上 c(碗盖)b(多)悶 d(一候兒)。」『上 7b』 3. 「b(纔剛)打魚船上, 買來 c(一條魚)。」『上 8b』 4. 「b(多)洗 d(兩會)教 c(他)a(乾淨些兒), 攔 b(着刀板上)剝成 d(塊兒)。」『上 9a』 5. 「他們是打 c(上海)來的, 聽說是 a(進京趕考)d(去)咧。」『上 10b-11a』 6. 「我 b(不)a(知道)e(甚麼)c(緣故), 打 c(炕上)爬 d(起來), 從 c(窗糊眼兒)望外一看, 却是 a(了不得)咧。」『上 13b』 7. 「用不上 b(幾天的)工夫把 c(賊們)拿到咧。」『上 15b』 8. 「你 e(那)朋友是 e(甚麼)人。他是打 c(上海)a(來)的, 前年在 c(本省裏)中咧 c(舉人)、今年要往 c(京裏面)考會試去。」『上 16b-17a』 9. 「你 a(去叫)c(我)e(那箇)c(趕車的), 把 c(牲口)a(套上)b(快些兒)a(走)罷。」『上 18a』 10. 「我 e(那)b(會)c(來的)時候兒, 打 c(橋上)過來的。」『上 20b』 11. 「b(在)e(那裏)站着 d(半天時候兒), 打 c(屋裏)出來 b(一個小)媳婦, 年紀不上 c(十五六歲)。」『上 21a』 12. 「橋 e(那塊兒)擺 d(不得)c(船), e(這)上邊有 c(擺渡)呢。」『上 21b-22a』 13. 「你從 e(這箇)c(車道)b(往上)a(走一走)。」『上 22a』 14. 「咱們 b(咳)是 b(往上)走的 a(好)。」『上 22a』 15. 「天道 b(好不大)a(離索), b(隔一天)下 c(一天)雨, b(在半道上)耽誤 b(幾天)c(功夫)咧。」『上 26a-26b』 16. 「老爺 b(打)c(貴國)b(來的)時候兒, 一路上看過 c(新新事)麼。」『上 27b』 17. 「我打 c(王京)上咧 c(火輪船)。」『上 27b』 18. 「e(這)船上 b(也)a(有)c(中國人)b(也)a(有)c(外洋人)。」『上 27b』 19. 「越走越快, 用 d(不了)b(幾天)c(工夫)到 c(上海)咧。」『上 28a』 20. 「我在 c(本國)時候兒, b(長)聽着他們講究, e(這)上海是 b(好大)c(去處)。」『上 28a』 21. 「b(咳)有 b(多高的)樓上演起 c(戲班子), 唱的唱, 吹的吹, 打的打。」『上 28b』 22. 「e(這箇)人 b(也不)a(死)b(也不)a(倒地), 站咧 d(半天)b(又)拔出 e(這把)c(刀子), 望 e(那)c(女兒)身上一通。 e(這箇)女兒 a(不忙不慢的), 舉起 b(一把)c(扇子)b(往上一)攔, e(這)刀 b(却是)落空咧。」『上 29b-30a』 23. 「e(這箇)人 b(也不)a(死)b(也不)a(倒地), 站咧 d(半天)b(又)拔出 e(這把)c(刀子), 望 e(那)c(女兒)身上一通。 e(這箇)女兒 a(不忙不慢的), 舉起 b(一把)c(扇子)b(往上一)攔, e(這)刀 b(却是)落空咧。」『上 29b-30a』 24. 「他們兩箇 b(一上一下)a(耍咧)c(半天), e(這)女兒 b(終是)a(敵)d(不過)c(他)。」『上 30a』

25. 「我打着 e(這是甚麼)意思, 到 c(椅子上) a(一坐下) 咧 e(那箇) 小子 a(斟上) c(茶) d(來), 我 a(哈咧) b(一碗) c(茶) a(坐) d(一候兒), 他 b(纔) a(問) c(我) 要買 e(甚麼) 東西呢。」『上 31b』
26. 「我打着 e(這是甚麼)意思, 到 c(椅子上) a(一坐下) 咧 e(那箇) 小子 a(斟上) c(茶) d(來), 我 a(哈咧) b(一碗) c(茶) a(坐) d(一候兒), 他 b(纔) a(問) c(我) 要買 e(甚麼) 東西呢。」『上 31b』
27. 「你 e(這) 回票是打 e(那裏) 來的, 我打 c(上海銀號裏) a(會來) 的。」『上 33a』
28. 「有 e(多少) c(數) 麼, b(好上萬數來的) 銀子咧。」『上 33a』
29. 「b(萬一) 他 b(不) a(付) e(這箇) c(銀子), 我 b(再) 到 c(上海本舖) 裏 a(能要) d(得來)。」『上 35b』
30. 「你瞧 d(不出) e(這) 帽子上亮藍頂子麼。」『下 2a』
31. 「e(幾時) 高陞的。十五歲上 b(就) a(考上) c(童生), 十六歲 b(會) a(過咧) c(鄉試) 。」『下 2a-2b』
32. 「噯呦, 提起 e(這箇) c(地方) d(來), 好 d(得狠)。城底下有箇 b(潮水來往的) 大同江, 城上邊有箇 b(金粉丹青的) 練光亭。」『下 3b-4a』
33. 「對岸上 a(盖起了) c(兩三層樓), 樓前邊拴了 b(許多的) 船隻兒, b(滿) 藏了 b(各樣的) 貨物發賣呢」『下 4a-4b』
34. 「b(多少的) 王孫公子, 各載咧 b(天上吊下來的) 二八女佳人。」『下 4b』
35. 「又提我們 e(那邊) b(西湖上的) 景致, 一筆 b(難) 畫。」『下 5b』
36. 「你呢今天 b(不) a(上) c(部裏) d(去) 麼。」『下 6a』
37. 「今天是 b(下班的) 閒日子, 公事 b(不) a(在) b(我的) c(身上), 所以 a(無拘無束) 的。」『下 6a』
38. 「b(實在的) 話, b(連) 南京 b(也) a(比) d(不上) c(這裏) 咧。」『下 8b』
39. 「叫 c(跟班的), 把 e(那箇) c(小車) a(套上), 拿 e(那匹) c(黑驢子) a(背) c(鞍子), b(一同) 送到 c(會館裏) d(迴來) 罷。」『下 12a』
40. 「你老今天 a(上) e(那裏) d(去來) 咧, e(這箇) 時候兒 b(纔) a(迴來) 麼。」『下 12b』
41. 「噯哟衆位老爺們 a(來) 咧麼, 一路上 a(太平)。」『下 14a』
42. 「衆位大人們 a(在上), 在下的 a(問好)。」『下 14a-14b』
43. 「那麼就, a(拿) 箇紙條, b(先) 把 c(庫門) a(封上), 打箇 c(印信年月) b(別) a(記錯) 罷。」『下 15a』
44. 「b(特) 派 c(小的們) 來請 c(大老爺), 上 c(我們府裏) d(去) 呢。」『下 18a』
45. 「e(那) 大街當間 b(紅的) 大門, e(這) 不是 b(王大人的) 府上麼。」『下 19a』
46. 「沿道開店的, 吃 c(客) 穿 c(客), 所以不打 c(客身上) a(增錢) 就, 打 e(那裏) 來使用的呢。」『下 19b-20a』
47. 「我們 b(剛出) c(鳳凰城地方), 到 c(遼東界上), 下咧 b(三天一夜的) c(大雪), 滿山滿溝都像 c(粉壁) 樣兒。」『下 20a-20b』

	48. 「b(萬一)走到 c(大高嶺上), b(東刮來的)風 b(西刮來的)雪, 堆在 c(一塊)成箇 c(雪洞)一樣, 像 c(我們走道的) a(遭) b(多大) c(罪)麼。」『下 20b』 49. 「e(那) b(上頭掛的) 自鳴鐘是, e(那) c(國的) 東西。」『下 23a』 50. 「e(那) c(卓子上放的) 石頭是 e(甚麼) c(寶物) 麼。」『下 23b』 51. 「你 b(若不) a(信), 看看 e(那) 石頭上有 e(多少) c(孔眼) 麼。」『下 24a』 52. 「b(我前年上隆福寺燒香回來的) 時候兒, 一到 c(前門大街), 圍着 b(一羣的) 人, b(亂) 嘈 b(亂) 嚷, 我 b(也) 不知道 e(甚麼) c(緣故)。」『下 24b』 53. 「我聽見 c(他) 說, 叫 c(跟班的) 帶 c(他) 上 c(我們府裏) e(來), 問 e(這箇) 石頭有 e(甚麼) c(用處)。」『下 24b-25a』 54. 「e(這) 石頂上有 b(三十六箇) c(大孔), 下半截有 b(二十八箇) c(小眼), 應 b(天上的) 星辰。」『下 25b-26a』 55. 「e(這) 石頂上有 b(三十六箇) c(大孔), 下半截有 b(二十八箇) c(小眼), 應 b(天上的) 星辰。」『下 25b-26a』 56. 「e(那) b(一天在河沿走來) 時候兒, 打 c(水面上) 起來 b(一道) 霧氣。」『下 27a』 57. 「e(那) b(女媧娘娘鍊石補天) 時候兒, 剩下 e(這塊) c(石頭), 放 b(在青嶺山上) 以來, b(不定) 有 b(多少的) 輪迴。」『下 28b』 58. 「我打 c(天津衛) 跟着 c(火輪船), 到咧 c(上海) 住 d(幾天), 又上 c(福建船行家裏), 打聽 c(跑海大船) 就, 有 b(一箇) c(使船的) 說是, 客人 b(要) a(上) e(那裏) d(去)。」『下 30b』 59. 「我打 c(天津衛) 跟着 c(火輪船), 到咧 c(上海) 住 d(幾天), 又上 c(福建船行家裏), 打聽 c(跑海大船) 就, 有 b(一箇) c(使船的) 說是, 客人 b(要) a(上) e(那裏) d(去)。」『下 30b』 60. 「我打 c(天津衛) 跟着 c(火輪船), 到咧 c(上海) 住 d(幾天), 又上 c(福建船行家裏), 打聽 c(跑海大船) 就, 有 b(一箇) c(使船的) 說是, 客人 b(要) a(上) e(那裏) d(去)。」『下 30b』 61. 「我 b(要) a(上) c(廣東) 的。」『下 30b』 62. 「咱們 b(船上的) 人, b(都) 是跑慣 c(大海) 的。」『下 32a』 63. 「我 e(那箇) 珠子不是 c(買的), e(那) 年 b(中國欽差上) c(外國) b(回來的) 時候兒, e(那) b(國王子給我送的) 禮來的。」『下 39a-39b』 64. 「e(這位) b(王爺的) 皮氣 e(誰) b(咳) 不知道麼, b(別) 管買 c(什麼) 東西添到價錢就, b(再) 也添 d(不上) b(半文錢的) 皮氣。」『下 40a (原文 30a, 應是筆誤一筆者) -40b』
下 44 例 ssia 42 例 ssa 2 例	1. 「請問 e(這) c(位) a(貴姓), b(不) a(敢) 在下 a(姓) c(李)。」『上 1a』 2. 「嚶啲 e(這箇) 店住 d(不下) 啊。」『上 5b-6a』 3. 「我 a(是) c(朝鮮國人), 打 c(天津) 下船要往 c(京裏) d(去) 的。」『上 6b』 4. 「前邊 b(又) a(沒有) c(店), 你們 b(又不) a(讓) 住下, 像 e(這樣) 黑夜裏 b(咳) 往 d(那裡) a(去) 呢。」『上 7a』 5. 「你呢不是 c(李老爺) 麼, 好說在下的 b(就) 是咧。」『上 11a』 6. 「e(這) 是 c(誰) 呢, 不是 c(胡兄弟) 麼, e(怎麼) 在 e(這裏) a(住下) 的。」『上 11a-11b』

	7. 「各人肚氣b(不想)a(回家)，所以在c(京裏)住一天使一天，把c(銀子)b(也)化沒有了，要回家b(也)罷沒有c(盤纏)，要住下 ssa 罷b(人家的)吸荒打d(不開)。」『上 11b-12a』 8. 「走沒有一二十裏地兒，日頭b(快要)a(黑)呢，找b(一箇)c(客店)住下咧。」『上 13a』 9. 「b(咳)有e(那)c(跑不開的)，b(一溜)平跪b(着地下對)c(他)討命。」『上 14a』 10. 「e(這)縣官 a(一聽)b(這箇)c(話兒)，b(立刻就)傳 c(票)拿 c(賊)，b(這箇)票一下來e(誰)不用心拿c(他)麼。」『上 15a-15b』 11. 「好說，你們老爺b(趕下次也)照顧c(我們)b(纔)好。」『上 18b』 12. 「橋底下水有c(三尺來深)，打e(那裏)b(能)a(過)g(得去)呢。」『上 20a』 13. 「e(那)b(擺船的)雜種們，白日a(增了)b(幾箇)c(錢)，到c(黑著)b(都)往c(四下里)跑去。」『上 23a』 14. 「我們打c(天津)往c(這裏)a(來)，天道b(好不大)a(離疎)，b(隔一天)下c(一天)雨，b(在半道上)耽悞b(幾天)c(工夫)咧」『上 26a』 15. 「e(這)上海是b(好大)c(去處)，我b(有心)a(看一看)，下船到c(街裏)走c(不多遠)，b(就)不知c(東西南北)咧。」『上 28a-28b』 16. 「e(那箇)人手拿b(一把)c(刀子)，往b(自己)c(嘴裏)a(一插)，b(只)剩下b(一寸多的)c(刀把兒)。」『上 29b』 17. 「他們兩箇a(一上一下)咧d(半天)，e(這)女兒b(終是)a(敵)d(不過)c(他)，b(要往外跑的)時候兒，e(這)刀子b(就)a(刺)c(他心窩裏)d(去)咧。」『上 30a』 18. 「我打e(那)c(門口)一走，有箇b(年青的)小子，出來讓c(我)到c(裏頭)坐着，我打着e(這是甚麼)意思，到c(椅子上)a(一坐下)咧，e(那箇)小子a(斟上)c(茶)d(來)，我a(哈哈)咧b(一碗)c(茶)a(坐)d(一候兒)，他b(纔)a(問)c(我)要買e(甚麼)東西呢。」『上 31b』 19. 「他b(照樣)a(拿)d(過來)b(一點兒也)a(不錯)，各樣底下b(都)畫箇c(碼子)，價錢也比c(這裏)a(平易多)咧。」『上 32a-32b』 20. 「e(這箇)票b(恐怕)使d(不下去)。」『上 33a』 21. 「e(這裏)買賣家b(都)不要c(他的)呢 b(只怕)e(這箇)回票使d(不下去)咧」『上 35a』 22. 「e(這裏)買賣家b(都)不要c(他的)呢 b(只怕)e(這箇)回票使d(不下去)咧」『上 35a』 23. 「噯喲在下的a(失陪)c(你)咧。」『下 2a』 24. 「噯喲提起e(這箇)c(地方)d(來)，好d(的狠)，城底下有箇b(潮水來往的)大同江。」『下 3b』 25. 「b(多少)王孫公子，各載咧b(天上吊下來的)二八女佳人。」『下 4b』 26. 「今天是b(下班的)閒日子，公事b(不)a(在)b(我的)c(身上)，所以a(無拘無束)的。」『下 6a』 27. 「像e(這樣)b(熱鬧的)地方，天底下b(也能)有d(得了)麼。」『下 8b』 28. 「教c(底下們)，叫e(那箇)c(廚房的)，預備b(各樣)c(點心葷素酒菜)d(來)罷。」『下 9b』 29. 「你e(這怎麼)b(說)呢，b(天下)人a(交)b(天下)c(友)，b(一遭)生b(兩遭)熟。」『下
--	--

	11b』 30. 「你 e(這怎麼)b(說)呢, b(天下)人 a(交)b(天下)c(友), b(一遭)生 b(兩遭)熟。」『下 11b』 31. 「昨兒箇打 c(禮部裏)a(下來)c(文書), 教 c(我們)a(交)c(貢)呢。」『下 13a』 32. 「衆位大人們 a(在上), 在下的 a(問好)。」『下 14a-14b』 33. 「你老 a(說一說)罷, 在下的 a(洗耳恭聽)。」『下 16a』 34. 「這箇時候兒有 c(幾點鐘)麼, b(纔)八點鐘兒, 趕十下鐘走 b(也)是得。」『下 18a-18b』 35. 「今年 a(下)b(多大)c(雪)麼。嚶啲提起 e(這箇)c(話兒), b(寔在)a(了)d(不得)。」『下 20a』 36. 「我們 b(剛)出 c(鳳凰城), 到 c(遼東界上), 下咧 b(三天一夜的)c(大雪), 滿山滿溝 b(都)像 c(粉壁)樣兒。」『20a-20b』 37. 「b(寡)下箇 c(大雪)b(該倒)不要緊的, b(又)刮 b(一場)c(大風)。」『下 20b』 38. 「e(這)石頂上有 b(三十六箇)c(大孔), 下 ssa 半截有 b(二十八箇)c(小眼), 應 b(天上的)星辰。」『下 25b-26a』 39. 「趕到 b(天陰下雨的)時候兒, 打 e(這箇)c(孔裏)冒出 c(雲彩), 又從 c(小眼裏)滴下 c(雨)d(來), 看 e(那箇)b(雲朦朧雨滴滴的)樣兒, 教 c(人)a(歡天喜地的)咧。」『下 26a』 40. 「趕到 b(天陰下雨的)時候兒, 打 e(這箇)c(孔裏)冒出 c(雲彩), 又從 c(小眼裏)滴下 c(雨)d(來), 看 e(那箇)b(雲朦朧雨滴滴的)樣兒, 教 c(人)a(歡天喜地的)咧。」『下 26a』 41. 「嚶啲 e(這塊)寶石, b(真是)a(天下無雙的)咧。」『下 26b』 42. 「e(那)b(女媧娘娘鍊石補天)時候兒, 剩下 e(這塊)c(石頭), 放在 b(青嶺山上)以來, b(不定)有 b(多少的)輪迴。」『下 28b』 43. 「e(這怎麼)說呢, b(天下)老駒 b(一般)a(黑)。」『下 32a』 44. 「走有 b(兩天)c(工夫), 天氣 b(就)a(變)d(過來)咧, b(一頭)刮風 b(一頭)下雨, b(越刮越)a(利害)。」『下 33a』
少 ssiao 28 例	1. 「走咧 e(多少)d(日子)麼, 走有 b(十來天的)c(工夫)咧。」『上 1a』 2. 「我有眼不識泰山 a(得罪)c(不少)。大人 e(這怎麼)說, 我 b(不敢)a(當)d(得起)咧。」『上 3b』 3. 「你們府上人口 e(多少)麼。有 b(三十多口)c(人)。」『上 4a』 4. 「家裏有 e(多少)c(地)麼。地 b(却是)a(不過)b(十成)c(地)咧。」『上 4b』 5. 「一成地 b(能)a(打)e(多少)担 c(糧)麼。b(若)到 b(好)c(年頭)就, b(能)打 b(百十多)c(担)咧。」『上 4b』 6. 「我 a(有)b(一箇)c(姑表弟兄), 在 e(這)c(京南)做箇 a(縣官), 我打算到 e(那裏)借 b(多少)c(銀子)。」『上 12a-12b』 7. 「嚶啲是 e(那麼)的來着, 兄弟遭罪 d(不少), 我當你是打 c(家裏)d(來)的。」『上 16a』 8. 「我 e(這)塘是 a(沒有)e(甚麼)c(大事), 所以 b(少)a(帶)c(幾箇人)d(來)咧。」『上 16b』

	9. 「咱不是b(頭一沒)a(來)的, b(長來)中國地方, 出過e(多少)c(遠門), 辦過b(許多)c(公事)。」『上 24b』 10. 「咱們e(那)a(怕)c(他辛苦)呢, 給c(他們)a(擺過去)罷, b(橫豎)少d(不了)b(我們的)酒錢。」『上 25a』 11. 「老爺e(這)次b(可以)住e(多少)c(日子)呢。」『上 32b』 12. 「有e(多少)c(數)麼, b(好上萬數來的)銀子咧。」『上 33a』 13. 「朝廷b(特)教c(刑部)論b(他的)c(罪), 他a(拿)c(錢)a(換)c(命)b(不定)化e(多少)c(銀子)咧。」『上 35a』 14. 「噯喲a(辛苦)d(不少), 為c(國家)出力b(敢)說a(辛苦)麼。」『下 1b』 15. 「b(多少的)王孫公子, 載咧b(天上吊下來的)二八女佳人。」『下 4b』 16. 「噯喲e(那裏)話呢, 文才人物b(也)出在c(南邊), b(土產的)寶物b(也)是a(不少)。b(別那麼)a(過獎)罷。」『下 5a-5b』 17. 「e(那)徐大人是, b(本來)宦門子弟, 在c(本鄉裏)中咧c(文舉), 到c(京城)趕考拔例b(頭一名)c(進士), 做過b(內閣的)中書, b(以後)陞咧b(南京的)學院, 拔出b(多少)人才, 為國報忠。」『下 16b』 18. 「噯喲大人們a(遭罪)d(不少)咧。」『下 21a』 19. 「你b(若不)a(信), 看看e(那)石頭上有e(多少)c(孔眼)麼。」『下 24a』 20. 「e(那)b(女媧娘娘鍊石補天)時候兒, 剩下e(這塊)c(石頭), 放b(在青嶸山上)以來, b(不定)有b(多少的)輪迴。」『下 28b』 21. 「問c(他)要e(多少)c(價錢), 他a(要)b(五千兩)c(銀子)。」『下 29a』 22. 「定了c(主意)以後, 問c(他)要e(多少)c(船價), 他a(要)b(每)c(一箇)b(人三十塊)c(洋錢)。」『下 31a-31b』 23. 「你e(這箇)珠子少咧c(一塊), b(咳不)跟c(我)e(這箇)好。」『下 38a』 24. 「e(這箇)珠子b(本來)少c(一個), 所以b(不)算c(全套的)。」『下 38b』 25. 「罷了罷了, 憑c(他)說b(多少)c(價)呢, b(隨便)賣給c(他)就是咧。」『下 39a』 26. 「我問過c(他)給e(多少)c(價)呢。」『下 39a』 27. 「e(那)b(年中國欽差上)c(外國)b(回來)時候兒, e(那)國王子給e(我)a(送)c(禮)來的, b(連)c(我)b(也不)曉得值c(多少)咧。」『下 39a』 28. 「b(再)教c(他)添e(多少)銀子是咧。」『下 40a』(原文 30a—筆者)
十 33 例 ssi 32 例 si 1 例	1. 「走咧e(多少)d(日子)麼, 走有b(十來天的)c(工夫)咧。」『上 1a』 2. 「b(你們貴國)王爺b(多大)寶齡麼, b(纔)過b(三十)c(春秋)咧。」『上 2b』 3. 「你呢今年貴庚, 齒長c(三十 si 五歲)咧。」『上 3a』 4. 「你們府上人口b(多少)麼. 有b(三十多口)c(人)。」『上 4a』 5. 「b(咳)有e(那)丫鬟老媽奴才跟班伺候人等, b(都)在一內算d(起來), 有箇b(四十多口)c(人)。」『上 4a-4b』

	6. 「家裏有 e(多少)c(地)麼。地 b(却是)a(不過)b(十成)c(地)咧。」『上 4b』 7. 「一成地 b(能)a(打)e(多少)担 c(糧)麼。b(若)到 b(好)c(年頭)就, b(能)打 b(百十多)c(担)咧。」『上 4b』 8. 「噯喲 e(這箇)魚 a(沒有)b(十分 a(熟))。」「『上 9b』 9. 「b(第二天起身望)c(京裏)b(去的)時候兒, 走沒有 c(一二十裏地兒), 日頭 b(快要)a(黑)呢, 找 b(一箇)c(客店)住下咧。」『上 12b-13a』 10. 「這一天有 b(十來箇騎牲口)c(客人們), b(也)住在 b(這箇)c(店裏)。」『上 13a』 11. 「b(每一位)飯錢 c(一錢銀子), 房錢在 c(外), 十斤砍草 b(共)該 c(二錢銀)。」『上 17b』 12. 「b(在)e(那裏)站着 d(半天時候兒), 打 c(屋裏)出來 b(一個小)媳婦, 年紀不上 c(十五六歲), 對 c(我)說 e(那位)老人是 b(我的)公公 今年 c(九十九歲), b(又)聾 b(又)瘋說 b(他)不明白, 你有 c(話)對 c(我)說罷。」『上 21a』 13. 「b(在)e(那裏)站着 d(半天時候兒), 打 c(屋裏)出來 b(一個小)媳婦, 年紀不上 c(十五六歲), 對 c(我)說 e(那位)老人是 b(我的)公公 今年 c(九十九歲), b(又)聾 b(又)瘋說 b(他)不明白, 你有 c(話)對 c(我)說罷。」『上 21a』 14. 「今年 a(屬)e(甚麼), b(纔)二十五歲咧。」『上 27a』 15. 「我 b(也不)a(知道)e(甚麼)c(緣故), 排開 e(那些)箇人往 c(裏)一瞧, e(那)裏頭站着 b(十來箇)大漢 b(咳)有 b(幾箇年青)c(女兒), 穿的打扮好像 b(耍戲法的)c(人)。」『上 29a-29b』 16. 「e(那)女兒手拿 b(一塊紅)c(珠子), 攔 b(在手裏)轉來轉去, 一箇 b(成)c(十箇), 十箇 b(成)c(百箇), 歸起成咧 b(一大盤的)櫻桃兒。」『上 30b-31a』 17. 「e(那)女兒手拿 b(一塊紅)c(珠子), 攔 b(在手裏)轉來轉去, 一箇 b(成)c(十箇), 十箇 b(成)c(百箇), 歸起成咧 b(一大盤的)櫻桃兒。」『上 30b-31a』 18. 「e(幾時)高陞的。十五歲上 b(就)a(考)c(童生), 十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試), 十八歲 a(登了)c(進士), 十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判), 二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣), 今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2a-2b』 19. 「e(幾時)高陞的。十五歲上 b(就)a(考)c(童生), 十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試), 十八歲 a(登了)c(進士), 十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判), 二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣), 今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2a-2b』 20. 「e(幾時)高陞的。十五歲上 b(就)a(考)c(童生), 十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試), 十八歲 a(登了)c(進士), 十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判), 二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣), 今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2a-2b』 21. 「e(幾時)高陞的。十五歲上 b(就)a(考)c(童生), 十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試), 十八歲 a(登了)c(進士), 十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判), 二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣), 今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2a-2b』 22. 「e(幾時)高陞的。十五歲上 b(就)a(考)c(童生), 十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試), 十八歲 a(登了)c(進士), 十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判), 二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣),
--	--

	今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2a-2b』 23. 「e(幾時)高陞的。十五歲上 b(就)a(考)c(童生)，十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試)，十八歲 a(登了)c(進士)，十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判)，二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣)，今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2a-2b』 24. 「這箇時候兒有 c(幾點鐘)麼， b(纔)八點鐘兒， 趕十下鐘走 b(也)是得。」『下 18a-18b』 25. 「e(這)石頂上有 b(三十六箇)c(大孔)， 下半截有 b(二十八箇)c(小眼)， 應 b(天上的)星辰。」『下 25b-26a』 26. 「e(這)石頂上有 b(三十六箇)c(大孔)， 下半截有 b(二十八箇)c(小眼)， 應 b(天上的)星辰。」『下 25b-26a』 27. 「b(一五一十都)說 c(他)， 所以拿 e(這)c(石頭)到 c(京裏)來找 c(行家)要賣呢。」『下 28b-29a』 28. 「定了 c(主意)以後 問 c(他)要 e(多少)c(船價)， 他 a(要)b(每)c(一箇)b(人三十塊)c(洋錢)。」『下 31a-31b』 29. 「b(若)帶 c(貨物)， b(就)按着 b(一百斤)叩 c(十塊錢)就是咧。」『下 31b』 30. 「b(咳)有 b(一箇大)c(珠子)b(七十多箇小)c(珠子)。」『下 34a』 31. 「e(這箇)珠子同 d(不得)b(別的)貨呢， b(若)是遇着 c(買主)十萬八萬 b(也)是 c(他)咧。」『下 35b』 32. 「e(這)叫 c(子母珠)原來 c(海裏)出的， b(一顆)大的 b(七十二顆)小的， e(這)b(纔)是 c(勾全套)。」『下 37b』 33. 「b(別)管 c(他)三七二十一， 給 c(他)b(五千兩)c(現銀子)， 看 b(他)願意不願意罷。」『下 39b』
現 ssien 6 例	1. 「我是 c(在民的)， b(原籍浙江的)人。 b(現在)e(甚麼)c(品級)呢。」『上 1b-2a』 2. 「我是 b(現任北京禮部裏)郎中， 你瞧 d(不出)e(這)b(帽子上亮藍)c(頂戴)麼。」『下 2a』 3. 「e(這箇)對子是也不 c(現寫的)， 是 b(一箇古人的)遺跡啊。」『下 22b-23a』 4. 「他要 b(五千兩)c(銀子)， 我給 c(他)b(四千兩)c(現銀子)買的咧。」『下 29a』 5. 「我今天陪着 c(貴客)b(沒有空兒現)去， b(後日再)來聽信罷。」『下 36b』 6. 「b(別)管 c(他)三七二十一， 給 c(他)b(五千兩)c(現銀子)， 看 c(他)願意不願意罷。」『下 39b』
三 24 例 ssian 20 例 ssan 4 例	1. 「現在 e(甚麼)c(品級)呢。 b(纔)到 c(三 ssan 品頂戴)咧。」『上 2a』 2. 「b(你們貴國)王爺 b(多大)寶齡麼， b(纔)過 b(三 ssan 十)c(春秋)咧。」『上 2b』 3. 「你呢今年貴庚， 齒長 c(三十五歲)咧。」『上 3a』 4. 「弟兄 a(幾位)。哥們 a(三箇)我是 c(老大)咧。」『上 3a』 5. 「我 e(那)二兄弟是去年 b(纔)中咧 c(進士)， 三兄弟是 b(咳在書房)a(念書)呢。」『上 3a-3b』 6. 「你們府上人口 e(多少)麼。有 b(三十多口)c(人)。」『上 4a』

	7. 「e(那)縣官是b(做官體面的)人，可憐我e(這箇)c(情節兒)，打錢店裏秤給c(我)b(三百兩)c(碎銀)。」『上 12b』 8. 「睡到c(半夜三_{ssan}更裏)，店裏就a(叫喚)d(起來)咧。」『上 13a-13b』 9. 「他b(再三再四)懇求c(我)，b(同他一塊兒去)考。」『上 17a』 10. 「b(一共)打算b(一兩三錢)c(銀子)咧。」『上 18a』 11. 「橋底下水有c(三尺來深)，打e(那裏)b(能勾)a(過)d(得去)呢。」『上 20a』 12. 「e(那)三市六街買賣門面，b(沒有法兒)說道。」『上 28b』 13. 「我要買b(幾塊)c(時表)b(三四箇)c(掛鐘)呢。」『上 32a』 14. 「打c(鳳凰城)坐了b(三套)c(小車子)，走d(一箇多月)b(纔)到e(這)c(北京)d(來)咧。」『下 1b』 15. 「城北邊有箇b(七層玉塔兒的)永明寺，對岸上盖起了b(兩三_{ssan}層)c(樓)。」『下 4a』 16. 「三月裏紅的是c(花)綠的是c(柳)。」『下 4a-4b』 17. 「b(兩年)一鄉試b(三年)一會試。」『下 7a』 18. 「如今大清家，建都以來，三市六街，九城九門，內外皇城，大小衙衙，作官為宦的，作買作賣的，人山人海，來來往往，挨挨擠擠，你拉我扯，像e(這樣)b(熱鬧的)地方，天底下b(也能)有d(得了)麼。」『下 8a』 19. 「b(我們)老大人a(是)，b(去年)b(陞咧)c(兩江總督)，三大人a(是)，b(在外)a(做官)b(咳沒有)a(回來)。」『下 17b』 20. 「我們b(剛出)c(鳳凰城)，到c(遼東界上)，下咧b(三天一夜的)c(大雪)，滿山滿溝都像c(粉壁)樣兒。」『下 20a-20b』 21. 「e(這)石頂上有b(三十六箇)c(大孔)，下半截有b(二十八箇)c(小眼)，應b(天上的)星辰。」『下 25b-26a』 22. 「定了c(主意)以後，問c(他)要e(多少)c(船價)，他a(要)b(每)c(一箇)b(人三十塊)c(洋錢)。」『下 31a-31b』 23. 「b(別)管c(他)三七二十一，給c(他)b(五千兩)c(現銀子)，看c(他)願意不願意罷。」『下 39b』 24. 「b(若)是左三右四不對皮氣，肚氣偏不買c(他)的。」『下 40b』
四 ssy 14 例	1. 「請問當今皇太后萬歲爺，b(聖明)德政，布滿c(四海)，所以b(連海外的)小邦b(也都)來賓服。」『上 2a-2b』 2. 「b(咳)有e(那)丫鬟老媽奴才跟班伺候人等，b(都)在一內算d(起來)，有箇b(四十多口)c(人)。」『上 4a-4b』 3. 「他b(再三再四)懇求我，b(同他一塊兒去)考。」『上 17a』 4. 「e(那)b(擺船的)雜種們，白日a(增了)b(幾箇)c(錢)，到c(黑著)b(都)往c(四下里)跑去。」『上 23a』 5. 「也有c(坐船行令哈酒的)，b(四通五達之)路人來人往。」『上 28b-29a』

	6. 「我要買 b(幾塊)c(時表)b(三四箇)c(掛鐘)呢。」『上 32a』 7. 「如今挪到 c(東四牌樓)，做 b(他們王公侯爺府的)買賣，所以 e(那些)箇 b(做官的)人們，都打 c(他)e(那裏)川換 c(銀子)咧。」『上 33b』 8. 「我們國是讀 b(孔孟之)書，行 b(周公之)禮，所以四書五經 b(也)沒有不講過的。」『下 3a』 9. 「他要 b(五千兩)c(銀子)，我給 c(他)b(四千兩)c(現銀子)買的咧。」『下 29a』 10. 「門房的 a(進來回話)，有箇古董行裏張老四 b(要)見 c(大人)。」『下 29b』 11. 「叫 c(他)進來罷。張老四你 b(可)a(好)麼。」『下 29b-30a』 12. 「你 b(怪不得)眼空四海咧。」『下 34a』 13. 「張老四你 a(來)咧麼。」『下 36b』 14. 「b(若)是左三右四不對皮氣，肚氣偏不買 c(他)的。」『下 40b』
世 ssi 4 例	1. 「聽說你們王世子聰明 d(的狠)。」『上 2b-3a』 2. 「好一位 b(有德的)世子咧。」『上 3a』 3. 「我的父親 b(前年)a(去世)，b(只)有老母親在着咧。」『上 26b-27a』 4. 「b(你父親在世的)時候兒 b(長)對 c(我)說有 b(一箇)兒子 b(怪不得)你 e(這麼)大咧。」『上 27a』
兄 ssiung 13 例	1. 「弟兄 a(幾位)。哥們 a(三箇)我是 a(老人)咧。」『上 3a』 2. 「你 e(那)兩位兄弟 b(在家裏)幹 e(甚麼)。」『上 3a』 3. 「我 e(那)二兄弟是，去年 b(纔)中咧 c(進士)，三兄弟是 b(咳在書房)a(念書)呢。」『上 3a-3b』 4. 「我 e(那)二兄弟是，去年 b(纔)中咧 c(進士)，三兄弟是 b(咳在書房)a(念書)呢。」『上 3a-3b』 5. 「都是 e(甚麼)c(人)。我 e(那)大爺叔叔伯伯兄弟孀娘姨娘嫂子姐姐妹妹兄弟媳婦侄兒們。」『上 4a』 6. 「都是 e(甚麼)c(人)。我 e(那)大爺叔叔伯伯兄弟孀娘姨娘嫂子姐姐妹妹兄弟媳婦侄兒們。」『上 4a』 7. 「這是 e(誰)呢。不是 c(胡兄弟)麼。」『上 11a』 8. 「噯啲說 d(不了)，b(兄弟的)運氣 b(忒不)a(好)咧。」『上 11b』 9. 「我 a(有)b(一箇)c(姑表弟兄)，在 e(這)c(京南)做箇 a(縣官)。」『上 12a-12b』 10. 「噯啲是 e(那麼)的來着，兄弟遭罪 d(不少)。」『上 16a』 11. 「胡兄弟你到 e(那裏)住 d(去)呢。」『上 25b』 12. 「明兒箇兄弟到 c(貴館)瞧 c(兄台)是咧。」『上 26a』 13. 「明兒箇兄弟到 c(貴館)瞧 c(兄台)是咧。」『上 26a』
山 ssian 7 例	1. 「我有眼不識泰山 a(得罪)d(不少)。」『上 3b』 2. 「十五歲上 b(就)a(考)c(童生)，十六歲 c(會)a(過咧)c(鄉試)，十八歲 a(登了)c(進士)，

	十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判)，二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣)，今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。』『下 2b』 3. 「咱們聽說是，你們 e(那)邊 a(山清水秀)，有箇 c(平壤府的地方)是，b(好大的)去處。」『下 3b』 4. 「如今大清家，建都以來，三市六街，九城九門，內外皇城，大小衙衙，作官為宦的，作買作賣的，人山人海，來來往往，挨挨擠擠，你拉我扯，像 e(這樣)b(熱鬧的)地方，天底下 b(也能)有 d(得了)麼。」『下 8b』 5. 「沒有 e(甚麼)山珍海味，你 b(却咧)嫌粗請用一用罷。」『下 10a』 6. 「我們 b(剛出)c(鳳凰城)，到 c(遼東界上)，下咧 b(三天一夜的)c(大雪)，滿山滿溝都像 c(粉壁)樣兒。」『下 20b』 7. 「e(那)b(女媧娘娘鍊石補天)時候兒，剩下 e(這塊)c(石頭)，放 b(在青埂山上)以來，b(不定)有 b(多少的)輪迴。」『下 28b』
算 ssoan 10 例	1. 「b(咳)有 e(那)丫鬟老媽奴才跟班伺候人等，b(都)在一內算 d(起來)，有箇 b(四十多口)c(人)。」『上 4a-4b』 2. 「我 a(有)b(一箇)c(姑表弟兄)，在 e(這)c(京南)做箇 a(縣官)，我打算到 e(那裏)借 b(多少)c(銀子)。」『上 12b』 3. 「明兒箇 b(打算要起身)a(走)呢，e(誰)想今兒箇遇見 c(大哥)麼。」『上 16b』 4. 「店掌櫃的 a(要)c(打店錢)，a(教)c(他)a(算)d(去)罷。」『上 17b-18a』 5. 「你們幾位 b(都在一塊兒)算麼。」『上 17b』 6. 「黑豆五升六分銀，料一斗八分銀，b(一共)打算 b(兩三錢)銀子咧。」『上 18a』 7. 「e(那)裏話呢，客到店 a(是)算到家一樣否咧。」『上 18b』 8. 「e(這)義豐家是京裏算他頭一箇號。」『上 33b』 9. 「所以算我們東國是，b(都)a(叫)c(小中華)。」『下 8a』 10. 「e(這箇)珠子 b(本來)少 c(一箇)，所以 b(不)算 c(全套的)。」『下 38b』
小 24 例 ssiao 23 例 siao 1 例	1. 「請問當今皇太后萬歲爺，b(聖明)德政布滿 c(四海)，所以 b(連海外的)小 siao 邦 b(也都)來賓服，這不是大清家洪福齊天麼。」『上 2b』 2. 「都種 e(甚麼)。粳子稻子穀子稗子大麥小麥 b(各樣)豆子 b(都)a(有)咧。」『上 4b-5a』 3. 「b(都)是 b(斷道的)馬賊，a(手拿)c(洋槍火礮)，b(大)呼 b(小)叫 b(要)殺 b(要)剮呢。」『上 13b-14a』 4. 「在 e(那)裏站着半天時候兒，b(打屋裏)出來 b(一箇小)媳婦，年紀 b(不)上十五六歲，b(對我)說 e(那)位老人是 b(我的)公公，今年九十九歲，b(又)聾 b(又)瘋說他不明白，你有話對我說罷。」『上 21a』 5. 「b(別)說你們 e(這)樣小河，連 b(有名的)大河也 b(不定)走過 d(幾會)咧。」『上 24b』 6. 「我 b(打那行門口)一走，a(有)b(一箇年青的)c(小子)，出來 a(讓)c(我)b(到裏頭)坐着。」『上 31a-31b』

	7. 「我打着是 e(甚麼)意思, b(到椅子上)一坐下咧, e(那箇)小子 a(斟上)c(茶)d(來)。」『上 31b』 8. 「b(打鳳凰城)坐了 b(三套小)車子, 走 c(一箇多月)纔到 e(這)c(北京)a(來)咧。」『下 1b』 9. 「十五歲上 b(就)a(考)c(童生), 十六歲 b(會)a(過咧)c(鄉試), 十八歲 a(登了)c(進士), 十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判), 二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣), 今年二十五歲 a(做)e(這)b(樣的)c(小官兒)。」『下 2b』 10. 「好一箇 b(有禮有義)之邦, 真是大同小異。」『下 3a』 11. 「所以 b(在京在外的)大小官員, e(那)一箇不能, e(那)一箇不明。」『下 7a-7b』 12. 「所以算我們東國是, b(都)a(叫)c(小中華)。」『下 8a』 13. 「如今大清家, 建都以來, 三市六街, 九城九門, 內外皇城, 大小衙門, 作官為宦的, 作買作賣的, 人山人海, 來來往往, 挨挨擠擠, 你拉我扯, 像 e(這樣)b(熱鬧的)地方, 天底下 b(也能)有 d(得了)麼。」『下 8b』 14. 「叫跟班的, 把 e(那箇)c(小車)a(套上)。」『下 12a』 15. 「噯喲 a(謝謝)c(大人們), 今天 b(忒)a(勞神的)d(不小)。e(那裏)話呢。」『下 15a』 16. 「b(特)a(派)c(小的們)a(來請)c(大老爺), a(上)b(我們)c(府裏)d(去)呢。」『下 18a』 17. 「e(這)石頂上有 b(三十六箇)c(大孔), 下半截有 b(二十八箇)c(小眼), 應 b(天上的)星辰。」『下 26a』 18. 「又 b(從小眼裏)a(滴)d(下來)c(雨)d(來), 看 e(那)箇 b(雲朦朧雨滴滴的)樣兒, a(教)c(人)歡天喜地的咧。」『下 26a』 19. 「咱們到的地方 b(忒)a(多)咧, e(那)越南交趾大小琉球連 e(那)外洋地方 b(都)a(走過來)咧。」『下 33b-34a』 20. 「b(咳)a(有)b(一箇)c(大珠子)b(七十多箇)c(小珠子)。」『下 34a』 21. 「先把 c(大珠子)擱在 c(盤子裏)後拿 c(小珠子)撒在 c(一塊兒), 大的合小的滾得 c(一塊兒)粘 d(起來)咧。」『下 34a』 22. 「先把 c(大珠子)擱在 c(盤子裏)後拿 c(小珠子)撒在 c(一塊兒), 大的合小的滾得 c(一塊兒)粘 d(起來)咧。」(下 34a) 23. 「你 e(這)箇貨好倒好, 不是 b(全套的)小一箇數兒。」『下 37a-37b』 24. 「e(這)叫 c(子母珠)原來 c(海裏)出的, b(一顆)大的 b(七十二顆)小的, e(這)b(纔)是 c(勾全套)。」(下 37b)
閒 ssien 5 例	1. 「今天 b(行路的)客人們 b(忒)多, 店裏沒有 b(閒)屋子咧。」『上 6a』 2. 「今天是 b(下班的)閒日子, 公事不在 b(我的)身上, 所以 a(無拘無束的)。」『下 6a』 3. 「咱們把 e(這箇)閒話先擱一邊, 咳 b(要)領教。」『下 6b』 4. 「只是二大人在府裏, 說是 b(要)a(來拜望), 沒有得閒工夫, b(特)a(派)c(小的們)a(來請)c(大老爺), a(上)b(我們)c(府裏)d(去)呢。」『下 18a』

	5. 「 e (這位)王府是住在 c (皇城裏頭)，聞人們 a (進) d (不去)咧。」『下 35b-36a』
燒 ssiao 2 例	1. 「賣的 e (甚麼)酒。紹興黃酒乾白燒酒五加皮玫瑰露狀元紅翰林春史國公 b (各樣)藥酒 b (都) a (有)咧。」『上 9b』 2. 「我 b (前年上隆福寺燒香回來的)時候兒，一到 c (前門大街)，圍着 b (一羣的)人， b (亂)嘈 b (亂)嚷。」『下 24b』
史 ssy 1 例	1. 「賣的 e (甚麼)酒。紹興黃酒乾白燒酒五加皮玫瑰露狀元紅翰林春史國公 b (各樣)藥酒 b (都) a (有)咧。」『上 9b』
撒 2 例 ssa 1 例 ssia 1 例	1. 「你 e (這箇)人 b (好) a (嘴巧)，當着 c (外路人) b (會)撒 ssa 謊 hoang 咧。」『上 10b』 2. 「先把 b (大) c (珠子)攔在 c (盤子裏)後拿 b (小) c (珠子)撒 ssia 在 c (一塊兒)，大的合小的滾得 c (一塊兒)粘 d (起來)咧。」『下 34a』
散 ssan 1 例	1. 「前年 b (與大哥)分散以後，在 b (京裏)住 d (些箇日子)。」『上 11b』
使 8 例 ssy 7 例 sy 1 例	1. 「各人肚氣 b (不想) a (回家) d (去)，所以在 c (京裏)住一天使一天。」『上 11b』 2. 「我們家是 b (輩輩) a (當) e (這箇) c (差使 sy)。 e (這裏) b (有名的)徐通官是， b (我的)老人家咧。」『上 26b』 3. 「 e (這箇)票 b (恐怕)使 d (不下去)。」『上 33a』 4. 「如今 e (這裏)買賣家 b (都不)要他的呢，只怕 e (這箇)回票使 d (不下去)咧。」『上 35a』 5. 「 e (這) a (是 sy)使 d (不得)的，你既是到 c (我) e (這裏)來， e (那)有 e (怎麼) b (快)走的。」『下 9a』 6. 「所以 b (不打客身上)增錢就，打 e (那裏)來使用的呢。」『下 20a』 7. 「我也 a (問過) e (那) c (客人)，他說是 b (原來使船的)水手，家住在 c (黃河沿)的。」『下 26b-27a』 8. 「又上 c (福建)到 c (船行家裏)，打聽 c (跑海大船)就，有 b (一箇) c (使船的)說是，客人 b (要)上 c (那裏) d (去)。」『下 30b』
縣 ssien 7 例	1. 「我 a (有) b (一箇) c (姑表弟兄)，在 e (這) c (京南)做箇 a (縣官)。」『上 12a-12b』 2. 「 e (那)縣官是 b (做官體面的)人，可憐我 e (這箇)情節兒，打錢店裏忤 a (給) c (我) b (三百兩) c (碎銀子)。」『上 12a-12b』 3. 「所以 b (巴不得的) a (到) c (縣裏) d (去)，把 b (這箇)賊案 e (這)般 e (這)般 e (那)般 e (那)般 a (告訴) c (他)。」『上 15a』 4. 「 e (這)縣官一 a (聽) e (這箇) c (話兒)， b (立刻)就 b (傳票) a (拿賊)。」『上 15a』 5. 「 e (這)縣官坐起堂 d (來)，把 c (賊們) b (拿夾棍) a (夾) d (起來)。」『上 15b』 6. 「十五歲上 b (就) a (考) c (童生)，十六歲 b (會) a (過咧) c (鄉試)，十八歲 a (登了) c (進士)，十九歲 a (做過) b (京城裏) c (通判)，二十一歲 a (陞咧) b (唐山縣的) c (知縣)，今年二十五歲 a (做) b (這樣的) c (小官兒)。」『下 2b』 7. 十五歲上 b (就) a (考) c (童生)，十六歲 b (會) a (過咧) c (鄉試)，十八歲 a (登了) c (進士)，

	十九歲 a(做過)b(京城裏)c(通判)，二十一歲 a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣)，今年二十五歲 a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2b』
殺 ssia 1 例	1. 「b(頭裏住店的)e(那)客人們，b(原不)是c(好人)，都是b(斷道的)馬賊咧。手拿c(洋槍火炮)，a(大)呼a(小)叫a(要)殺a(要)剮呢。」『上 13b-14a』
死 ssy 4 例	1. 「他b(本)是c(聾子)，我說c(東)他說c(西)，b(高聲)說c(他)他b(肯)胡塗，教c(我)氣d(死)說d(不出)c(話)d(來)。」『上 21a』 2. 「e(這箇)人也b(不)a(死)也b(不)a(倒地)。」『上 29b』 3. 「我當他是b(真)a(死咧)，半天又a(活)d(過來)咧。」『上 30b』 4. 「一補c(元氣)，二補c(身體)，b(真)有b(起死回生的)妙理。」『下 11a』
響 ssiang 2 例	1. 「一開船呼呼一響就，打c(煙笛裏)冒起c(黑煙)。」『上 28a』 2. 「鐘裏有b(一箇)雀兒，b(按着)c(一天的)b(時辰)叫喚，鐘一響他b(也)叫d(一聲兒)，b(真)是b(奇怪的)頑意兒。」『上 28a』
孫 ssun 2 例	1. 「b(也)有b(穿花過柳的)王子公孫們。」『上 28b』 2. 「b(多少的)王孫公子，各a(載咧)b(天上吊下來的二八)c(女佳人)，唱的也有，彈的也有，吹的也有，e(這樣)b(熱鬧的)光景，b(真)是一口難說。」『下 4b』
扇 ssan 1 例	1. 「e(這箇)女兒b(不忙不慢的)舉起b(一把)c(扇子)b(往上一)攆，e(這)刀b(却是)落空咧。」『上 30a』
歇 ssie 2 例 (例文同)	1. 「b(好好)歇歇罷，明日b(再)來領教。」『上 35b』
紗 ssia 2 例	1. 「e(這位)打扮d(好看)，頭戴c(烏紗帽)，身穿c(圓領大袖)，好像b(漢時的)人，教c(人)可敬可羨。」『下 1a』 2. 「要往家裏走的時候兒，打c(西邊)來b(一位)道士，身穿b(一件黑紗)c(道袍)，手拿b(一根)c(拐棍)。」『下 27b』
羨 ssien 1 例	1. 「e(這位)打扮d(好看)，頭戴c(烏紗帽)，身穿c(圓領大袖)，好像b(漢時的)人，教c(人)可敬可羨。b(好)說我們敝國人是e(這樣)粧扮呢。」『下 1a』
鄉 ssiang 7 例	1. 「十五歲上b(就)a(考)c(童生)，十六歲c(會)a(過咧)c(鄉試)，十八歲a(登了)c(進士)，十九歲a(做過)b(京城裏)c(通判)，二十一歲a(陞咧)b(唐山縣的)c(知縣)，今年二十五歲a(做)b(這樣的)c(小官兒)。」『下 2b』 2. 「聽說中國開科取才b(好不)a(容易)，b(兩年)一鄉試b(三年)一會試，錯咧滿肚文章b(不能)a(來考)。」『下 7a』 3. 「請問e(這)禮部正堂徐大人是，e(那)b(鄉的)人，a(有)e(甚麼)c(功勞)，a(做)b(這樣的)c(高官)，我b(要)a(領教)呢。」『下 15b-16a』 4. 「e(那)徐大人是，本來宦門子弟，b(在本鄉裏)a(中咧)c(文舉)，b(到京城)a(趕考拔例)b(頭一名)c(進士)，a(做過)b(內閣的)c(中書)，以後a(陞咧)b(南京的)c(學院)，a(拔

	出)e(多少)c(人才), b(為國)a(報忠)。」『下 16a』 5. 「俗言道人離鄉賤物離鄉貴 b(一點兒)也 a(不錯)。」『下 29b』 6. 「俗言道人離鄉賤物離鄉貴 b(一點兒)也 a(不錯)。」『下 29b』 7. 「b(咳)有 e(那些)客人們, b(也)是 c(本鄉本處)的。」『下 32a』
訓 ssian 1 例	1. 「b(咱們講到半天的)話, b(咳沒有)領過 c(教訓), 請 c(大人)開 c(金口)發 c(玉言), 把 e(那箇)b(江南的)c(好處)講一講。」『下 5a』
笑 ssiao 1 例	1. 「我 e(那箇)口氣講 d(不到)c(好處), 你呢 b(別)見笑。嚶啲 e(那裏)c(話)。」『下 5a』
爽 ssiang 1 例	1. 「說得 e(這些箇)c(話兒), 教 c(我心裏)爽快 d(的狠)。」『下 8a』
篩 ssiai 1 例	1. 「那麼 b(就)咱們 b(不必)打賭, 你 a(篩)我 a(敬), b(盡量兒)哈罷。」『下 10b』
蔘 ssyn 2 例	1. 「有 b(一種)人蔘是, c(我們南方要緊所用的)東西。」『下 10b-11a』 2. 「拿 b(一斤)人蔘, b(能)換 b(一斗)金子。」『下 11a-11b』
箱 ssiang 1 例	1. 「你開 e(那箇)c(箱子), 拿出 c(官服朝靴)d(來), b(都)擱得 c(外邊), b(別)擱 c(裏頭)。」『下 13b』
洗 2 例 ssi 1 例 si 1 例	1. 「把 c(那箇魚)先 a(割肚子刮鱗), b(多)洗 d(兩會)教 c(他)a(乾淨些兒)。」『上 8b-9a』 2. 「你老 a(說一說)罷, 在下的 a(洗 ssi 耳敬聽)。」『下 16a』
尚 ssiang 1 例	1. 「所以我們萬歲爺, b(特)加 c(二品尚書), e(這)b(真是)官星高照明公, b(一點不)虛啊。」『下 16b』
寺 2 例 ssy 1 例 sy 1 例	1. 「城北邊有箇 b(七層玉塔兒的)永明寺 sy, 對岸上盖起了 b(兩三層)c(樓)。」『下 4a』 2. 「b(前年我上隆福寺 ssy 燒香回來的)時候兒, 一到 c(前門大街), 圍着 b(一羣的)人, b(亂)嘈 b(亂)嚷。」『下 24b』
香 ssiang 1 例	1. 「b(前年我上隆福寺燒香回來的)時候兒, 一到 c(前門大街), 圍着 b(一羣的)人, b(亂)嘈 b(亂)嚷。」『下 24b』
險 ssien 1 例	1. 「嚶啲 b(險些)惱出 c(大難子)咧。」『下 33b』
師 ssy 1 例	1. 「聽着說 c(尊府老大人)是, b(王爺的)師傅呢。」『下 36a』

付録3 『你呢』 ss 表記を含む漢字の文焦点

漢字	文焦点
三 10 例 ssan	1. 遼東 a(是)b(在這)a(<u>多遠</u>)哪。有个 b(三百多里的)c(地)啊。『你 8a』 2. 上下家眷禮具禮 e(<u>多小</u>)呀。b(三十多个)家口哪。『你 8b』 3. 那嗎一个房子 b(<u>能勾</u>)住 d(得下)嗎。b(四十多間)大房子 b(<u>纔三十多个</u>)人 e(<u>怎嗎</u>)住 d(不下)呢。『你 9a』 4. b(你們家裡一年的)照顧著 e(<u>多少</u>)啊。b(不算粮食寡吃穿使用的打得一塊)算 d(起來)嗎, 著个 b(<u>三百來的</u>)c(銀子)。『你 9b』 5. 我 b(在邊門口)作過 b(<u>三十多年的</u>)買賣, 辦過 e(多小)b(皮子的)c(生意), b(從前並沒有調皮子的)規矩, 但等著我來, 你呢 b(要)開 e(這)b(一件)c(例兒)嗎 b(一種)皮子是本來 b(並不)是 b(一个)講主, 原是 b(好歹)瞧着 c(成色), 各人看到 e(甚嗎)c(成色), 講到 e(甚嗎)c(價錢), e(這)个 a(是)b(<u>自古以來遵行的</u>)c(舊例), b(難得)說 a(是)你咳 d(不慚得)嗎。『你 17a-17b』 6. 三停走一停『你 29a』 7. 不管 c(三七二十一)『你 29b』 8. 走 c(三家)不用問 c(恆家)『你 30a』 9. 朝廷 b(咳)有 b(三門子)窮親『你 31a』 10. 寔心任事結已奉公陡陞三級『你 32a』
四 5 例 ssy	1. 你呢 a(貴庚)啊。我 b(<u>纔</u>)a(<u>四 ssy 十五歲</u>)咧。『你 8b』 2. 哥兄 a(幾位)啊。弟兄們四 ssy 个 b(都在一塊)a(過日子)b(咳)a(沒有分家)咧。『你 8b-9a』 3. 那嗎一个房子 b(<u>能勾</u>)住 d(得下)嗎。b(四 ssy 十多間)大房子 b(<u>纔三十多个</u>)人 e(<u>怎嗎</u>)住 d(不下)呢。『你 9a』 4. 四 ssy 角不 a(合實)唇榔不 a(下槽)『你 31b』 5. b(四 ssy 塊)綫『你 33b』
上 9 例 ssiang1 例 sang 7 例 siang 1 例	1. 上 ssiang 下家眷禮具禮 e(<u>多小</u>)呀。b(三十多个)家口哪。『你 8b』 2. 你 e(這)个 價錢 b(<u>忒</u>)a(貴)呀。要二不上 sang 倒也就罷了, 說 e(<u>那嗎</u>)b(大)c(謊), e(<u>誰</u>)b(肯)a(買着)b(你)e(那个)b(貴)東西呢。『你 12b』 3. 你 a(打)b(你的)c(算板), 若願意就咱們 b(馬上 sang)停當, 若不願意就罷。『你 13a』 4. 好說好說 我瞧 b(你)e(那个)b(牛皮堆得)五堆子, 每堆子上 sang 頭的 a(是)b(可以)看 d(得過), 底些堆的 a(是有)c(半羅的)b(咳)a(有)c(爛的), b(都不)a(得)c(<u>一半</u>)。『你 16a』 5. 却所以呢 哄人不過 c(一遭), 作比你見 c(我便宜)咧 我也是心裡 a(過)d(得去)嗎, 若說是你上 (siang) b(我的)c(當), 赶明个你 b(咳)a(理)c(我)嗎, 我也 e(怎

	嗎)對 d(得過) c(你)呀。『你 19b-20a』 6. 札上 sang 『你 22a』 7. 案上 sang 『你 22b』 8. 錦上 (sang) a(添)花 『你 26a』 9. b(你) e(這個) b(體面的) 生意一條口俗也借 d(不出來)呢算 e(甚麼) b(體面的) 生意呢 將棍子 a(插打)就完咧 b(咳)用 a(打開瞧)嗎 不是我們上 sang 稅的肯漏 b(你們)稅嗎, 他們也 b(爬山過嶺大遠地方) a(來咧) b(不) a(販貨干) e(甚麼)呢, b(拿刀子)一刺出血就罷咧弄 d(不出) b(一个) c(錢) d(來)呢。『你 32b-33a』
下 16 例 ssia 2 例 sia 9 例 sa 1 例 sia 1 例 ssar 1 例 ssa 2 例	1. 上下 ssia 家眷機具機 e(多小)呀。 b(三十多个)家口哪。『你 8b』 2. 那嗎一个房子 b(能勾)住 d(得下 ssia)嗎。『你 9a』 3. b(四十多間)大房子 b(纔三十多个)人 e(怎嗎)住 d(不下 sia)呢。『你 9a』 4. 地却是多 d(不過) b(二十多成) c(地), 赶到 c(秋天)收成 c(糧食)就現賣 c(一半)打咧 b(人家的)吸荒, 剩下 (sia) c(一半) b(剛)勾一年 a(吃)。『你 9b-10a』 5. b(我) e(這個) b(機來的)東西 b(好歹) a(不同), 比 b(人家) c(頭裡)你呢 b(哺哩)都瞧瞧, e(那个)裡頭 b(看中的)東西 a(否)咧, 只管 b(往我) a(說)罷, 我 b(給你)留下 sia, b(再不敢) a(應許) c(別人)哪。『你 10b-11a』 6. b(一張)牛皮 b(小不)賣一兩八錢紋銀, e(這個)是 b(再不能)惱 d(下 sia 來)的 b(老寔)價錢哪。『你 12a-12b』 7. 也 a(是得), b(若) a(不是) e(那嗎)着, 我 e(那个) b(各樣)東西裡頭憑你呢 b(只管) a(帶) d(回去), 算算帳 那怕下 sia 短 e(多小)呢 我 b(給你) a(寫) b(一个) c(回单子), 赶下塘還 c(你銀子)是 d(得)是 d(不得)。『你 13b』 8. 也 a(是得), b(若) a(不是) e(那嗎)着, 我 e(那个) b(各樣)東西裡頭憑你呢 b(只管) a(帶) d(回去), 算算帳, 那怕下短 e(多小)呢, 我 b(給你) a(寫) b(一个) c(回单子), 赶下 sa 塘還 c(你銀子)是 d(得)是 d(不得)。『你 13b』 9. 我 b(也不願意) a(該) c(你銀子), 你呢既是 b(不要) a(放帳)就, 把我 e(那个)雜貨按 b(你的)銀數兒, 拿去就却 d(不完)。 e(那个)越發 d(下 sia 不來), e(這些个)雜貨拿 d(回去)咧, 到我們地方剛勾本賣到現銀子就, 也倒沒有 c(難), 若說是恒事一達賣 d(不出去)咧, 我咳該 e(怎嗎)的呢。『你 14b』 10. 我 a(給) c(你) b(一千兩) c(現銀子), b(剩下 sia 的)銀子却是, b(頂着雜貨)拿去就算了咧。『你 15b』 11. 俗言 a(道), b(先) a(斷) b(後) a(不難), 咱們嗎 (口尚) b(哺哩)都 a(打開瞧一瞧), b(寡) a(調出) c(不好的) d(來), a(剩) c(下 sia 多小) a(算) c(多小), a(點點) c(數兒) a(起) c(票) d(來), 却不省 b(明个的)嘮道嗎, 那怕連 c(一張)也 a(沒有) e(甚麼) c(調頭兒)否咧, 我 b(咳比你更) a(喜歡)哪。『你 16a-16b』 12. e(這個) b(纔) a(是) c(話), 一遭生兩遭熟, 咱們 a(是) b(開道的) c(買賣), b(初

	會的)朋友跟前 你呢留b(一点)人情b(纔往後再)顧照c(你)呢 你要b(罷道)a(作)咧, 趕下 sia 次 e(誰)b(肯)a(惹)c(你)嗎, 咱們長作不作。『你 16b』 13. 摘 d(下 sia 來) 『你 24a』 14. 隧 d(下 ssar 來) 『你 24b』 15. 無錢b(寸步難)a(行), 有錢b(能)a(變)c(天下 ssa) 『你 29a』 16. 四角不 a(合實)唇榔不 a(下 ssa 槽) 『你 31b』
十 10 例 si 8 例 sy 1 例 ssy 1 例	1. 你在 e(這裏)作生意有 e(多少)b(年的)c(工夫)嗎。有个 b(二十 si 多年的)c(工夫)咧。『你 8a』 2. 你呢 a(貴庚)啊。我 b(纔)a(四十 si 五歲)咧。『你 8b』 3. 上下家眷禮具禮 e(多小)呀。 b(三十 ssi 多个)家口哪。『你 8b』 4. 那嗎一个房子 b(能勾)住 d(得下)嗎。 b(四十 si 多間)大房子 b(纔三十多个)人 e(怎嗎)住 d(不下)呢。『你 9a』 5. 那嗎一个房子 b(能勾)住 d(得下)嗎。 b(四十多間)大房子 b(纔三十 sy 多个)人 e(怎嗎)住 d(不下)呢。『你 9a』 6. 地却是多 d(不過)b(二十 si 多成)c(地), 赶到 c(秋天)收成 c(粮食)就現賣 c(一半)打咧b(人家的)吸荒, 剩下 c(一半)b(剛)勾一年 a(吃)。『你 9b-10a』 7. 我 b(在邊門口)作過 b(三十 si 多年的)買賣, 辦過 e(多小)b(皮子的)c(生意), b(從前並沒有調皮子的)規矩, 但等著我來, 你呢 b(要)開 e(這)b(一件)c(例兒)嗎, 『你 17a』 8. b(一五一十 si 的)說 『你 29b』 9. 不管 c(三七二十 si 一) 『你 29b』 10. 八九不離十 si 就也倒 a(罷了) 『你 33a』
使 5 例 ssy	1. b(你們家裡一年的)照顧著 e(多少)啊。 b(不算粮食寡吃穿使用的打得一塊)算 d(起來)嗎, 著个 b(三百來的)c(銀子)。『你 9b』 2. 也是得, 我 a(沒有)b(別的)c(東西), a(只有)b(一千多張)c(牛皮), 你要 a(使換)就, 咱們 b(先)a(講)c(價錢)罷。『你 11a』 3. e(那个)裡頭 b(可以使 d(得過)樣兒)的是, 算我的, 若有看 b(不過)樣兒的是, e(誰)b(肯拿)c(現銀子)a(買去)呢。『你 16a』 4. 我 e(那个)牛皮是本成並沒有使 d(不着)的, 不怕隨你調, e(為甚嗎)不教調呢。不但是有人笑壞 c(我)呀, b(從這以後只怕底些的留例的)意思呢。『你 18a』 5. b(看風)使船 『你 27b』
死 3 例 ssy	1. 王大哥你呢 b(寡)a(聽見)b(死高麗的)c(話), 却 b(就)不能的, 寡我死高麗胡弄 d(去)罷, 看 d(起)e(這個)d(來), 却知道你 e(那个)心樣兒 a(不值)咧。『你 18b-19a』 2. 王大哥你呢 b(寡)a(聽見)b(死高麗的)c(話), 却 b(就)不能的, 寡我死高麗胡弄

	d(去)罷, 看 d(起)e(這個)d(來), 却知道你 e(那個)心樣兒 a(不值)咧。『你 18b-19a』 3. b(死水裡)翻 c(船) 『你 28b』
噤 2 例 ssiang ssang	1. 噤 ssiang 子 a(渴) 『你 21a』 2. 噤 ssang 子 b(好)a(渴)啊 b(拿)e(甚嗎)a(治)e(這個)c(渴)呢。『你 33a』
送 3 例 ssiung	1. 送行 『你 22a』 2. b(一)送 『你 23b』 3. b(饋送的)東西 b(按信)收明。『你 31a』
喪 1 例 ssang	1. 喪 c(氣) 『你 22b』
摔 1 例 ssoi	1. 摔 c(他) 『你 23a』
香 2 例 ssiang ssang	1. 一臭一香 ssiang 『你 26b』 2. b(借香 ssang)燒佛爺 『你 28a』
鮮 1 例 ssuien	1. 鮮 ssuien 紅紅紅 『你 27a』
事 9 例 sy 3 例 syr 3 例 ssy 3 例	1. e(那個)越發 d(下不來), e(這些个)雜貨拿 d(回去)咧, 到我們地方剛勾本賣到現銀子就, 也倒沒有 c(難), 若說是恒事 sy 一違賣 d(不出去)咧, 我咳該 e(怎嗎)的呢。『你 14b』 2. b(咳)a(有)b(一件)c(事 sy)咱們哥兒 b(咳)沒有 a(言明)。e(甚嗎)勾當罷。『你 20a』 3. 看事 syr 作事 『你 25b』 4. 看事作事 syr 『你 25b』 5. b(愛)管閑事 syr 『你 26a』 6. 人 a(無)c(信)事 (ssy) a(不齊) 『你 29a』 7. b(當中)a(沒有)c(人)事 (ssy) a(不成) 『你 30b』 8. b(要)a(講)c(事 sy)b(只怕)a(沒有)c(究首) 『你 30b』 9. 寔心任事 ssy 結已奉公陞陞三級 『你 32a』
似 1 例 ssy	1. b(得意)狐兔強 d(似虎) 『你 29b』
小 12 例 siao10 例 sau 1 例	1. 上下家眷禮具禮 e(多小 siao)呀。b(三十多个)家口哪。『你 8b』 2. 家 a(有)e(多小 siao)c(天地)地嗎。『你 9b』 3. b(一張)牛皮 b(小 siao 不)賣一兩八錢紋銀, e(這個)是 b(再不能)惱 d(下來)的

ssao 1 例	b(老寔)價錢哪。『你 12a』 4. 也 a(是得), b(若)a(不是)e(那嗎)着, 我 e(那个)b(各樣)東西裡頭憑你呢 b(只管)a(帶)d(回去), 算算帳, 那怕下短 e(多小 siao)呢 我 b(給你)a(寫)b(一个)c(回单子), 赶下塘還 c(你銀子)是 d(得)是 d(不得)。『你 13b』 5. 俗言 a(道), b(先)a(斷)b(後)a(不難), 咱們嗎(口尚) b(甯理都)a(打開瞧一瞧), b(寡)a(調出)c(不好的)d(來), a(剩)c(下多小 siao)a(算)c(多小), a(點點)c(數兒)a(起)c(票)d(來), 却不省 b(明个的)嘮道嗎, 那怕連 c(一張)也 a(沒有)e(甚嗎)c(調頭兒)否咧, 我 b(咳比你更)a(喜歡)哪。『你 16a-16b』 6. 俗言 a(道), b(先)a(斷)b(後)a(不難), 咱們嗎(口尚) b(甯理都)a(打開瞧一瞧), b(寡)a(調出)c(不好的)d(來), a(剩)c(下多小)a(算)c(多小 siao), a(點點)c(數兒)a(起)c(票)d(來), 却不省 b(明个的)嘮道嗎, 那怕連 c(一張)也 a(沒有)e(甚嗎)c(調頭兒)否咧, 我 b(咳比你更)a(喜歡)哪。『你 16a-16b』 7. 我 b(在邊門口)作過 b(三十多年的)買賣, 辦過 e(多小 siao)b(皮子的)c(生意), b(從前並沒有調皮子的)規矩, 但等著我來 你呢 b(要)開 e(這)b(一件)c(例兒)嗎, 『你 17a』 8. 作比我買 b(你的)灰鼠皮否子, b(裡頭)有的是別說是 b(些凍)小 siao 一点, 那怕有 c(光皮兒的沒有毛的)呢 你呢 b(許我們)a(調)嗎 b(管包不讓)a(調), 你 e(這個)b(行不出的)話是, 我看到底無益, e(何)故 d(來)呢。『你 17b-18a』 9. 小 siao 他 d(不得) 『你 26b』 10. 載 a(多)車 a(小 sau) 『你 27b』 11. 酒逢知己千盃 a(小 siao) 『你 29b』 12. 小 ssao 河裡存 d(不得)大魚 『你 30b』
善 1 例 ssien	1. 行善望報不如 c(禽獸) 『你 30b』
燠 1 例 ssun	1. 利慾 a(燠)c(心)連眼睛也 a(花) 『你 30b』
雄 1 例 ssiung	1. a(沒有)b(一个)c(大錢)能 b(別)a(道)c(英雄好漢) 『你 31b』
蔘 1 例 ssyn	1. 白蔘 ssyn 『你 34a』

漢字	文焦点
三 4 例 ssam 2 例 ssan 1 例 bsian 1 例	1. 鄙處在遼東城裡 a(住)呵，有个 b(三 ssam 百多里) 地。『学 1a』 2. 上下家眷 e(多小)呵。b(三 ssan 十多个) 人家口那。『学 2a』 3. 一个房子 b(能句 (勾)) 住 d(得下)嗎。b(四十多間) 大房，b(纔三 bsian 十多个) 人，e(甚嗎) 住 d(不下)呢。『学 2a』 4. 你(我)b(在过(邊) 门口)作過 b(三 ssam 十多年的) 生意，辨過 e(多小)b(皮子的)c(生意)，b(從來並沒有調皮子的) 規矩，但等着我，你呢 b(要) 閑e(這)b(一件)c(例兒)嗎。『学 11a-11b』
四 2 例 ssy 1 例 bsy 1 例	1. 哥兄 a(幾位)呵。弟兄們是四 ssy 个 b(都在一塊ㄌ)a(日子)，b(還)a(没有分家) 咧。『学 1b』 2. 一个房子 b(能句 (勾)) 住 d(得下)嗎。b(四 bsy 十多間) 大房，b(纔三 bsian 十多个) 人，e(甚嗎) 住 d(不下)呢。『学 2a』
十 4 例 ssi 1 例 si 2 例 sy 1 例	1. 上下家眷 e(多小)呵。b(三十 ssi 多个) 人家口那。『学 2a』 2. 一个房子 b(能句 (勾)) 住 d(得下)嗎。b(四十 si 多間) 大房b(纔三十多个) 人，e(甚嗎) 住 d(不下)呢。『学 2a』 3. 一个房子 b(能句) 住 d(得下)嗎。b(四十多間) 大房 b(纔三十 sy 多个) 人，e(甚嗎) 住 d(不下)呢。『学 2a』 4. 你 b(在过(邊) 门口)作過 b(三十 si 多年的) 生意，辨過 e(多小)b(皮子的)c(生意)，b(從來並沒有調皮子的) 規矩，但等着我，你呢 b(要) 閑e(這)b(一件)c(例兒)嗎。『学 11a-11b』
使 3 例 ssy	1. 我 a(沒有)b(別的)c(東西)，a(只有) b(一千多張) c(牛皮)，你要 a(使換)，就咱們 b(先)a(講)c(價錢)罷。『学 3b-4a』 2. 我 a(瞧) 你 b(那个) 牛皮 d(堆得五堆子)，b(每堆子上頭的) 是可以使 d(得過)，b(底些ㄌ堆的) 是 a(有) 半囉的咳 c(爛的)，都 a(不得)c(壹盤ㄌ)。『学 9b-10a』 3. 我 e(那个) 牛皮是本成並沒有使 d(不着) 的，不怕隨你調。e(為甚嗎) 不教調呢。不但是有人笑壞 c(我)呀，b(從這以後只怕底些留咧 (例) 的) 意思呢。『学 12b-13a』
死 2 例 ssys	1. 王大哥 b(寡)a(聽見)b(死高麗的)c(話)，却 b(就) 不能的 寡我死高麗胡弄 d(去) 罷。看 d(起)e(這個)d(來)，却知道你 e(那个) 心樣 a(不值) 咧。『学 13b』 2. 王大哥 b(寡)a(聽見)b(死高麗的)c(話)，却 b(就) 不能的 寡我死高麗胡弄 d(去) 罷！看 d(起)e(這個)d(來)，却知道你 e(那个) 心樣 a(不值) 咧。『学 13b』

付録5『華音撮要』ss 表記を含む漢字の文焦点

漢字	文焦点
三 12 例 ssan 7 例 ssar 1 例 ssian 2 例 san 2 例	1. 上塘 b (我托的)東西 a (拿來)咧嗎。 b (三 ssan 種裡)頭兩種 a (拿來)，但一種 b (沒有) a (帶來)咧。『1a』 2. 你呢叫底些兒們扛 b (一點)劈柴火三 ssar 領席子一面鍋 b (給我) a (送來)罷。『2b-3a』 3. b (他的)上塘 a (提)你的話， b (三 ssian 十八吊錢的)西狗拿去說是， e (這)次你 a (來開付)啊。『9a』 4. 販起 d (不來)咧我 b (白)丟 b (三 ssan 十多吊) c (錢)嗎。『9b』 5. 他說是趕過年正月初頭，你們大老爺 a (打) b (一場) c (官圍)， b (再三 ssan 再四的) a (托) c (我) a (找) b (一個好) c (狗)。『10b』 6. 這個纔說理的話，教 c (我)心裡過 d (得去)，別說是 b (三 ssian 十多吊)錢，那怕是丟咧他 b (一百吊)錢，也不大 e (怎嗎)箇兒哪。何老四我頭裡說的是賺你的話，橫豎他的 e (這)塘赶上就 a (是)咧。『11a』 7. 李掌櫃的你呢 b (三 ssan 四年的)工夫，家裡 b (幾遍)走過啊。『13b』 8. 橫豎用不了 b (三 ssan 更天的)工夫可以到門上去。『16a』 9. b (那裡的)話呢 吳老三 ssan 是我勾他多少年相識的， e (怎嗎)不認得 c (我)嗎。『24b』 10. 好話三 san 遍說過狗 b (也)不喜歡 『59b』 11. 一年經蛇 a (咬) 三 ssan 年 a (怕)井繩 『61a』 12. 張三(san) a (喫酒)李四 a (醉) 『61b』
使 15 ssy 13 例 sy 2 例	1. e (那個)東西原 a (是)我們大老爺使 ssy 用的， e (這)塘 b (若不)拿去咧，回去管包有 b (大)難子。『1b』 2. e (這個)纔可以使 ssy 得過兒。『2a』 3. 那嗎在 e (這裡)趕着使 ssy 換歸起趕帳筭罷。『4b』 4. 你的 a (多)使(ssy) c (我的)也 a (是)得 我的短 c (你)多少也 a (是)得 裡外 b (再) a (找)罷。『4b』 5. e (那個)是現成的，知道有的，零賣的使(ssy) d (不得)。『5b』 6. 盖州船上纔卸的，原封原箇兒的 b (纔可以)使 ssy 得咧。『5b』 7. b (使 ssy 筋)嚼也嚼不動，教我 e (那裡)使去呢。『6a』 8. b (使筋)嚼也嚼不動，教我 e (那裡)使 ssy 去呢。『6a』 9. 你 b (還不) a (知道)我的家口兒多咧，年年照顧 a (不少)咧，若是走咧 d (一遍)拿二百銀子 b (纔可以)使 ssy 得來回呢。『13b-14a』 10. b (全興號的)標在 e (這裡) a (使 ssy) d (不下去)啊。『17a』 11. 却是有標使(ssy) d (不下去)像是我一个胡弄你們來的兒樣啊。『17b』 12. e (這) b (一張標使 ssy) d (不下去) b (的)時候兒， a (知道)他們不怕不給我的。『18a』

	13. b(遠接)使 sy 『56b』 14. b(節度)使 sy 『56b』 15. b(看風)使 ssy 船 『57b』
筭 12 例 ssan 1 例 ssian 2 例 soian 3 例 soan 6 例	1. e(那個)a(倒)筭(ssan)e(甚麼)呢。『2a』 2. 萬一漏信兒咧，筭 ssian 是你 a(砸)b(我的)c(鍋)咧。『4a』 3. 你 e(這個)好笑話，你呢打着別人否咧沒有 e(這個)筭 ssian 盤咧。『4a』 4. 憑你呢歸起該 e(怎麼)筭 soian 都是得啊。『8b』 5. 連各人家 e(那裡)對賬的一共老兒筭(soian)d(起來)嗎，迭个 b(二十五吊來的)錢。『9b』 6. e(這個)是怪不着你啊，全是兄弟惱的，筭 soian 是兄弟吭你 d(一下子)否咧。『11a』 7. 罷叻你 b(却)a(是)大賺我來着，我 b(却)a(是)筭 soan 是丟定咧。『11a-11b』 8. 趕他們臨走 a(筭 soan 筭)b(各人的)賬，上頭賺的是管多筭你的狗錢是 d(得)是 d(不得)。『11b』 9. 趕他們臨走 a(筭筭 soan)b(各人的)賬，上頭賺的是管多筭你的狗錢是 d(得)是 d(不得)。『11b』 10. 李四爺，我 e(這個)單子是買 b(零碎)東西的，舖子裡有的是筭 soan 現成的，b(細細兒)下眼查看，若有沒有得咧，b(嗎尚)a(打派)人給 c(我)買來罷。『15b』 11. 若說是短你們十來吊錢否咧，e(那個)倒好說，b(百數兒來的)錢否咧，還筭 soan 小的嗎。『18b』 12. 筭(soan)d(不得)人 『58b』
十 16 例 ssi 7 例 si 8 例 sir 1 例	1. 你的賒我 b(十 ssi 包)帽子咧，趕下塘 a(還)c(你銀子)是 d(得)是 d(不得)。『2b』 2. b(就)a(是)罷，你 b(要)a(拿)d(去)就 b(別)a(說是)c(十 ssi 包)，那怕一百包也我的 b(好)放心哪。『2b』 3. 昨兒個春季子受下 b(我的五十 si 多兩)銀子，b(却)不知擱得那裡呢。『4b』 4. b(按舊例)一包退十 ssi 斤就 a(完)咧。你若那嗎就一个小桶子否咧剛勾二十斤的，也給人家退十斤的 a(有)嗎。『7b-8a』 5. b(按舊例)一包退十斤就 a(完)咧。你若那嗎就一个小桶子否咧剛勾二十 ssi 斤的，也給人家退十斤的 a(有)嗎。『7b-8a』 6. b(按舊例)一包退十斤就 a(完)咧。你若那嗎就一个小桶子否咧剛勾二十斤的，也給人家退十 ssi 斤的 a(有)嗎。『7b-8a』 7. a(有)c(一千)a(退)c(一百)，a(有)c(一百)a(退)c(一十 ssi)，a(有)c(一十)a(退)c(一斤)。『8b』 8. a(有)c(一千)a(退)c(一百)，a(有)c(一百)a(退)c(一十)，a(有)c(一十)

	ssi)a(退)c(一斤)。『8b』 9. 連各人家 e(那裡)對眼的一共老兒筭 d(起來)嗎, 迭个 b(二十 si 五吊來的)錢。『9b』 10. 舁起 d(不來)咧我 b(白)a(丟)b(三十 si 多吊)c(錢)嗎。『9b』 11. 今年 a(貴庚)啊, 今年 a(有)c(八十 si 九歲)咧。『16b』 12. 我 a(念)你 a(打), b(共)a(合)e(多少)嗎 b(共)a(合)c(一百一十 si 吊)的啊。『17a』 13. 我 a(有)b(全興號的一百一十 si 八吊的)錢標呢。『17a』 14. 若說是短你們十 sir 來吊錢否咧, e(那个)倒好說 b(百數兒來的)錢否咧, 還筭 soan 小 ssiau 的嗎。『18b』 15. 你的多大年記嗎, 我 b(纔)a(二十 si 五歲)咧。『22b』 16. b(十 si 箇)看守的 b(難)a(制防)b(一箇)賊。『62b』
下 17 例 ssia 14 例 sia 2 例 ssar 1 例	1. 你的賒我 b(十包)帽子咧, 趕下 ssia 塘 a(還)c(你銀子)是 d(得)是 d(不得)。『2b』 2. 那麼趕下 sia 次販煙草來的 b(必見光)啊。『3b』 3. 昨兒個春季子受下(ssia)b(我的五十多兩)銀子, b(却)不知攔得那裡呢。『4b』 4. 趕下 ssia 塘 b(却不定)我 a(來不來), 若 b(不來的)時候兒, 小不得夥計 a(來)。『5a』 5. 趕下 ssia 季子來定趕 d(上)趕 d(不上)啊。『5a』 6. 到 e(那裡)若說是出 d(不上)價錢 b(就)a(不賣), 又不知攔下(ssia)b(多少年的)工夫纔往瀋陽去的也 a(有), 往遼陽拉的也 a(有)呢。『7a』 7. 那嗎又網 d(起來), 上頭記號 b(替另)攔下 ssia 臨走過秤罷。『7b』 8. 到底是朋友裡頭臉上下(ssia)d(不來), a(打派)家裡的 b(往西村子財主家)去給他買來的。(10b) 9. e(這個)妙理你還不懂得, 比妨說是 e(這)次小來幾包下 ssia 塘多帶幾包, 一年輪背一千五百包 a(是)少不得, 一次小來幾包 a(是)不理會啊。『12b-13a』 10. 李四爺, 我 e(這個)單子是買 b(零碎)東西的, 舖子裡有的是筭現成的, b(細細兒)下 ssia 眼查看, 若有沒有得咧, b(嗎尚)a(打派)人給 c(我)買來罷。『15b』 11. 橫豎你 b(却)a(是)今兒个走 d(不着), 今兒个就天氣變咧, 下(ssia)b(一場)大雪, 又是惱大北風, e(這個)天氣你一个 b(可以)治得走嗎。『16a』 12. b(全興號的)標在 e(這裡)a(使)d(不下 ssar 去)啊。『17a』 13. 却是有標使 d(不下 ssia 去)像是我一个胡弄你們來的兒樣啊。『17b』 14. e(這)b(一張標使)d(不下 ssia 去)b(的)時候兒, a(知道)他們不怕不給我的。『18a』 15. e(那个)b(先不用)講究些兒, 黑地裡天道 a(下 ssia)e(這嗎)b(大)雪, a(刮)e(那嗎)b(大)風, 却不知咱們 b(往前)a(走)d(得)a(走)d(不得)呢。『20a』 16. e(這)b(一場)風雪 b(一頭)a(下 ssia)b(一頭)a(刮), a(湊成)c(雪堆子), 牲口 a(拔)d(不出)身子 d(來), 車轂輪 a(不轉)還用走得嗎。『20b』 17. b(下 sia 飯的)東西 『65a』

送 7 例 ssiung	1. 你呢叫底些兒們扛 b(一點) 劈柴火三領席子一面鍋 b(給我)a(送 ssiung 來)罷。『2b-3a』 2. 赶明兒打听准信兒, b(送 ssiung 文書來的)時候兒, b(給你們)a(送信)就是咧。『3b-4a』 3. 赶明兒打听准信兒, b(送文書來的)時候兒, b(給你們)a(送 ssiung 信)就是咧。『3b-4a』 4. 萬一送 ssiung 文書的否咧, b(我給你送 ssiung 信的)時候兒, 人家那裡 b(不會)a(送 ssiung 信兒)嗎。『4a』 5. 萬一送文書的否咧, b(我給你送 ssiung 信的)時候兒, 人家那裡 b(不會)a(送信兒)嗎。『4a』 6. 萬一送文書的否咧, b(我給你送信的)時候兒, 人家那裡 b(不會)a(送 ssiung 信兒)嗎。『4a』 7. 你要 e(那)些箇作 e(甚嗎)。京裡大人們跟前送 ssiung 禮的。『5b』
現 5 例 ssien	1. e(那個)a(是)現 ssien 成的, 飯 b(却)a(是)早給你攪的。『3a』 2. e(那個)a(是)現 ssien 成的, a(知道)有的, 零賣的 a(使)d(不得)。『5b』 3. 黃老大你 e(這個)標是 b(拿現 ssien 錢)對換來的嗎。『18a』 4. 自家銀号對給 c(他們現 ssien 銀子), 每一兩銀子六吊八百錢合起來換錢來的呢。『18a』 5. 就是 e(這裡)沒有 e(甚嗎)b(認得的)朋友, 弄 d(不來)現 ssien 錢。『18a-18b』
先 7 例 ssien	1. 我說的 a(是)e(這)b(關東一處的)光景, 先 ssien 不知關裡 e(怎嗎)箇兒的呢。『3b』 2. 昨兒个 b(往遼東)a(要帳)去, b(先 ssien 沒有)a(回來)咧。『4a-4b』 3. e(那個)b(先 ssien 不用)講究些兒, 黑地裡天道 a(下)e(這嗎)b(大)雪, 刮 e(那嗎)b(大)風, 却不知咱們 b(往前)a(走)d(得)a(走)d(不得)呢。『20a』 4. 噯啲我也是 b(先 ssien 沒有)a(問)b(你的)尊姓貴號啊。『22b-23a』 5. 你呢 b(先 ssien 別)a(焦急)罷。『23b』 6. e(這個)禮數之 a(不是)b(我們高麗從來遵守的)規矩, 也 a(是)b(先 sien 皇先帝的)規矩。『56a』 7. e(這個)禮數之 a(不是)b(我們高麗從來遵守的)規矩, 也 a(是)b(先皇先 sien 帝的)規矩。『56a』
笑 3 例 ssiau 1 例 siau 1 例 ssau 1 例	1. 你 e(這個)好笑 ssiau 話, 你呢打着別人否咧沒有 e(這個)算盤咧。『4a』 2. 我 e(這個)話是過不是 b(向你頑笑 siau 的)話, 你呢 e(別)a(恠)c(我)罷。『5b』 3. e(那裡)a(有)b(騎不住的)c(驢子)嗎, 你也是 b(會)a(說笑 ssau 話)咧。『12b』
小 26 例 ssia 6 例	1. 赶下塘 b(却不定)我 a(來不來), 若 b(不來的)時候兒, 小 ssia 不得夥計 a(來)。『5a』 2. e(這)a(不是)我惱的, 我們小 ssiau 夥計 b(在盖州船上)上當來的啊。『6a-6b』

ssiau 15 例	3. b(按舊例)一包退十斤就 a(完)咧。你若那嗎就一个小 ssia 桶子否咧剛勾二十斤的,也給人家退十斤的 a(有)嗎。『7b-8a』
ssau 1 例	
ssiao 1 例	4. e(那个)a(是)水漲船高,小甬子否咧,赶子小傢伙裝上的自然 a(是)b(東西小的)時候兒,皮子不少嗎。e(那裡)小桶子 b(給你們)退十斤的 a(有)嗎。『8a』
sao 1 例	
siao 2 例	5. e(那个)a(是)水漲船高,小甬子否咧,赶子小 ssia 傢伙裝上的自然 a(是)b(東西小的)時候兒,皮子不少嗎。e(那裡)小桶子 b(給你們)退十斤的 a(有)嗎。『8a』 6. e(那个)a(是)水漲船高,小甬子否咧,赶子小傢伙裝上的自然 a(是)b(東西小 ssia 的)時候兒,皮子不少嗎。e(那裡)小桶子 b(給你們)退十斤的 a(有)嗎。『8a』 7. e(那个)a(是)水漲船高,小甬子否咧,赶子小傢伙裝上的自然 a(是)b(東西小的)時候兒,皮子不少嗎。e(那裡)小 ssia 桶子 b(給你們)退十斤的 a(有)嗎。『8a』 8. 我 a(借)c(你)b(一百吊小 ssiau)c(錢),家裡開 b(一場)湊風。『11b』 9. 赶他們臨走 a(算算)b(各人的)賬,上頭賺的是管多小 ssiau 算你的狗錢是 d(得)是 d(不得)。『11b』 10. 一匹驢子否咧, b(捨不得)a(借)c(你)嗎。你 e(這嗎)b(不信)c(我)咧,坐 b(我的)小 ssiau 車 a(走)罷。『12b』 11. e(這個)妙理你還不懂得,比妨說是 e(這)次小 ssiau 來幾包下塘多帶幾包,一年輪背一千五百包 a(是)少不得,一次小來幾包 a(是)不理會啊。『12b-13a』 12. e(這個)妙理你還不懂得,比妨說是 e(這)次小來幾包下塘多帶幾包,一年輪背一千五百包 a(是)少不得,一次小 ssiau 來幾包 a(是)不理會啊。『12b-13a』 13. 舖子裡沒有人照管,每季子 a(打派)一个小 ssau 夥計去咧。『14a』 14. b(你的)小 ssiau 夥計去咧 b(可以)a(辦事)嗎。『14a』 15. 外頭 e(怎嗎)噪換哪,你呢 a(叫)b(一个)c(小 ssiau 夥計)問一問外頭兒的 e(甚嗎)緣故。『14a』 16. 你們這裡王法是 b(打死討錢的也給償命)的規矩 a(有)嗎。赶子 e(這)是小 ssiau 不得的。『14b-15a』 17. 發咧大財 b(却)是在 b(各人的)福氣,得咧小 ssiau 財 b(却)是在 b(各人的)本事呢。『15a』 18. 今兒个小 ssiau 不得 a(回去)咧。『15b』 19. 橫豎 b(你的)銀子 b(却)是有得那裡呢,販起小 ssiau 不得 a(開付)c(你)。『18a』 20. 若說是短你們十來吊錢否咧, e(那个)倒好說, b(百數兒來的)錢否咧,還算小 ssiau 的嗎。『18b』 21. 若混走咧,雪地裡 b(半凍半水的)河溝子 e(那裡)車 a(一翻)咧,惱出 c(小 ssiau 難子)d(來)嗎。『21a』 22. 還在 a(早)啊。b(往前)走 b(不多)遠, b(一過小 ssiau 嶺路東山根底些乙有老墳的)e(那)b(一座)瓦房是就是 b(徐家的)庄子呢。『23b』 23. b(我們的)王法老爺 a(不知道)嗎,萬一一个退了嗎我們 a(得罪)d(不小 ssiao)。

	『55b』 24. b(大)驚b(小 sao)恠『58a』 25. 人貪志小 siao『58b』 26. a(留得)青山在a(不怕)柴火大小 siao『61a』
向 2 例 ssiang 1 例 hiang 1 例	1. 我 e(這個)話是過不是 b(向 ssiang 你頑笑 siao 的)話, 你呢 b(別)a(恠)c(我)罷。『5b』 2. 向 hiang 他『65b』
少 12 例 ssia 1 例 ssiau 4 例 siau 5 例 siao 2 例	1. e(那個)a(是)水漲船高, 小甬子否咧, 趕子小傢伙裝上的自然 a(是)b(東西小的)時候兒, 皮子不少 ssia 嗎。e(那裡)小桶子 b(給你們)退十斤的 a(有)嗎。『8a』 2. 橫豎你們兄弟裡頭, 少(ssiau)d(不了)我的短 d(不了)我的是得。『10a』 3. 你們外貨裡頭 e(甚嗎)a(多)咧。沒有 e(甚嗎)b(狠)多的, 就是海菜 a(少 ssiau)咧。『13a』 4. 听着說一年一千五百包 a(是)b(一定的)留例, 一塘否咧, 也 a(有)c(少 ssiau 來的)嗎。『13a』 5. e(這個)妙理你還不懂得, 比妨說是 e(這)次小來幾包下塘多帶幾包, 一年輪背一千五百包 a(是)少 ssiau 不得, 一次小來幾包 a(是)不理會啊。『12b-13a』 6. 你 b(還不)a(知道)我的家口兒多咧, 年年照顧 a(不少 siao)咧, 若是走咧 d(一遍)拿二百銀子 b(纔可以)使得來回呢。『13b-14a』 7. 那麼舖哩舖哩都打 b(起來), 共合多 a(少 siao)錢的。『17a』 8. 我 a(念)你 a(打), b(共)a(合)e(多少 siao)嗎。b(共)a(合)c(一百一十吊)的啊。『17a』 9. 咱們 a(走)咧 e(多少 siao)c(里地)嗎。『20a-20b』 10. b(南村子徐通官的)庄子是還有 e(多少 siao)c(里地)嗎。『22a-23b』 11. 死不在老少 siao『62b』 12. 少 siao 債 b(快)a(說謊)『64a』
死 6 例 ssy 5 例 ssyr 1 例	1. 王大哥你呢 b(寡)a(聽聽見)b(死 ssy 高麗的)話, 橫豎 a(有)b(幾個)c(活的)呢。『8a』 2. 楊夥計你 e(這嗎)混打人咧, 萬一打 c(死 ssyr)咧 e(怎嗎)的呢。 e(這)a(不是)頑哪。『14b』 3. 你們這裡王法是 b(打死 ssy 討錢的也給償命的)規矩 a(有)嗎。『14b』 4. e(這個)病牛都拿去 b(我們的)牛一塊兒放着是 b(我們的)牛也是得 a(病死 ssy)了, e(這個)當得嗎。『54b』 5. 山高遮 d(不得)太陽牛大压 d(不死 ssy)駱駝『60b』 6. 死 ssy 不在老少『62b』
四 11 例 ssy 10 例	1. e(誰)b(在外頭)a(找)c(我)啊, 何老四(ssy)b(在門口)a(招)c(你)a(說話)。『8b』 2. 坐着何老四 ssy, b(在底些兒站着)說話嗎。『9a』

sy 1 例	3. 何老四 ssy 你 e(這嗎)着, b(你的)e(那個)狗錢是有得 e(那裡)呢。『10a』 4. 他說是趕過年正月初頭, 你們大老爺 a(打)b(一場)c(官圍), b(再三再四 ssy 的)a(托)c(我)a(找)b(一個好)c(狗)。『10b』 5. 這個纔說理的話, 教 c(我)心裡過 d(得去), 別說是 b(三十多吊)錢, 那怕是丟咧他 b(一百吊)錢, 也不大 e(怎嗎)箇兒哪。何老四 ssy 我頭裡說的是賺你的話, 橫豎他的 e(這)塘赶上就 a(是)咧。『11a』 6. 走咧何老四 ssy, b(坐着)惱口兒罷。『12a』 7. 李掌櫃的你呢 b(三四 ssy 年的)工夫, 家裡 b(幾遍)走過啊。『13b』 8. 李四 ssy 爺, 我 e(這個)單子是買 b(零碎)東西的, 舖子裡有的<u>是</u>算現成的, b(細細兒)下眼查看, 若有沒有得咧, b(嗎尚)a(打派)人給 c(我)買來罷。『15b』 9. 你 e(這個)單子裡頭 別的 b(却)a(是)家裡 b(都)有的 就是 b(四 ssy 斤)葫芦条 b(兩匣子)菓子 b(一匣子)雞蛋糕 b(幾套)旧書是 b(別處給你)a(買來)啊。『15b-16a』 10. e(那個)也是得, b(四 ssy 爺的)話 b(咱們家裡的)老太太 b(還)a(是)硬朗嗎, 『16a-16b』 11. 張三 a(喫酒)李四(ssy)a(醉) 『61b』
兄 4 例 ssiung	1. e(這裡)好, 你的叔伯兄 ssiung 弟麼子的。『9a』 2. 橫豎你們兄 ssiung 弟裡頭, 少 d(不了)我的短 d(不了)我的是得。『10a』 3. e(這個)是怪不着你啊, 全是兄 ssiung 弟惱的, 算是兄弟吭你 d(一下子)否咧。『11a』 4. e(這個)是怪不着你啊, 全是兄弟惱的, 算是兄 ssiung 弟吭你 d(一下子)否咧。『11a』
想 4 例 ssiang 1 例 siang 3 例	1. 听着說你 b(那個)趕車的 b(在東廂屋裡)害病, 想 ssiang 來是沒有人給我 a(趕車)罷。『12b』 2. 趕車的你的防想 siang 兒嗎。『20a』 3. 老爺可憐 b(我們的)e(這)b(一條)性命 b(再再)想 siang 着罷。『56b』 4. 人 b(不可)貌想 siang 海 b(不可)斗量 『59b』
山 10 例 ssian 2 例 san 8 例	1. 你呢暫住車, 望一望山 ssian 根底些兒, 若有住家的否咧, 咱們趕進去 a(烤)b(一候兒)c(火)a(吃)b(一袋)c(烟)a(暖和)c(身子)b(再)a(走)罷。『21a』 2. 你瞧 b(大路西邊乙山 ssian 根地些乙黑朦朦的)樹林子裡頭 e(這)不是 b(徐老五的)庄子嗎, 咱們 a(趕)b(進去)罷。『23a』 3. 山(san)a(高)水 a(低) 『57b』 4. 堆的如山 san 『58a』 5. 堆的如山 san 『58b』 6. a(管)c(山 san)a(喫)c(山 san)a(管)c(水)a(喫)c(水) 『60a』 7. 山 san 高遮 d(不得)太陽牛大压 d(不死 ssy)駱駝 『60b』 8. a(留得)青山 san 在 a(不怕)柴火大小 siao 『61a』

	9. 水深過 d(不得), 山 san 高上 d(不去) 『63a』 10. 日頭 a(壓) c(山 san) 『66a』
嫌 1 例 ssien	1. 風不透冷 d (不着)的又是 a (嫌 ssien) 冷嗎。『21b』
事 4 例 ssy 1 例 sy 3 例	1. 我到咧門口兒叫 b(一候乙的)工夫 b(纔)有 b(一個)雇工的 a(出來)說是吳當家的是 a(有事 ssy 出門)咧, 家裡空着 a(沒有)人陪客呢。『24a』 2. 廣知 b(天下)事 sy 『63a』 3. 萬事 sy 不由人計較 『63b』 4. 福 a(不至)萬事(sy)a(難) 『63b』
駟 1 例 ssy	1. 丈夫 a (一言)駟 ssy 馬 b (難) a (走) 『61a』

(1)

	a	ia	oa	e	ie	o
b	罷把巴八			北	別	
p	爬怕派			潑		
m	麼媽馬					摸謀
f	法發					
d	打大			得德		多剝躲
t	他塌			特		托妥
n	那拿					挪
r(1)	拉蠟			樂	咧劣例	落羅
g			掛寡刮	哥箇各		果
sg						
k			刮誇	客却可		
h			話花化	何哈河		活火貨
j	咱雜刺	家加夾		浙	這節着	坐卓作
c	茶叉插查				車	錯
s			耍		些謝寫	所訴嗦
ss	撒下	下殺紗			歇	
o(零)	啊曖	啲丫押	瓦	惡	爺也夜	

(2)

	ue	iuie	iue	i	y	u	iu
b				必比筆		不否部	
p				皮		舖葡	
m				密		母牧	
f						夫服福	
d				的地弟		都肚渡	
t				體提		土	
n				呢你		奴	
r(1)				李裏離		路露綠	
g	國過櫃					穀故瑰	
sg							
k						苦	
h	闊					胡糊呼	
j				啓幾籍	子怎只	就竹	住句主

c		揣		起旗齊	伺次磁	粗楚	出取處
s		說靴雪	說	失十媳	是時事	叔疎屬	書熟手
ss				十世	四史使		
o(零)	我窩	越月		日以一		五悞屋	如預

(3)

	iu	ui	er	ai	iai	@i
b				伯百稗排		
p				牌		
m				麥買賣		
f						
d		對		待歹帶		戴
t		推腿		泰太台		擡台太
n	女					
r(1)		驢				來
g		貴櫃貴		盖改		
sg						
k		虧		開		
h		回會徽		咳海害		海
j	舉聚橘	舉罪嘴		在再		
c	去	吹翠		纔才差		
s	歲雖緒	誰歲水 許俗		色		
ss					篩	
o(零)	語魚與	位味為	二兒	挨愛		

(4)

	ei	iei	yi	oai	oi	uei
b	北別輩		彼備貝			
p	陪		陪			
m	妹沒玫		每			
f			肺費			
d		跌				

t	特帖		忒			
n	內					
r(1)						
g			給	恠怪拐		跪
sg				塊快		
k						
h			黑	懷	愧	
j	宅	借街界	賊			
c						
s		卸鞋	失			
ss						
o(零)		葉		外		

(5)

	ao	iao	yu	eu	i-u	an
b	寶保報					班辦板
p	礮袍	票		跑		盤判販
m	冒帽毛	廟妙				滿慢瞞
f						飯煩
d	到道稻		豆斗			担耽丹
t	討套桃	條挑	頭			貪彈談
n	惱鬧					難南
r(1)	老勞撈	了料遼	簍樓		溜六柳	藍
g	告高		狗溝勾	勾		敢幹趕
sg						乾柑
k	考		口叩			看
h	好號		候後侯			旱翰漢
j	找遭早	叫教攪	走奏		就酒州	站慙粘
c	草	朝瞧巧			秋求紬	竄產
s	嫂	小紹消			手袖繡	珊
ss		少小燒				三扇散
o(零)	熬	若要藥			有又油	案岸安

(6)

	ian	ien	oan	uen	ioian	en
b		邊遍鞭				本
p		便偏				
m		面				悶
f						
d		點店惦	斷緞			
t		天添				
n		年				
r(1)		連憐臉		亂		
g			管官館			
sg						
k			寬	寬		
h			宦鬘歡			
j	賤間見				轉	
c		千前纏			船穿傳	
s		鮮先嫌	拴			
ss	三山	現閒縣	算			
o(零)	眼言顏	緣鹽沿	碗晚灣			

(7)

	yn	in	un	iuien	uien	iun
b	本	賓				
p	盆	品				
m	們	民				
f	分粉					
d			頓			
t						
n						
r(1)		鱗林臨	論			輪
g	跟		滾棍			
sg	懇根					
k						
h			葦混			
j		今進金				準均尊
c		親辰沉	村寸存	拳全		春羣

s		嬌信身	笋			順
ss	蔘					訓
o(零)	恩	人銀認	問文	原元遠	遠	運雲

(8)

	ang	iang	oang	eng	yng	ieng
b	邦					
p				朋		
m	忙			孟	朦	
f	房放方					
d	當擋				等燈登	
t	糖湯堂				疼	
n		娘		甩	能	
r(1)	狼郎	兩糧亮			冷	
g			光廣狂		庚	哽
sg	剛缸				更肯互	
k	炕		況			
h	行杭		皇黃謊		橫	
j		張江醬	壯裝庄	睜	中增	
c	槍	長場娼	窗			成程城
s		像想傷	雙		生牲省	聖
ss		上響鄉				
o(零)		樣楊讓	往王望			

(9)

	ing	ung	iung
b	氷並		
p	枰平憑		
m	明名命		
f		瘋風豐	
d	頂定	懂東登	
t	聽廷亭	同通筩	
n			

r(1)	齡令領	弄聾龍	
g		工公共	
sg			
k		空恐孔	
h		洪紅哄	
j	敬京政	中種衆	中
c	請清情	從崇	聰衝
s	姓行興	送松	
ss			兄
o(零)	迎櫻英		用永容

付録7『你呢貴姓』同音字表

(1)

	a	ar	ia	iar	oa	e
b	罷八把	鉞櫛				
p	怕發法					
sp						
m	嗎馬麻					
f						
d	打大搭					得
t	他撻					
n	那哪拿					夯
r (l)	鑽					咧惡
g			家價假		寡鴉	个哥勾
k						却可刻
h					話化花	何合和
sg						
gg						
j	家咱雜		家駕	遭		
c	差岔插					差
s	下沙		下吓	下		些
ss	三	下	下			
o (零)	啊呀曖		呀		王	餓

(2)

	er	ie	ier	o	or	ue
b			邊			
p				佛破婆		
sp						
m				莫磨		
f						
d				多		
t	貼			頭托躲		
n				老嘮挪		
r (l)				落		
g		着載隧				過鍋

k						
h				貨活穴		
sg						
gg						
j		這着	節着	作坐	昨	
c		車妾		錯		
s		些	些	所縮		說
ss		爺				
o (零)						我倭越

(3)

	iuie	i	ir	im	y	yr
b		界比必				
p		皮被				
sp						
m		米				
f						
d		的地第				
t		提蹄踢				
n		你呢禮				
r (l)		裡里哩				
g		幾今雞				
k						
h						
sg						
gg						
j		吸知既				柳
c		起吃尺				
s	說	十世食		甚		事
ss		十				
o (零)	月	意一日	一			

(4)

	ym	u	ur	iu	iui	ui
--	----	---	----	----	-----	----

b		不部布				
p		父哺付				牌
sp						
m		母嗎木				沒
f		夫				
d		都塗獨				對堆推
t		頭土吐				退推
n						
r (l)		妒路		鹿柳類		
g		顧矩古	顧	規	貴	貴販
k		故口			饋	
h		胡候主				回灰會
sg						
gg						
j	怎	住就主	具			嘴規
c		初出楚	趣	秋出	處去漆	去處崔
s		屬書蕪			歲暑	水許誰
ss						
o (零)		五無物		如	餘雨魚	位違為

(5)

	uie	uier	er	@i	ei	iei
b				百白柏	別背盃	別寫
p						
sp						
m				賣買		
f						
d				在帶歹	著得	
t				態台	鉄	
n						
r (l)				來	咧	
g	過	過		該改		
k				開		
h				咳海害		

sg						
gg					跡	
j				再在債	界接結	界接結
c	缺			纔材財		切
s	說			色腮	賒些設	
ss						
o (零)	月		二兒而	愛爨		爺

(6)

	yi	oai	oi	ao	iao	au
b				包保	瞞表	報
p	飛				票	
sp						
m	沒每美			帽毛冒	冒貓	毛
f						
d				到道倒	調吊雕	到倒
t	忒			調討套		桃
n				惱老怒	遼了惱	老
r (l)					了	
g	給	goai 『23b』 原文のまま		叫	教叫腳	
k		塊		靠		
h	黑	壞			好牯	
sg						
gg						
j				早找交	照着遭	照
c				瞧草操	瞧	朝
s				少燒捎	小少笑	小
ss			摔	小		
o (零)		外			藥要若	

(7)

	iau	yu	eu	i-u	an	ian
--	-----	----	----	-----	----	-----

b					半辨班	
p					板飯反	
sp						
m						勉
f						
d		抖陡			单担但	
t		頭透			攤彈	
n				留牛六	難南	
r (l)		漏			難爛亂	
g	高教	狗	勾高	勾舊九	敢干赶	間
k		口			看	
h		後厚			漢寒	
sg						
gg						
j		走		就究酒	間件賤	賤見件
c		湊			攙畧參	
s				收手售	山衫	
ss					三	
o (零)		樞		有又友	按案	言眼雁

(8)

	ien	oan	uen	en	yn	in
b	邊遍便			礮本		
p	便			便忿分		
sp						
m	面綿			悶		閩
f						
d	点	短斷		点		
t	天添			天		
n	年念連			連		
r (l)				臉		人
g		管冠關			根跟	
k		看寬			肯	
h		換還歡			狠	

sg						
gg						
j		轉				盡真儘
c	千錢前	穿船	全			親
s	現先嫌	算		現		身藩心
ss	善				蔘	
o (零)	緣然炯	萬完	遠願原	噎		銀

(9)

	un	iuien	uien	iun	ang	iang
b					梆	
p	分				房方放	
sp						
m	們門					
f						
d					當當	
t					塘塘蕩	
n					兩	兩
r (l)					兩	糧兩量
g	棍				剛	
k						
h	渾				恆行	
sg						
gg						
j	俊			遵君	張講帳	薑講張
c	村寸存		拳勸		長常唱	強
s	燠		顯		上想喪	上
ss			鮮		喪香噪	上噪香
o (零)	紋間	原	元願遠		讓杏	陽樣壤

(10)

	oang	eng	yng	ieng	ing	ung	iung
--	------	-----	-----	------	-----	-----	------

b					鉸并並		
p		朋礪平			憑杯並	縫逢風	風
sp						奉	
m		明夢蒙			明命名		
f							
d			等蹬登		定頂釘	東慟童	
t			疼		停聽廷	同通銅	
n			能		寧領翎	弄	
r (l)				零		攪弄隴	弄
g	光		庚更			工貢公	
k						空	
h	【口荒】黃 謊					哄紅	
sg			更				
gg							
j	粧		箏增		情晴竟	種中	種中終
c	闖撞粧	成青	承	城成情	請	從窮充	窮
s			生升省	盛	姓剩行	兄生鬆	
ss							送雄
o (零)	王往望				應鸚螢		用容

付録8『学清』同音字表

(1)

	a	ar	am	ia	iar	oa
b	罷八把	罷半盤				
p	怕發	法				
m	嗎馬瑪					
f						
sf						
d	大打					
sd						
t	他					
n	那鑽哪				兒	
r						
g				家倆	家	寡
k						
sk						
h						話
gg						
j	咱遭雜			家再咱	家	
c						
s				下	下	算
bs						
ss			三			
o (零)	呵呀噯			呀		

(2)

	e	ie	ier	o	ue	ueu
b		別	邊	不		
p						
m	嗎		明	莫		
f						
sf						
d	得	得		多		
sd						
t						

n		列		老		
r		咧		老		
g	个哥個				過	
k	却可刻					
sk						
h	合何			貨後		
gg						
j	這	這着得		作		
c						
s		些	些	所		說
bs						
ss						
o (零)		也			我也	

(3)

	uer	iue	iuie	i	ir	y
b				鄙比白		
p				皮怕		
m						
f						
sf						
d				地弟底		
sd						
t				提		忒
n				你呢裡		
r				裡哩你		
g	過			幾		給
k	塊					
sk						
h				嚶		
gg						
j				幾的知		只子甚怎
c				起		次
s		說	說	世甚瀋	錫是	是時試

bs						四
ss				十		四使是
o (零)			倭外	一日尾	二以	

(4)

	yr	u	ur	iu	iui	ui
b		不部否	否不			
p		布哺				
m		母沒嗎				每
f		父				
sf						
d	多	都斗堆		都堆頭		對
sd						
t		頭		頭		
n						
r						
g	根	顧古	故	規		貴規歸
k		口				
sk			兒			
h		胡糊	候			回灰會
gg						
j		住就主		住就主		
c		出處去		處出		棄去崔
s		蘓數說		書數說	隨	水許隨
bs						
ss						
o (零)		伍		餘如違		位為

(5)

	uir	er	@i	@	@ir	ei
b			百白			別
p						
m			買賣			

f						
sf						
d		點點	在帶歹		帶	
sd						
t						
n			來			
r			來			
g			該			
k			開			
sk						
h	囁		還該咳			
gg						
j			在再	咱雜遭		
c			纔材	差		
s			色			寫
bs						
ss						
o (零)		二兒	愛			

(6)

	iei	yi	oai	iuiei	oi	uei
b	別					
p						
m						
f						
sf						
d						
sd						
t						
n	咧咧				勞	
r	咧咧					
g		給				
k						
sk						

h			壞		囧	
gg						
j	這					
c						
s	賒					
bs						
ss						
o (零)		依意宜	外	倭外		外越

(7)

	ao	aor	iao	au	iau	io
b						
p	標					
m	毛			帽冒		
f						
sf						
d	道			到倒道		
sd						
t				調		
n	老			惱	遼惱了	
r				了		
g				句	教	
k						
sk						
h	好			好後		
gg						
j	找	遭	找交	早着	椒早	作
c	瞧			瞧	瞧	
s	少		小	小笑	小	
bs						
ss						
o (零)			要若	要若	藥要若	

(8)

	yu	yur	eu	ui-u	i-u	an
--	----	-----	----	------	-----	----

b						辯辦
p						磐板
m						
f						
sf						
d						單担斷
sd						短
t	頭	頭				
n					留牛六	難爛
r						
g			句勾			敢幹趕
k	口					看
sk						
h	後					
gg						
j					就	見件
c						
s				手	收	
bs						
ss						三
o (零)					有牛又	按

(9)

	ian	ien	oan	on	uen	en
b		邊		本		邊
p						
m						
f						
sf						
d			短			點
sd						
t						天
n		念連				年
r						

g	趕		管			
k			看			
sk						
h			換還歡			
gg						
j	賤間		眷			
c		千錢前				
s		現先嫌	算			
bs	三					
ss						
o (零)	言	言	萬完		願原	緣

(10)

	yn	in	un	uien	iun	yun	ang
b	本						放
p							
m	們	閔	們門				
f							房方防
sf			分				
d							當當
sd							
t							塘
n						能	量兩
r		人					塘
g	跟						剛
k	肯		肯				
sk							
h	狠						恆
gg							
j		真			遵		張講帳
c		親					長
s		心					相想上
bs							
ss							

o (零)	銀	人銀	紋	鉛願			嚷樣
-------	---	----	---	----	--	--	----

(11)

	iang	oang	eng	yng	ieng	ing
b						餅並
p					便	憑便
m			命明			明
f						
sf						
d				等		定頂
sd						
t				聽		停
n	兩			能弄		寧
r	兩					
g		光				
k						
sk						
h		黃謊【口荒】				
gg				更		
j	薑張講	粧講				剩
c			城成		成	青停成
s				生省		姓剩行
bs						
ss						
o (零)	陽樣嚷	王往				應

(12)

	ung	iung
--	-----	------

b		
p	朋	
m		
f		
sf		
d	東働	
sd		
t	同	
n	能	
r	摺弄	
g	貢	
k	空	
sk		
h	横哄	
gg		
j	種中用	
c	從	
s	兄升鬆	兄
bs		
ss		
o (零)	用	

付録9『華音撮要』同音字表 第1部分会話文

(1)

	a	ar	ia	iar	oa	oar
b	罷八把	罷伴				
p	派怕發	派法發				
m	嗎麼罵	馬				
d	大打	大單打				
t	他	他塌				
n	那拿哪	拿難				
r						
g			家價街	架家	寡掛刮	關褂
sg						
gg						
k						
h					話畫化	換化
j	家咱雜	站	家傢加	稼家	抓	
c	查					
s			下少匣			
ss		三	下小少			
o (零)	啊		啲啊呀		啊襍	完頑

(2)

	e	ie	ier	o	or	ue
b			邊邊遍	暴		
p				破	破	
m	沒		明	磨		
d	得		些	多	多	
t				托頭駄		
n		咧	劣	老騾挪	落	
r						
g	哥個個					鍋過過
sg						
gg	可					
k	可却客					
h	何和合			貨火活		

j		這迭		坐作雜	昨	
c		車	車錢節	矧		
s		捨	些			
ss						
o (零)	惡	也有爺				我

(3)

	uer	oie	i	ir	y	yr
b			比必筆	必單		不否
p			劈皮疋	皮		
m						
d			的底地	的替点		
t			提			頭
n			你裡呢	你力咧		
r			裡裏麗			
g	過鍋		幾今雞	今	給	根
sg						
gg						
k						
h					黑	子
j			值知計	計筋進	怎子只	子枝
c			起騎喫	齊去起	次	
s		雪	西甚實	十是信	時是事	時事
ss			十		使死四	死
o (零)	我		一有以	一意人		

(4)

	u	ur	uu	iu	iur	iui
b	不否	否不				
p	夫福舖					
m	沒嗎木	門們				
d	都肚					
t	頭	頭				

n	路流籠					
r						
g	過雇故	顧棍故				
sg						
gg						
k	口苦哭	口				
h	戶胡鬍	候胡			候	
j	初住就	子		就		
c	出處廚	初出				
s	豎書叔	書數樹	說	訴		
ss						
o (零)	五悞無	屋兒吳		餘有		語

(5)

	ui	uir	uei	er	@ir	eir
b						
p	費陪					
m	每				買賣	
d	对堆			点得	帶歹袋	
t	忒退			天		
n					來	
r						
g	貴歸故		櫃	箇个		
sg						
gg						
k	虧					
h	回會	回		何		
j	嘴居				再	借着
c	去取除	去				
s	誰隨水	歲徐				
ss						
o (零)	未圍為			兒二		

(6)

	iei	oai	oair	uei	uie	oei
--	-----	-----	------	-----	-----	-----

b						
p						
m						
d						
t						
n	咧					
r						
g		恠怪掛	怪	櫃	櫃	
sg						
gg						
k		快塊				
h		壞				
j	這	瓠				
c						
s					雪水	
ss						
o (零)	爺也惹	外			月	瓦

(7)

	au	iao	iau	yu	yur	eu
b	裸包保					包
p			標			跑袍
m	帽		妙			
d	到道倒	貂	吊彫			
t	討條套		調	頭鬪透	頭	
n	老惱		遼了	漏蘆		
r						
g	告糕		叫教	狗溝		勾高
sg						
gg						
k	烤靠			口	口	
h	好號毫			後		
j	找早嚼		招照叫	走州洲		
c	草瞧橋		瞧橋	湊		

s			少笑			
ss	笑		笑小少			
o (零)	熬襖		若要姚			

(8)

	i-u	an	anr	ian	ien	ienr
b		販辦半			變邊遍	
p		飯盤煩	盤		偏	
m		瞞慢滿			面綿	
d	丟	但單蛋			惦店	店
t					天	
n	牛留六	難南			年連臉	
r						
g	舊旧九	趕敢				
sg		趕幹				
gg						
k		看				
h		含				
j	就酒九	件暫站		見建件		
c	櫓秋求				錢前千	
s	收受手	山			線	
ss		三山		筭三山	現先嫌	
o (零)	有友又	按鞍安		煙言眼	煙然緣	

(9)

	oan	oanr	on	oian	oain	en
b			本			本
p						
m						
d	短			短		店点
t						天聽
n		臨林				年
r						

g	管關官	關				
sg						
gg						
k	寬					
h	歡還換					
j	賺轉眷	進津斤				
c	船穿					
s	筭	身心信		筭	筭	
ss						
o (零)	萬按			軟		

(10)

	yn	in	un	oien	oen	uien
b						
p			分墳			
m		閩	們門			
d						
t			沌			
n			論輪			
r						
g						
sg	跟懇恨					
gg						
k	肯		網			
h	狠		混			
j			尊			
c	陳		存村春	全拳勸	全	
s						
ss						
o (零)		人銀艮	文問			原願元

(11)

	iun	ang	iang	oang	eng	yng
--	-----	-----	------	------	-----	-----

b						
p		放房妨			朋風	
m		忙			朦	
d		當當				戡等燈
t		塘糖				
n		量朗亮	兩糧量			冷能
r						
g		剛		光		庚更
sg		剛				更
gg						
k		扛		況		吭坑
h		行		黃凰		橫
j	淮均	薑漲漲		庄裝粧	正	
c		場償				陳層
s		上相	商像上			牲生
ss			向想			
o (零)	雲運		讓養樣	王徃望		

(12)

	ieng	ing	ung	iung
b		並病冰	封鳳風	
p		憑		
m	明	明命名	弄	
d		定頂	東動懂	
t		聽停	通甬同	
n		領零另	濃弄	
r			弄	
g		景更	工共	
sg				
gg				
k			空	
h				
j	正	京津晴		種中重
c	城成盛	成情	從	

s		行興姓	時	時
ss				送
o (零)		應硬		用

(1)

	a	ar	ia	am	oa	e
b	罷巴叭					百
p	法怕					
m	嗎馬罵		馬			
f	發					
d	大打達					得的
t	他					
n	拿那					
r						
g	家		價家		鴉	个各箇
k	卡					可却客
h			下嚇		話花畫	河
j	咂					
c	茶插					
s	殺		下	甚		蝨
ss						
o (零)	啊	兒	啞厭啊		瓦	餓惡

(2)

	ie	o	oy	ue	uer	iuie
b	別	脖	佛			
p		潑佛破				
m						
f						
d	得	多				
t		唾脫				
n						
r	來					
g		過		國		
k						
h		活火和				
j	着這接	作坐				
c						穿

s	甚些蛇					說
ss						
o (零)	爺也噎	我			月	

(3)

	i	y	u	ur	iu	iu
b	備必		府不福	不		
p	皮		稞			
m	米迷		沒們木			
f			府婦福			
d	的地知		都度			
t						
n	你呢裡		奴怒			
r	裡禮麗		路			
g	急雞計		故規骨			
k	去氣起		哭口			
h	喜		虎壺			
j	知制至	只子志	做			
c	起前喫	匙				
s	西市是	是使事	訴數熟			水
ss		死使駟				
o (零)	一義意		我文武			

(4)

	ui	r	ai	@i	ei	iei
b				排		別
p				牌		
m	沒			買賣		
f						
d	對對堆			戴		
t	退			太	鐵	
n				來		來
r					來	來老

g	貴			該盖		
k	去		快	開		
h	回晦胡			海害孩		
j	罪走醉			再在宰		
c	吹去垂			纔差柴		
s	誰歲睡			色		
ss						
o (零)	喂	兒		愛		

(5)

	yi	oai	oaii	oi	uei	ao
b						飽包包
p						
m						毛貓貌
f	飛					
d						到道刀
t						淘
n						老惱怒
r						了
g	給	恠				高覺
k		塊快誇	快		快	烤
h	黑	壞			靴	好
j	賊					早遭造
c						草
s						山小
ss						
o (零)		外		我		

(6)

	au	iao	iaui	io	yu	i-u
b						
p						
m						

f						
d	到				斗	
t		条			頭投	
n	老	老鳥溺				牛留
r		了	了			
g	告高	覺較		腳	狗	舊久
k		巧			口	
h					後候厚	
j					走	州救酒
c						趣秋
s		小燒少			瘦	收手受
ss						
o (零)		要搖咬				有由

(7)

	an	ian	ien	oan	on	uen
b			鞭遍邊		本	
p						
m			面			
f	飯					
d			典店點			
t	膽		天田			
n	難		年念			
r			鐮			
g			揀見			管罐關
k	看					
h	漢		閒	換還		
j	站	站	濺			
c			前千	穿		
s	三山撒		先	筭		
ss	三					
o (零)		眼	緣宴言	【日兌】萬		

(8)

	en	yn	in	un	iuien	uien
--	----	----	----	----	-------	------

b	般					
p			貧			
m	滿			們門		
f						
d						
t	天					
n						
r	憐		林		亂	
g		跟根	今金			
k		肯	欽			
h		很				
j			真枕	遵尊		
c				春	船	
s			身心新			
ss						
o (零)		恩	尹人飲		遠	遠

(9)

	oien	iun	ang	iang	oang	eng
b			放			
p			房			
m						
f			方放防			風
d			當			
t			塘			
n			娘			
r						
g			韁		光廣	
k			坑			
h	歡				皇謊	
j		準君			藏	
c						
s			想上裳			
ss						

o (零)		運		樣仰陽	王萬碗	
-------	--	---	--	-----	-----	--

(10)

	yng	ieng	@ing	ing	ung	iung
b				病		
p				平瓶		
m				明命		
f	風				風	
d	燈			定頂	東	
t				聽		
n	冷					
r				靈嶺		
g	庚			京敬驚	公恭弓	
k					空孔	
h				行	紅哄	
j		賤	爭		中	中
c				青承	從	從
s	牲生			性姓繩		
ss						
o (零)				囧		用容